仙台市文化財調査報告書第192集

南小泉遺跡

第22次・23次発掘調査報告書

１９９４年10月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第192集

南　小　泉　遺　跡

第22次・23次発掘調査報告書

１９９４年10月

仙台市教育委員会

序　　文

日頃より仙台市の文化財保護行政に多大のご協力を賜り、誠に感謝にたえません。

現在、仙台市内には約700箇所の遺跡が知られており、若林区に所在する南小泉遺跡もその一つです。この遺跡は仙台バイパスを挟んで東西に広がっており、昔から仙台を代表する遺跡で、弥生時代以降の集落跡として著名です。特に古墳時代の5世紀の土師器は南小泉式と言われ、当遺跡出土のものが基準となっています。

今回この遺跡内で都市計画道路と共同住宅を建設することになり、それに先行して第22次、23次発掘調査を実施しましたが、遺跡西側の状況を知る手掛かりが得られたものと考えております。

このような発掘調査によって得られた多くの成果は、地域の歴史を知るうえで貴重な資料でありますので、今後の仙台市における街づくりや学校教育などの中に、十分に活かしていきたいと考えております。

この報告書が広く皆様にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査と報告書作成にご指導、ご協力くださいました皆様に対し、心より感謝申し上げます。

平成6年10月

仙台市教育委員会

教育長　坪　山　　繁

例　　言

1．本書は、仙台市都市計画街路南材木町－古城線建設に伴う南小泉遺跡第22次調査及び共同住宅建築工事に伴う南小泉遺跡第23次調査の本報告書である。

2．本書の編集は、結城慎一、川名秀一、菅原裕樹、神成浩志と協議をしながら、斎野裕彦が行った。

3．本書の作成作業は、次のとおり分担した。

本文執筆	
第Ⅰ章～第Ⅳ章・第Ⅵ章	斎野裕彦
第Ⅴ章	結城慎一
遺構写真撮影	川名秀一、斎野
遺構図面整理、トレース	結城、斎野、川名、大山のり子、泉美恵子、渡辺好恵
遺物整理、水洗、ネーミング	阿部美香、佐竹志女子、佐藤弘子、山口佳子
遺物復元	我妻美代子、山田やす子、伊藤房江
遺物実測、トレース	斎野、菅原裕樹、神成浩志、菅谷裕子、原田由美子、津島久子、青山諒子、大山由起子
遺物写真撮影	菅原
図版組み	斎野、菅原、泉、伊藤、青山、菅谷、大山

4．石器の材質の鑑定は、東北大学　蟹沢聰志氏にお願いした。

5．陶器・磁器の鑑定は、当課の佐藤洋が行った。

凡　　例

1．図中及び本文中使用の方位の「北（N）」は真北である。

2．調査区は、平面直角座標系Ｘに位置づけた。

3．本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

ＳＡ：区画施設　ＳＢ：建物跡　ＳＩ：竪穴住居跡・竪穴遺構　ＳＤ：溝跡　ＳＫ：土坑

ＳＸ：性格不明遺構　ＳＰ：ピット、小柱穴

4．竪穴住居跡内のスクリーントーン部分は、焼面の範囲を示す。

5．本書に示した土色については、「新版標準土色帳」（小山・佐藤：1970）を使用した。

6．本書で使用した遺物略号は次のとおりで、それぞれ種類別に番号を付した。

Ｂ：弥生土器　Ｃ：土師器（ロクロ不使用）　Ｄ：土師器（ロクロ使用）　Ｅ：須恵器　Ｆ：丸瓦・軒丸瓦　Ｇ：平瓦・軒平瓦　Ｈ：その他の瓦　Ｉ：陶器　Ｊ：磁器　Ｋ：石器・石製品　Ｎ：金属製品　Ｐ：土製品　Ｕ：土師質土器

なお、筒形土器、手捏土器については、分類としては土製品としたが、遺物略号は「Ｃ」を用いた。また、平安時代のロクロ不使用の甕については遺物略号を「Ｄ」とした。

7．土器・石器の図化の方法については、下図に示した。

①ロクロ不使用の土師器の胎土には、緻密で砂粒が少なく、赤褐色の粒子を含む特徴的なものがみられ、これを実測図の中心線の上に「☆」で示した。

②土師器の内面および外面が黒色を呈するものについては、黒色処理（器壁内部まで黒色化している）と、黒色仕上げ処理（器壁表面が黒色化している）に分けた。黒色処理はスクリーントーンで示し、黒色仕上げ処理は実測図の内面、外面の上にそれぞれ「◎」で示した。なお、「黒色仕上げ処理」としたものの類例は仙台平野でも認められているが、栃木県稲荷塚遺跡では分析をしたところ、漆を塗布していることが指摘されており、この遺跡の報告（栃木県文化振興事業団：1987『稲荷塚・大野原』）では「漆仕上げ処理」としている。実見させていただき、実物を比較してみたところ、酷似していることを確認したが、当遺跡では分析を行っていないため、便宜的に黒色処理と区別するためこの名称を用いた。

③須恵器坏、ロクロ使用の土師器坏の底部切り離し技法及び調整については、実測図の中心線の下にそれぞれ記号で示した。

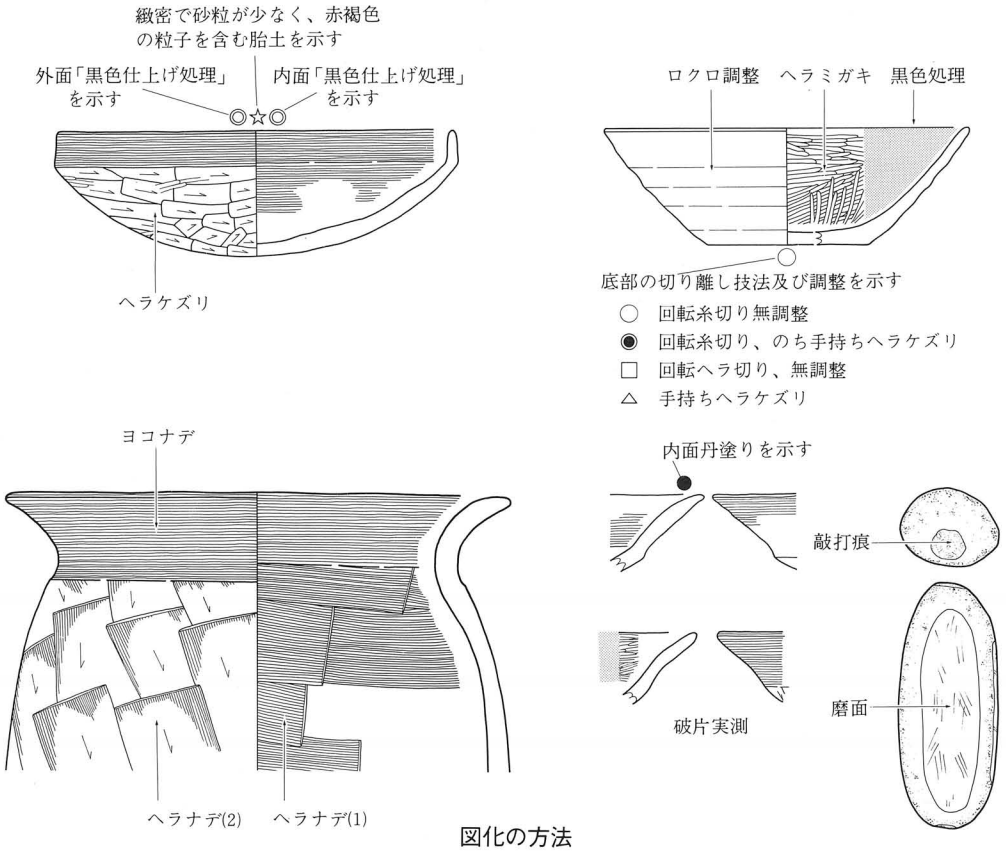
④ロクロ不使用の土師器甕の外面調整には、砂粒が動くくらいのやや強いヘラナデが行われているものがある。主に内面調整にみられるヘラナデ(1)と区別するためヘラナデ(2)とし、方向を矢印で示した。ヘラケズリとの区別のつきにくい場合もある。

⑤口径の復元が難しい破片実測については、図に示したように、左側に断面と内面、右側に外面を図化した。

8．土師器坏、須恵器坏の口径に対する底径の比率（底径／口径）、口径に対する器高の比率（器高／口径）については、それぞれ「底径口径比」、「器高口径比」として記述した。

9．本文中で「小玉石」とした遺物は、仙台市郡山遺跡で「小玉石」と呼称されている遺物と類似するものである。

10．本文中で「埋土」とした用語は、「埋まっている土」という意味で用いた。



図化の方法

本　文　目　次

第Ⅰ章　調査に至る経過と調査要項 …… 1

1．調査に至る経過 …… 1

2．調査要項 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 3

1．立地 …… 3

2．歴史的環境 …… 3

第Ⅲ章　調査の方法と調査経過 …… 4

1．調査区の設定 …… 4

2．調査経過 …… 4

第Ⅳ章　第22次調査 …… 6

1．基本層序 …… 6

2．調査概要 …… 6

3．検出された遺構と遺物 …… 9

4．出土遺物の検討と遺構群の変遷 …… 97

第Ⅴ章　第23次調査 …… 125

第Ⅵ章　まとめ …… 129

挿　図　目　次

第1図　周辺の遺跡 …… 2

第2図　調査区位置図 …… 5

第3図　第22次調査区設定図 …… 5

第4図　基本層序（B-14グリット南壁） …… 6

第5図　調査区全体図 …… 7

第6図　SI 1平面図・セクション図 …… 11

第7図　SI 1・3出土遺物実測図 …… 11

第8図　SI 2平面図・セクション図 …… 12

第9図　SI 3平面図・セクション図 …… 13

第10図　SI 3・4出土遺物実測図 …… 14

第11図　SI 4平面図・セクション図 …… 15

第12図　SI 4・5・8出土遺物実測図 …… 16

第13図　SI 5平面図・セクション図 …… 17

第14図　SI 6平面図・セクション図 …… 18

第15図　SI 7平面図・セクション図 …… 19

第16図　SI 8平面図・セクション図 …… 20

第17図　SI 9平面図・セクション図 …… 21

第18図　SI10平面図・セクション図 …… 22

第19図　SI11平面図・セクション図 …… 23

第20図　SI 9・10・11出土遺物実測図 …… 24

第21図　SI12平面図・セクション図 …… 26

第22図　SI13平面図・セクション図 …… 27

第23図　SI14平面図・セクション図 ……28
第24図　SI14セクション図 ……29
第25図　SI15平面図・セクション図 ……30
第26図　SI12・13・14・15出土遺物実測図 ……31
第27図　SI15出土遺物実測図 ……32
第28図　SI15・16出土遺物実測図 ……33
第29図　SI16平面図・セクション図 ……35
第30図　SI16・17出土遺物実測図 ……37
第31図　SI17平面図・セクション図 ……38
第32図　SI17・18出土遺物実測図 ……39
第33図　SI18平面図・セクション図 ……41
第34図　SI18・19出土遺物実測図 ……42
第35図　SI19平面図・セクション図 ……43
第36図　SI20平面図・セクション図 ……44
第37図　SI20出土遺物実測図(1) ……46
第38図　SI20出土遺物実測図(2) ……47
第39図　SI21平面図・セクション図 ……49
第40図　SI22平面図・セクション図 ……50
第41図　SI23平面図・セクション図 ……51
第42図　SI24平面図・セクション図 ……52
第43図　SI25平面図・セクション図 ……53
第44図　SI22・24・25出土遺物実測図 ……54
第45図　SI25・26出土遺物実測図 ……55
第46図　SI26平面図・セクション図 ……56
第47図　SB 1平面図・セクション図 ……58
第48図　区画施設溝跡平面図 ……59
第49図　区画施設溝跡平面図・溝跡セクション図 61
第50図　SD 3平面図 ……63
第51図　SD 3セクション図 ……64
第52図　SD 3出土遺物平面・垂直分布図 ……65
第53図　SD 3　1層出土遺物平面分布図 ……66
第54図　SD 3　2層出土遺物平面分布図 ……67
第55図　SD 3　3層出土遺物平面分布図 ……68
第56図　SD 3　4層出土遺物平面分布図 ……69
第57図　SD 3出土土師器坏の器形分類 ……72
第58図　SD 3　1層出土遺物実測図 ……79
第59図　SD 3　1層・2層出土遺物実測図 ……80
第60図　SD 3　2層出土遺物実測図(1) ……81
第61図　SD 3　2層出土遺物実測図(2) ……82
第62図　SD 3　2層出土遺物実測図(3) ……83
第63図　SD 3　2層出土遺物実測図(4) ……84
第64図　SD 3　2層出土遺物実測図(5) ……85
第65図　SD 3　2層・3層出土遺物実測図 ……86
第66図　SD 3　3層・4層、SD 4出土遺物実測図 ……87
第67図　土坑平面図・セクション図(1) ……91
第68図　土坑平面図・セクション図(2) ……93
第69図　土坑他出土遺物実測図 ……95
第70図　基本層他出土遺物実測図 ……96
第71図　坏Ⅰ類・Ⅱ類の口径分布 ……106
第72図　坏Ⅰ類・Ⅱ類の口縁高と器高の関係 …106
第73図　遺跡周辺出土のA種土器群坏 ……111
第74図　Ⅲ期の坏の器形分類 ……115
第75図　ⅢA期・ⅢB期の坏 ……116
第76図　坏の器形と底部の切り離し技法との関係 ……117
第77図　ⅢA期・ⅢB期の坏の法量分布 ……118
第78図　南小泉遺跡における奈良・平安時代の坏 ……120
第79図　第23次調査平面図・セクション図 ……126
第80図　第23次調査出土遺物実測図 ……128
第81図　第22次調査遺溝群の変遷 ……130

挿　表　目　次

第1表　SD 3出土遺物数量表 ……71
第2表　SD 3出土の坏の分類と数量 ……74
第3表　SD 3出土の甕の分類と数量 ……74
第4表　SD 3埋土2層出土A種・B種と器種との関係 ……99
第5表　SD 3埋土2層出土土師器の組成 ……103

第 6 表　坏Ⅰ類・Ⅱ類の数量と比率 ……103
第 7 表　SI25 出土土師器の器種と数量 ……106
第 8 表　坏Ⅰ類・Ⅱ類の体部調整の分類 ……107
第 9 表　SI25・SD 3 の坏Ⅰ類・Ⅱ類の体部調整　107
第 10 表　ⅡB期古・新の遺構 ……109
第 11 表　南小泉遺跡における須恵器坏の変化 …110
第 12 表　坏の口径と器高 ……121
第 13 表　ⅢA期・ⅢB期の遺構 ……122
第 14 表　SK12・19・21 出土遺物 ……123
第 15 表　竪穴住居跡・竪穴遺構 ……134
第 16 表　掘立柱建物跡 ……134
第 17 表　区画施設 ……134
第 18 表　溝跡 ……135
第 19 表　土坑・性格不明遺構 ……135
第 20 表　竪穴住居跡・竪穴遺構出土遺物数量表(1)(2)
……136
第 21 表　遺構出土遺物数量表 ……138
第 22 表　ピット出土遺物数量・土層注記表(1)(2)　139
第 23 表　グリット遺物出土数量表 ……141
第 24 表　第 23 次調査遺物出土数量表 ……142
第 25 表　弥生土器観察表 ……143
第 26 表　非ロクロ土師器観察表(1)(2)(3)(4) ……143
第 27 表　ロクロ土師器観察表(1)(2) ……147
第 28 表　須恵器観察表(1)(2) ……148
第 29 表　丸瓦・軒丸瓦観察表 ……149
第 30 表　平瓦・軒瓦観察表 ……149
第 31 表　その他の瓦観察表 ……150
第 32 表　陶器観察表 ……150
第 33 表　磁器観察表 ……150
第 34 表　金属製品他観察表 ……150
第 35 表　石器・石製品観察表(1)(2) ……150
第 36 表　土製品観察表(1)(2) ……151
第 37 表　土師質土器観察表 ……152
第 38 表　第 23 次調査非ロクロ土師器観察表 ……152
第 39 表　第 23 次調査土製品観察表 ……152

写　真　目　次

写真 1　調査区遠景（西から） ……153
写真 2　調査区全景 ……153
写真 3　B－14G　南壁深掘りセクション
（北から） ……154
写真 4　調査風景 A・B－11G 以西（南から） …154
写真 5　調査風景 A・B－11G 以東（東から） …154
写真 6　A－8・9 G　SI－1 完掘全景（北から）
……155
写真 7　A－7 G　SI－2 全景（南から） ……155
写真 8　A－5・6 G　SI－3 全景（西から） …155
写真 9　A－4・5 G　SI－4 全景（南から） …156
写真 10　A－5 G　SI－5 全景（南から） ……156
写真 11　A・B－5 G　SI－6 全景（南から） …155
写真 12　A・B－4・5 G　SI－8 全景
（南から） ……157
写真 13　B－3・4 G　SI－9 全景（南から） …157
写真 14　A－1 G　SI－10 全景（南から） ……157
写真 15　A・B－1・2 G　SI－11 全景
（南から） ……158
写真 16　A・B－2・3 G　SI－12 全景
（南から） ……158
写真 17　A・B－16 G　SI－14 全景（北から） …158
写真 18　A・B－14 G　SI－15 全景（北から） …159
写真 19　A・B－14 G　SI－15 ベルトセクション
（南から） ……159
写真 20　B－14・15G　SI－17 全景（北から） …159
写真 21　A・B－17G　SI－18 全景（南から） …159
写真 22　B－17G　SI－19 全景（東から） ……160
写真 23　A・B－18・19G　SI－20 南側かまど
（西から） ……160
写真 24　A・B－18・19G　SI－20 全景
（西から） ……160

写真 25　A－19・20G　SI－22 全景（西から）…161
写真 26　B－3G　SI－23 全景（南から）……161
写真 27　A・B－12G　SI－24 全景（北から）…161
写真 28　A－16G　SI－25 全景（西から）……162
写真 29　A－16G　SI－25 遺物出土状況
（南から）……162
写真 30　A－14G　SI－26 全景（南から）……162
写真 31　A・B－12・13G　SA 1・SA 2 全景…164
写真 32　B－14・15G　SB 1・SI17 全景……163
写真 33　A－17G　SA－1 全景（西から）……164
写真 34　A・B－13G　SA2 全景（北から）……164
写真 35　A・B－13G　SA 2 セクション
（北から）……164
写真 36　A・B－7 G　SA－1 東側ベルトセクション
（西から）……165
写真 37　B－10G　SA－1・P－2・3 プラン（南から）
……165
写真 38　A－11G　SD－2 全景（北西から）……165
写真 39　A・B－7 G　SD－3 全景（南から）…166
写真 40　A・B－7 G　SD－3 SP 全景
（東から）……166
写真 41　A・B－7 G　SD－3 作業風景
（北東から）……166
写真 42　A・B－7 G　SD－3 全景（北から）…167
写真 43　A・B－7 G　SD－3 南壁セクション
（北から）……167
写真 44　A・B－7 G　SD－3 中央ベルトセクション
（南から）……167
写真 45　A・B－7 G　SD－3 北壁セクション
（南から）……167
写真 46　A・B－9・10 G　SD－4 全景
（北から）……168
写真 47　A・B－17 G　SD－10 全景（南から）　168
写真 48　B－10G　SD－4 セクション（南から）　168
写真 49　B－10G　SK－1 全景（南から）……169
写真 50　B－10G　SK－2 全景（南から）……169
写真 51　B－5 G　SK－4 全景（南から）……169
写真 52　A－7 G　SK－5 全景（南から）……169
写真 53　A－20G　SK－10 全景（南から）……169
写真 54　A－19G　SK－11 全景（北から）……169
写真 55　A－19G　SK－12 全景（北から）……169
写真 56　B－19G　SK－13 全景（南から）……169
写真 57　A－17G　SK－15 全景（南から）……170
写真 58　A－17G　SK－16 全景（西から）……170
写真 59　A－16G　SK－18 全景（南から）……170
写真 60　A－16G　SK－19 全景（南から）……170
写真 61　A－16G　SK－20 全景（南から）……170
写真 62　B－18G　SK－17 全景（北から）……170
写真 63　A・B－21G　SX－1 セクション
（西から）……170
写真 64　第 22 次調査記念写真 ……171
写真 65　第 23 次調査 SI 1 全景 ……171
写真 66　第 23 次調査 SI 1 カマド全景 ……171
写真 67　出土遺物(1)……172
写真 68　出土遺物(2)……173
写真 69　出土遺物(3)……174
写真 70　出土遺物(4)……175
写真 71　出土遺物(5)……176
写真 72　出土遺物(6)……177
写真 73　出土遺物(7)……178
写真 74　出土遺物(8)……179
写真 75　出土遺物(9)……180
写真 76　出土遺物(10)……181
写真 77　出土遺物(11)……182
写真 78　出土遺物(12)……183
写真 79　出土遺物(13)……184
写真 80　出土遺物(14)……185
写真 81　出土遺物(15)……186

第Ⅰ章　調査に至る経過と調査要項

1．調査に至る経過

第22次調査は、平成4年7月27日に仙台市都市計画街路南材木町古城線建設に伴う発掘届が提出されたことに起因しており、建設担当部局の仙台市建設局と当教育委員会との協議により平成4年度に事前調査を行うこととなった。

第23次調査は、平成4年8月25日に阿部武氏により、共同住宅建築に伴う発掘届が提出されたことに起因しており、平成4年度に事前調査を行うこととなった。

2．調査要項

(1)　遺跡名

南小泉遺跡（宮城県遺跡登録番号：01021・仙台市文化財登録番号Ｃ－102）

(2)　調査名と調査区所在地

南小泉遺跡第22次調査　仙台市若林区南小泉4丁目17・18（申請者　仙台市長石井亨）

南小泉遺跡第23次調査　仙台市若林区南小泉3丁目15－103（申請者　阿部武）

(3)　調査期間

第22次調査　発掘調査　平成4年9月1日から平成4年12月28日

室内整理　平成5年10月1日から平成6年3月25日

第23次調査　発掘調査　平成4年11月24日から平成4年12月4日

室内整理　平成6年1月10日から平成6年1月31日

(4)　調査面積

第22次調査　調査面積：1382 m^2　　対象面積：2340 m^2

第23次調査　調査面積：　35 m^2　　対象面積：　68 m^2

(5)　調査主体

仙台市教育委員会

(6)　調査担当

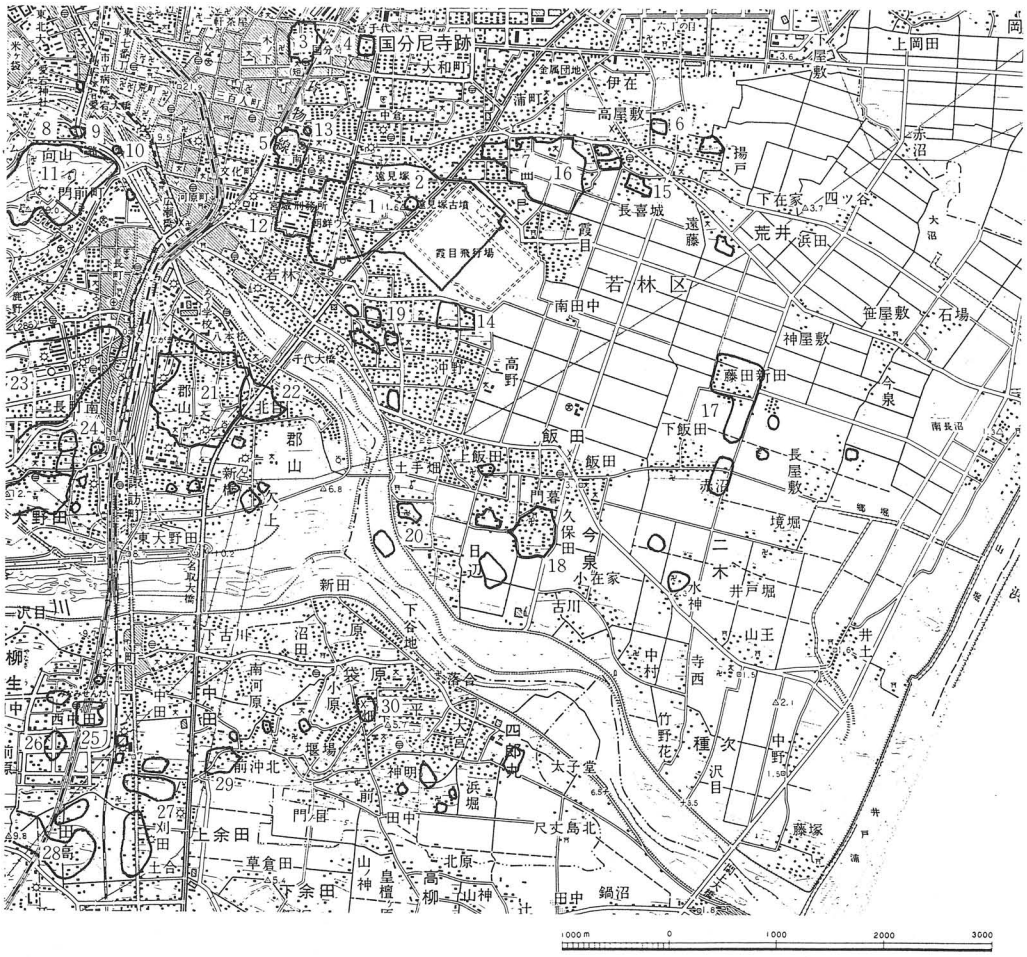
仙台市教育委員会社会教育部文化財課

第22次調査　斎野裕彦　川名秀一

第23次調査　結城慎一

(7)　発掘調査参加者

三浦市子　佐藤愛子　佐藤よし子　芳賀節子　岡崎一郎　高橋喜八　高橋節子　相沢あい子　三浦陽子　横山美代子　柏倉憲一　御供宏子　七宮　清　峯岸安好　吉田アキヨ　蓬田明子　伊藤はるよ　鳥畑きみえ　岩下光五郎　大泉テイ子　鈴木美代子　遠藤ます子　福田美智子



1．南小泉遺跡　2．遠見塚古墳　3．陸奥国分寺跡　4．陸奥国分尼寺跡　5．養種園遺跡　6．押口遺跡
7．中在家南遺跡　8．愛宕山横穴群　9．大年寺横穴群　10．定禅寺横穴群　11．茂ヶ崎城跡　12．若林城跡
13．法領塚古墳　14．沖野城跡　15．長喜城館跡　16．仙台東郊条里跡　17．藤田新田遺跡　18．今泉城跡
19．神柵遺跡　20．日辺館跡　21．郡山遺跡　22．北目城跡　23．富沢遺跡　24．元袋遺跡
25．安久東遺跡　26．栗遺跡　27．中田南遺跡　28．清水遺跡　29．後河原遺跡　30．中田畑中遺跡

第１図　周辺の遺跡

水戸　智　笹谷　明　岩井利桂　佐藤由喜子　佐藤三枝子　根岸ゆみ　斎藤美香　小松長司　佐藤三枝子　佐藤喜恵子　対馬悦子　加藤束穂　吉田公治　深瀬清和　佐藤　正　阿部敬子　阿部みはる　宮城富子　小松千代子　青山博樹

(8)　整理作業参加者

大山のり子　泉美恵子　渡辺好恵　阿部美香　佐竹志女子　佐藤弘子　山口佳子　伊藤房江　我妻美代子　山田やす子　菅谷裕子　原田由美子　津島久子　青山諒子　大山由起子

(9)　整理作業に際して次の方々から貴重なご教示をいただいた。記して感謝したい。(敬称略)

向坂鋼二　蟹沢聰志　川江英孝　後藤健一　松井一明　木戸春夫　仲山英樹　内山敏行　片根義章　藤沢　敦

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

１．立　　地

宮城県中央部の地形は、山形県境沿いに船形山、面白山を擁し南北に連なる奥羽山脈と、ここより派生する陸前丘陵、さらに東方へ広がる宮城野海岸平野よりなる。この平野は、地理的条件や成因、地質などから地形区分がなされており、仙台市南部の広瀬川と名取川の合流点付近では河間低地を郡山低地、広瀬河以北を霞ノ目低地、名取川以南を名取低地と呼んでいる。

南小泉遺跡は、これらの低地のなかで霞ノ目低地に所在し、主に自然堤防に立地している。標高は 7〜14 m、遺跡範囲は東西 2 km、南北 1 km に及び、面積は約 135 ha である。今回の調査地点は、遺跡西部の広瀬川に南面する微高地縁辺部にあたり、地形面の標高は 12.0〜12.5 m で、西方に高く、東方にやや低くなっている。

２．歴史的環境

南小泉遺跡は、昭和 10 年代の霞ノ目飛行場の拡張工事に際して発見され、伊東信雄氏らの調査により、弥生時代の合口土器棺墓や多量の土器、石庖丁や太型蛤刃石斧などの大陸系磨製石器、古墳時代の遺物が検出されている。その後、昭和 52 年以降、主に当市教育委員会の調査により、遺跡の年代幅は縄文時代晩期から近世に及ぶことが知られてきている。この遺跡における弥生時代以降の遺構、遺物の継続性は、遺跡範囲の広さとも関わり、時期的な地点の違いも認められるが、遺跡の立地する自然堤防と周囲の後背湿地の広がりが、生業基盤としては農耕にとって適地であったことが大きな要因と考えられる。また、広瀬・名取両河川の合流点付近に位置することも水上交通の利便性だけではなく、周辺地域を含め、政治的な動きとも関連性をもっていたものと推定される。

こうした歴史的環境をふまえたなかで行われた第 22 次調査では、古墳時代後期〜近世の数多くの遺構、遺物が、第 23 次調査では古墳時代後期の竪穴住居跡などが検出されている。各時期の周辺の遺跡をみてみると、古墳時代後期では、法領塚古墳、藤田新田遺跡などがあり、広瀬川を挟んで南方には官衙跡として知られる郡山遺跡、西方の青葉山丘陵には大年寺山横穴群などの横穴群が点在しており、今回の調査成果との関連性も考えられる。奈良・平安時代では、陸奥国分寺跡、陸奥国分尼寺跡、神柵遺跡、今泉遺跡がある。遺跡の東北方には仙台東郊条里跡が広がっているが、表層条里であり、時期は明確でない。平安時代の水田跡は藤田新田遺跡や郡山遺跡で検出されており、郡山遺跡の西方に位置する富沢遺跡では奈良時代に遡る条里型土地割の存在が調査によって確認されている。中世〜近世では、隣接する若林城跡をはじめとして、今泉城跡、沖野城跡、長喜城館跡、養種園遺跡、広瀬川の対岸に北目城跡、青葉山丘陵東端に茂ケ崎城跡が分布している。また、水田跡も高田Ｂ遺跡などで検出されている。

第III章　調査の方法と調査経過

1．調査区の設定

(1)　第22次調査

対象地区は、第2図に示すように、若林城跡の北東に隣接しており、遺跡のなかでは西部に位置する。都市計画街路の建設予定地である東西156m、南北15m、面積2340m²が対象であり、東西に細長く、東端は宮城野萩通りに接する。

調査区は、周囲に宅地や畑があることを考慮し、第3図のように設定した。調査面積は1382m²である。調査区北西コーナーを原点とし、ここから調査区の方向に合わせて基準線を設け、これをもとに調査区内に6m×6mのグリットを設定し、遺構実測を行った。グリット名称は原点から南へA・B、東へ1～21とした。基準線の方向は真北に対してN－12°－Eである。

(2)　第23次調査

対象地区は、第2図に示すように、若林城跡の北側に隣接しており、遺跡のなかでも西端部に位置する。共同住宅建設予定地である面積68m²が対象である。

調査区は、建物の位置に合わせて設定した。調査面積は35m²である。

2．調査経過

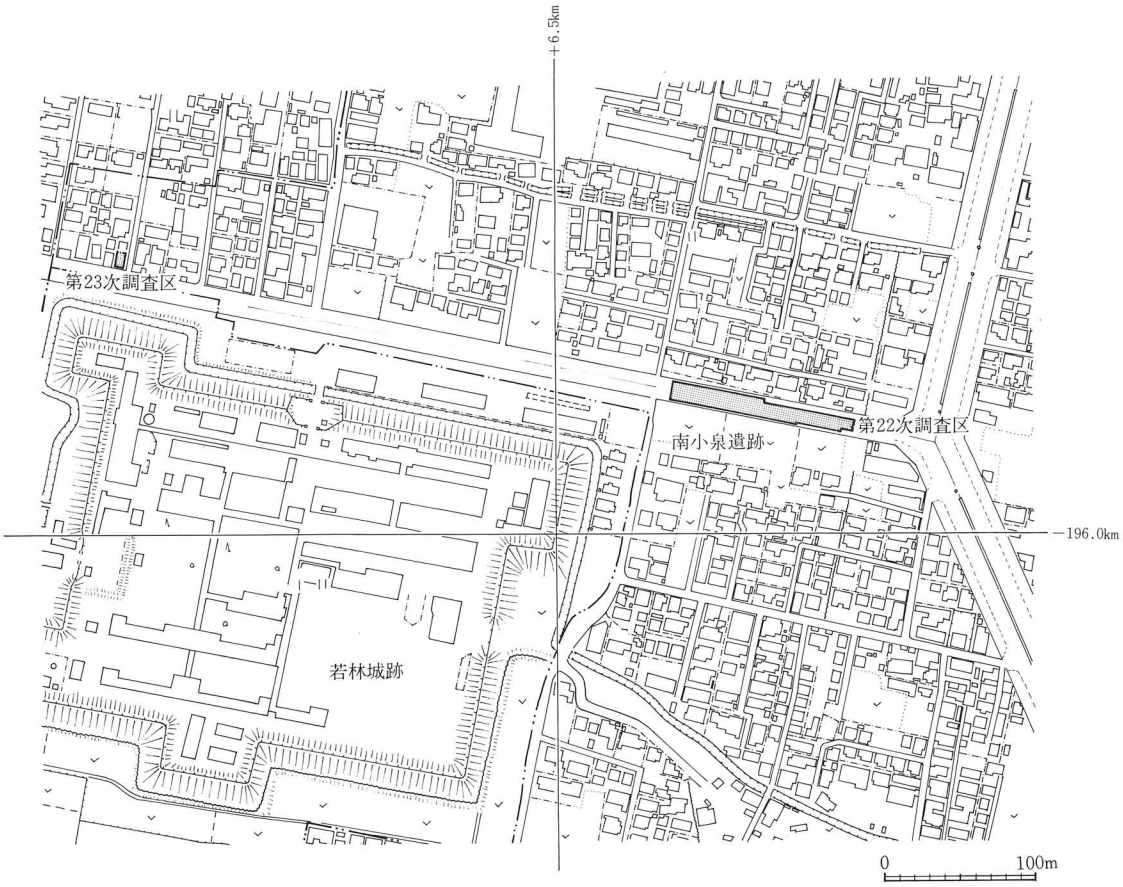
(1)　第22次調査

発掘調査は平成4年9月1日に開始された。対象地区内で排土処理を行うため、調査区をA・B－11グリット中央を境に東西二つに分け、東側を排土置き場として西側の調査を先行した。遺構は基本層II層上面で検出された。西側では天地返しによる攪乱が著しく、遺構の残存状況は良好ではない。また、以前の農道直下だけが天地返しを受けておらず、調査区を東西にベルト状に検出レベルの高いところがみられた。凹凸のある検出面の精査に時間をとられ、西側の調査は11月末までかかり、排土置き場を反転して東側の調査へと移行した。平成4年12月28日に調査を終了した。

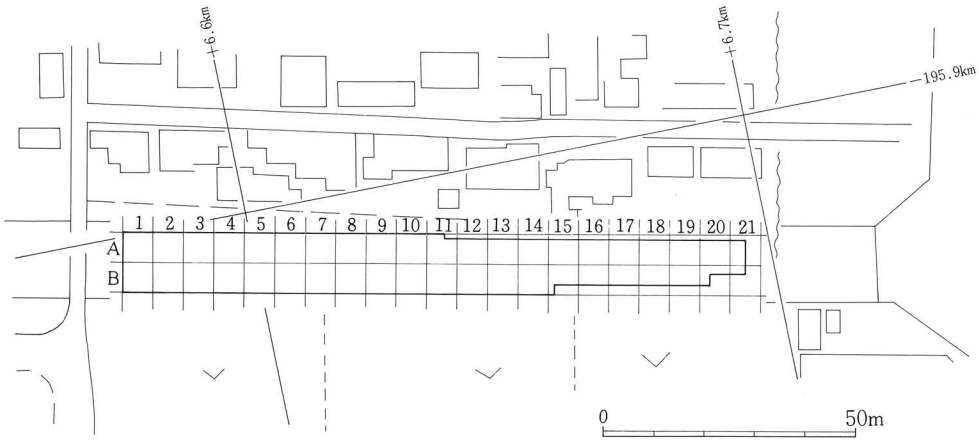
なお、この調査では、若林城跡と近い位置にあることから、当初予想された中世～近世の遺構が検出されているが、この他に、『貞山公治家記録』のなかで伊達政宗がこの城について、「・・・回リノ堀一重ハ残置キ、外ハ皆故ノ田畑トスヘキ・・・」（巻之39上）
と言い残した記録から、現在みらる堀跡を内堀として、外堀の確認も調査のひとつの目的としていた。結果として堀跡は検出されなかったが、今後の課題とされる。

(2)　第23次調査

発掘調査は平成4年11月24日に開始され、平成4年12月4日に終了した。



第２図　調査区位置図



第３図　第22次調査区設定図

第IV章　第22次調査

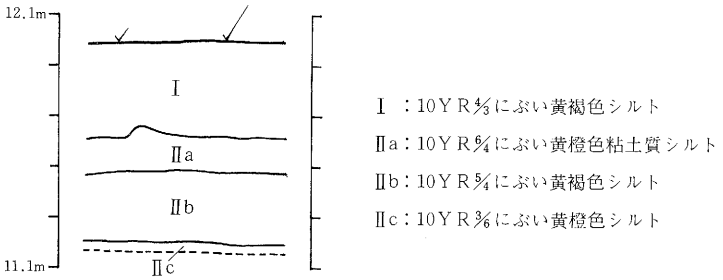
1．基本層序

基本層はⅠ層、Ⅱ層を確認した(第4図)。Ⅰ層は畑の耕作土、Ⅱ層は河川によって供給された堆積層である。Ⅱ層上面が遺構検出面であり、A・B－13・14グリットを境に、東ではⅡa層上面、西ではⅡa層の分布が部分的なため、主にⅡb層上面で検出している。Ⅱa、Ⅱb層の層相変化については、調査区東部へむけて粘性が強くなっていくことが知られる。これは、調査区周辺の地形面が西方へわずかに高くなっていることとも関連して、主な供給源が西方にあった可能性を推測させる。また、より下層については、各遺構の壁面の観察などから、にぶい黄褐色～にぶい黄橙色の粘土質シルトと砂質シルトあるいはシルトが互層になって連続しており、遺構検出面下1.5mでも砂層は認められなかった。

2．調査概要

遺構は、古墳時代後期から近世にかけて竪穴住居跡及び竪穴遺構26軒、掘立柱建物跡1棟、区画施設3基、溝跡14条、土坑21基、性格不明遺構1基、柱穴列1条、ピット259個が検出された（第5図)。

遺物の総量は収納用平箱で約100箱で、総点数は約30000点であり、各遺構及び基本層からの出土数量は第20～23表に示した。調査区は畑地であったこともあり、天地返しを受けていることから基本層Ⅰ層出土遺物は20000点を越えており、その多くは土師器の破片である。また、遺構には伴わないが、弥生時代の遺物も少量認められる。なお、礫としたなかには、磨石の可能性のあるものが含まれている。



第4図　基本層序(B-14グリット南壁)

第５図　調査区全体図

0　2　4m

3．検出された遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡・竪穴遺構

ＳＩ１（竪穴住居跡）：Ａ－８・９グリットに位置する。天地返しにより、床面は部分的にしか残っていない。平面形は正方形である。ピットは６個認められ、Ｐ１～４が主柱穴、Ｐ５は貯蔵穴と考えられる。カマドは東壁南側に設けられており、焼土面と煙出しの一部が確認された。床面は４層上面である。掘り方底面は、中央部が溝状にやや深くなっている。

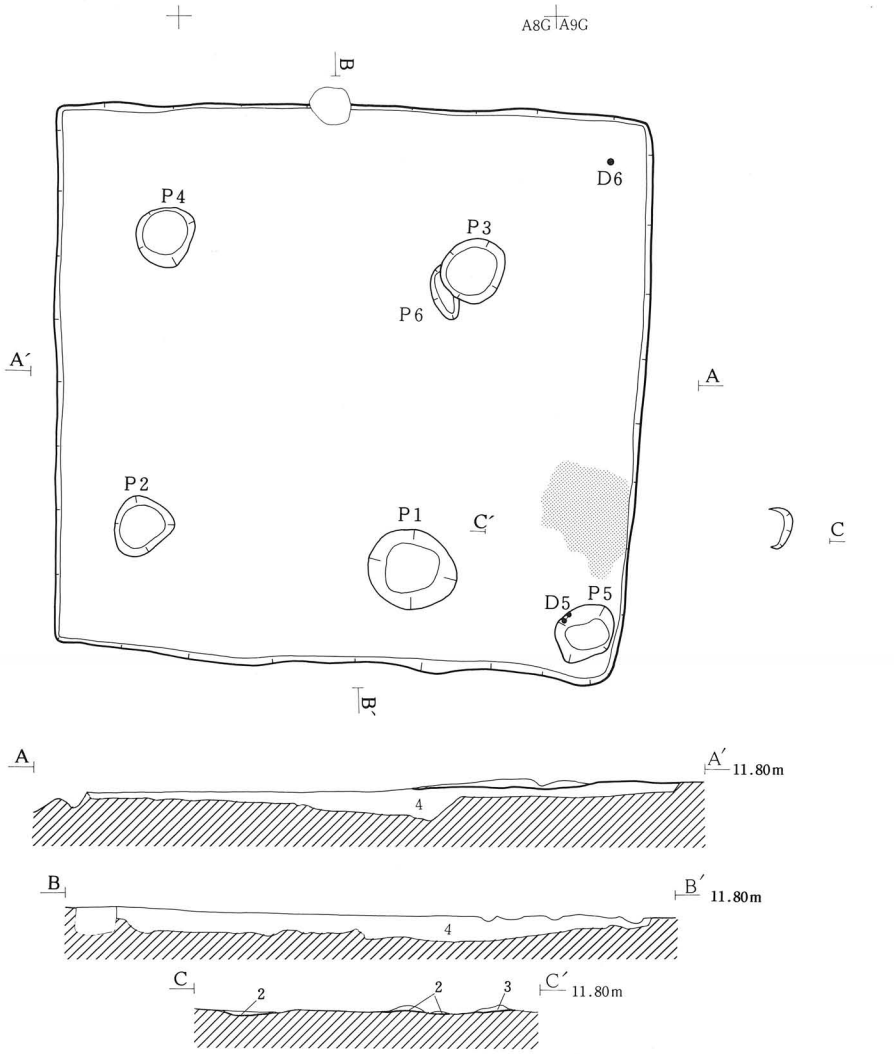
遺物は総数363点出土しており、土師器破片が多数を占める。掘り方埋土からの出土遺物も多い。第７図には11点を図示した。土師器はすべて製作にロクロを使用している。これらは、床面及びＰ５出土遺物と、掘り方出土遺物に分けられる。床面及びＰ５からは、土師器の坏（Ｄ－３・５）、高台付坏（Ｄ－６・７）、甕（Ｄ－８・９）が出土している。坏Ｄ－３・５には器形的な類似性が認められ、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾しており、内面は体部と底部の境に屈曲をもたない。底径口径比（Ｄ－３：0.38、Ｄ－５：0.37）、器高口径比（Ｄ－３：0.32、Ｄ－５：0.34）も近似する数値を示している。底部の切り離し技法も、ともに回転糸切り無調整である。また、Ｄ－３・５には大きさの違いが認められることから、坏に大小２種類のあることも知られる。大小２種類は甕Ｄ－８・９にもみられる。高台付坏Ｄ－６・７は、ともに高台部分が外傾しているが、その高さに違いもある。掘り方からは、土師器の坏（Ｄ－１・２・４）、須恵器の坏（Ｅ－１・２）が出土している。土師器坏には、器形的に体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾するＤ－１・４と、体部から口縁部へ直線的に外傾するＤ－２がある。底径口径比は、Ｄ－１（0.45）とＤ－４（0.35）に違いがみられ、Ｄ－１はＤ－２（0.45）と同じ数値を示す。器高口径比（Ｄ－１：0.31、Ｄ－２：0.29、Ｄ－４：0.29）は近似している。また、内面は、体部と底部の境に屈曲のあるＤ－１と，屈曲のないＤ－２・４に分けられる。須恵器坏Ｅ－１・２には、器形的な類似性が認められ、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾しており、内形線は体部と底部の境に屈曲をもたない。底径口径比は、Ｅ－１：0.42、Ｅ－２：0.36、器高口径比は、Ｅ－１：0.32、Ｅ－２：0.29である。また、内面の体下部～底面にはロクロ痕とは異なる調整痕跡が認められる。この他、掘り方からは丸瓦（Ｆ－１：写真67）も出土している。

床面及びＰ５と掘り方から出土した土師器坏を比較してみると、底径口径比は掘り方出土の坏に大きいものが多く、器高口径比は床面及びＰ５出土の坏のほうがやや大きい傾向がうかがえる。これは住居構築時以前と廃絶時の時期的な違いを示している可能性はあるが、底部の切り離し技法や器形的に類似性があり、それほどの大きな時期差は認められない。

ＳＩ２（竪穴遺構）：Ａ・Ｂ－９・10グリットに位置する。天地返しにより遺構の大半は残存していない。農道直下の検出レベルの高いところで上端を確認しており、他の部分は貼床の残っ

ていた範囲を示した。平面形は隅丸長方形と推定される。2層は固くしまった砂質シルトで貼床と考えられる。床面は2層上面である。

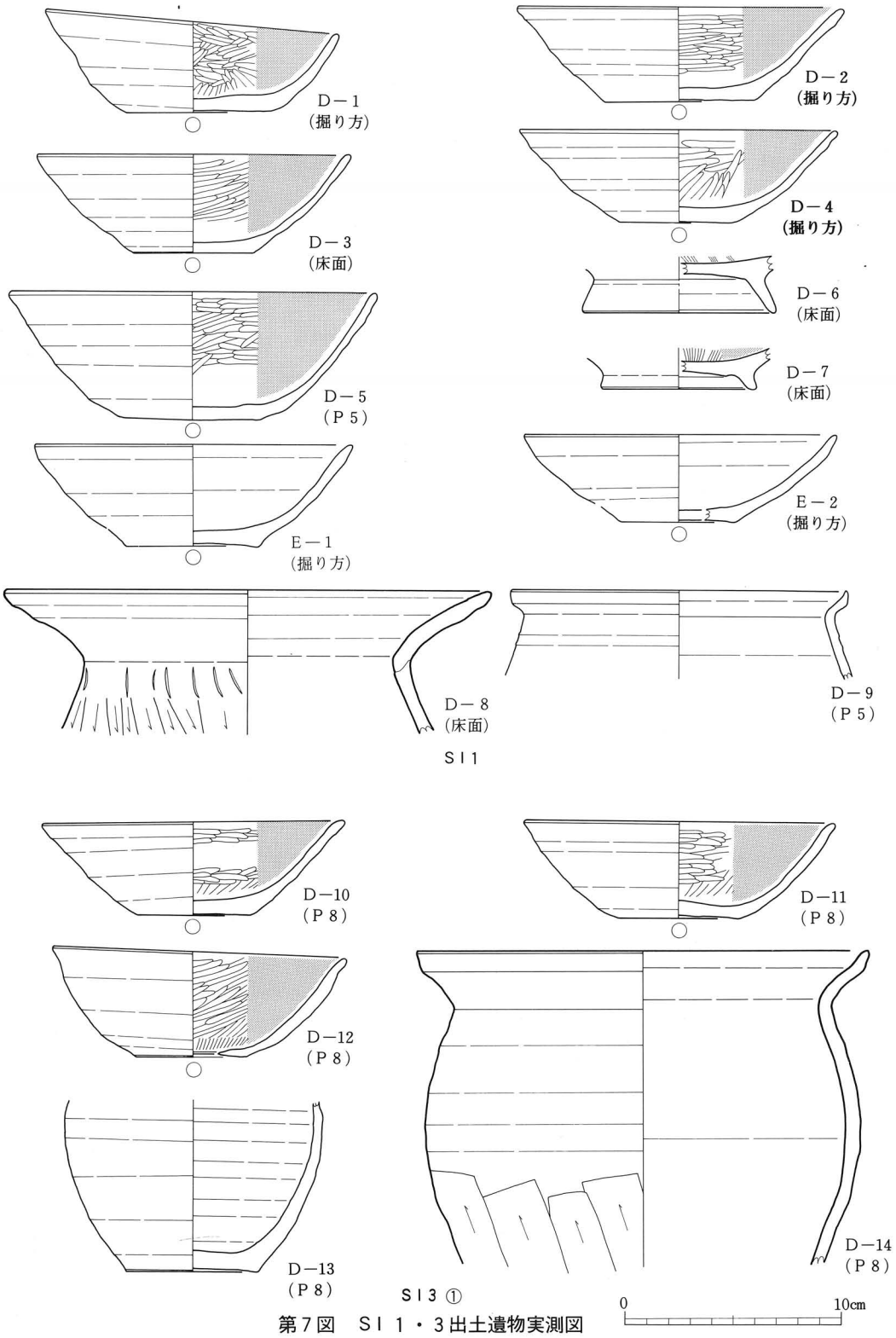
出土遺物の総数は10点であり、埋土1層中から土師器破片9点、2層中から燻し焼成瓦の破片（G－1：写真67）が1点出土している。G－1は貼床から出土している点で、この遺構の構築時期を示す可能性が考えられる。



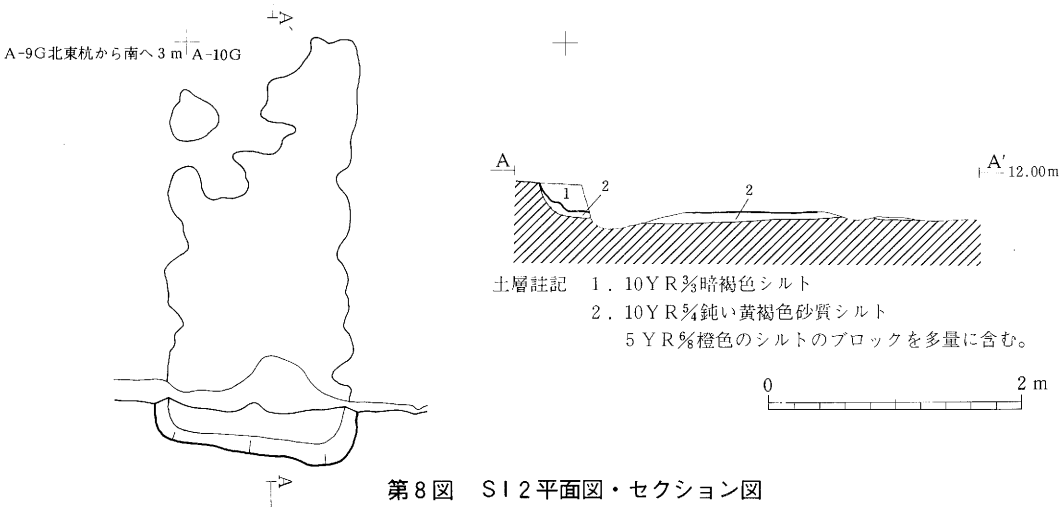
土層註記　1．10YR4/4褐色シルト，黄褐色土をブロック状に含む炭化物（炭経2～5mm）
2．10YR4/4褐色シルト，黒色土をブロック状に含む炭化物(炭)焼土粒を含む
3．10YR3/3暗褐色シルト，炭化物(炭2～10mm)焼土粒を共に多量に含む
4．10YR5/6黄褐色シルト

0　2m

第6図　SI 1平面図・セクション図



第7図　SI 1・3出土遺物実測図

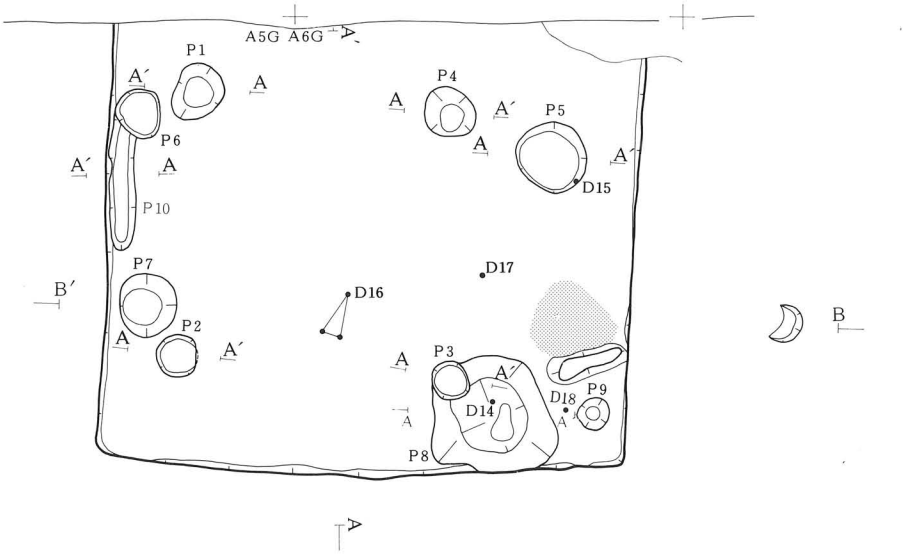


第8図　SI2平面図・セクション図

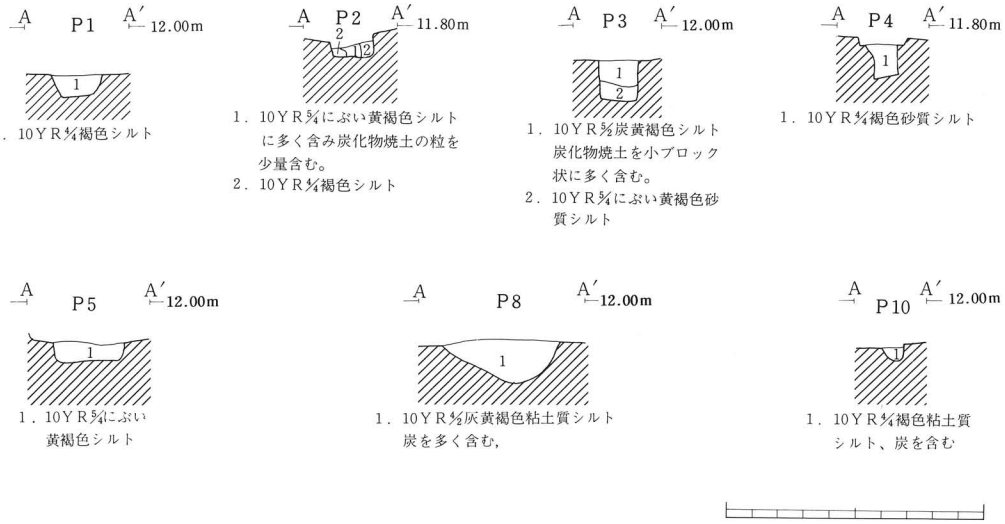
SI3（竪穴住居跡）：A－5・6グリットに位置する。SK7と重複関係があり、SI3のほうが新しい。天地返しにより、遺構の残存状況は良好ではない。北辺を確認していない。平面形は方形を基調としていると推定される。ピットは10個認められる。P2には柱痕跡があり、その位置からP1とともに主柱穴と考えられるが、他のどのピットと組むのか明確でない。P3、P4と組むのであろうか。P8はP3に先行して存在した貯蔵穴と推定される。西壁際の中央部には溝状のピット（P10）とその両側に2個のピット（P6、P7）があり、入口に関わる遺構の可能性がある。カマドは東壁南側に設けられており、焼面と南側の袖、煙出しの一部が確認された。床面は5層上面である。

遺物は総数320点出土しており、土師器破片が多数を占める。第7図と第8図には、土師器9点を図化した。これらは、D－18を除きすべて製作にロクロを使用している。P8からは、土師器の坏（D－10・11・12）、甕（D－13・14）が出土している。坏D－10・11・12には、器形的に、体部から口縁部にかけて、直線的に外傾するD－10、やや丸みをもって外傾するD－11、丸みをもって外傾するD－12と、それぞれ異なるが、口縁端部がやや外へ開く共通性がある。底径口径比は3点ともほぼ同じ数値（D－10：0.37、D－11：0.38、D－12：0.37）を示し、器高口径比はD－12が0.36、D－10・11はともに0.31で、D－10・11は、ほぼ同じ大きさでもある。内面では、体部と底部の境に屈曲のあるD－11・12と、屈曲のないD－10に分けられる。底部の切り離し技法は、いずれも回転糸切り無調整である。D－12には焼成前の孔が底部に認められる。埋土2層から出土した甕D－18には、内面にヘラミガキのち黒色処理が施されている。

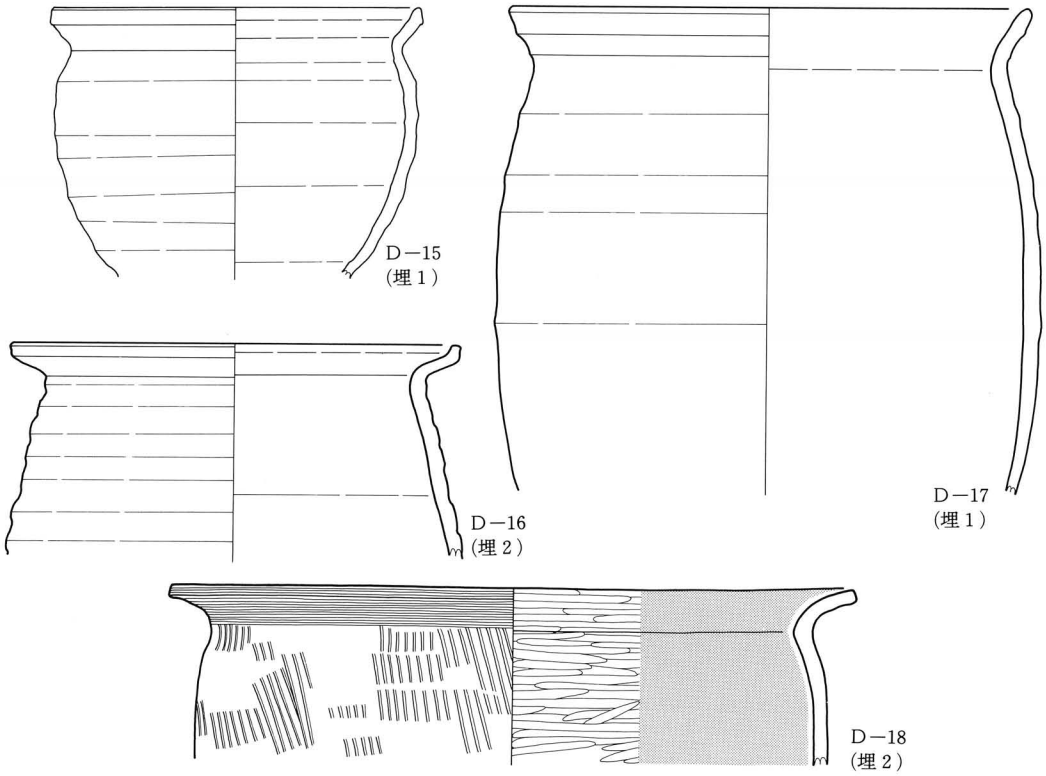
床面からの出土遺物には図化できるものはなく、住居廃絶の時期は明確でないが、P8はP3よりも古いことから、出土遺物は住居機能時に伴うものと考えられる。P3を主柱穴とすれ



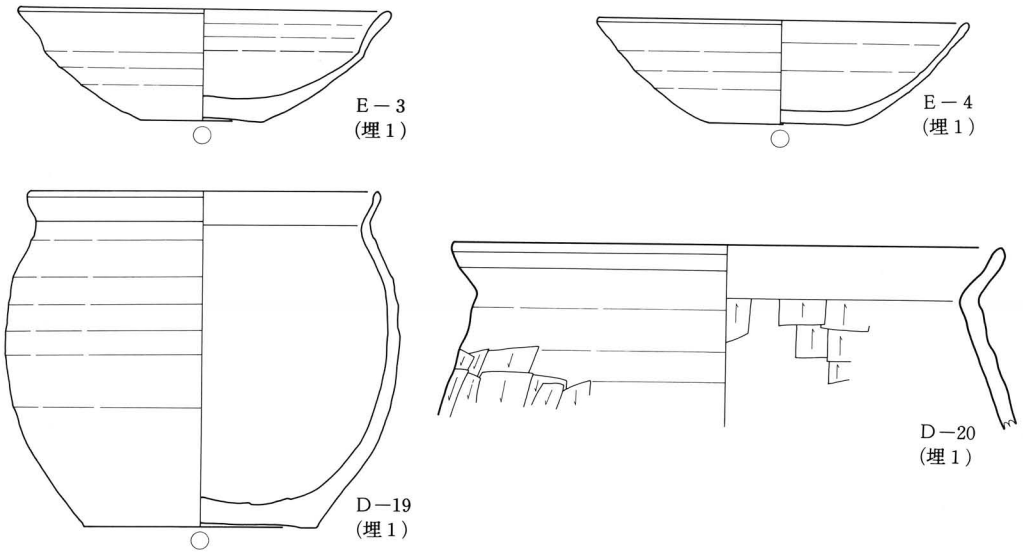
土層註記　1．7.5YR3/4暗褐色シルト，黄褐色シルト，黒色土をブロック状に含む炭を少量含む
2．10YR4/4褐色シルト，黒色土をブロック状に含む炭を少量含む
3．10YR3/3黒褐色シルト，炭・焼土粒を多量に含む
4．10YR5/4鈍い黄褐色砂質シルト，黒色土をブロック状に含む，炭を含む
5．10YR5/6黄褐色シルト
6．10YR5/8黄褐色砂質シルト，黒色土をブロック状に含む



第9図　SI 3平面図・セクツョン図



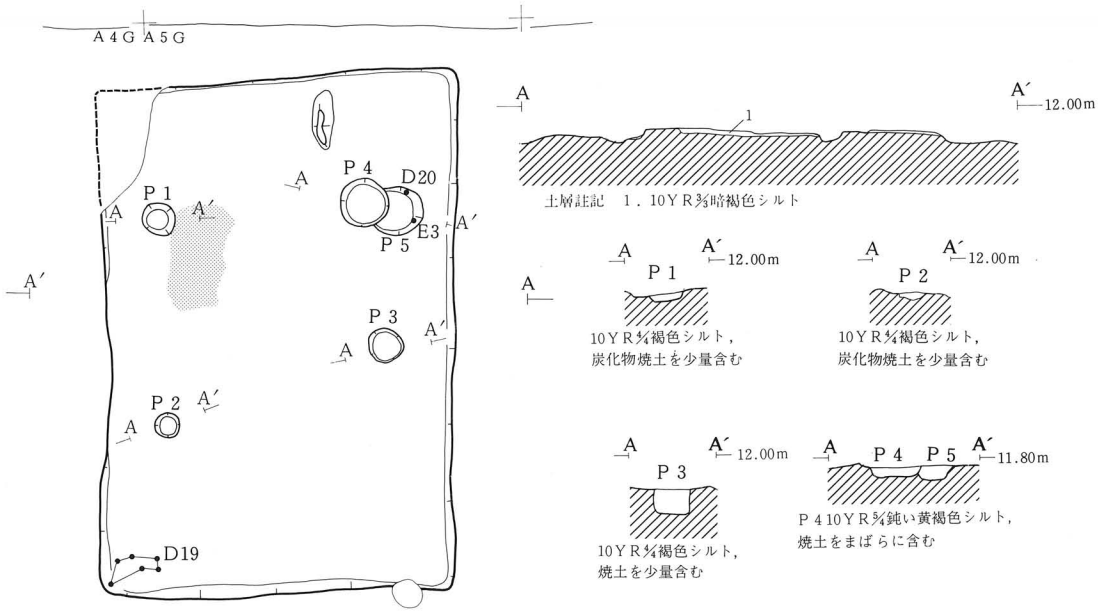
ＳＩ３②



ＳＩ４①

0　10cm

第10図　ＳＩ３・４出土遺物実測図



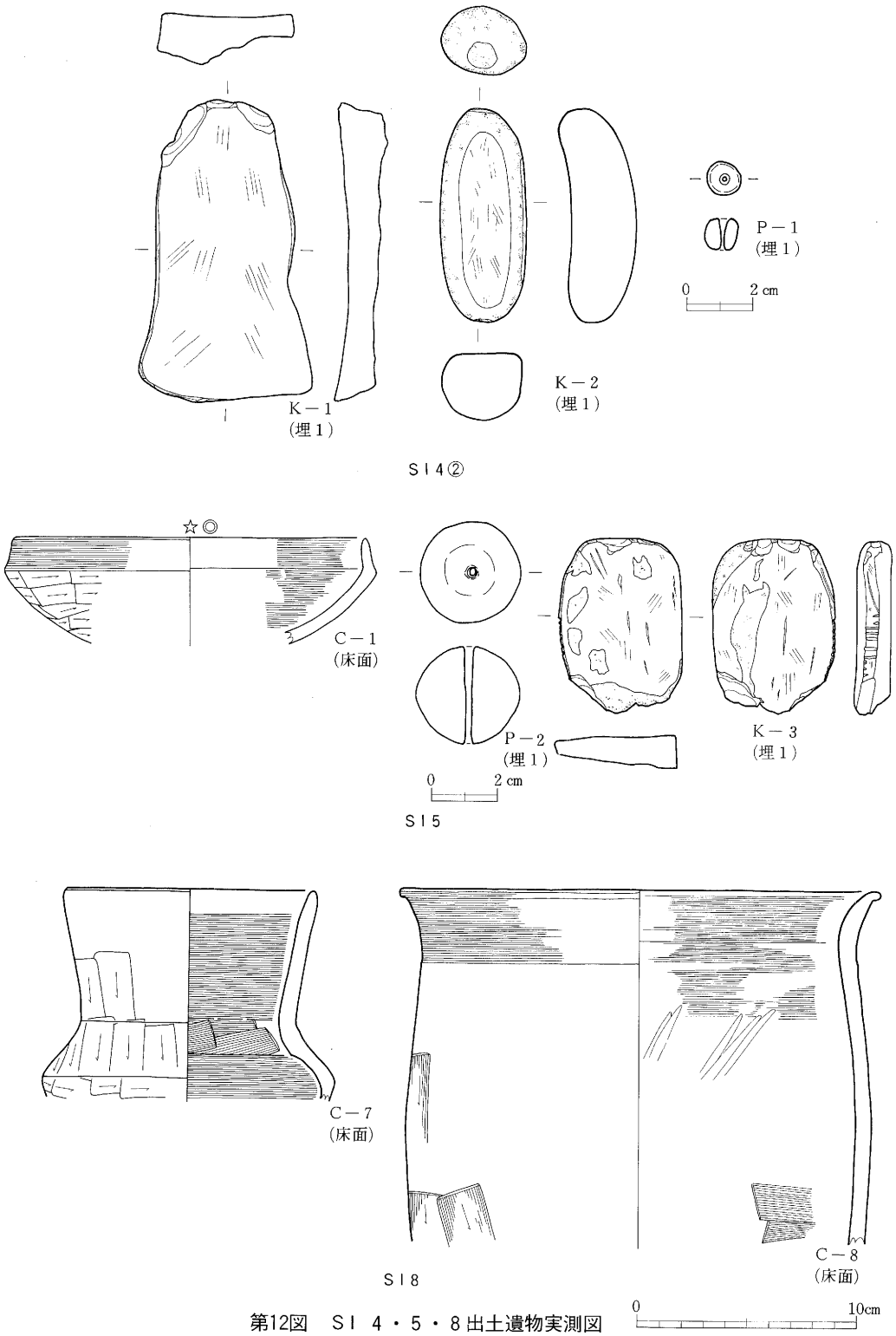
第11図　SI4平面図・セクション図　0　2m

ば、柱の建て替えを行うためにP8が埋められた可能性もある。また、住居プラン内からではないが、東壁から数cm離れた地点より第70図に示した三日月高台の灰釉陶器椀I－8が出土している。天地返しにより原位置を保っていないと思われるが、基本層II層にくい込むようにして出土しており、この住居に伴うものと考えられる。

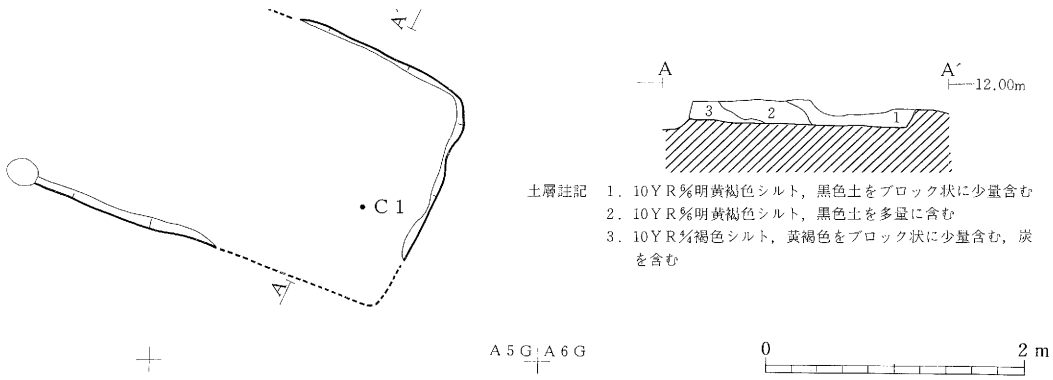
SI4（竪穴住居跡）：A－4・5グリットに位置する。SI5、SI6と重複関係があり、SI4のほうがいずれよりも新しい。平面形は長方形である。ピットは5個認められるが、主柱穴は明確でない。カマドは北壁中央に設けられており、東側の袖が確認された。床面北東部には焼土面がみられる。

遺物は総数143点出土しており、土師器破片が多数を占める。床面から出土した3点の土師器の破片には図化できるものはないが、製作にロクロが使用されている。第10図、第11図には埋土から出土した7点の遺物を示した。須恵器坏には、器形的に体部がやや丸みをもって外傾し、口縁部が外へ開くE－3と、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾するE－4がある。底径口径比は、E－3（0.33）とE－4（0.41）と違いはあるが、器高口径比（E－3：0.30、E－4：0.28）は近似している。内面は、ともに体部と底部の境に屈曲をもたない。また、内面の体下部～底面にはロクロ痕とは異なる調整痕が認められる共通性もあり、E－4にはその工具痕も観察される。土師器甕D－19・20には大小がみられる。また、把手付の体部破片（D－21：写真68）も出土している。

遺物の多くは埋土1層からの出土であるが、図示した甕D－19のように住居南西隅から破片



第12図　SI 4・5・8出土遺物実測図



第13図　ＳＩ５平面図・セクション図

がまとまって出土したものがあることや、第18図に示すように埋土１層の厚さは5cm以下と薄いことから、これらの多くは住居廃絶時に伴う可能性が高い。

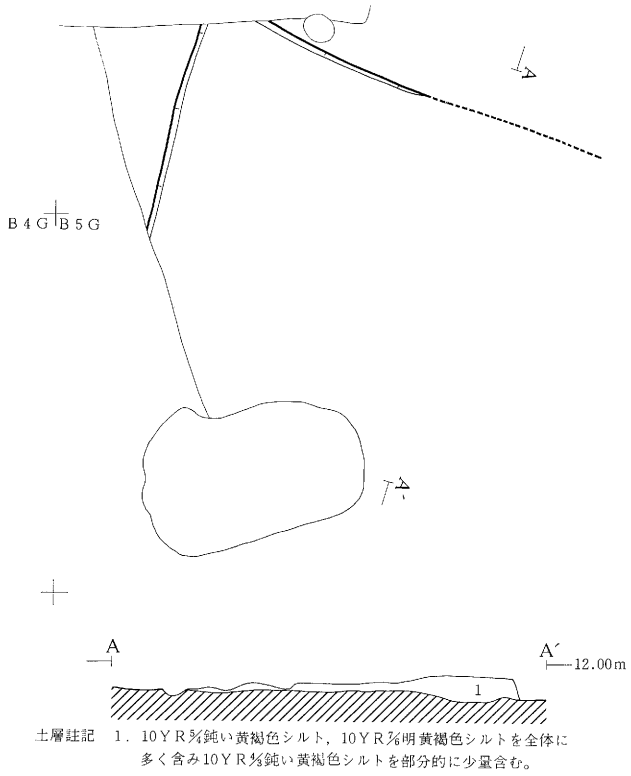
ＳＩ５(竪穴遺構)：Ａ－５グリットに位置する。ＳＩ４と重複関係があり、ＳＩ５のほうが古い。平面形は長方形を呈すると推定される。

遺物は総数29点出土している。多数を占める土師器破片には製作にロクロを使用したものは認められない。３点を第12図に示した。床面からは土師器坏（Ｃ－１）が出土しており、住居廃絶時に伴うものと考えられる。埋土１層からは土玉（Ｐ－２）、砥石（Ｋ－３）とともに、写真68に示すように土師器坏破片３点（Ｃ－２・３・４）などが出土している。土師器坏Ｃ－１～４には、胎土の類似性と、黒色仕上げ処理が施されている共通性が認められ、Ｃ－２～４もこの住居に伴う可能性がある。これらは、口縁部が内傾し、口縁部と体部の境に段のあるＣ－１・４と、稜のあるＣ－２・３に分けられる。口縁の立ち上がりには、内傾するもの（Ｃ－１）と直立するもの（Ｃ－２～４）がある。

ＳＩ６（竪穴遺構)：Ａ・Ｂ－５グリットに位置する。天地返しにより、遺構の残存状況は良好ではない。ＳＩ４と重複関係がある。ＳＩ６のほうが古い。平面形は方形を基調とすると推定される。

遺物は総数31点出土しており、すべて土師器破片である。製作にロクロを使用したものは認められない。床面からの出土遺物はない。埋土１層から出土した土師器坏の破片２点(Ｃ－５・６)を写真68に示した。２点には、胎土の類似性と、黒色仕上げ処理が施されている共通性が認められる。ともに口縁部と体部の境に段があり、口縁の立ち上がりは、Ｃ－５が内傾、Ｃ－６が直立している。

ＳＩ７（竪穴住居跡)：Ａ・Ｂ－６グリットに位置する。天地返しにより、床面の残存状況は良好ではない。平面形は方形と推定される。ピットは４個認められ、それぞれ主柱穴と考えられる。



第14図　ＳＩ６平面図・セクション図

0　2 m

遺物は総数16点出土しており、多数を占める土師器破片には、製作にロクロを使用したものは認められない。床面からの出土遺物はない。

ＳＩ８（竪穴住居跡）：Ａ・Ｂ－４・５グリットに位置する。ＳＩ４、ＳＤ７、ＳＫ４と重複関係があり、ＳＩ８がそのいずれよりも古い。天地返しにより、遺構の残存状況は良好ではない。平面形はやや南北に長い方形を基調としている。ピットは５個認められ、Ｐ１～４が主柱穴と考えられる。南辺はＳＤ７によって切られているが、中央にはわずかに焼土面が認められ、カマドは南側に設けられていた可能性がある。

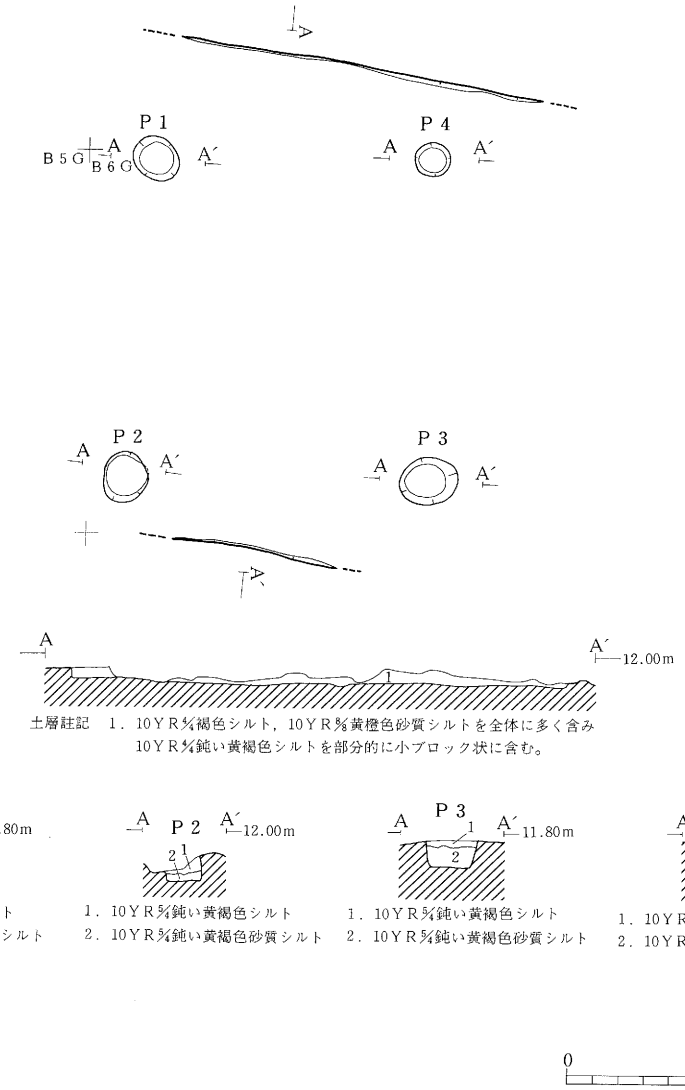
遺物は総数148点出土しており、土師器破片が多数を占める。製作にロクロを使用したものは認められない。第12図には、床面から出土した土師器２点を図化した。Ｃ－７は小型の壺である。広口で、口縁部がやや長い。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ、ヨコナデによって調整されている。Ｃ－７は２点が接合している。Ｃ－８は甕である。口縁部と体部の境は明瞭ではない。体部外面には部分的に縦方向のヘラナデが認められる。Ｃ－９（写真68）は床面出土の土師器坏の破片である。口縁部が直立し、口縁部と体部の境に段がみられる。

ＳＩ９（竪穴住居跡）：Ｂ－３・４グリットに位置する。天地返しにより、床面は残存しておら

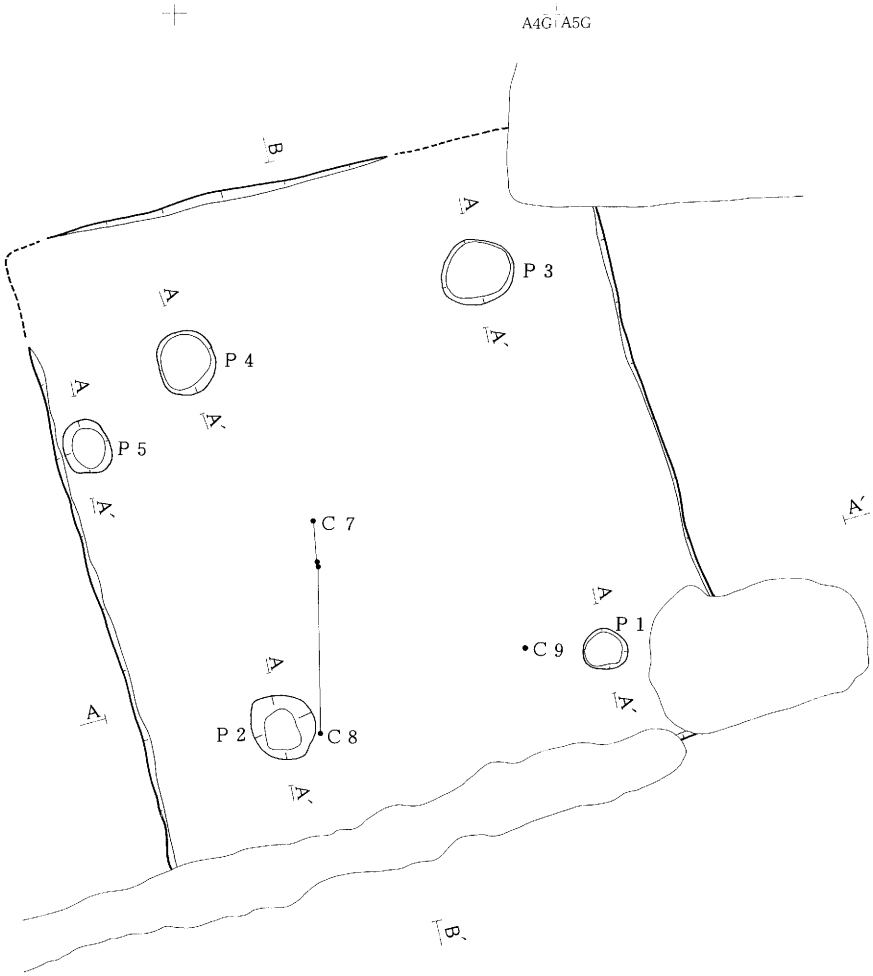
ず、掘り方と貼床埋土を検出した。ＳＩ23、ＳＤ７と重複関係があり、ＳＩ９がＳＩ23より新しく、ＳＤ７より古い。平面形は方形を基調とすると推定される。ピットは６個認められ、Ｐ２・３・５が主柱穴と考えられる。

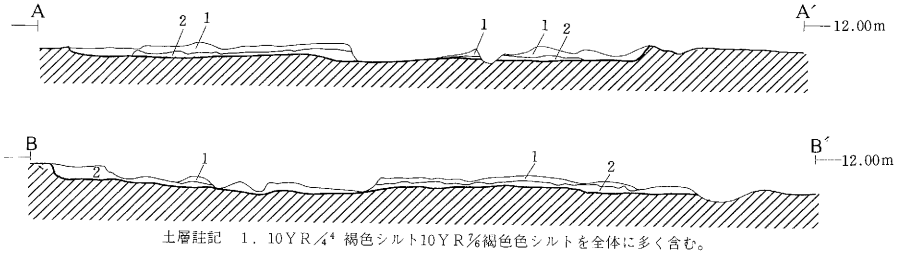
遺物は総数232点出土しており、土師器破片が多数を占める。製作にロクロを使用したものは認められない。第20図には、貼床（埋土１層）から出土した土師器坏破片１点（Ｃ－10）を図化した。Ｃ－11（写真68）の土師器坏破片とともに、胎土は緻密で細かく、口縁部が内傾し、口縁部と体部の境に稜がみられる。Ｃ－10は内外面に黒色仕上げ処理が施されている。

ＳＩ10（竪穴住居跡）：Ａ－１グリットに位置する。ＳＩ11と重複関係があり、ＳＩ10のほう

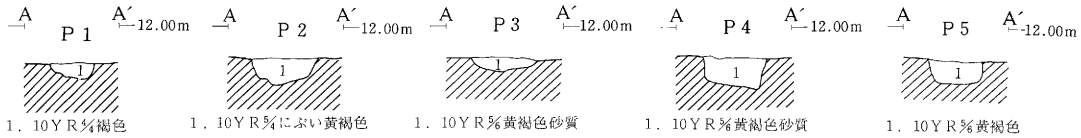


第15図　ＳＩ７平面図・セクション図





土層註記　1．10YR4/4 褐色シルト10YR5/6褐色色シルトを全体に多く含む。
2．明黄褐色砂質シルト10YR5/4褐色シルトを少量含む。



1．10YR5/4褐色シルト砂質

1．10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト黄褐色土をブロック状に含む。

1．10YR5/6黄褐色砂質シルト黒色土をブロック状に含む。

1．10YR5/6黄褐色砂質シルト黒色土をビロック状に含む。

1．10YR5/6黄褐色シルト

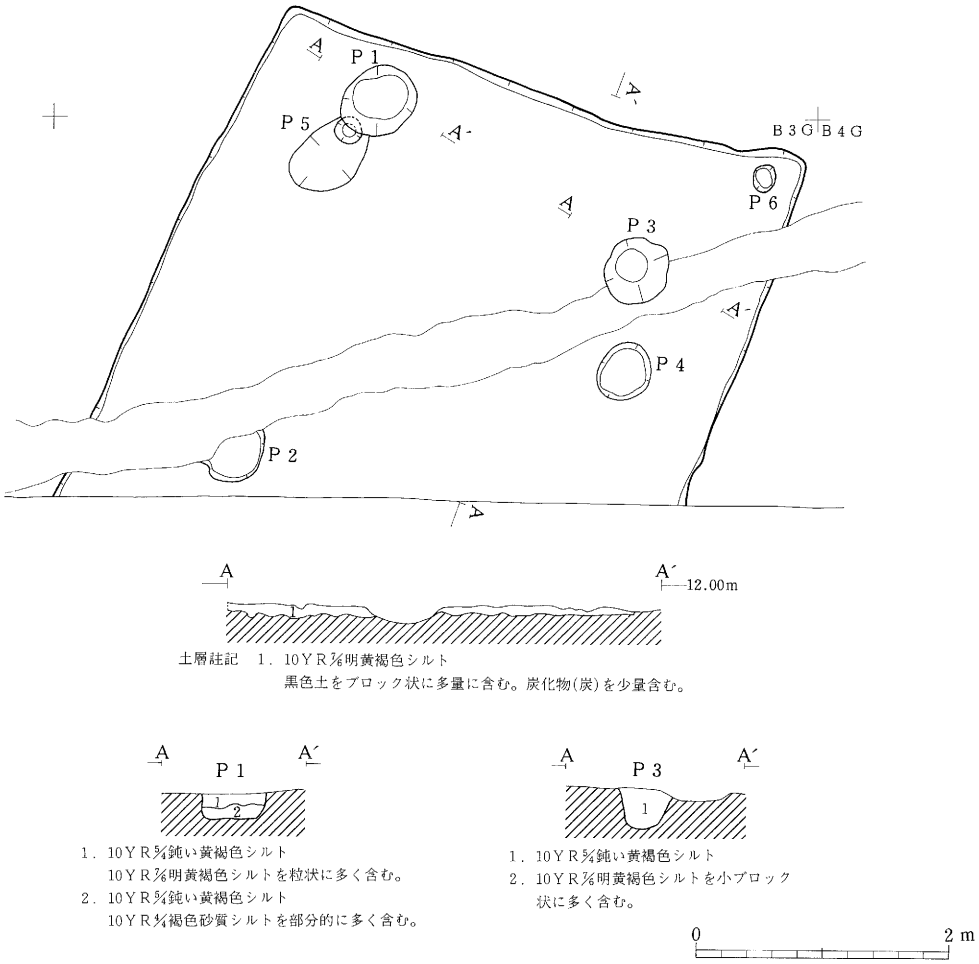
第16図　S I 8平面図・セクション図

0　2 m

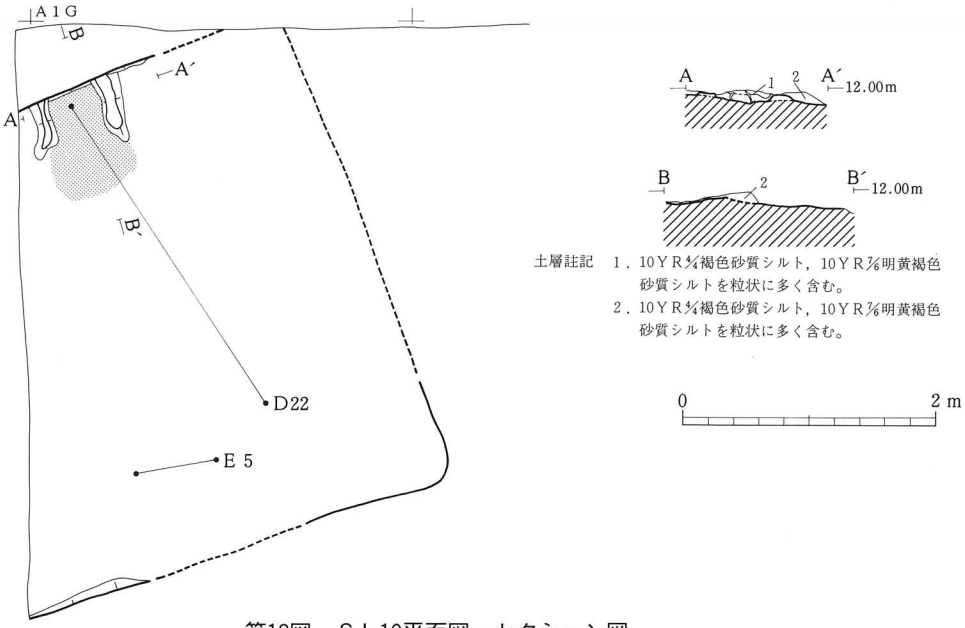
がＳＩ 11 よりも新しい。平面形は方形を基調とすると推定される。カマドは北壁中央に設けられている。

遺物は総数 137 点出土しており、土師器破片が多数を占める。第 20 図には土師器甕１点（Ｄ－22）を図化した。小型の甕である。製作にロクロを使用している。カマド焼面と床面との接合関係が認められる。床面出土のものは小破片である。Ｅ－５（写真 68）は須恵器甕が焼成時に溶着したものの破片である。外面にはともに平行叩き目がみられる。

ＳＩ 11（竪穴住居跡）：Ａ・Ｂ－１・２グリットに位置する。ＳＩ 10 と重複関係があり、ＳＩ 11 のほうが古い。天地返しにより、床面は部分的にしか残っていない。平面形は南北にやや長い方形である。ピットは 11 個認められ、Ｐ１～４が主柱穴、Ｐ９が貯蔵穴と考えられる。カマドは焼土面の位置から、南壁中央部のやや西側に設けられていたと推定される。床面は２層上面である。



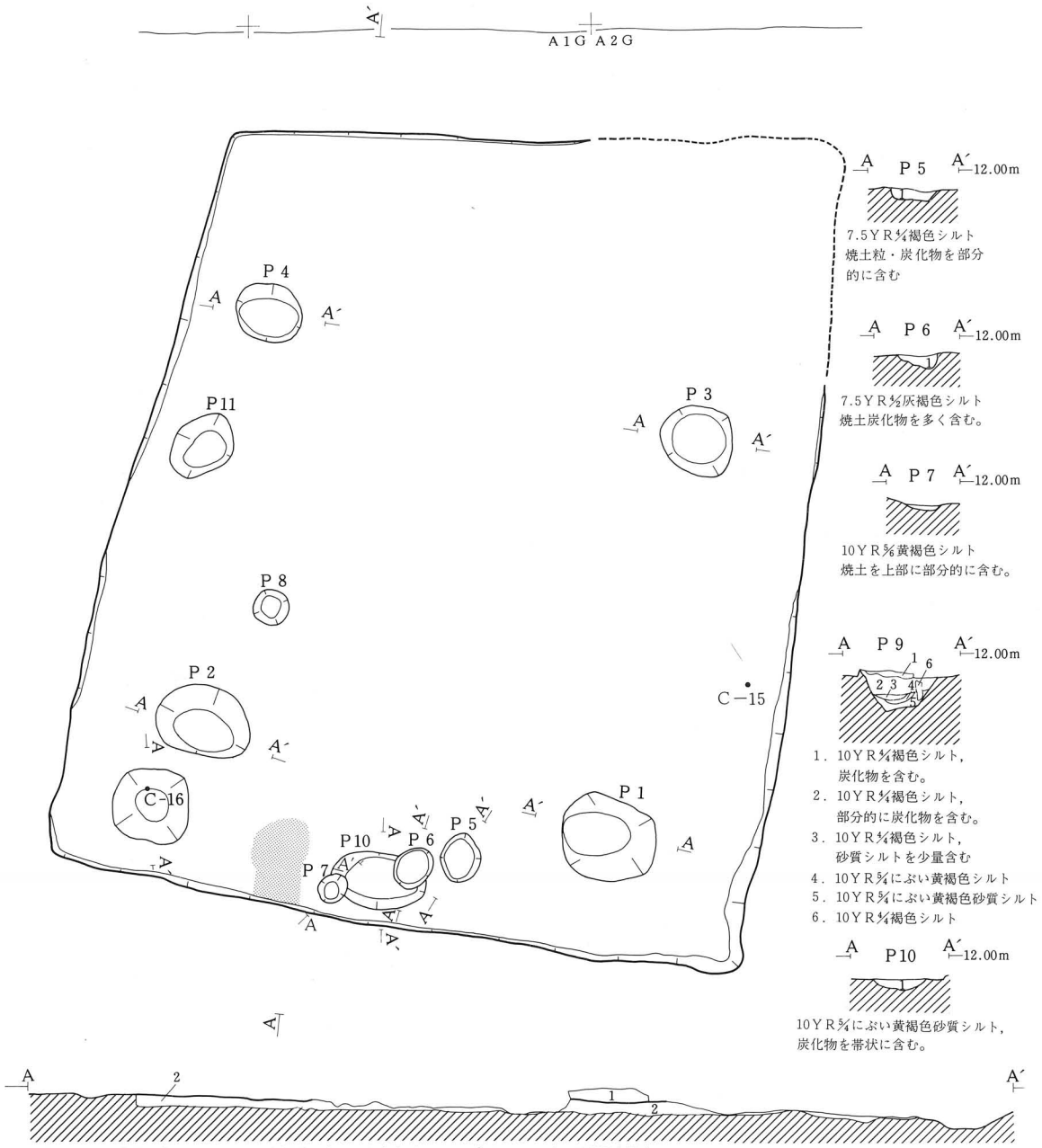
第17図　ＳＩ９平面図・セクション図



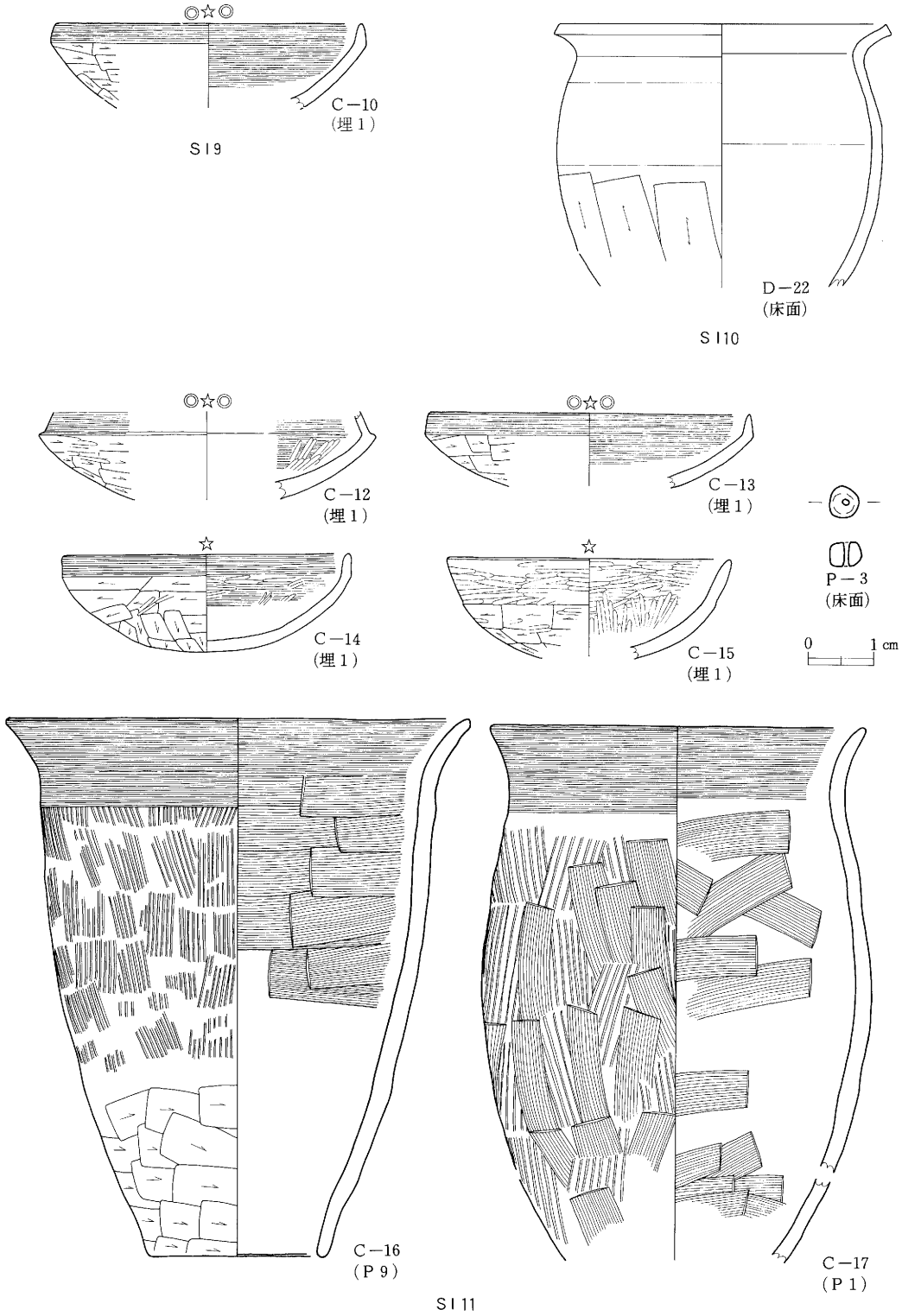
第18図　ＳＩ10平面図・セクション図

遺物は総数470点出土しており、土師器破片が多数を占める。製作にロクロを使用したものは認められない。第20図には7点を図化した。床面から出土した土玉(Ｐ－３)は直径4.5mmと小さい。Ｐ１からは土師器甕(Ｃ－17)、Ｐ９からは土師器甑(Ｃ－16)が出土している。Ｃ－17は、口縁部が外反し、体部中央が膨らむ器形の甕である。口縁部から体部にかけて段は形成されていない。外面は刷毛目ののちヘラナデによる調整が行われている。最大径は体部中位にある。Ｃ－16は口縁部、体部が外傾する無底式の甑である。口縁部から体部にかけて段は形成されていない。埋土１層からは４点の土師器坏（Ｃ－12～15）が出土しており、胎土の共通性が認められる。しかし、これらは、それぞれ器形的に異なり、口縁部が内傾し、体部との境に段のあるＣ－12、稜のあるＣ－13、口縁部が直立し、体部との境に稜のあるＣ－14、口縁部が外傾し、体部との境に段のあるＣ－15に分けられる。調整では、Ｃ－12～14（内外面口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリあるいはそののちヘラミガキ、体部内面ヨコナデあるいはそののちヘラミガキ）と、Ｃ－15（内外面口縁部ヘラミガキ、体部外面ヘラケズリのちヘラミガキ、体部内面ヘラミガキ）には違いが見られる。また、Ｃ－12・13は内外面に黒色仕上げ処理が施されている。Ｃ－15の内面には黒色処理は施されていない。

床面からの出土土器には図化できるものはないが、Ｐ１出土の土師器甕Ｃ－17とＰ９出土の土師器甑Ｃ－16は、住居廃絶時に伴うものと考えられる。また、埋土１層出土の土師器坏４点については、いずれも破片資料であるが、埋土が薄いことなどから、この住居に伴う可能性が考えられる。



第19図　SI 11平面図・セクション図



第20図　SI ９・10・11出土遺物実測図

ＳＩ 12（竪穴住居跡）：Ａ・Ｂ－２・３グリットに位置する。ＳＡ３と重複関係があり、ＳＩ 12のほうが古い。天地返しにより、床面は部分的にしか残っていない。平面形は南北にやや長い方形を基調としている。ピットは７個認められる。

遺物は総数365点出土しており、土師器破片が多数を占める。製作にロクロを使用したものは認められない。第26図には４点を図化した。床面からは須恵器盤（Ｅ－６）と、図化していないが、土師器坏（Ｃ－20：写真69）が出土している。どちらも破片である。Ｅ－６は推定口径19.1 cm。Ｃ－20は体部から口縁部にかけて直立気味に立ち上がる大型の坏の破片である。埋土１層からは、土師器坏Ｃ－18、土師器甕Ｃ－19、鉄鏃Ｎ－１が出土している。Ｃ－18は、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾し、口縁端部がわずかに外へ開いている。外面体下部に段が形成されているが、内面には認められない。Ｃ－19は、口縁部が外反し、体部が膨らむ器形の甕である。口縁部と体部の境には軽い段が形成されている。

床面出土の須恵器盤Ｅ－６は住居廃絶時に伴うと考えられる。また、図示した２点の土師器については、埋土が薄いことなどから、この住居に伴う可能性がある。

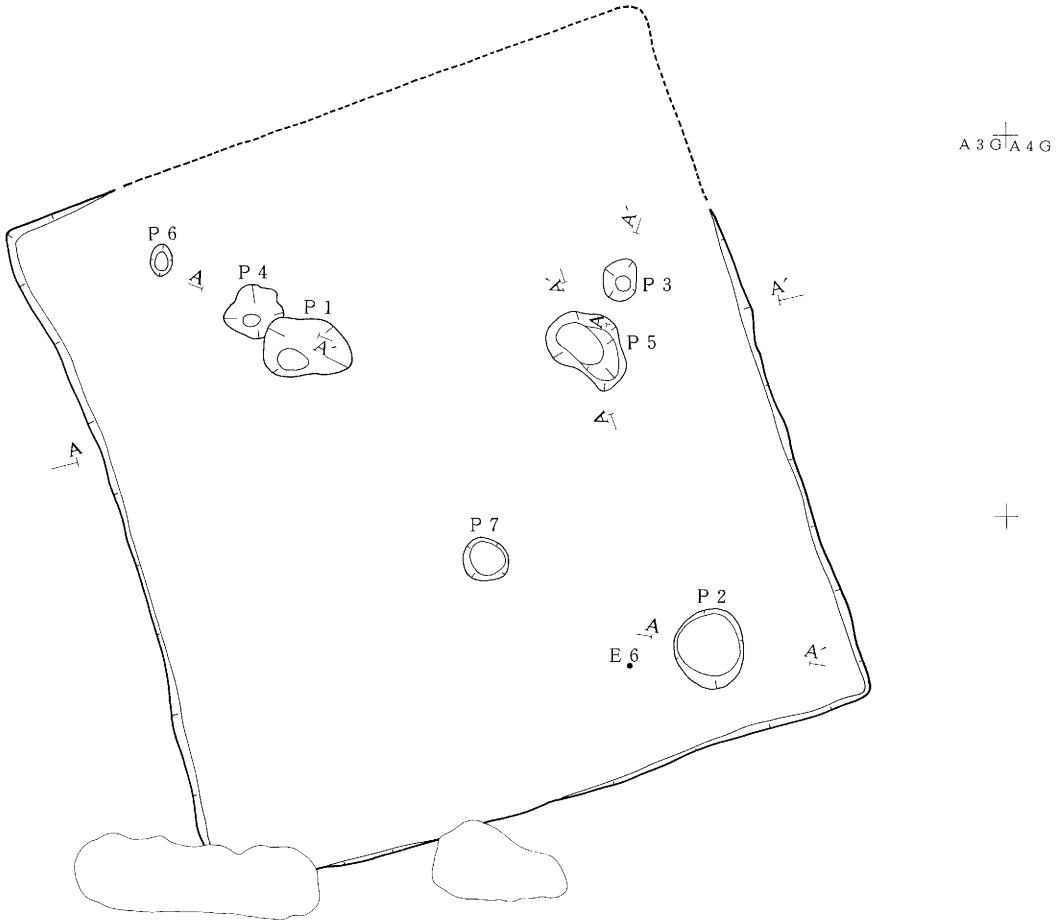
ＳＩ 13(竪穴遺構)：Ａ－２グリットに位置する。ＳＩ 11、ＳＩ 12と重複関係があり、ＳＩ 13のほうが両者より古い。天地返しにより、遺構のほとんどは残存していない。床面は２層上面である。

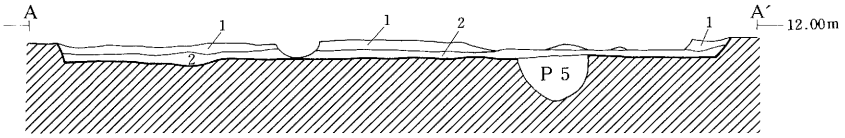
遺物は総数59点出土している。すべて土師器破片であり、製作にロクロを使用したものは認められない。埋土１層出土遺物には図化できるものはなく、埋土２層（掘り方）出土の土師器坏Ｃ－21を図示した。Ｃ－21は、体部から口縁部にかけて丸みをもって立ち上がっている。内面の口縁直下に稜線が形成されている。調整は、口縁部内外面ヨコナデ、体部から底部の内外面はヘラケズリのちヘラミガキである。

ＳＩ 14（竪穴住居跡）：Ａ・Ｂ－16グリットに位置する。ＳＩ 25、ＳＢ１、ＳＤ11、ＳＫ19、ＳＫ20と重複関係があり、ＳＩ 14は、ＳＩ 25、ＳＢ１、ＳＤ11より新しく、ＳＫ19、ＳＫ20より古い。平面形は正方形である。ピットは７個認められ、Ｐ４が貯蔵穴と考えられる。カマドは、西壁中央部のやや北側に設けられている。

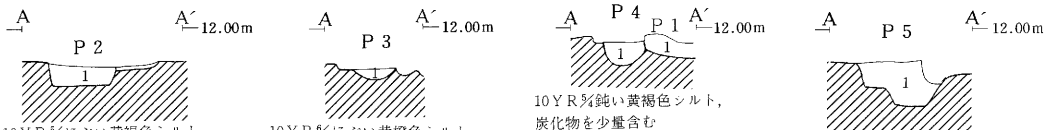
遺物は総数618点出土しており、土師器破片が多数を占める。床面から出土した76点の土師器には図化できるものはないが、その製作にはロクロが使用されている。なかには、内面に黒色処理の施された坏破片も数点ある。第26図には埋土１層から出土した須恵器坏Ｅ－８と砥石Ｋ－４を図示した。また、臼玉（Ｋ－33：第70図）も出土している。

ＳＩ 15（竪穴住居跡）：Ａ・Ｂ－14グリットに位置する。ＳＩ 16、ＳＩ 26と重複関係があり、ＳＩ 15のほうが両者より古い。平面形は正方形である。ピットは12個認められる。主柱穴は明確でないが、Ｐ５とＰ８は貯蔵穴と推定される。カマドは東壁北側に設けられており、焼土





1．10YR5/4にぶい黄褐色シルト　10YR7/6明黄褐色シルトを小ブロック状に多く含む。
2．10YR5/6黄褐色シルト　10YR7/6明黄褐色シルトを小ブロック状に多く含む。



10YR5/4にぶい黄褐色シルト
焼土・炭化物を部分的に含む。

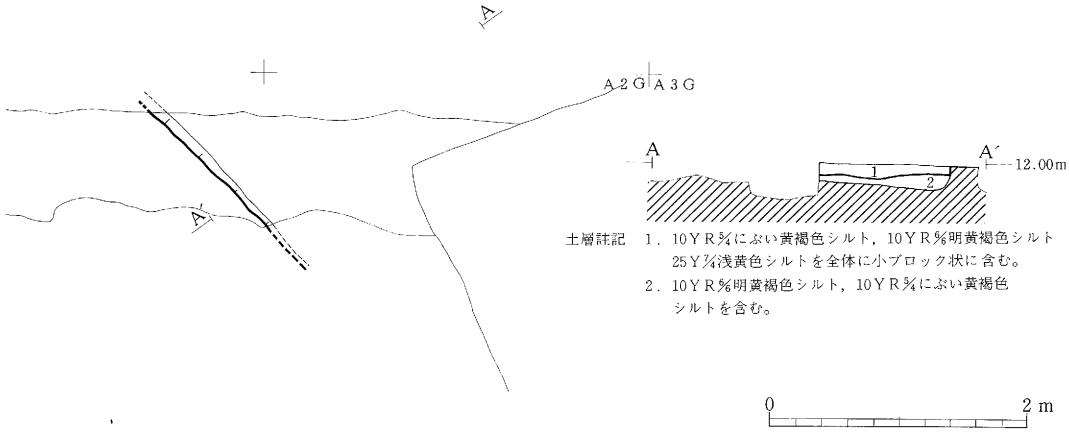
10YR5/3にぶい黄橙色シルト，
炭化物焼土・土器片を部分的
に含む。

10YR5/4鈍い黄褐色シルト，
炭化物を少量含む

10YR5/4にぶい黄褐色シルト
炭化物・焼土を部分的に含む。

第21図　SI 12平面図・セクション

0　2 m



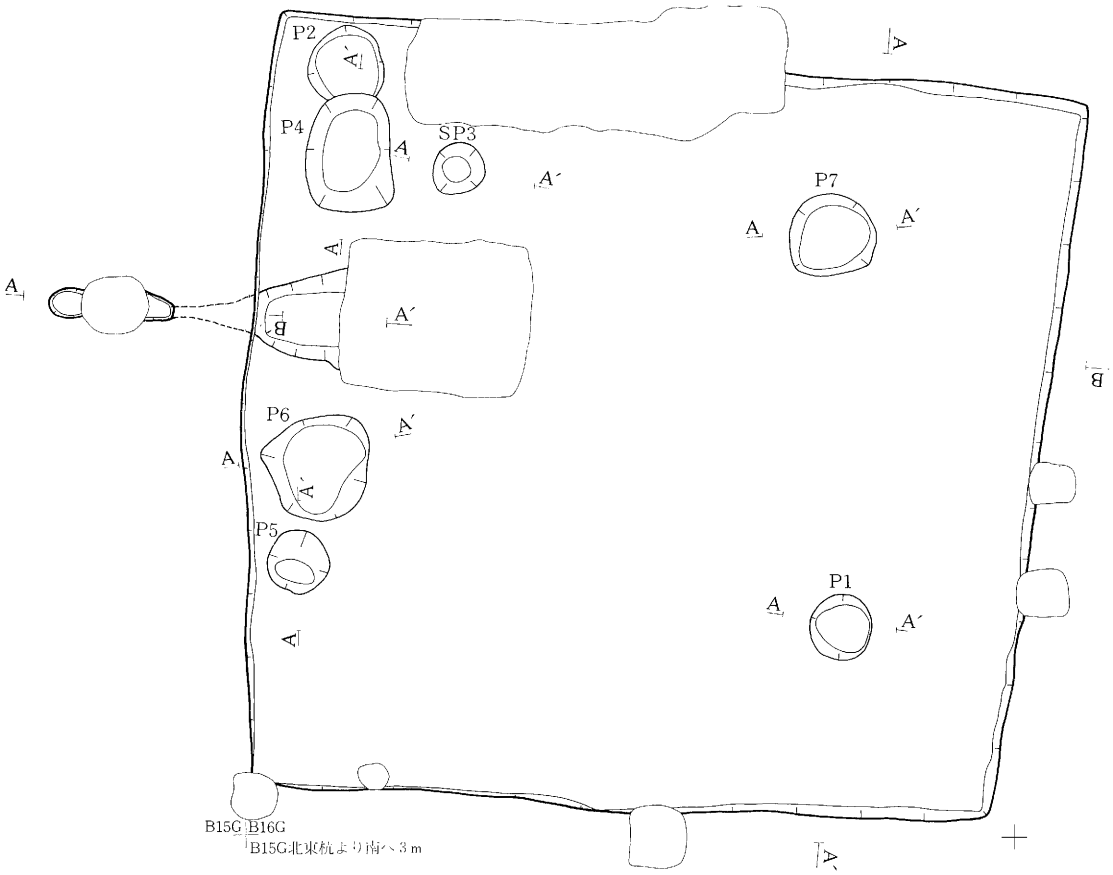
第22図　ＳＩ13平面図・セクション図

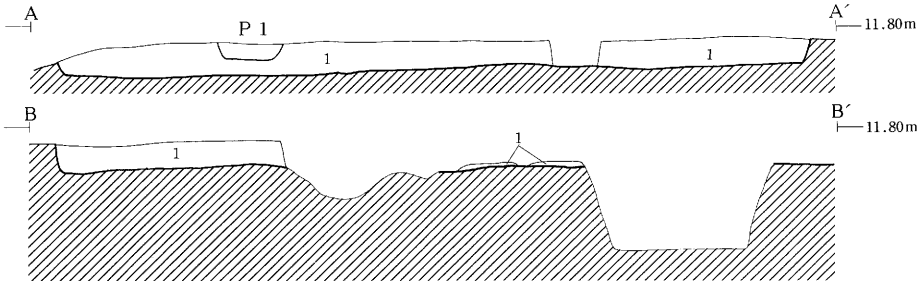
面と北側の袖のところに礫２個、短い煙道が確認された。埋土は２層に分かれている。埋土１層下部には、灰白色火山灰が層厚1～2 cm で２層上面を覆うように堆積している。

遺物は総数1396点出土しており、土師器破片が多数を占める。埋土出土遺物は、灰白色火山灰の上下で大きく二つに分けられる。第26図・27図・28図には、主に埋土２層と、床面及びピット出土遺物16点を図示した。土師器はすべて製作にロクロを使用している。

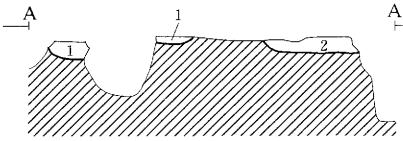
床面からは土師器坏Ｄ－23、Ｐ11からは耳皿Ｄ－34が出土している。Ｄ－23の器形は、体部から口縁部にかけてやや円みをもって外傾しており、内形線は体部と底部の境に屈曲をもっている。底径口径比：0.45、器高口径比：0.37。体部下端と底部は手持ちヘラケズリ調整が行われている。Ｄ－34は燻し焼成されている耳皿で、内外面とも黒色を呈する。ロクロ形成ののちヘラミガキなどの調整は行われておらず、土師器とは異なる。

埋土２層からは土師器の坏（Ｄ－24～26、28）、甕（Ｄ－29～31）、甑（Ｄ－32）、壺（Ｄ－33）、須恵器坏（Ｅ－８～10）が出土している。坏Ｄ－24～26、28には器形的な類似性が認められ、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾しており、Ｄ－25には口縁端部がやや外へ開く違いはあるが、内形線はいずれも体部と底部の境に屈曲をもたない。底径口径比（Ｄ－24：0.41、Ｄ－25：0.39、Ｄ－26：0.35、Ｄ－28：0.40）と器高口径比（Ｄ－24：0.33、Ｄ－25：0.36、Ｄ－26：0.35、Ｄ－28：0.31）では、Ｄ－26の口径底径比がやや小さいが、他はそれぞれ近い数値となっている。底部は、すべて回転糸切り無調整である。また、Ｄ－24～26とＤ－28には大きさの違いが認められることから、坏に大小２種類のあることも知られる。Ｅ－８～10は、器形的にそれぞれ異なる。口縁部から体部にかけては、Ｅ－８はやや丸みをもって外傾し、口縁端部が外へ開き、Ｅ－９は丸みをもってそのまま外傾し、Ｅ－10は外傾している。内面は体

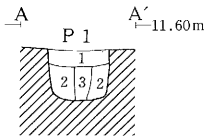




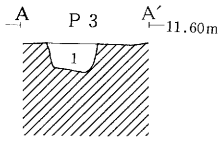
1．10YR5/4にぶい黄褐色シルト，10YR5/6明黄褐色シルト，2.5Y5/4淡黄褐色シルトを全体にブロック状に含む。
10YR6/6にぶい黄橙色シルトを部分的にブロック状に含み炭を少量含む。



1．10YR3/3暗褐色シルト
炭化物を少量含む。
2．10YR3/3暗褐色シルト
焼土・炭化物を多く含む。



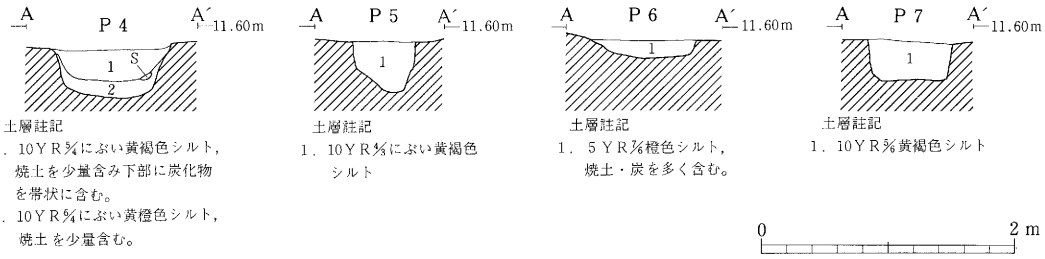
1．10YR5/4にぶい黄褐色シルト
2．10YR5/4にぶい黄褐色シルト
10YR5/6明黄褐色シルト
2.5Y5/4明黄褐色シルトを
小ブロック状に含む。
3．10YR5/4鋭い黄褐色粘土質シルト



1．10YR5/4にぶい黄褐色シルト 小ブロック状に炭化物少量含む。

0　2 m

第23図　SI 14平面図・セクション図



第24図　ＳＩ14セクション図

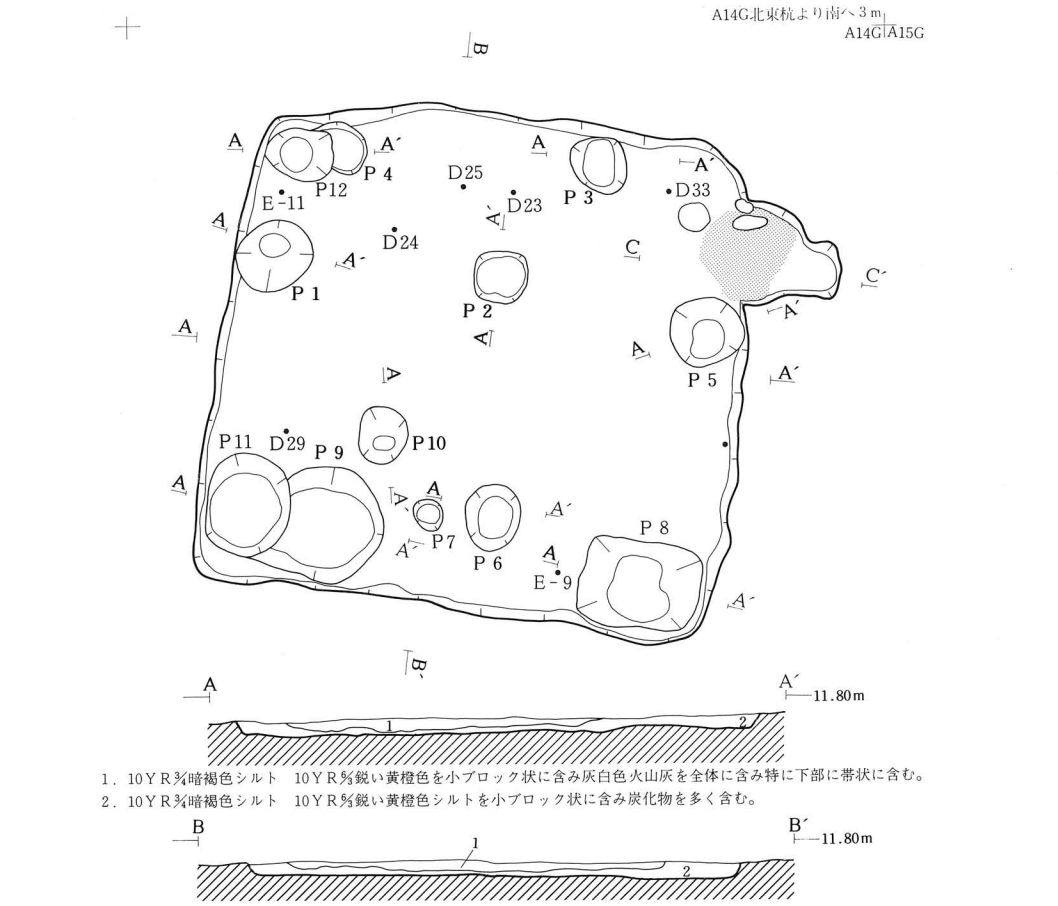
部と底部の境に屈曲をもつＥ－８・９、屈曲をもたないＥ－10に分けられる。底径口径比（Ｅ－８：0.39、Ｅ－９：0.46、Ｅ－10：0.44）と器高口径比（Ｅ－８：0.29、Ｅ－９：0.33、Ｅ－10：0.34）では、Ｅ－９と10の数値は近似するが、器形とともに大きさの違いが認められる。底部は、すべて回転糸切り無調整である。また、Ｅ－８・９の内面体部下半から底部にかけて、Ｅ－10の内面体部下半には、ロクロ痕とは異なる調整痕が認められ、Ｅ－８・９では工具の痕跡も観察される。Ｄ－29～31には、土師器甕の大小がみられ、小型の甕Ｄ－30の内面にはヘラミガキののち黒色処理が施されている。Ｄ－32は底部を欠損しているが、把手付の甑と推定される。口径22 cmを測る。器形は、体下部は外傾、体上部は直線的に立ち上がり、口縁は外へ開いている。２個の把手は小さく、先端は上方を向いており形骸化している。Ｄ－33は壺と考えられる。

埋土１層からは、土師器坏Ｄ－27と砥石Ｋ－５のほか、平瓦破片１点（Ｇ－２：写真70）や赤焼土器の破片２点などが出土している。Ｇ－２は狭端部付近の平瓦破片である。製作上の痕跡は、凸面では全面に縦方向の縄叩き目とその叩き目の潰れ、凹面では細かい布目とそれを消す全面的なナデがみられる。凹面側縁にはヘラケズリにより面取りは行われていない。再利用されており、凸面の中央部に磨面が認められる。

これらの出土遺物のなかで、床面から出土している土師器坏Ｄ－23は住居廃絶時に伴うものと考えられる。埋土中出土遺物については、図示した２層出土の土器は床面直上からの出土であり、層厚が薄いことや、残存率の高いものが多く、この住居に伴う可能性が高い。

ＳＩ16（竪穴住居跡）：Ａ・Ｂ－13・14グリットに位置する。ＳＩ15、ＳＩ26、ＳＡ２と重複関係があり、ＳＩ16は、ＳＩ26より新しく、ＳＩ15、ＳＡ２より古い。平面形は方形を基調としていると推定される。ピットは６個認められる。主柱穴は明確でないが、Ｐ１は貯蔵穴と推定される。

遺物は総数947点出土しており、土師器破片が多数を占める。遺物のほとんどは埋土１～３層から出土している。第28図・30図には12点を図示した。土師器はすべて製作にロクロを使用している。



1．10YR3/4暗褐色シルト　10YR5/3鋭い黄橙色を小ブロック状に含み灰白色火山灰を全体に含み特に下部に帯状に含む。
2．10YR3/4暗褐色シルト　10YR5/3鋭い黄橙色シルトを小ブロック状に含み炭化物を多く含む。

1．10YR5/4褐色シルト，焼土粒を少量含む。
2．10YR5/4褐色シルト，焼土をブロック状に多く含み灰白色火山灰も少量含む。
3．10YR褐色シルト，焼土を少量含む。
4．5YR5/4にぶい赤褐色シルト，炭化物を含む。

10YR5/3にぶい黄褐色シルト

10YR5/4にぶい黄褐色シルト，炭化物を少量含む。

10YR5/4にぶい黄褐色シルト，炭化物・焼土を少量含む。

10YR5/4にぶい黄褐色シルト，炭化物を多く含む。

1．10YR5/3にぶい黄褐色シルト，炭化物・焼土を少量含む。
2．10YR5/4褐色シルト炭化物を上部に部分的に含む。

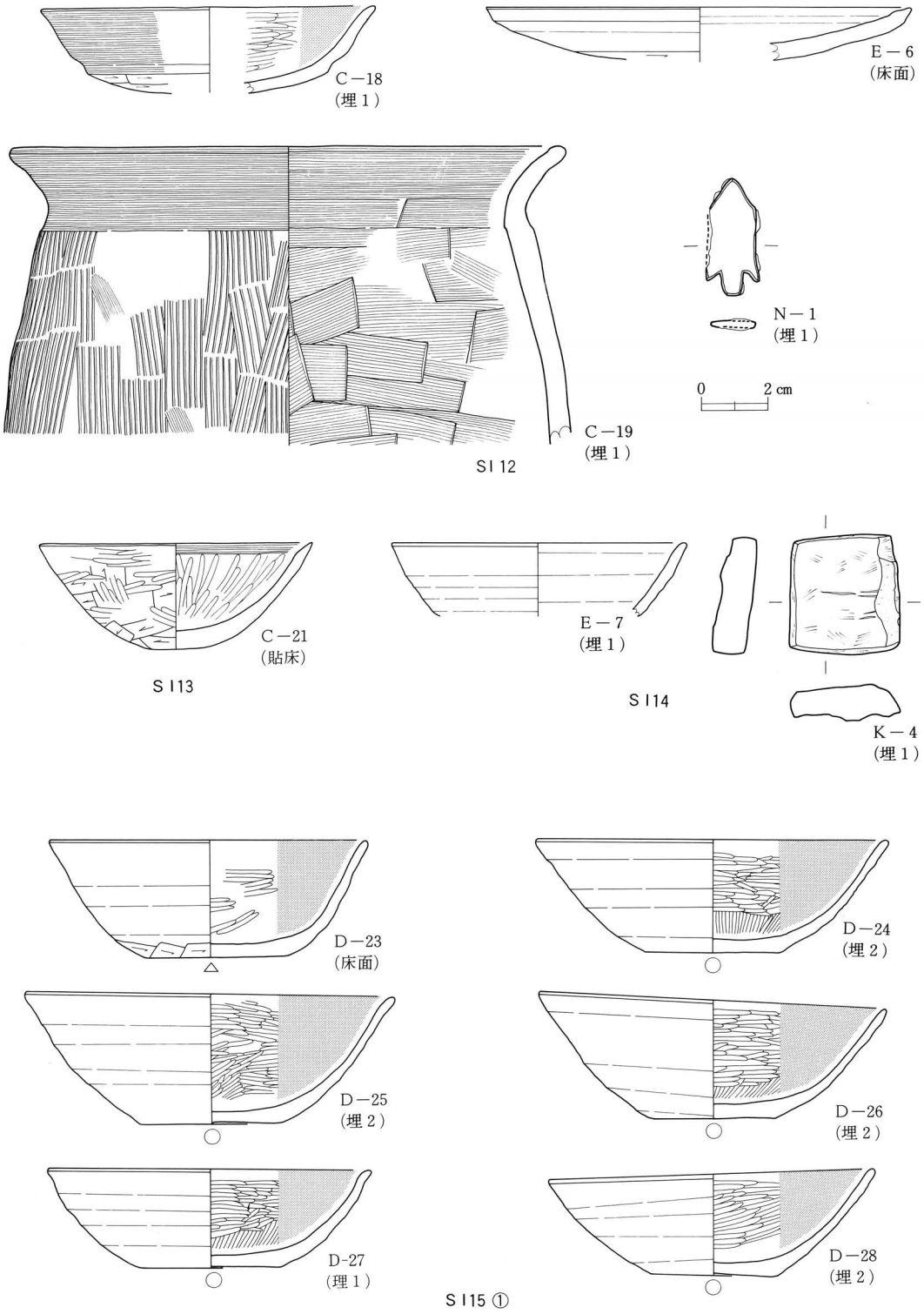
1．10YR5/4褐色シルト，炭化物・焼土を少量含む。
2．10YR5/3にぶい黄橙色砂質シルト，炭化物を含む。
3．10YR5/3にぶい黄橙色砂質シルト炭化物を少量含む。

1．10YR5/4にぶい黄褐色シルト炭化物・焼土を少量含む。

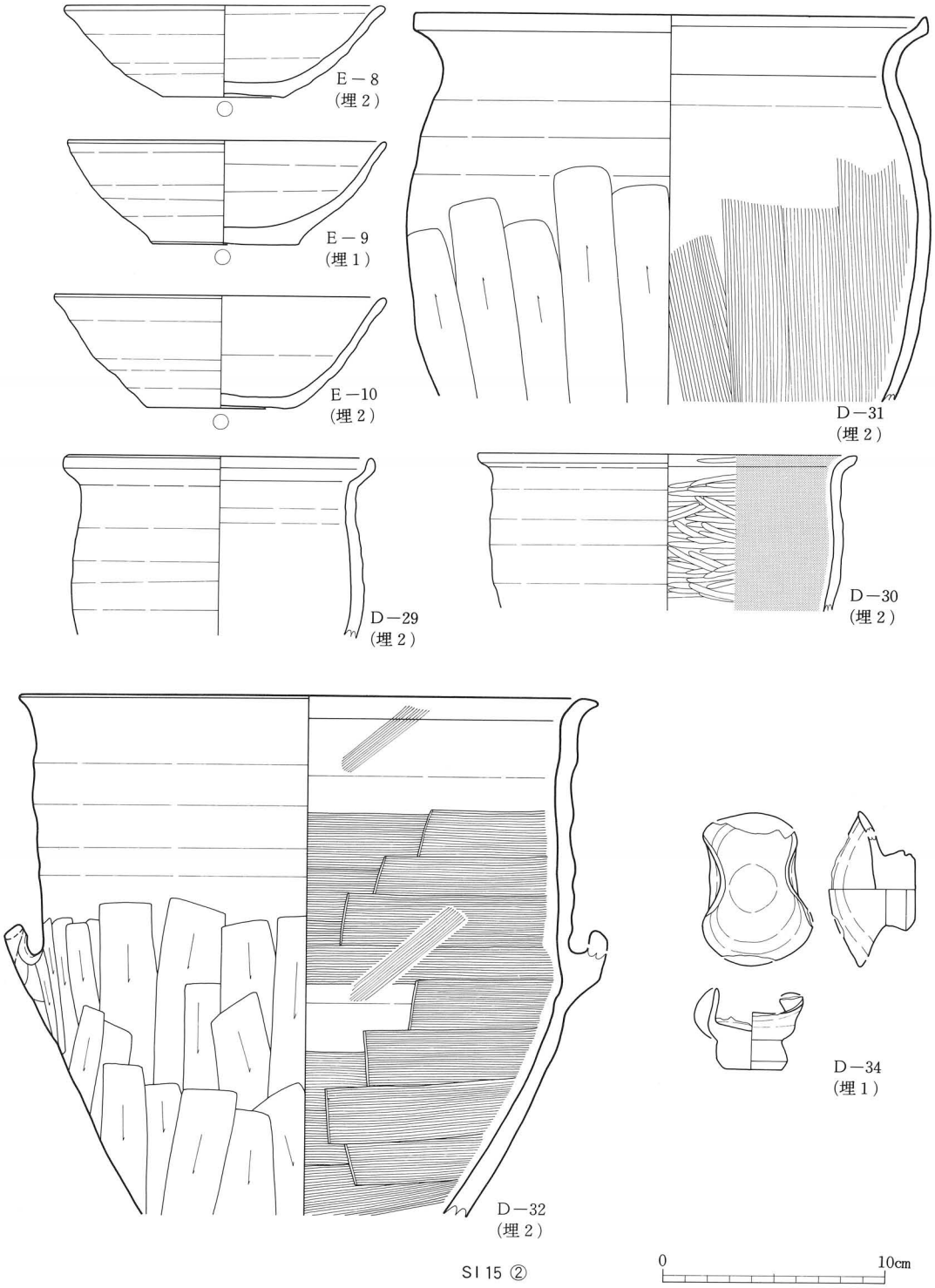
P—11　10YR5/4にぶい黄褐色シルト炭化物を多く含む。
P—9　10YR5/4にぶい黄褐色シルト炭化物・焼土を少量含む。

P—12　10YR5/4にぶい黄褐色シルト
P—4　10YR5/4にぶい黄褐色シルト

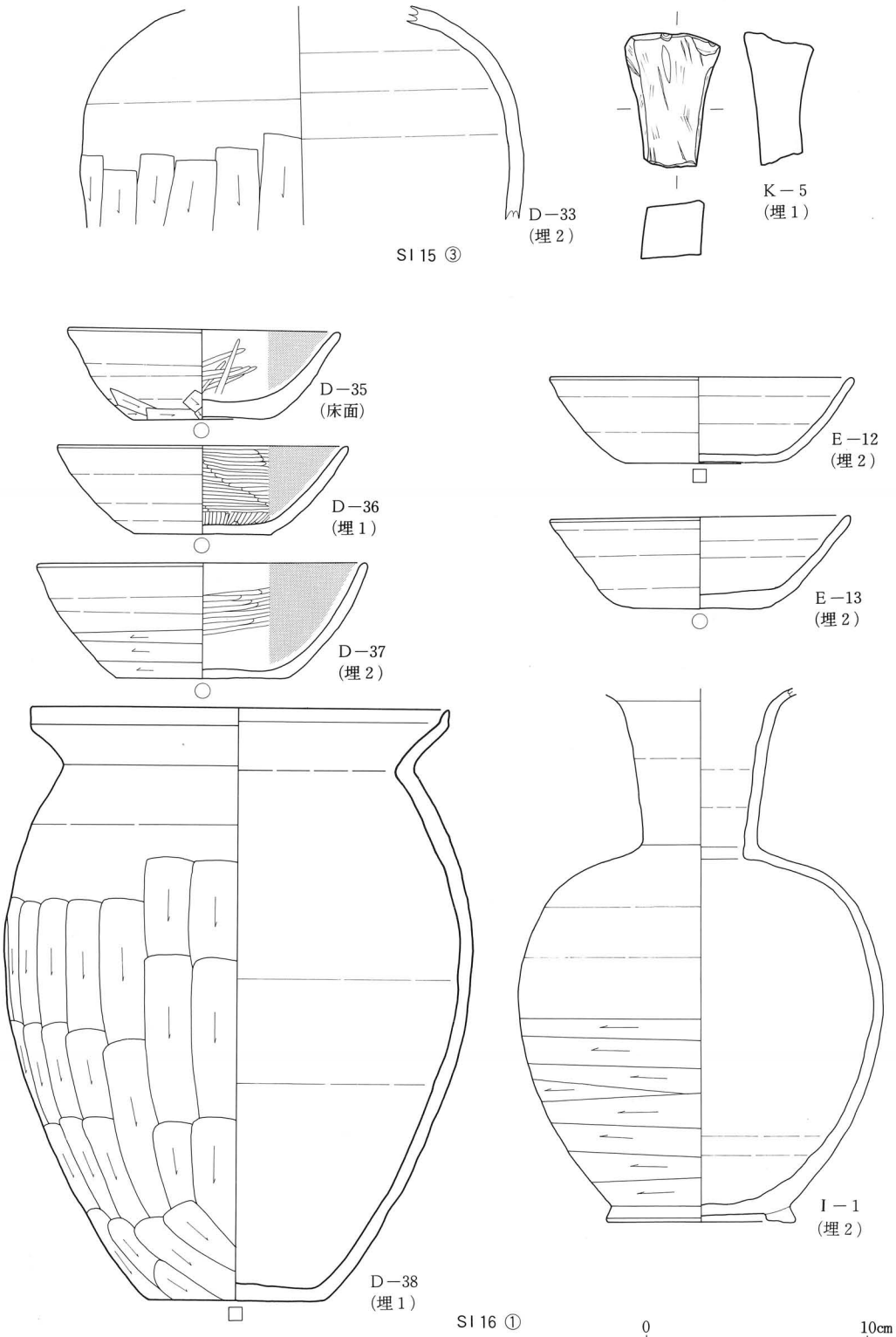
第25図　SI 15平面図・セクション図



第26図　SI 12・13・14・15出土遺物実測図　0　10cm



第27図　ＳＩ 15出土遺物実測図



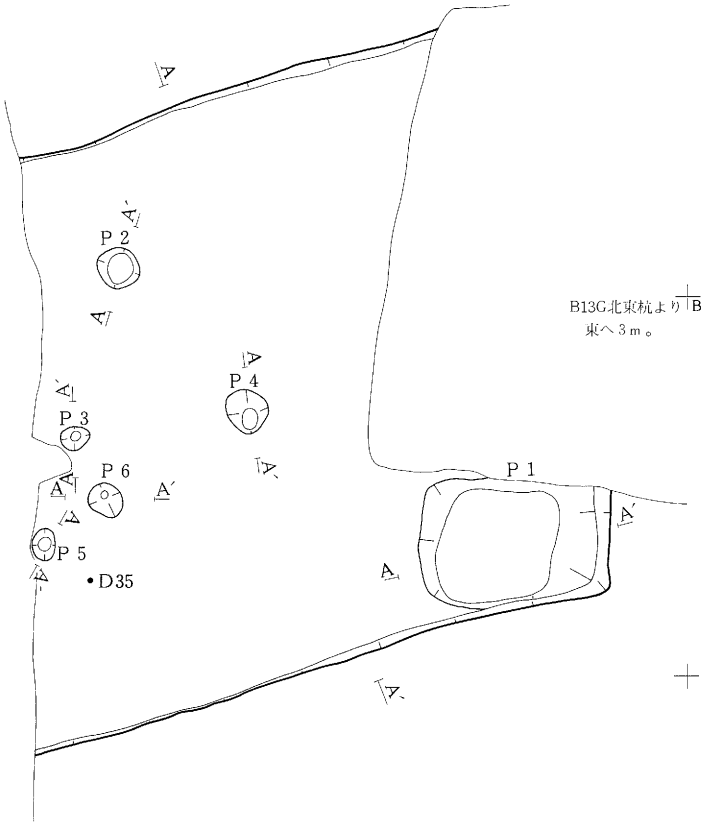
第28図　ＳＩ 15・16出土遺物実測図

床面からは土師器坏D－35、Ｐ１からは須恵器壺Ｅ－14が出土している。D－35の器形は、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾し、口縁端部が外へ開いており、内面は体部と底部の境に屈曲をもっている。底径口径比：0.50、器高口径比：0.33。底部には回転糸切り痕がそのまま残されており、調整は体部下端にのみ手持ちヘラケズリが行われている。E－14は、口縁は外反するが、端部を欠損しており、体部は算盤玉状を呈する丸底の広口壺である。外面は、体上部に回転ヘラケズリ、体下部に叩き目、底部は手持ちヘラケズリによって調整されている。

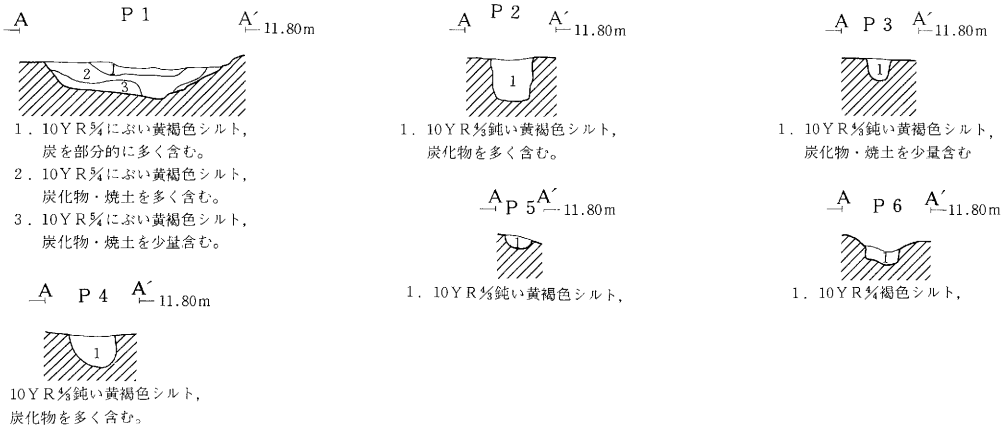
埋土中からは、土師器の坏（D－36・37)、甕（D－38)、須恵器坏（E－12・13)、灰釉陶器長頸瓶（Ｉ－１)、砥石（K－６・７)、石製模造品（K－８)、土玉（P－４)、軒丸瓦（F－２：写真71)が出土している。D－36とD－37には器形的な類似性が認められ、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾し、内面は体部と底部の境に屈曲をもっている。底径口径比はD－36：0.47、D－37：0.52、器高口径比はD－36：0.30、D－37：0.34とやや異なる。D－37の方が器高が高く、口径も大きい。D－36は底部：回転糸切り無調整、D－37は体下部から底部を回転ヘラケズリによって調整されている。D－37の底部内面には井桁状にヘラミガキが施されている。E－12・13は、器形的にD－36と類似する。E－13は体部から口縁部にかけて直線的に外傾する点で異なるが、E－12とともに底径口径比（E－12：0.48、E－13：0.47)、器高口径比（E－12：0.28、E－13：0.30）は近似する数値を示している。E－12はD－36よりわずかに大きいが、ほぼ同じ器形、法量の坏といえる。底部は、E－12が回転ヘラ切り無調整、E－13が回転糸切り無調整である。Ｉ－１は高台の付く長頸瓶である。器厚は頸部から体上部にかけて5～6 mmと薄い。体部は球形に近く、最大径は上半部にあり、頸部は下端が細く、直線的にやや外傾して立ち上がり、口縁部が外へ開いている。口縁端部は欠損している。接合痕は体部と高台部、頸部と体部の境に認められる。外面体中～下部は回転ヘラケズリによって調整されている。釉は頸部から体上半部にみられる。F－２は陸奥国分寺跡（伊東他：1961）で、重弁蓮花文鐙瓦Ⅵ類として分類されている軒丸瓦の瓦当部である。再利用されており、瓦当面の裏側に磨面が認められる。

これらの出土遺物のなかで、床面から出土している土師器坏D－35は住居廃絶時に伴うものと考えられる。埋土中出土遺物については、図示した２層出土の土器は床面直上からの出土であり、層厚が薄いことや、残存率の高いものが多く、この住居に伴う可能性が高い。

ＳＩ17（竪穴住居跡）：B－14・15グリットに位置する。住居中央部に攪乱が入っており、遺構の残存状況は良好ではない。ＳＢ１、ＳＤ12と重複関係があり、ＳＩ17は、ＳＤ12より新しく、ＳＢ１より古い。平面形は方形を基調としている。ピットは９個認められる。主柱穴はＰ１、Ｐ２、Ｐ６は貯蔵穴と推定される。カマドは北壁中央部に設けられているが、燃焼部は



1．10YR⅓鈍い黄褐色シルト，10YR⅝明黄褐色シルトを小ブロック状に含み焼土焼土・炭を多く含む
2．10YR⅓鈍い黄褐色シルト，明黄褐色シルトを小ブロック状に多く含み焼土炭土炭を部分的に多く含む。
3．10YR⅓鈍い黄褐色シルト，10YR⅝明黄褐色シルトを小ブロック状に含み炭化物焼土を少量含む。



第29図　SI 16平面図・セクション図

0　2 m

残っておらず、煙道の一部と煙出しのピットが確認された。東西の壁際には周溝が検出されている。床面は4層上面である。埋土は3層に分かれるが、人為的な堆積状況を示している。

遺物は総数1776点出土しており、土師器破片が多数を占める。遺物の多くは埋土1・2層から出土している。第30図・32図には10点を図示した。土師器はすべて製作にロクロを使用している。

床面からは土師器坏D－39が出土している。D－39の器形は、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾し、口縁端部が外へ開いており、内面は体部と底部の境に屈曲をもっている。底径口径比：0.48、器高口径比：0.31。体部下端と底部には手持ちヘラケズリによる調整が行われている。

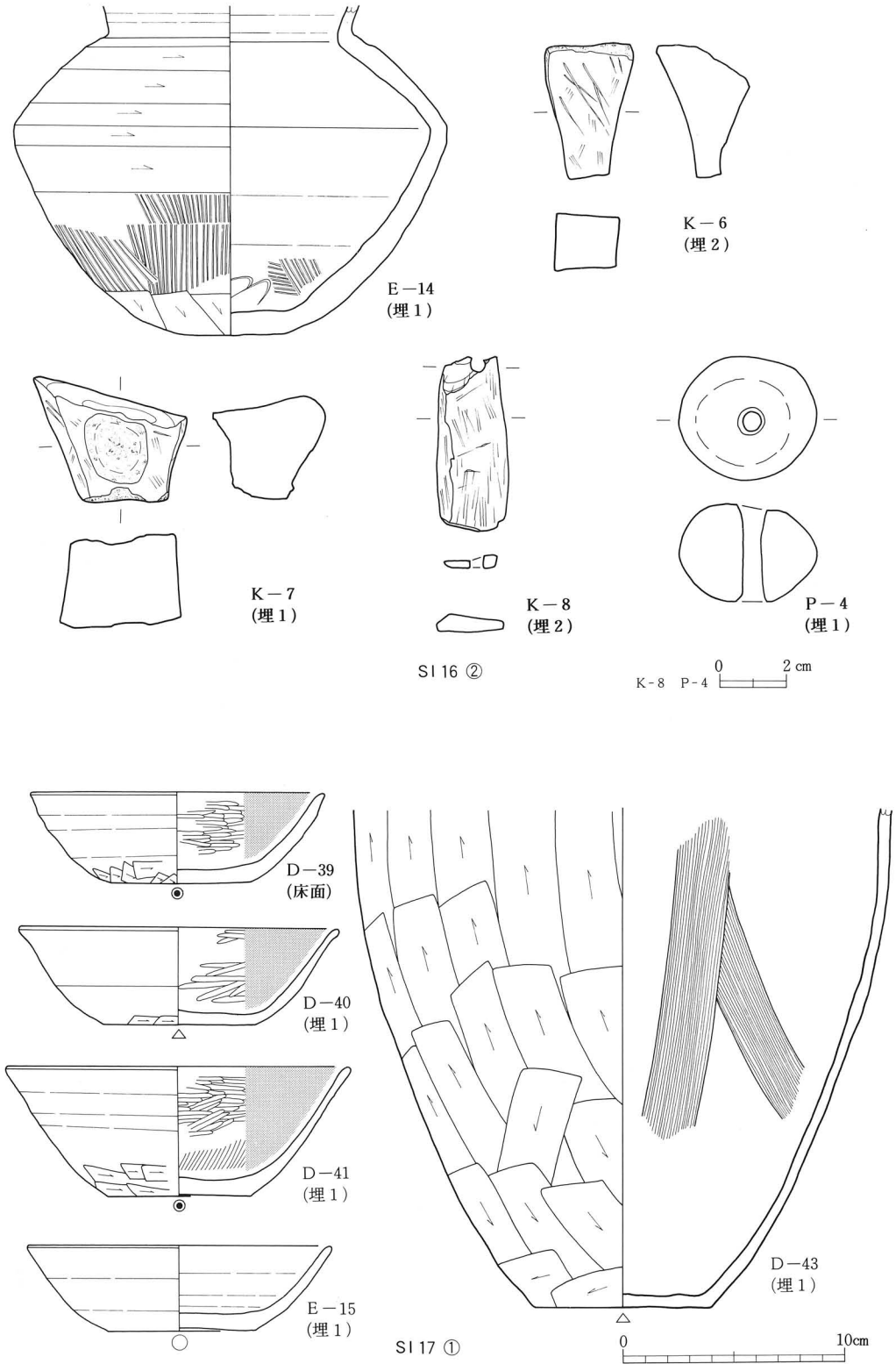
埋土中からは、土師器の坏（D－40・41）、甕（D－42・43）、須恵器坏（E－15）、土玉（P－5）、鉄製品（N－2～4）が出土している。D－40はD－39と器形的に類似し、底径口径比：0.47、器高口径比：0.31もほぼ同じ数値を示し、体部下端と底部の調整も共通する。しかし、D－40の器厚は薄く、口縁端部がより外方へ開いている点では異なっている。内面底部のヘラミガキは井桁状に行われている。D－41は、D－39・40と比べて大きく、底径口径比：0.41、器高口径比：0.37も異なっている。器形としては、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾し、内面は体部と底部の境に屈曲をもっている。体部下端と底部には手持ちヘラケズリによる調整が行われている。E－15の器形はD－39・40と類似するが、口縁端部がそのまま外傾している点で異なる。底径口径比は0.48、器高口径比は0.28であり、D－39・40と比べるとやや浅い。底部は、回転糸切り無調整である。D－42・43の甕には大小の違いがみられる。N－2～4の鉄製品については、N－2が鉄斧、N－4が刀子で、N－3は馬具の轡を構成する喰と推定される。

これらの出土遺物のなかで、床面から出土している土師器坏D－39は住居廃絶時に伴うものと考えられる。埋土中出土遺物については、前述のように埋土1～3層には人為的な堆積状況が認められることから、住居廃絶後、それほどの時間差をもたないことが推定される。

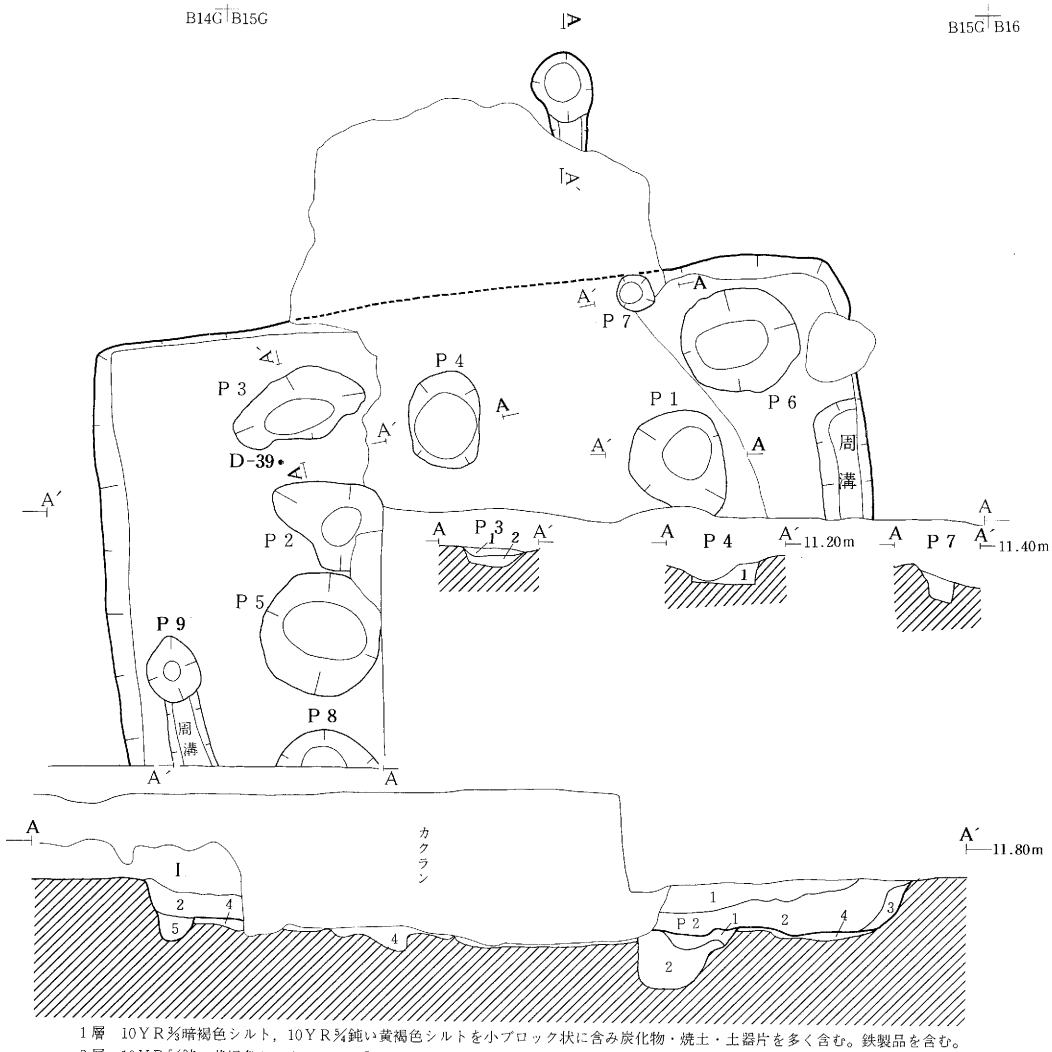
ＳＩ18（竪穴住居跡）：A・B－17・18グリットに位置する。ＳＩ21、ＳＤ10、ＳＫ16と重複関係があり、ＳＩ18は、ＳＩ21より新しく、ＳＤ10、ＳＫ16より古い。平面形は方形を基調としている。ピットは5個認められる。カマドは北壁中央部東寄りに設けられている。床面は4層上面である。

遺物は総数697点出土しており、土師器破片が多数を占める。遺物の多くは埋土1・2層から出土している。第32図・34図には6点を図示した。土師器はすべて製作にロクロを使用している。

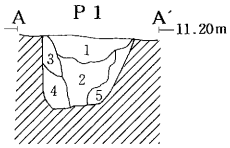
カマドからは土師器甕（D－45・46）、須恵器坏（E－16・17）が出土している。E－16と17



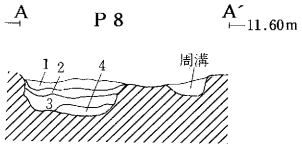
第30図　ＳＩ 16・17出土遺物実測図



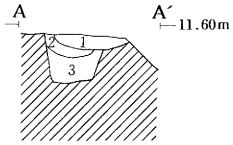
1層　10YR3/3暗褐色シルト，10YR3/4鈍い黄褐色シルトを小ブロック状に含み炭化物・焼土・土器片を多く含む。鉄製品を含む。
2層　10YR5/4鈍い黄褐色シルト，10YR7/6明黄褐色シルトを小ブロック状に含み炭化物・焼土・土器片を多く含む。
3層　10YR6/6明黄褐色粘土質シルト，10YR5/4鈍い黄褐色シルトを小ブロック状に含む。
4層　10YR4/3灰黄褐色シルト，黄褐色土を多量にブロック状に含む。
5層　10YR5/4褐色シルト，黄褐色土を細かなブロック状に含む。
P2：1層　10YR5/4褐色粘土質シルト，10YR7/6明黄褐色シルトを小ブロック状に含み炭化物・焼土を少量含む。
2層　10YR5/4鈍い黄褐色粘土質シルト，10YR7/6明黄褐色シルトを小ブロック状に含み炭化物・焼土を少量含む。



1層　10YR5/4褐色シルト，
2層　10YR5/6黄褐色シルト
3層　10YR5/3鈍い黄褐色シルト
4層　10YR4/3鈍い黄褐色シルト
5層　10YR5/6黄褐色シルト



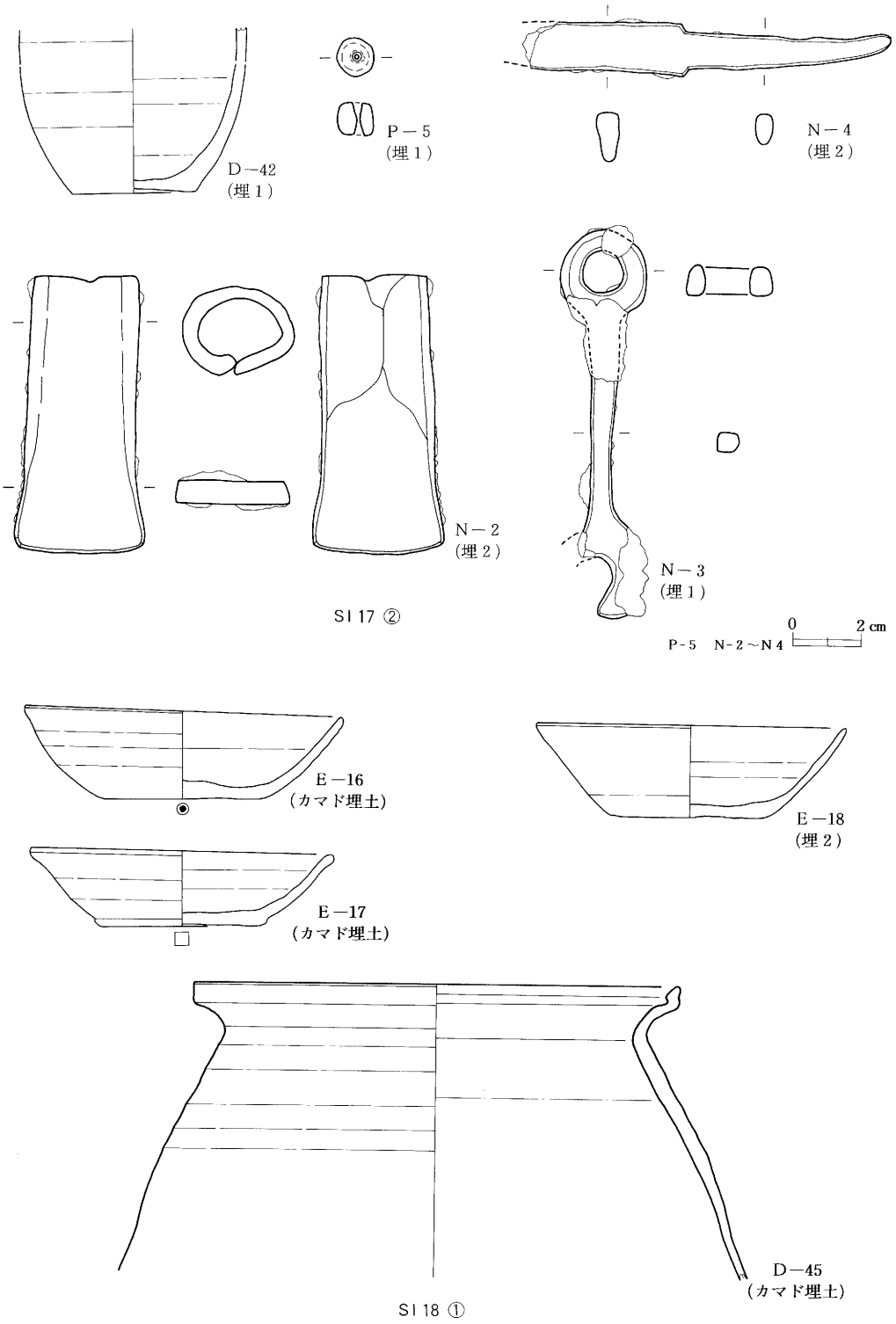
1層　10YR5/3暗褐色シルト，
炭化物・焼土を多量に含む。
2層　10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルト，焼土を少量含む。
3層　10YR5/4にぶい黄褐色シルト，
炭化物・焼土を少量含む。
4層　10YR6/6明黄褐色シルト，
炭化物を少量含む。



1層　10YR3/2黒褐色シルト
炭・焼土を含む。
2層　10YR6/6黄褐色砂質シルト
炭を多く含む。
3層　10YR3/2黒褐色シルト
炭を含む。

0　2 m

第31図　SI 17平面図・セクション図



第32図　ＳＩ 17・18出土遺物実測図

には、器形的にＥ－17の口縁端部が外へ開いていることや底径口径比（Ｅ－16：0.49、Ｅ－17：0.54）にやや違いはみられるが、大きさや器高底径比（Ｅ－16：0.28、Ｅ－17：0.26）は近似し、ともに内面は体部と底部の境に屈曲をもっている。底部は、Ｅ－16が手持ちヘラケズリによる調整、Ｅ－17は回転ヘラ切り無調整である。土師器甕には、口縁部と体部の径がほぼ同じＤ－46と、口径に対して体部の径が大きいＤ－45という２つの器形のあることが知られる。

埋土中からは、土師器甕（Ｄ－44）と須恵器坏（Ｅ－18）が出土している。Ｄ－44の外面体部上半には平行叩き目がみられ、内面には回転刷毛目が施されている。Ｅ－18は再過熱を受けており、底部は火はねにより器面が剝落している。大きさや器形はＥ－16とほぼ同じで、底径口径比：0.49、器高口径比：0.30も近似している。

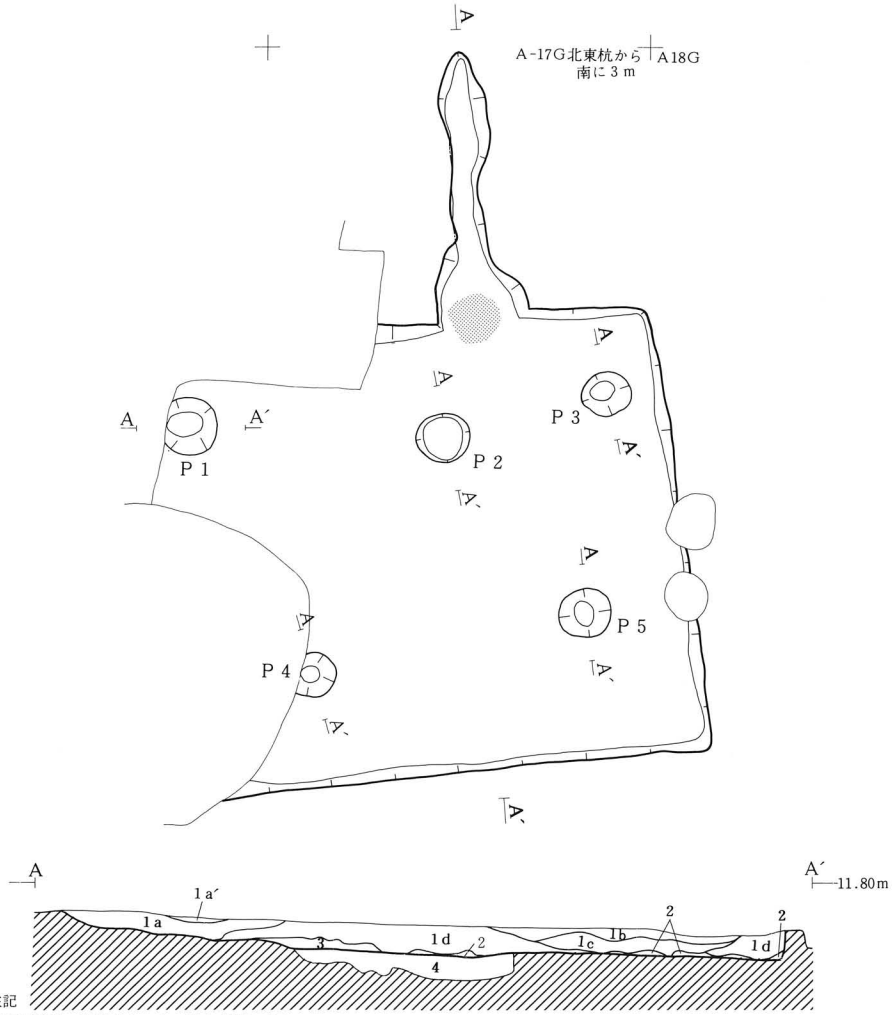
これらの出土遺物のなかで、カマド埋土から出土している４点の土器は住居廃絶時に伴うものと考えられる。また、Ｅ－18（埋土２層出土）は、第33図でも知られるように床面直上から出土しており、この住居に伴う可能性が高い。

ＳＩ19（竪穴住居跡）：Ｂ－17・18グリットに位置する。調査区南壁際に攪乱が入っている。ＳＤ10と重複関係があり、ＳＩ19は、ＳＤ10より古い。平面形は方形を基調としていると推定される。ピットは１個認められる。カマドは東壁北端部に設けられている。

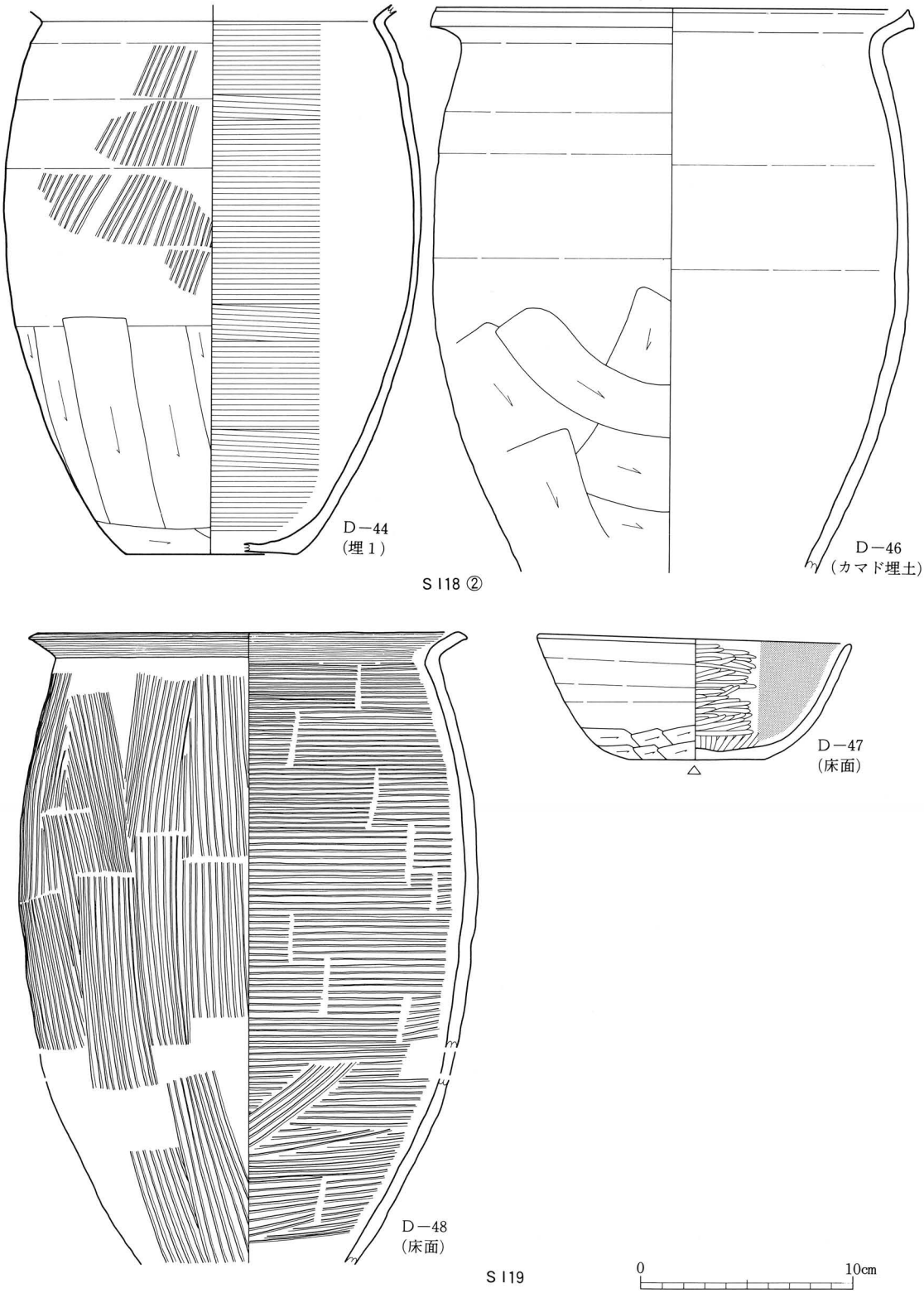
遺物は総数116点出土しており、土師器破片が多数を占める。遺物の多くは埋土１層から出土している。第34図には床面から出土した２点を図示した。

土師器坏Ｄ－47は、製作にロクロが使用されており、器形は体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾し、内形線は体部と底部の境に屈曲をもっている。底径口径比：0.45、器高口径比：0.41とやや深い。体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリによる調整が行われている。土師器甕Ｄ－48は、製作にロクロが使用されていない。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は刷毛目、内面はヘラナデが施されている。最大径は体部上半にある。

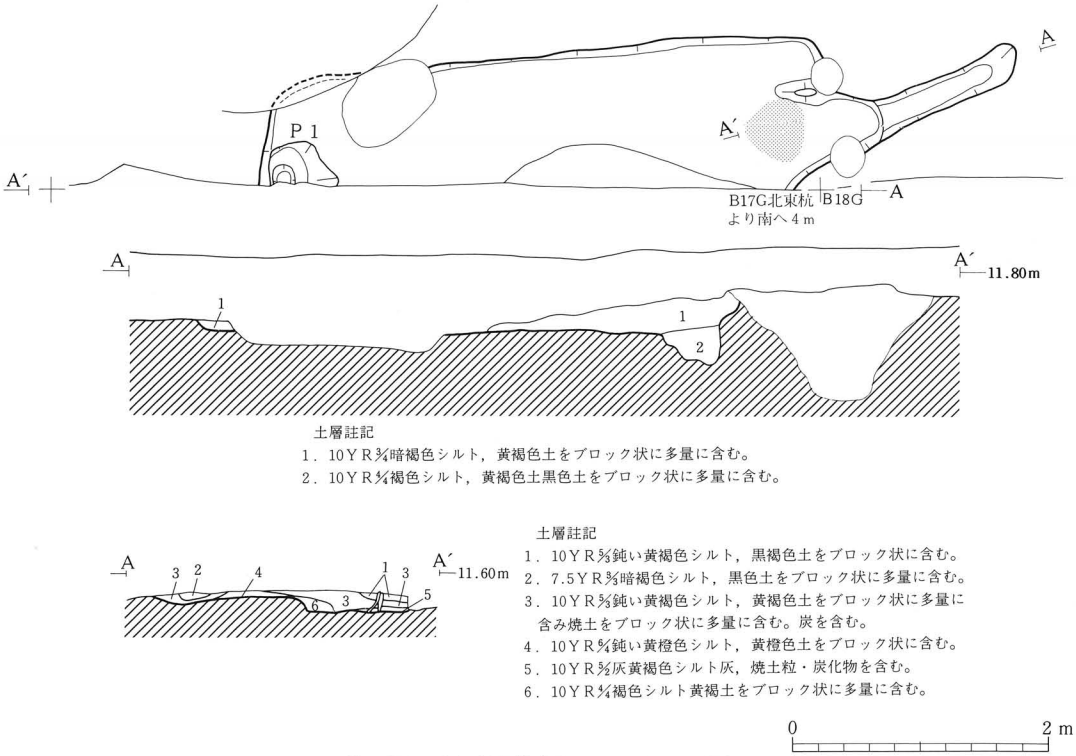
ＳＩ20（竪穴住居跡）：Ａ－18・19グリットに位置する。住居南辺から東辺南端部にかけて攪乱が入っている。ＳＩ21、ＳＤ８と重複関係があり、ＳＩ19は、ＳＩ21より新しく、ＳＤ８より古い。平面形は南北にやや長い方形を基調としている。床面は新・古２面が検出されている。第36図のセクションにおいて、３層上面を床面とする住居跡をＳＩ20ａ、２層上面を床面とする住居跡をＳＩ20ｂとした。ピットは８個認められ、Ｐ１～４はＳＩ20ｂに伴う。Ｐ５～８はどちらの住居に伴うか明確でない。カマドはＳＩ20ａ・20ｂに伴い、東壁南寄りに設けられている。ＳＩ20ｂのカマド燃焼部の左右の壁には、それぞれ平瓦が用いられている。また、東壁北寄りにも煙道と思われる遺構があり、その底面のレベルからはＳＩ20ｂに伴うと考えられるが、それを煙道としてカマドが作られた痕跡は認められず、その埋土には炭や焼土は含まれず、主に基本層Ⅱ層がブロック状に入っており、煙道を作る際に崩落した可能性がある。



第33図　SI 18平面図・セクション図



第34図　S I 18・19出土遺物実測図

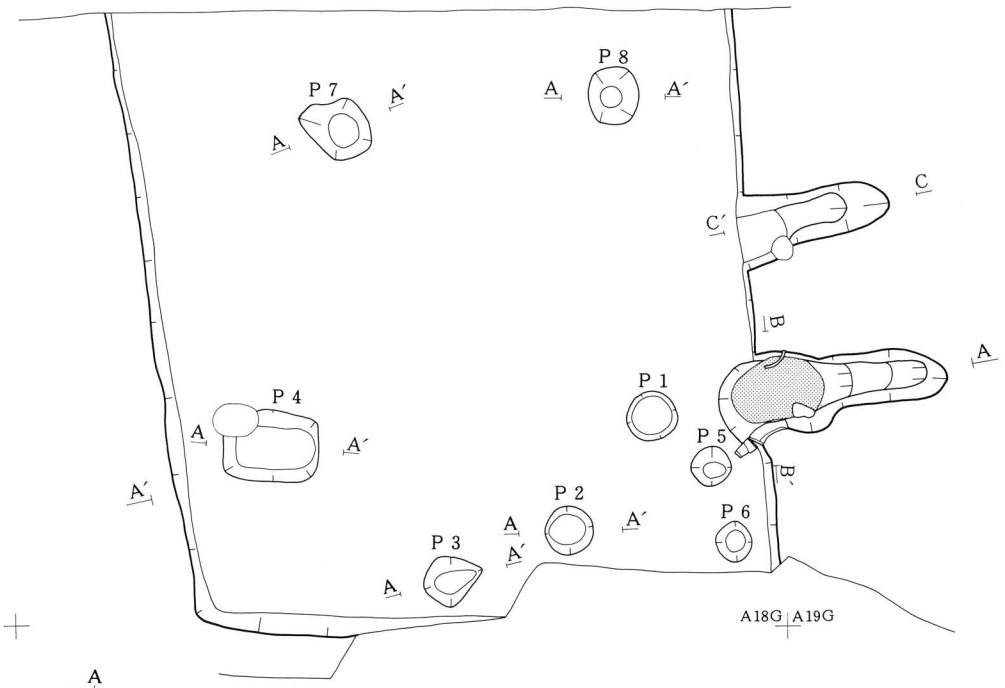


第35図　ＳＩ19平面図・セクション図

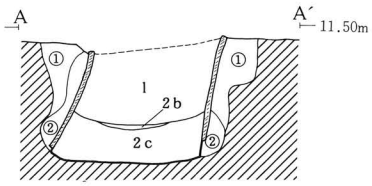
遺物は総数1994点出土しており、土師器破片が多数を占める。それらはＳＩ20ａ・20ｂそれぞれに伴う遺物と、ＳＩ20ｂ埋土出土遺物に分けられる。第37図・第38図には14点を図示した。土師器はすべて製作にロクロを使用している。

ＳＩ20ａでは、カマド燃焼部に近い床面から須恵器坏Ｅ－20、カマド埋土から須恵器坏Ｅ－23、埋土２層から土師器甕Ｄ－51が出土している。Ｅ－20･23は、ともに器形的に、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾し、内形線は体部と底部の境に屈曲をもっているが、大きさや、底径口径比（Ｅ－20：0.48、Ｅ－23：0.39）と器高口径比（Ｅ－20：0.25、Ｅ－23：0.44）は異なっている。須恵器坏の大小と理解される。底部は、Ｅ－20は手持ちヘラケズリ、Ｅ－23は回転糸切り無調整である。

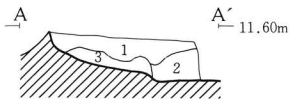
ＳＩ20ｂでは、カマド燃焼部底面から須恵器坏Ｅ－19･21、丸瓦Ｆ－３、床面から土師器甕Ｄ－52、Ｐ３から土師器坏Ｄ－50が出土している。Ｄ－50の器形は、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾し、口縁端部がやや外へ開き、内面は体部と底部の境に屈曲をもっている。底径口径比：0.47、器高口径比：0.38。底部は、手持ちヘラケズリが行われている。Ｅ－19･21は口径、器高ともほぼ同じで、器高口径比（Ｅ－19：0.27、Ｅ－21：0.29）も近似する。器形は、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾し、口縁端部がやや外へ開くＥ－19と、



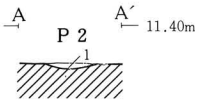
1a．10YR5/4褐色シルト，黄褐色土をブロック状に少量含む。
1b．10YR5/6鈍い黄褐色シルト，黄褐色土黒色土をブロック状に含む。
1c．10YR5/6鈍い黄褐色シルト，黄褐色土をブロック状に多く含み
　煙道部分では黄褐色土のブロックは特に多い。
1d．10YR5/6鈍い黄褐色シルト，黄褐色土をブロック状に多量に含む。
1e．10YR5/6鈍い黄橙色シルト，焼土を多量を含み炭を含む。
1f．2.5Y5/4褐色シルト，黒色の灰を多量に含む。ほとんど灰層。
1g．10YR5/4褐灰色灰層。
1h．10YR5/3暗褐色シルト，炭・焼土を含む。
1i．黒色の灰層（P1）
2a¹ 10YR5/4褐色シルト，黄褐色土を横じま状に含む。
2a² 10YR5/4鈍い黄褐色シルト，黄褐色土をブロック状に多量に含む。
　炭焼土を含む。
2b．7.5Y5/3褐色シルト焼土粒を含む。
2c．10YR5/6鈍い黄褐色シルト，黄褐色土をブロック状に多量に含む。
　炭・焼土を多量に含む。
2d．黒色の灰層・灰を含む。



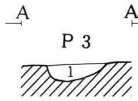
①．7.5YR5/4褐色シルト炭焼土粒を含む。
②．7.5YR5/2灰褐色粘土質シルト炭焼土粒を多量に含む。



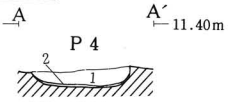
1．10YR5/4鈍い黄褐色シルト黄褐色土をブロック状に含む。
2．10YR5/6鈍い黄褐色シルト黄褐色土をブロック状に含む。
3．10YR5/6明黄褐色シルト。



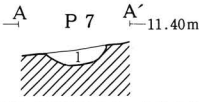
1．10YR5/4褐灰色シルト炭をブロック状に含む。



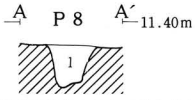
1．10YR5/4褐色シルト，黄褐色土を多量にブロック状に含む。



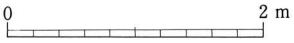
1．10YR5/6鈍い黄褐色シルト，黄褐色土をブロック状に含む。
2．黒色灰層。



1．10YR5/4褐色シルト，炭を含む。



1．10YR5/4褐色シルト，炭を含む。



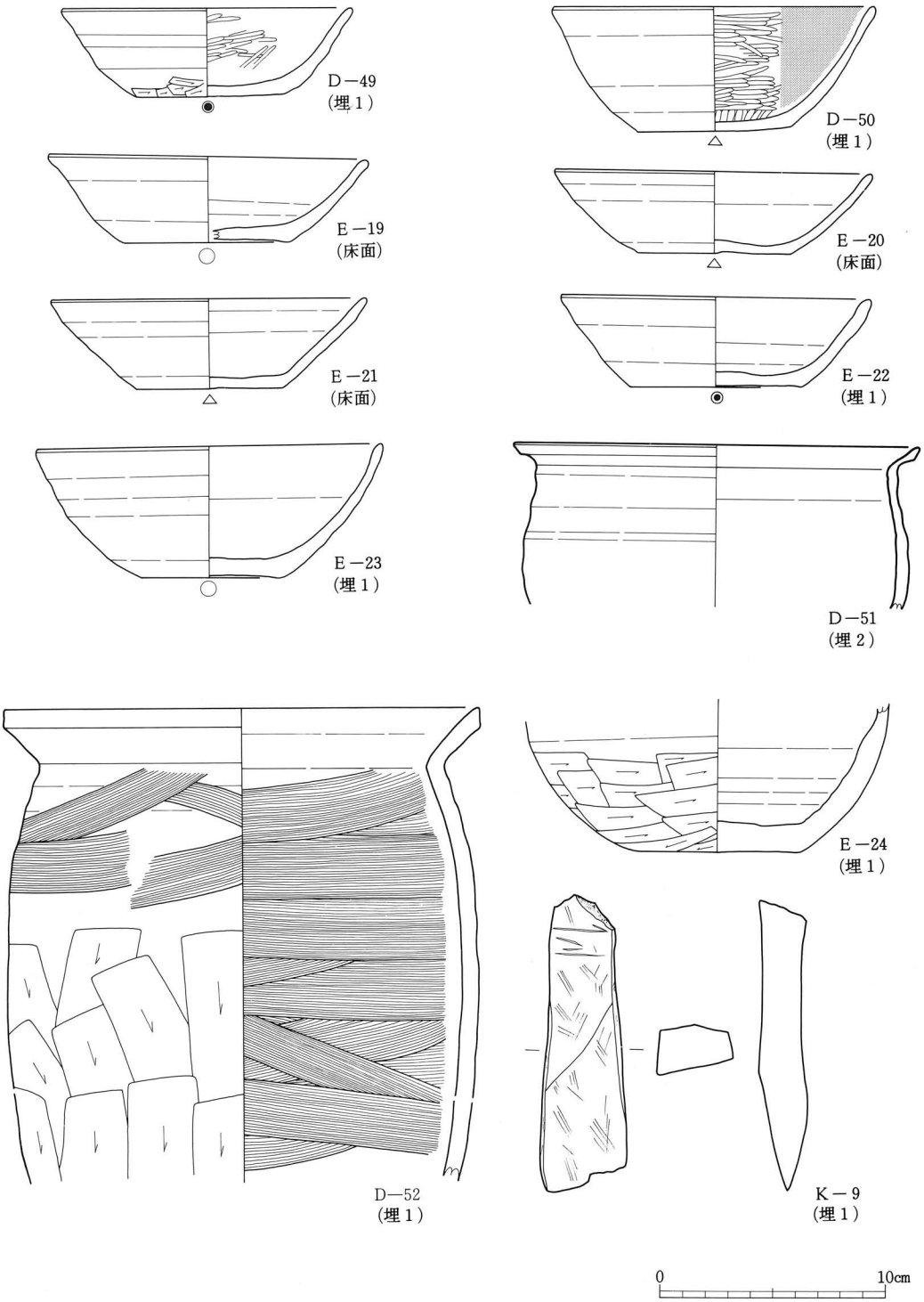
第36図　SI 20平面図・セクション図

直線的に外傾するＥ－21の違いはみられるが、内面はともに体部と底部の境に屈曲をもっている。底径口径比はＥ－19：0.52、Ｅ－21：0.46。底部は、Ｅ－19が回転糸切り無調整、Ｅ－21が回転ヘラ切り無調整である。Ｅ－19は再火熱を受けており、褐色を呈している。

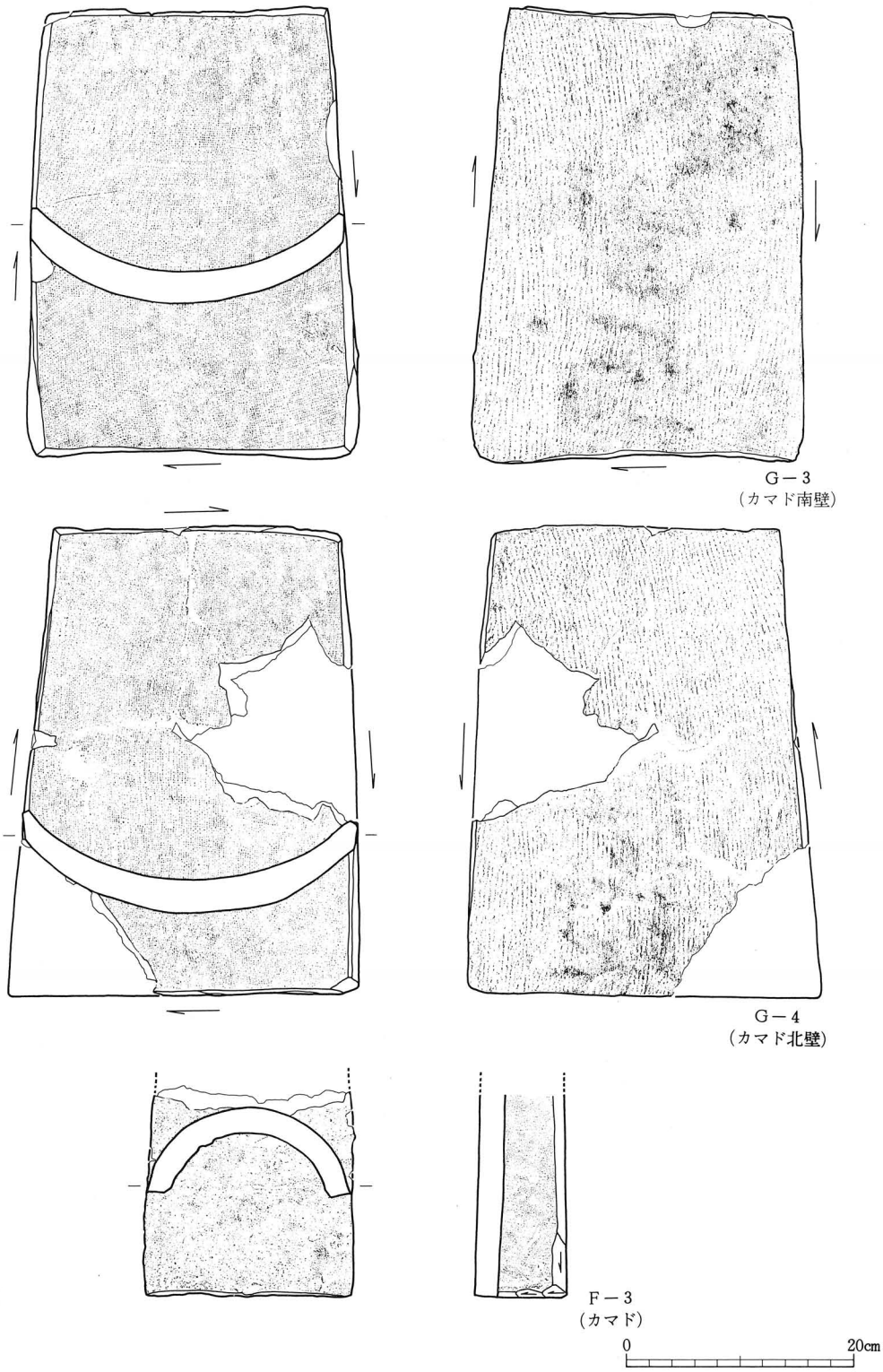
また、カマド燃焼部の南壁には平瓦Ｇ－３、北壁には平瓦Ｇ－４が用いられている。ともに凸面を燃焼部側に向け、狭端を上にして据えてある。Ｇ－３は完形品、Ｇ－４はやや欠損しているが、取上げ時にはすでにいくつかに割れていた。２枚の瓦の平面形は、細長い台形状を呈している。色調は、Ｇ－３はうすい黄褐色、Ｇ－４は灰色～黒色である。Ｇ－３の凸面の狭端から約2/3は熱を受けたため、剝落しているところや黒斑がみられる。凹凸両面に残された製作上の痕跡はほぼ共通している。凸面には、縦方向の縄叩き目が全面にみられるが、叩き目のつぶれが観察されるところがある。その場所は、左右両側縁付近に部分的と、広端側縁付近から瓦中央へ向けての部分がある。つぶれているところに明確な木目圧痕はみられない。凹面には、細かい布目が全面にみられるが、布目を消す指ナデ状の痕跡が観察されるところがある。その場所は、狭端付近と、広端側縁付近から瓦中央へ向けての部分である。側縁の調整は、広端左右の角を取るような面取りと、凹凸両面からの側縁の面取りがヘラケズリによって行われている。凹面側では、Ｇ－３は左右上下の４辺、Ｇ－４は左右の２辺が面取りされており、ヘラケズリの方向はＧ－３は時計回り、Ｇ－４の２辺の方向はＧ－３と同じである。凸面側と凹面側では、凹面側の面取りのほうが弱い（註１）。

ＳＩ 20ｂ埋土からは、土師器坏Ｄ－49、須恵器坏Ｅ－22、須恵器の底部Ｅ－24（壺？）砥石Ｋ－９が出土している。Ｄ－49の器形はＥ－19と類似しており、底径口径比：0.50、器高口径比：0.30も近似しているが、口径がやや小さい。底部の切り離しは回転糸切りによって行われており、そののち体部下端から底部が手持ちヘラケズリによって調整されている。再火熱を受けており、色調は赤褐色を呈する。Ｅ－22の器形はＥ－20と類似しており、口径もほぼ同じである。底径口径比：0.55、器高口径比：0.29。底部は回転糸切りののち手持ちヘラケズリが行われている。この他、埋土中からは弥生土器４点（Ｂ－１・３～５：写真80）、石器５点（Ｋ－26～30：写真80）も出土している。

これらの出土遺物と住居との関係については、ＳＩ 20ａ廃絶時には床面及びカマド埋土から出土した須恵器坏Ｅ－20・23が伴い、ＳＩ 20ｂ廃絶時にはカマド燃焼部底面及び床面から出土した須恵器坏Ｅ－19・21、土師器甕Ｄ－52、丸瓦Ｆ－３、Ｐ３出土の土師器坏Ｄ－50が伴うものと考えられる。また、ＳＩ 20ｂのカマドに用いられた平瓦Ｇ－３・４はこの住居の構築時に伴い、ＳＩ 20ａ廃絶時に伴うＥ－20・23、その可能性のある埋土２層から出土した土師器甕Ｄ－51とそれほどの時間差はないと推定される。ＳＩ 20ｂ埋土から出土したＤ－49、Ｅ－22については、Ｄ－50、Ｅ－19・21と器形的な類似性などが認められることから、この住居に伴う可



第37図　ＳＩ 20出土遺物実測図（１）



第38図　ＳＩ 20出土遺物実測図（２）※矢印は側面のケズリの方向を示す。

能性がある。

ＳＩ21（竪穴住居跡）：Ａ・Ｂ－17・18グリットに位置する。ＳＩ18、ＳＩ20、ＳＫ14、ＳＫ15、ＳＫ16、ＳＫ17と重複関係があり、ＳＩ21は、ＳＫ17より新しく、他のすべての遺構より古い。残存状況は良好ではないが、平面形は方形を基調としていると推定される。ピットは2個認められる。

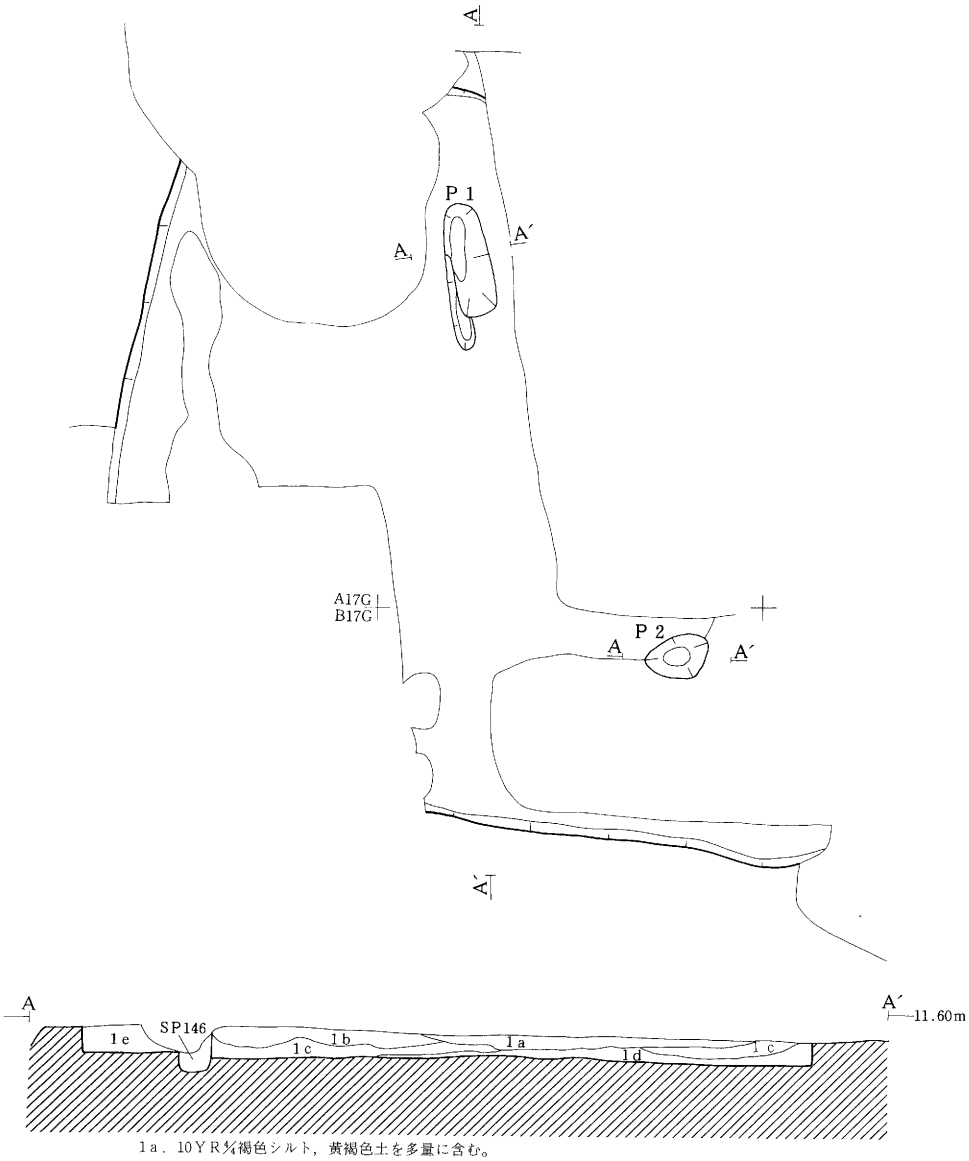
遺物は総数562点出土しており、すべて土師器破片である。製作にロクロを使用したものは認められない。図化できるものはなく、写真73に埋土1層から出土した土師器Ｃ－22を示した。体部破片であり、器形を推定すると、丸みをもって外傾しており、外面には段があり、内面にはそれに対応する段や屈曲はみられない。外面の段より下は手持ちヘラケズリ、内面はヘラミガキが施されている。再火熱を受けているためか、内面は褐色を呈している。

ＳＩ22(竪穴住居跡)：Ａ－19グリットに位置する。ＳＤ8、ＳＤ13、ＳＤ14と重複関係があり、ＳＩ22は、ＳＤ13、ＳＤ14より新しく、ＳＤ8より古い。また、重複するピットも多いが、ＳＩ22のほうがそれらより古い。平面形は方形を基調としていると推定されるが、南辺は直線的でなく、わずかに弧状を呈する。ピットは8個認められ、Ｐ2とＰ4が主柱穴と考えられる。住居北西端には壁際からの張出しがみられ、袖とも考えられること、その近くのＰ5には焼土、炭が含まれていることから、カマドは西壁に設けられている可能性もある。床面は9層上面である。

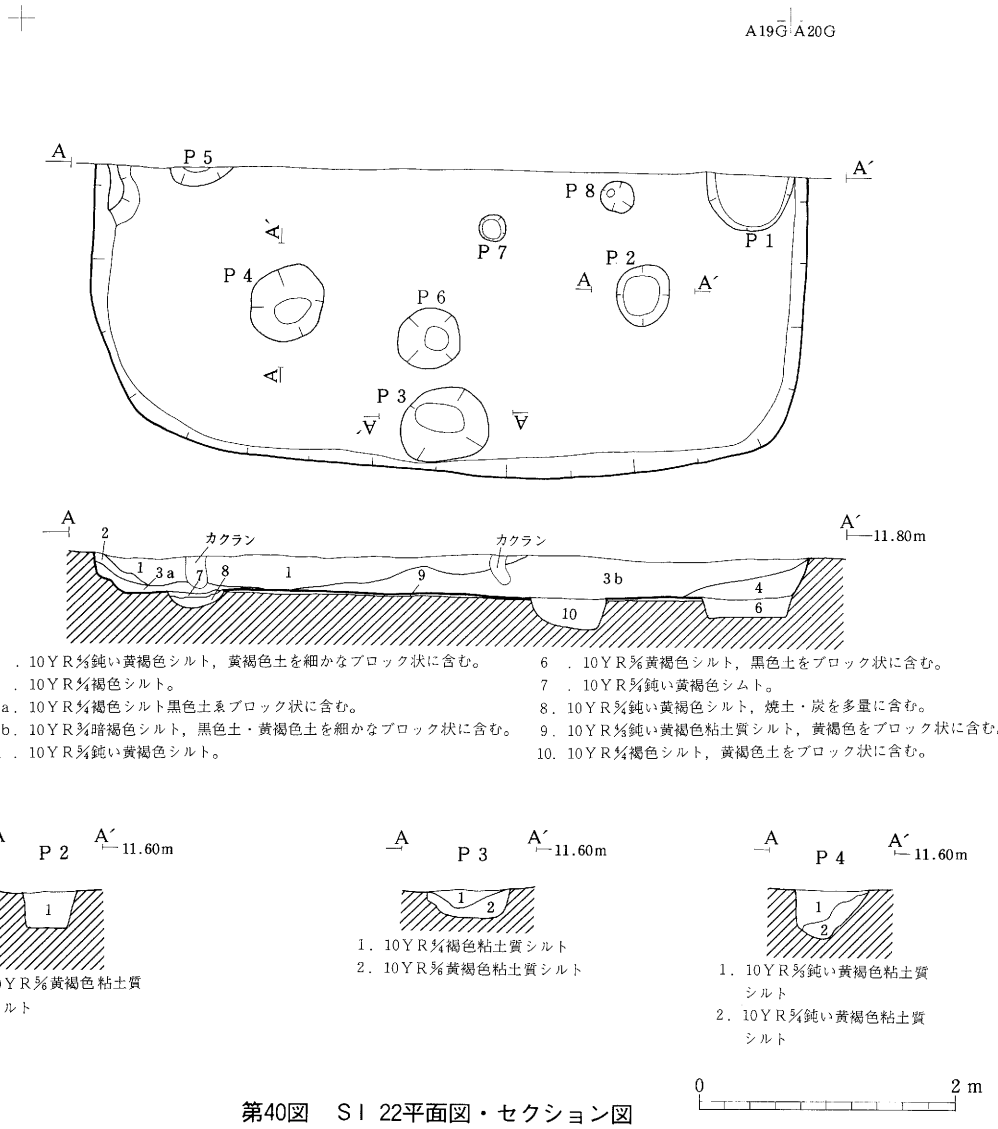
遺物は総数360点出土しており、土師器破片が多数を占める。製作にロクロを使用したものは認められない。遺物の多くは埋土1～3層から出土している。第・図には5点を図示した。

床面からは土師器坏Ｃ－24が出土している。南東コーナー付近からの出土である。器形は、底部は丸底で、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾している。内外面とも底部と体部の境は明瞭でない。外面体下部は手持ちヘラケズリののち部分的なヘラミガキ、外面上半部と内面はヘラミガキが施されている。

埋土中からは、土師器の坏Ｃ－23、高坏Ｃ－25、Ｃ－26、臼玉Ｋ－10が出土している。このうち、Ｃ－23・25・26は床面直上から出土している。その位置は、Ｃ－26がＣ－24の近くから、Ｃ－23、25は南西コーナー付近である。Ｃ－23は浅い坏で、外面体下部に稜線を形成しており、口縁部は直線的に外傾している。調整はＣ－24とほぼ同じである。Ｃ－25は高坏の脚部である。縦長の透かし孔が3個認められ、その位置から四方透かしであったと考えられる。外面及び透かし孔は手持ちヘラケズリによって調整されている。Ｃ－26は残存状態が悪く、調整は不明である。この他、埋土中からは弥生土器2点（Ｂ－2・6：写真80)、石器2点（Ｋ－25・31：写真80）が出土している。Ｋ－25は大型板状安山岩製石器（斎野：1992）であり、第67図に図示した。



第39図　SI 21平面図・セクション図



第40図　ＳＩ 22平面図・セクション図

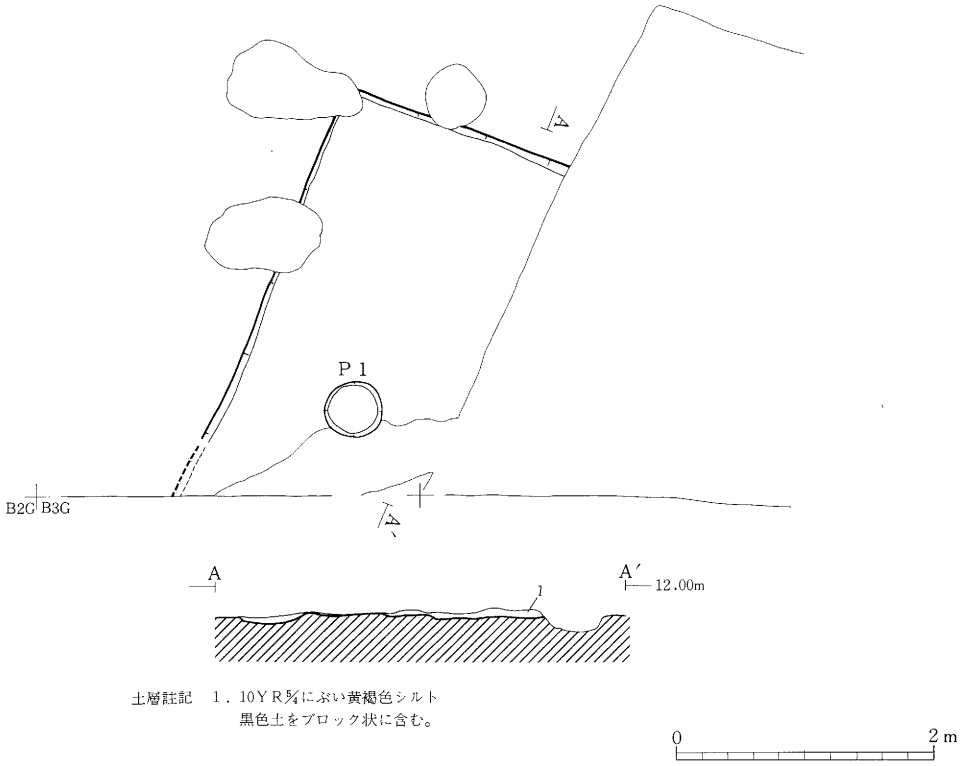
これらの出土遺物のなかで、床面から出土している土師器坏Ｃ－24は住居廃絶後に伴うものと考えられる。埋土中出土遺物については、床面直上から出土した土師器Ｃ－23・25・26は、破片ということもあるが、この住居に伴う可能性がある。

ＳＩ 23(竪穴住居跡)：Ｂ－３グリットに位置する。天地返しにより床面は残っておらず、掘り方と貼床埋土を検出した。ＳＩ９、ＳＡ３と重複関係があり、ＳＩ 23は両者より古い。平面形は方形を基調としていると推定される。ピットは１個認められた。

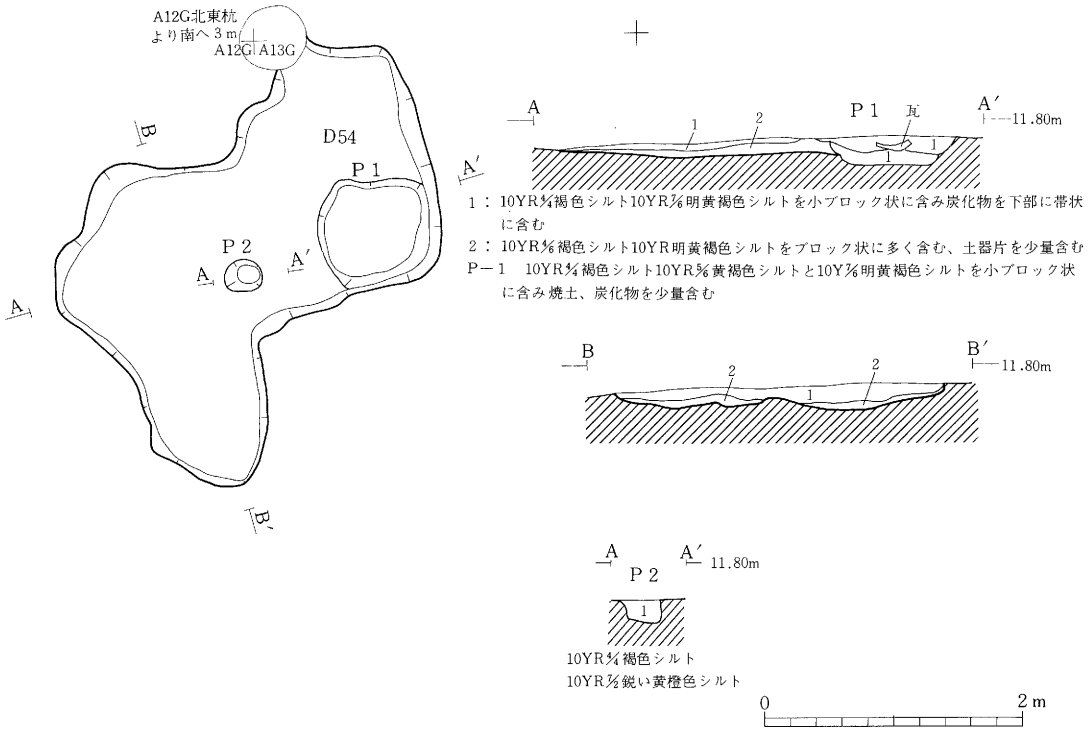
遺物は総数38点出土しており、ほとんどは土師器破片である。図化できるものはないが、製作にロクロを使用したものは認められない。

ＳＩ 24（竪穴住居跡）：Ａ・Ｂ－12・13 グリットに位置する。天地返しにより床面は残っておらず、掘り方の南東部を検出した。南辺と東辺は直線的であり、住居のプランと符号すると考えられ、平面形は方形を基調としていると推定される。ピットは２個認められ、Ｐ１は貯蔵穴と考えられる。南辺にはカマドの掘り方が検出されている。

遺物は総数 228 点出土しており、土師器破片が多数を占める。第 44 図には埋土１層から出土した土師器の坏Ｄ－53 と甕Ｄ－54 を図示した。２点とも製作にロクロを使用している。Ｄ－53 の器形は、体部から口縁部にかけて直線的に外傾しており、内面は体部と底部の境に屈曲をもたない。底径口径比：0.44、器高口径比：0.32。底部は、回転糸切り無調整である。土師器坏底部破片は埋土中から５点出土しており、いずれも底部は回転糸切り無調整である。この他、小玉石（写真 73）、軒平瓦（Ｇ－５：写真 73）、平瓦（Ｇ－６：写真 73）、赤焼土器破片５点も出土している。Ｇ－５は軒平瓦の平瓦部であり、凸面には赤彩が認められる。製作上の痕跡は、凸面では全面に縦方向の縄叩き目と部分的な叩き目のつぶれ、凹面では細かい布目とそれを消す指ナデ、さらにそれらの上に木目圧痕がみられる。凹面側側縁にはヘラケズリによる面取りは行われていない。Ｇ－６は狭端付近の平瓦破片である。製作上の痕跡は、凸面では全面に縦方向の縄叩き目とその叩き目のつぶれ、凹面では細かい布目とそれを消す全面的なヘラナデが



第41図　SI 23平面図・セクション図



第42図　SI 24平面図・セクション図

みられる。凹凸両側縁にはヘラケズリによる面取りが行われている。

ＳＩ 25（竪穴住居跡）：Ａ－16 グリットに位置する。ＳＩ 14、ＳＫ 18、ＳＫ 19 と重複関係があり、ＳＩ 25 はいずれの遺構より古い。平面形は正方形である。ピットは１個認められる。

遺物は総数 239 点出土しており、土師器破片が多数を占める。製作にロクロを使用したものは認められない。床面北東コーナー付近からは土師器Ｃ－27～38 がまとまって出土しており、第 45 図にはそれらとともに埋土中より出土した鉄製品Ｎ－５・６も図示した。

土師器の器種には、坏（Ｃ－27～33）、壺（Ｃ－34）、甑（Ｃ－36・38）、甕（Ｃ－37・35：写真 74）、鉢（Ｃ－39）があり、完形品も多い。

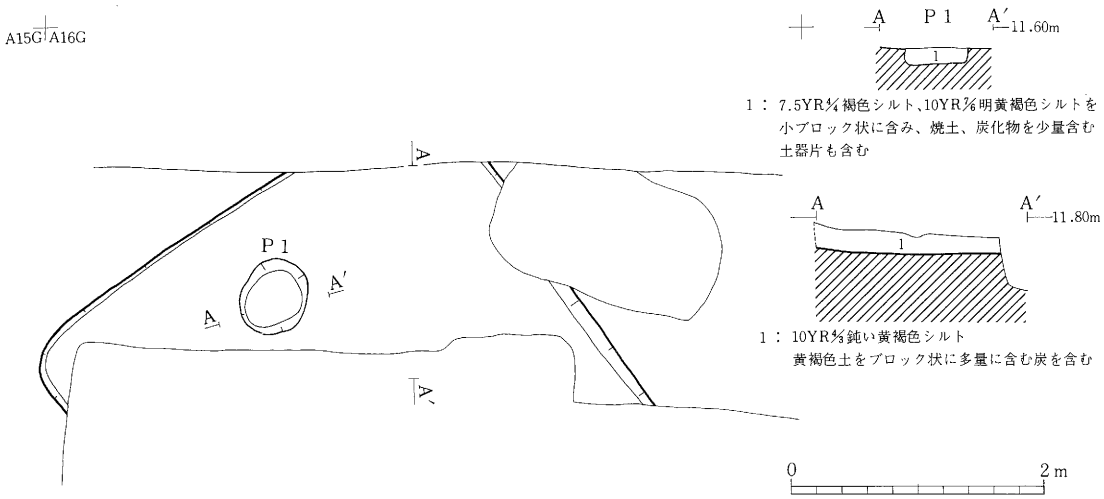
坏はいずれも丸底で、器形的に４つに分けられる。口縁部と体部の境の外面に段があり、口縁が直立するＣ－27・29、口縁が内傾するＣ－28・30、口縁部と体部の境の外面に稜があり、口縁が直立するＣ－31、口縁が内傾するＣ－32・33 である。Ｃ－31 の口縁にはわずかに内傾しているところもみられる。Ｃ－32 の稜線はやや弱い。これら７点の内面は口縁部と体部の境に外面の段・稜に対応して屈曲をもっている。段のある４点は、口径は 13.8～16.1 cm、器高は 4.4～5.5 cm（Ｃ－28・30 は推定値）である。口縁部の高さは 1.6～1.7 cm で、器高に占める比率は 0.31～0.39 である。調整は、いずれも口縁部外面と内面がヨコナデ、体部外面がヘラケズリである。Ｃ－28 は内面黒色処理、Ｃ－30 には内外面に黒色仕上げ処理が行われている。稜

のある3点は、口径は15.0〜15.8 cm、器高は4.2〜5.0 cmである。口縁部の高さは1.0〜1.4 cmで、器高に占める比率は0.24〜0.33である。調整は、いずれも口縁部外面と内面がヨコナデ、体部外面がヘラケズリであるが、体部には部分的にヘラミガキの施されているものがみられる。C－31・32には内外面に黒色仕上げ処理が行われている。胎土は、C－28・29を除き、他の5点は緻密で細かく明橙色を呈し、砂粒をほとんど含んでいない。C－29は褐色を呈し、砂粒を含んでいる。器厚も他と比べて厚い。

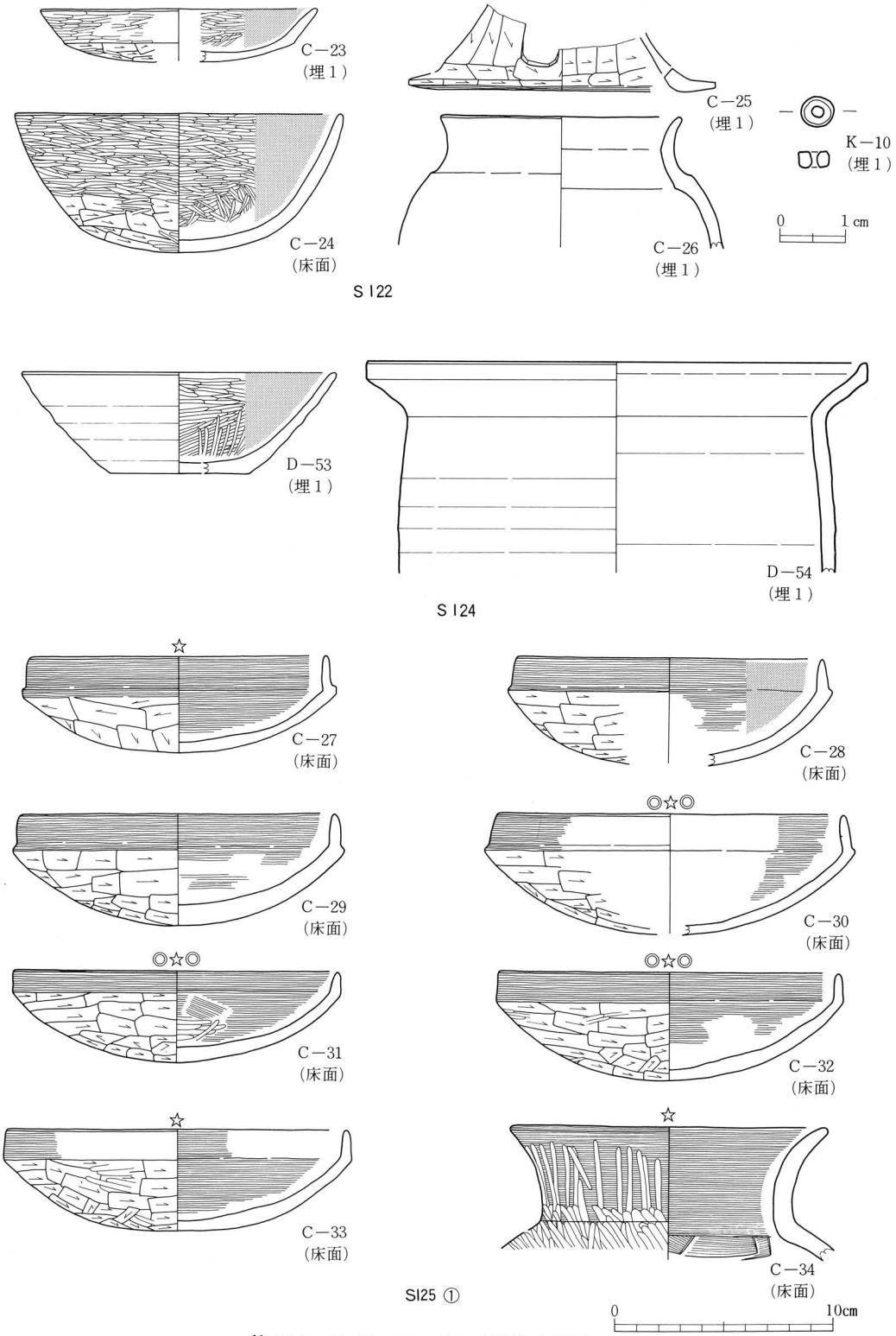
壺C－34は、口縁を下にして出土している。体部縁辺を打ち欠いており、器台として使われていた可能性がある。器形は、頸部は直立気味に短く立ち上がり、口縁は外反する。体部は球形状を呈すると推定される。調整は、口縁部内外面をヨコナデ、のち外面に間隔をあけた縦方向のヘラミガキ、体部外面はヘラミガキ、内面はヘラナデである。胎土は坏の多くと同じである。

甕は大小2種類が出土している。C－35は口縁部から体上端部の破片である。口縁は外反している。口縁部と体部の境に段はみられない。体部外面はヘラケズリのち部分的なヘラミガキが行われている。C－37は口縁が外反し、体部がやや膨らむ。最大径は口縁にある。胎土は砂粒を多く含んでおり、比較的脆く、器面の剝落もみられ、調整は明瞭には認められない。体部上半には刷毛目の痕跡が確認されるが、これが最終調整か否かは明確でない。

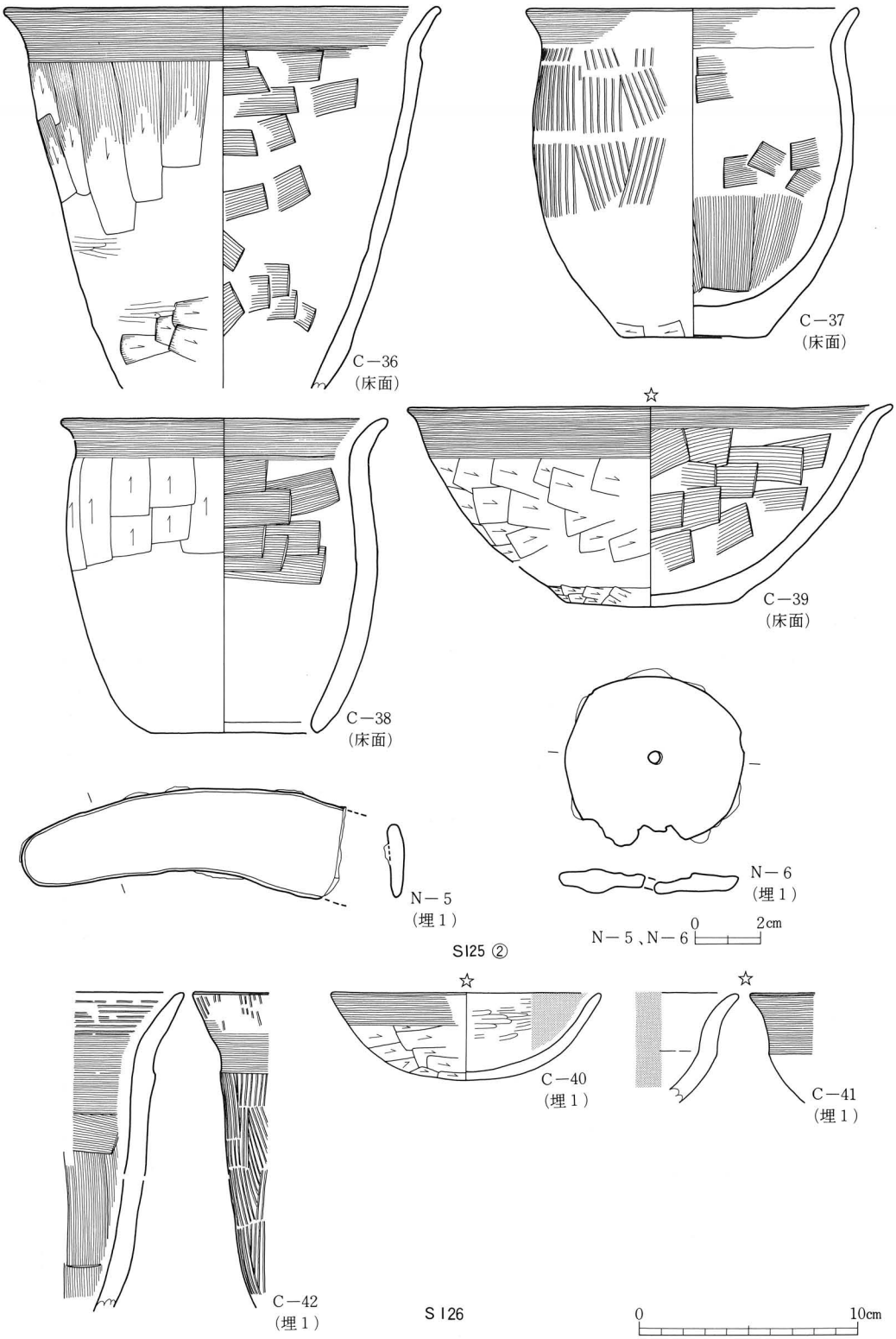
甑も大小2種類が出土している。C－36は底部を欠損しているが、口縁が外反し、体部がやや丸みをもって外傾している。口縁部と体部の境に軽い段がみられる。体部外面はヘラナデのち部分的なヘラミガキが行われている。C－38は口縁が外反し、体部がやや膨らむ。最大径は口縁にある。胎土はC－37とほぼ同じで、調整は明瞭には認められない。体部上半にはヘラナデの痕跡が確認される。



第43図　SI 25平面図・セクション図



第44図　SI 22・24・25出土遺物実測図



第45図　SI 25・26出土遺物実測図

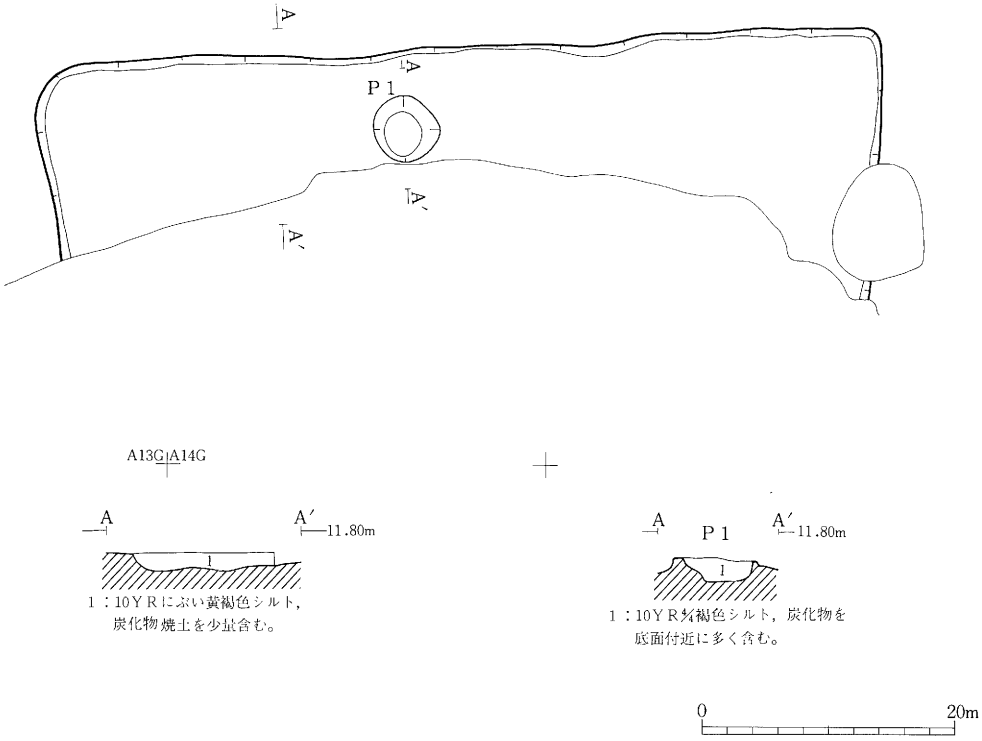
鉢C－39は、平底で、器形は体部から口縁部にかけて丸みをもって外傾しており、口縁端部が外へ開いている。体部外面はヘラケズリによって調整されている。

埋土中から出土した鉄製品2点については、N－5は鎌で、N－6は紡錘車と考えられる。また、出土した土師器破片のなかで、坏破片は19点認められ、それらは前述の坏4種のいずれかであり、胎土も緻密で細かく明橙色を呈し、黒色仕上げ処理の行われているものもある。また、甕の破片では、口縁部と体部の境に段をもつものはなく、体部の調整はヘラケズリあるいはヘラケズリののち部分的なヘラミガキが行われている。

これらの出土遺物のなかで、図示した床面出土の土師器は一括性が高く、住居廃絶時に伴うものと考えられる。また、それらと埋土中出土土師器には、器形、調整などにおいて共通していることが認められ、鉄製品2点についてもこの住居に伴う可能性が高い。

ＳＩ26（竪穴住居跡）；Ａ－13・14グリットに位置する。ＳＩ15、ＳＩ16と重複関係があり、ＳＩ26は両者より古い。平面形は方形を基調としている。ピットは1個認められる。

遺物は総数60点出土しており、そのほとんどは土師器破片である。製作にロクロを使用したものは認められない。第45図には埋土中から出土した3点を図示した。土師器坏C－40は丸底で、器形は体部から口縁部にかけて丸みをもって外傾している。胎土は緻密で細かく明橙色を呈する。土師器坏C－41の器形は、体部と口縁部の境の外面に稜があり、口縁は外反している。



第46図　SI 26平面図・セクション図

内面は外面の段・稜に対応して屈曲をもっている。土師器甕C－42の器形は、口縁部、体部ともに外傾しており、その境は強いヨコナデによって屈曲している。このヨコナデに先行して口縁部、体部とも刷毛目調整が行われている。

(2) 掘立柱建物跡

ＳＢ１：Ａ・Ｂ－15グリットに位置する。ＳＩ14、ＳＩ17と重複関係があり、ＳＢ１は両者より新しい。桁行３間以上、梁行３間、建物の方向はＮ－15°－Ｅである。Ｐ４・７・９には柱痕跡が認められる。

遺物は総数124点出土している。製作にロクロを使用している土師器破片が多数を占める。図示できるものはないが、写真74にはＰ８から出土した須恵器坏底部破片を示した。底部は回転ヘラ切り無調整である。

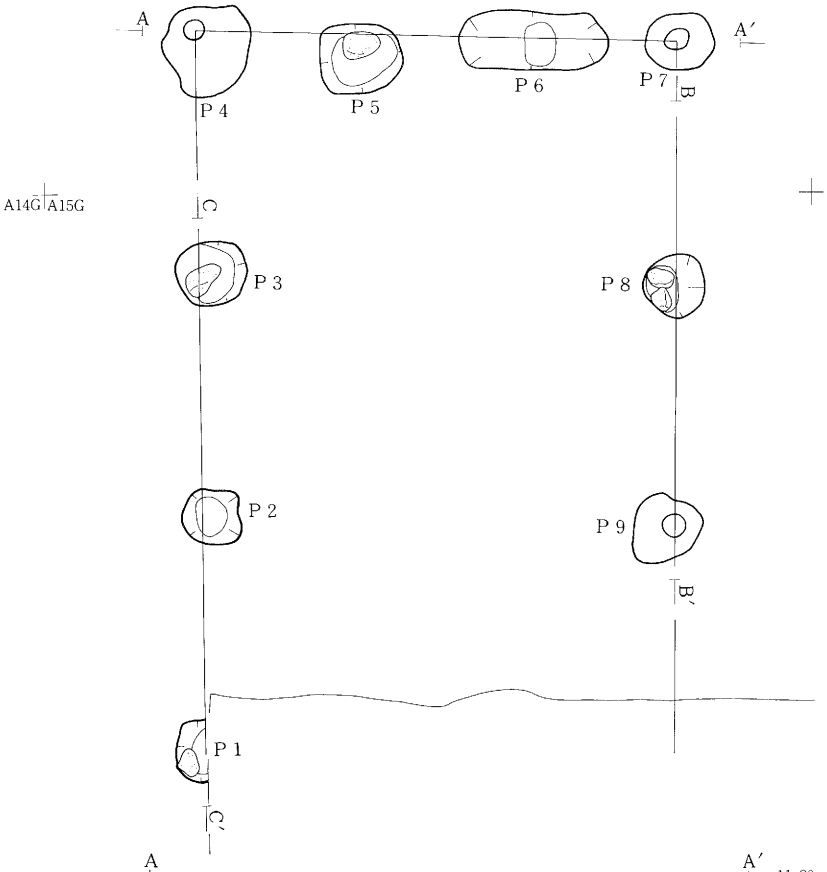
(3) 区画施設

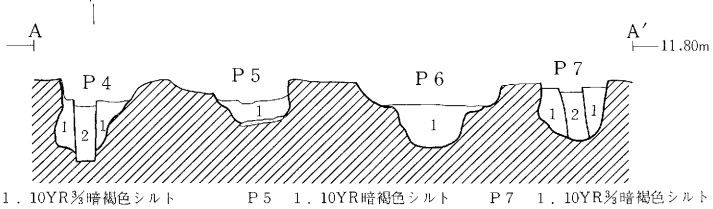
ＳＡ１：調査区中央部Ｂ－８～13グリットに位置する。ＳＤ１・２・４・５・６と重複関係があり、ＳＡ１は、ＳＤ４・５・６より新しく、ＳＤ１・２より古い。また、ＳＡ２と接続している。真東西方向に直線的に延びている。埋土は３層に分かれており、２層中で径15 cmほどの柱痕跡を４基検出した。底面近くの壁はほぼ直線的に外傾しているが、上部では開きが大きい。１層は柱の抜取りに伴う埋土と理解される。ＳＡ１の両側には間隔をあけていくつかのピットがみられる。なかには柱の抜き取りによって切られているものもあり、ＳＡ１との関連性が推定される。

遺物は総数928点出土している。製作にロクロを使用している土師器破片が多数を占める。土師器には内面黒色処理の施された坏破片も多いが、図示できるものはない。その他、３層中より赤焼土器坏体部破片１点、須恵器坏底部破片１点(回転糸切り無調整)、１層中よりＦ－４丸瓦（写真74）とＮ－７椀形滓（写真74）が出土している。

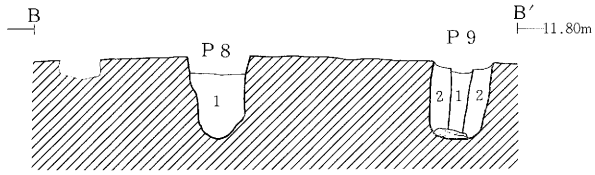
ＳＡ２：調査区中央部Ａ・Ｂ－13グリットに位置する。ＳＩ16と重複関係があり、ＳＡ２は、ＳＩ16より新しい。また、ＳＡ１と接続している。Ｎ－８°－Ｅの方向に直線的に延びている。埋土は３層に分かれており、３層上面で径10～25 cmほどの柱痕跡を14基検出した。柱痕跡は掘り方底面中央にジグザグに配置されている傾向がみられる。１・２層は柱の抜取りに伴う埋土と理解される。また、ＳＡ２の主に東側には間隔をあけていくつかのピットがみられる。なかには柱の抜き取りによって切られているものもあり、ＳＡ１との関連性が推定される。

遺物は総数678点出土している。製作にロクロを使用している土師器破片が多数を占める。土師器には内面黒色処理の施された坏破片も多いが、図示できるものはない。写真74・75には２層から出土したＤ－55土師器坏底部破片（回転糸切り無調整)、Ｅ－26～28須恵器坏破片(Ｅ－27：底部手持ちヘラケズリ、Ｅ－28：底部回転糸切り無調整)、Ｆ－４丸瓦、Ｇ－７平瓦

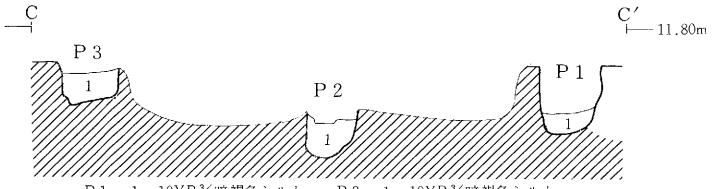




P 4　1．10YR⅔暗褐色シルト
　　2．10ＹＲ⅝にぶい黄褐色シルト
P 5　1．10YR暗褐色シルト
P 6　1．10YR⅔暗褐色シルト
P 7　1．10YR⅔暗褐色シルト
　　2．10ＹＲ⅝にぶい黄褐色シルト



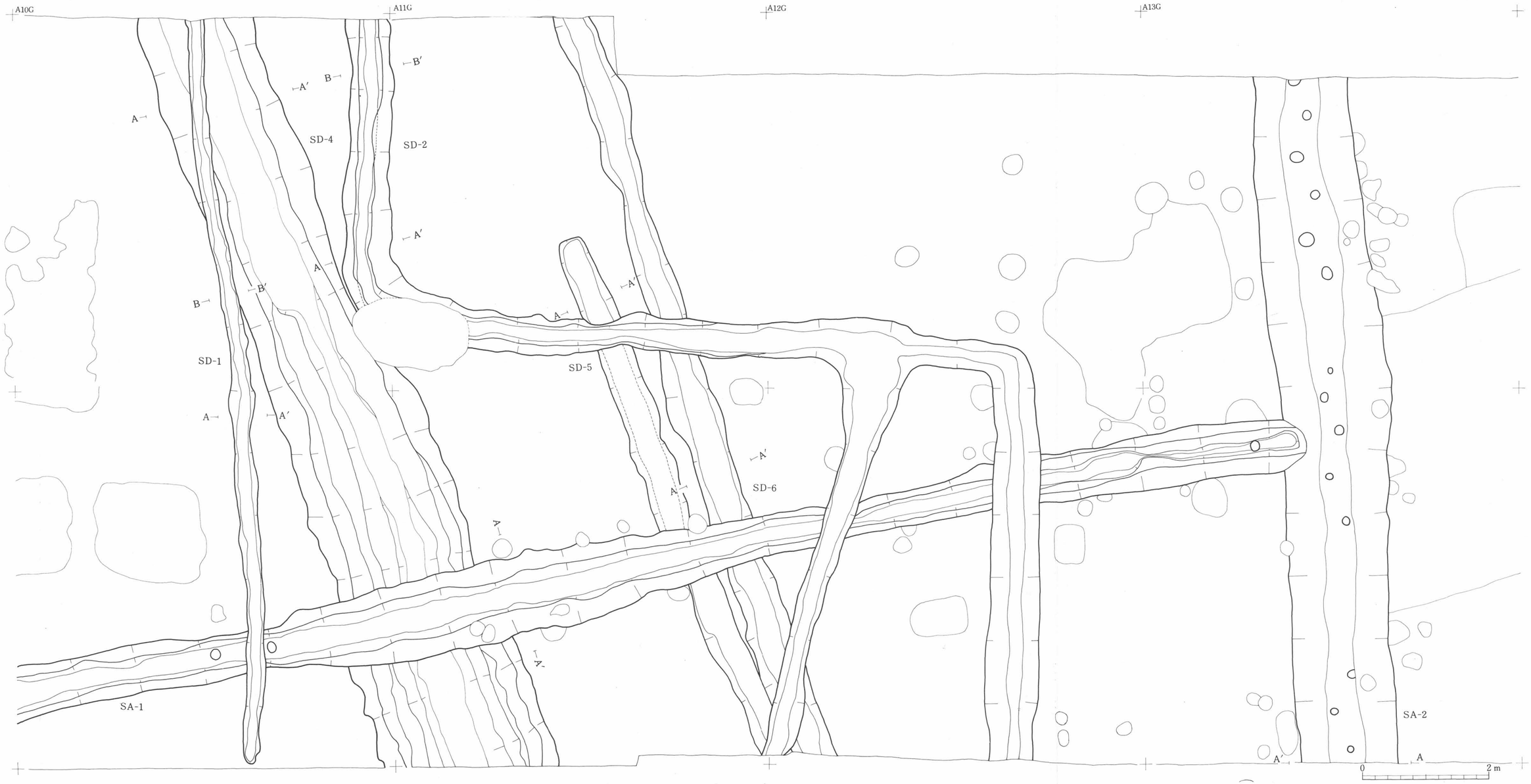
P 8　1．10ＹＲ⅝にぶい黄褐色シルト
P 9　1．10YR⅔暗褐色シルト
　　2．10ＹＲ⅝にぶい黄褐色シルト



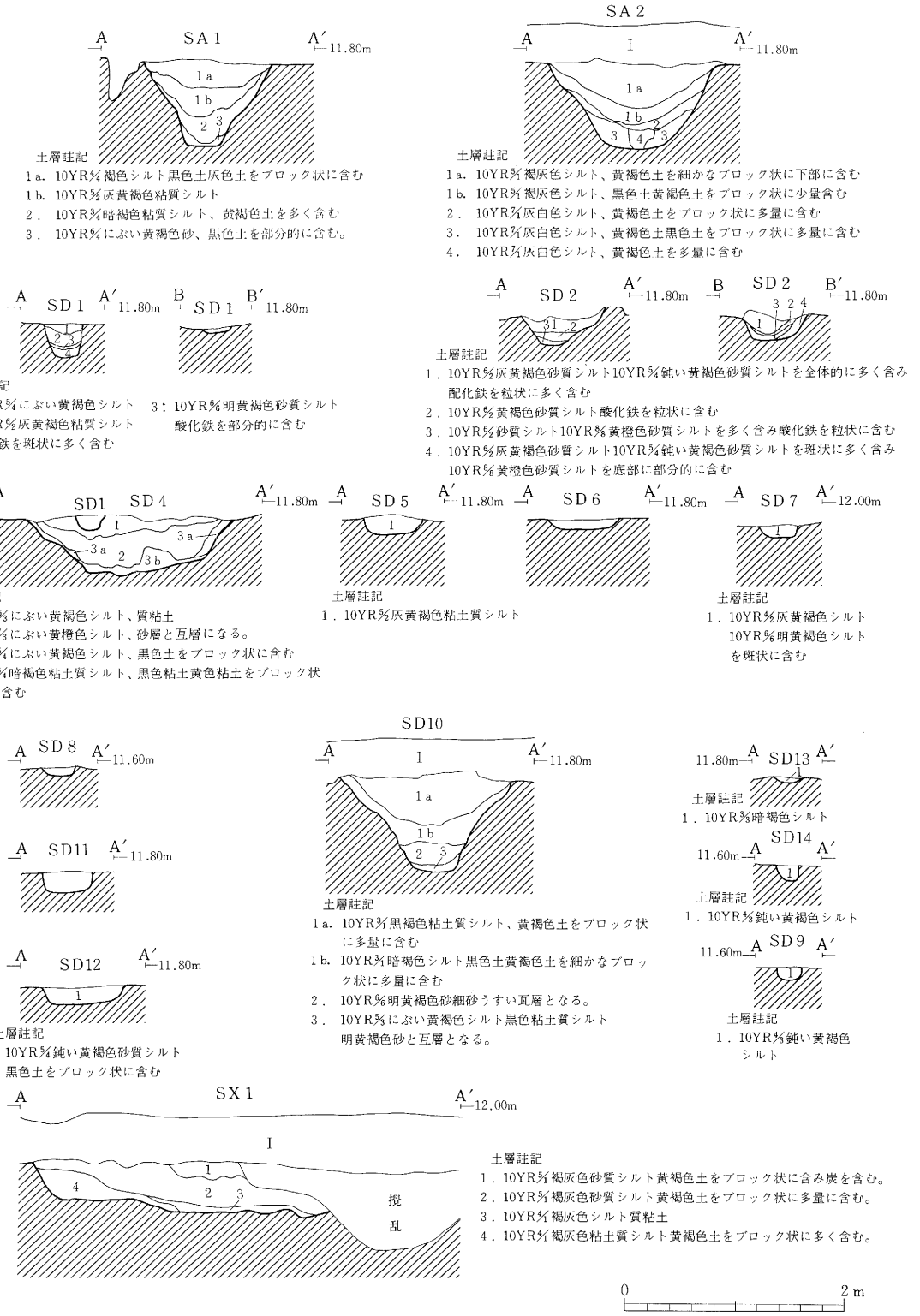
P 1　1．10YR⅔暗褐色シルト
P 2　1．10YR⅔暗褐色シルト
P 3　1．10YR⅔暗褐色シルト

0　2m

第47図　SB１平面図・セクション図



第48図　区画施設・溝跡平面図



第49図　区画施設・溝跡セクション図

を示した。その他、1層中より赤焼土器坏体部破片が数点出土している。また、第67図に示すようにP－13土玉も出土している。

SA3：調査区西部B－1～3グリットに位置する。SI12、SI23と重複関係があり、SA3は、両者より新しい。N－79°－Wの方向に直線的に延びている。P1～P11が列をなす1本柱列であり、P4・6・8・10にそれぞれ対応する南側にP12・13・14・15が配置されている。

遺物は総数54点出土している。すべて土師器破片である。図示できるものはない。柱穴列：B－4・5グリットに位置する。P1～P5が列をなしている。両端の柱間が短いことから、建物跡の桁にあたる可能性もある。

(4) 溝跡

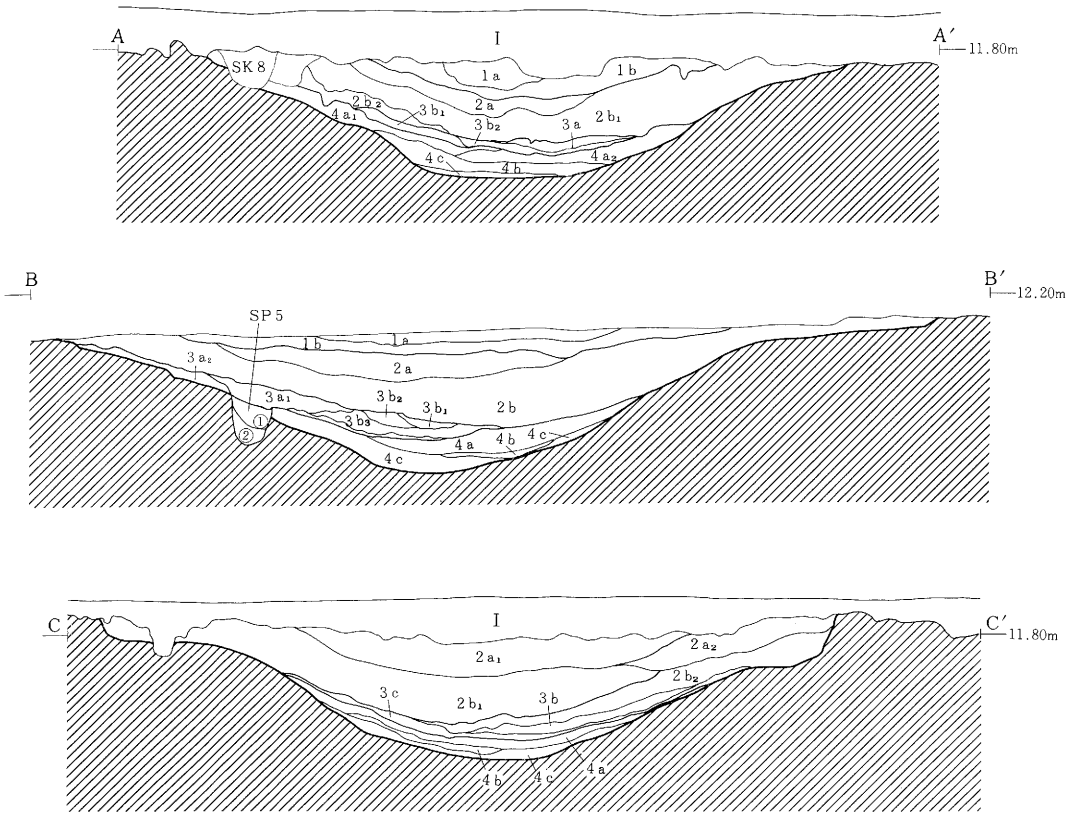
SD1：A・B－10グリットに位置する。SA1、SD4と重複関係があり、SD1は、両者より新しい。遺物は、総数13点出土している。

SD2：A・B－10～12グリットに位置する。SA1、SD5、SD6、SK3と重複関係があり、SD2は、SA1、SD5、SD6より新しい。SK3との関係は不明である。遺物は、総数209点出土している。H－1・2（写真79）は燻し焼成された道具瓦である。H－2は熨斗瓦であり、焼成前に刻みを入れ、焼成後に割っている。

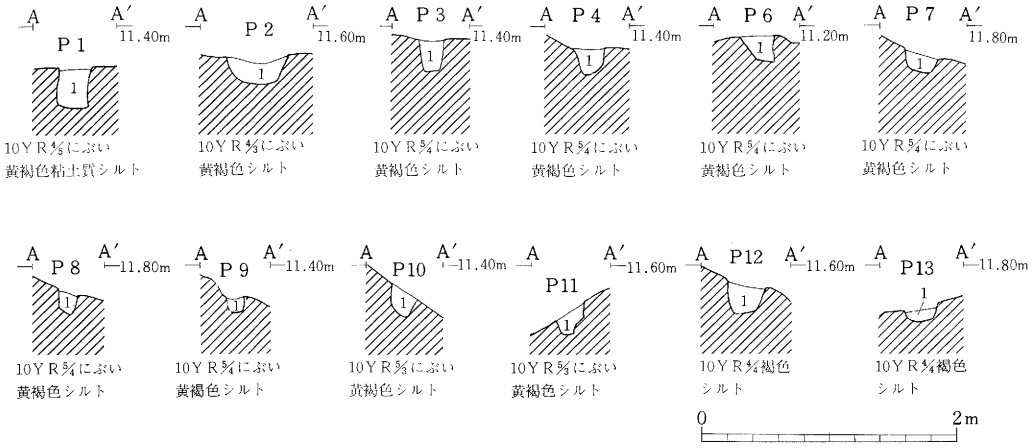
SD3：A・B－7グリットに位置する。SK5、SK8と重複関係があり、SD3は、両者より古い。N－30°－Eの方向に直線的に延びている。検出長は14.2mである。幅は、検出レベルの高い中央部で測ると6.9mである。断面形については、第51図のB－B′及びC－C′の断面図でみるように、幅70～100cmの底面から緩やかに立ち上がり、平坦面を東西両側に形成したのち、やや急角度に立ち上がっている。平坦面の幅や東西で異なり、西側が30～50cmなのに対して東側は70～130cmと広い。西側の平坦面と底面の間にはピット13個が埋土4層上面で検出されている。直線的に等間隔に並ぶ傾向はみられない。大きさにもそれぞれ違いがあり、径15～50cm、深さは15～40cmである。柱痕跡はいずれのピットでも認められなかったが、何らかの施設に関わる可能性が考えられる。埋土は4層に大別される。1層は主にシルトの黒色土で、炭化物が多量に含まれている。主に溝の北半部に分布する。2層上面の窪んだところでは下部に粘土層が薄く何枚か認められるところがある。2層堆積直後の自然堆積と考えられ、これは1層と2層の土質の違いからも1層堆積時との間にやや時間差のあることを示しているが、黒色シルトには人為的な堆積状況が認められる。2層は基本層II層に類似する黄褐色のシルトで、小さな炭を含んでいる。全域に分布し、層厚は厚く、細別層に層相の違いはあまりないことなどから、人為的に埋められたものと考えられる。3層はシルト～シルト質粘土で、上部には黒色土をブロック状に含んでいる。溝の中央から西側に分布する。4層は基本層

A
A′
A6G
A7G
P8
P6
P7
P11
P13
P10
P12
B
B′
P3
P5
B6G
B7G
P4
P9
P2
P1
C
C′
B7G
B8G
0
2 m

第50図　SD 3 平面図



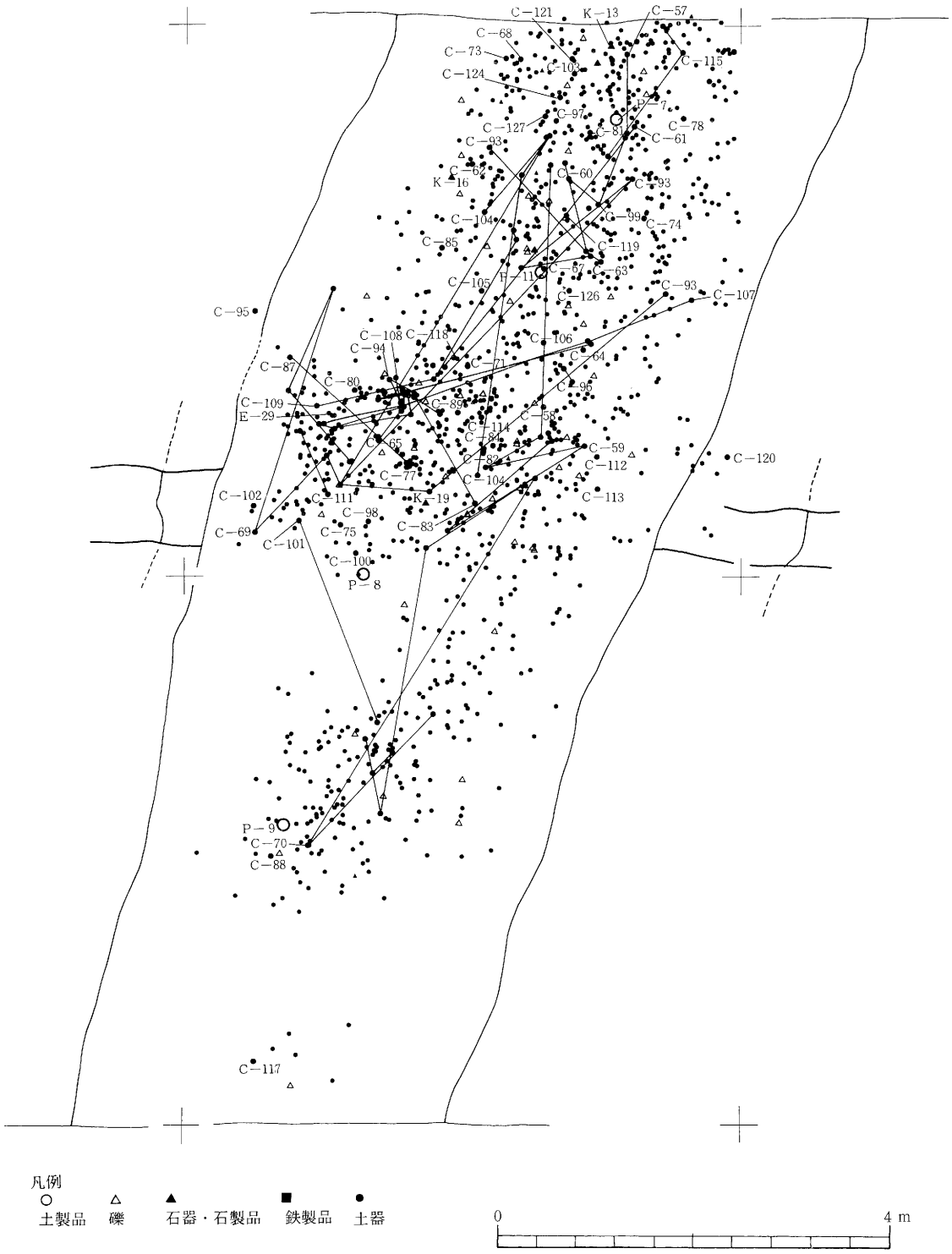
1a層　10YR5/3鈍い黄褐色シルト炭を含む
1b層　10YR3/3暗褐色シルト、炭を多量に含む
2a層　10YR5/4鈍い黄褐色シルト
2a₁層　10YR5/4鈍い黄褐色シルト
2a₂層　10YR5/4鈍い黄褐色シルト
2b層　10YR鈍い黄褐色シルト
2b₁層　10YR5/4鈍い黄褐色シルト、炭を含む
2b₂層　10YR5/4褐色シルト灰を少量含む
3a層　10YR5/6黄褐色シルト黒色土を多量にブロック状に含む
3a₁層　10YR5/6黄褐色シルト、黒色土を多量にブロック状に含む
3a₂層　10YR5/6黄褐色シルト、黒色土を少量ブロック状に含む
3b層　10YR3/3シルト質粘土
3b₁層　10YR3/3シルト質粘土、炭を多量に含む
3b₂層　10YR3/3シルト質粘土、砂粒の混入がみられる
3b₃層　10YR3/3シルト質粘土
3c層　10YR5/3鈍い黄褐色粘土
4a層　10YR5/4褐色シルト
4a₁層　10YR5/4鈍い黄褐色砂質シルト、灰を少量含む
4a₂層　10YR5/3鈍い黄褐色砂質シルト、灰を少量含む
4b層　10YR3/4暗褐色粘土質シルト、灰を少量含む
4c層　10YR5/4鈍い黄褐色シルト、灰を少量含む



第51図　SD 3 セクション図

第52図　SD 3 出土遺物平面・垂直分布図

第53図　ＳＤ３　１層出土遺物平面分布図



第54図　ＳＤ３　２層出土遺物平面分布図

第55図　ＳＤ３　３層出土遺物平面分布図

第56図　ＳＤ３　４層出土遺物平面分布図

II層に類似するが、細別層の層相は砂質シルト～シルト質粘土とそれぞれ異なる。3層と同様、溝の中央から西側に分布する。

遺物は、総数5242点出土している。そのうち、小さな土器破片などを除いた1719点の遺物について、地点とレベルを記録して取り上げた（接合したものを1点として算出、接合関係はラインで表示）。ここでは、主にこれらを対象として出土状況をみていきたい。第52図には1719点の平面垂直分布を、第53～56図には1～4各層ごとの平面分布を示した。第52図の平面分布図では、全域に遺物の分布が広がっているが、各層ごとにみると、出土点数や分布がそれぞれ異なっている。また、層位を越えた接合関係はほとんど認められない。1層：227点は溝の北半部に分布しており、北端部では密集した出土状況を示している。2層：1204点は南端部を除き、全域に分布している。溝の中央よりやや西寄りに集中しているところがみられる。接合関係をもつ土器も多く、接合距離が4mを越えるものもある。3層：141点は全域にまばらに分布するが、やや西に寄っている。4層：147点は全域にまばらに分布する。これらの出土状況の違いは、埋土の堆積状況とも関連していると考えられる。とくに、2層では、完形に近い土器がつぶれて出土しているものもあり、復元された土器の比率も他層に比べて高いことから、遺物の多くは溝が2層で埋まる時に伴うと考えられる。また、2・3層の遺物が全体としては溝の中央よりやや西寄りに分布の中心をもっていること、密集して出土しているところがいずれも西寄りの位置にあることは、ピットが西壁にあることとも合わせ、居住域が主に溝の西側にあったことを推測させる。

1719点の遺物の内容については、第1表に種類別、層位別に数量を示した。遺物の種類と数量は、弥生土器2点、土師器1569点、須恵器5点、金属製品2点、石器・石製品24点、土製品他23点、骨片1点、礫93点である。大半を占める土師器には、製作にロクロを使用したものは認められない。

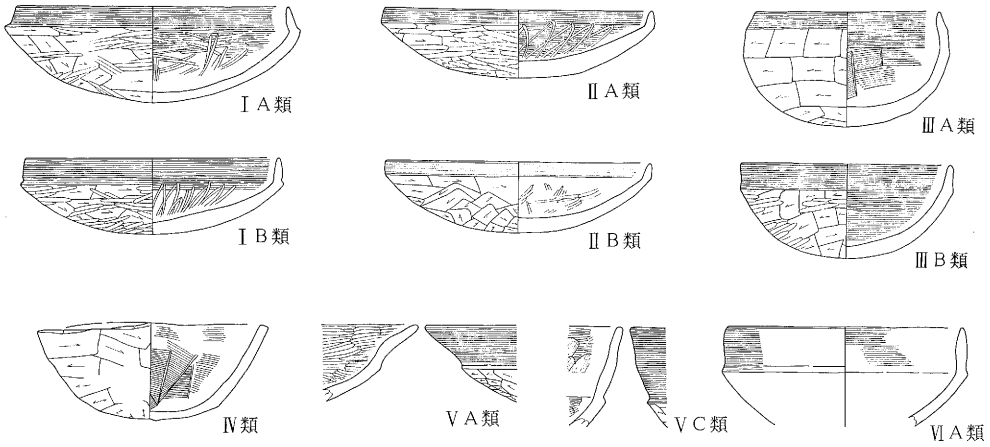
土師器の器種には、坏、壺、甕、甑、鉢、片口土器、高坏、蓋が認められる。これらについて、以下のように分類を行った。

坏は365点出土しており、49点を図示した。第57図のように器形からいくつかに分類される。また、調整・胎土などによっても類別される。各類の層位ごとの数量は第2表に示した。

坏I類：口縁部と体部の境に段のあるもの。丸底で、口径に対する器高の比率は1/4～2/5。74点認められ、16点を図示した。調整は、口縁部内外面と体部内面がヨコナデ、体部外面がヘラケズリで、そののち、多くは体部内外面か片面にヘラミガキが行われている。ヘラミガキの程度には個体差がある。内面に認められるヘラミガキには、単線の放射状、花弁状の複線による放射状、非放射状の3種がある。このうち、C－58は内面にヘラミガキののち黒色処理が施されており、他と異なる。また、内外面あるいは片面

第Ⅰ表　ＳＤ３出土遺物数量表

		1層	2層	3層	4層	計	
弥生土器		0	2	0	0		2
土師器	坏	62	283	15	5	365	1569
	壺	3	10	11	1	25	
	甕	98	485	72	86	741	
	甑	0	6	0	1	7	
	鉢	1	13	0	0	14	
	片口土器	0	1	0	0	1	
	高坏	4	17	1	8	30	
	蓋	2	1	0	0	3	
	口縁部破片	1	14	2	1	18	
	体部破片	42	223	17	20	302	
	底部破片	4	48	4	7	63	
須恵器		0	5	0	0		5
金属製品		0	1	1	0		2
石器・石製品	磨石	3	5	3	3	14	24
	敲石	0	2	0	0	2	
	凹石	0	1	0	0	1	
	砥石	0	1	0	0	1	
	剝片石器	0	1	0	1	2	
	石製品	1	2	1	0	4	
土製品他	土製品	1	12	2	0	15	23
	筒形土器	0	0	2	0	2	
	手捏土器	1	5	0	0	6	
骨片		0	0	0	1		1
礫		4	66	10	13		93
計		227	1204	141	147		1719



第57図　ＳＤ３出土土師器坏の器形分類

に黒色仕上げ処理の行われているものが７点みられる。胎土は、緻密で細かく明橙色を呈する。砂粒をほとんど含まない。

A：口縁が内傾するもの－50点あり、そのうちC－43・44・62・64～66・68・69・128の９点を図示した。内面は外面の段に対応して屈曲をもっている。口径は13.5～15.4 cm、器高は3.5～5.4 cmである。口縁部の高さは1.1～1.5 cmで、器高に占める比率は0.22～0.40である。

B：口縁が直立するもの－24点あり、そのうちC－57～61・63・67の７点を図示した。内面は外面の段に対応して屈曲をもっている。口径は12.6～14.8 cm、器高は4.1～5.2 cmである。口縁部の高さは1.4～1.7 cmで、器高に占める比率は0.28～0.34である。

坏Ⅱ類：口縁部と体部の境に稜のあるもの。丸底で、口径に対する器高の比率は1/4～2/5。80点認められ、12点を図示した。調整は坏Ⅰ類とほぼ同じであるが、内面にヘラミガキのち黒色処理が施されているものはない。内外面あるいは片面に黒色仕上げ処理の行われているものが９点みられる。胎土は、坏Ⅰ類と同じである。

A：口縁が内傾するもの－26点あり、C－45・72・73・75・76・77・79の７点を図示した。内面は外面の稜に対応して屈曲をもつが、屈曲の弱いものもある。口径は13.8～19.6 cm、器高は3.6～4.5 cmである。最も口径の大きいC－79の器高は不明であるが、残存高は5.8 cmである。口縁部の高さは0.8～1.05 cmで、器高に占める比率は0.20～0.22である。

B：口縁が直立するもの－54点あり、C－70・71・74・78・127の５点を図示した。内面は外面の稜に対応して屈曲をもつが、屈曲の弱いものもある。口径は13.0～17.6 cm、器高は3.7～5.0 cmである。口縁部の高さは0.8～1.2 cmで、器高に占める比率は

0.20〜0.27である。

坏III類：口縁部と体部の境に稜があり、体部〜底部が半球状をなすもの。口径に対する器高の比率は1/2前後。3点認められる。

A：口縁が内傾するもの－C－81と82の2点である。大きさはほぼ同じで、C－81は口径9.8 cm、器高6.1 cmである。最大径の位置は、C－81が体部にあるのに、C－82は体部と口縁部の境にある。また、調整ではヘラミガキの施されないC－81と、施されるC－82の違いがある。これは、胎土の違いと関係している可能性があり、粗粒で砂粒を多く含むC－81と、緻密で細かく砂粒をほとんど含まないC－82では、製作工程も異なるものとなったのであろう。

B：口縁が直立するもの－C－47の1点である。口径11.2 cm、器高5.0 cmである。体部外面にはヘラケズリののち部分的なヘラミガキが施されている。胎土は、緻密で細かく砂粒をほとんど含まない。

坏IV類：丸底で、体部から口縁部にかけて丸みをもってそのまま立ち上がるもの。外面の調整は、ヘラケズリによって行われており、口縁端部も面取りがなされている。5点認められ、C－92・93の2点を図示した。C－92は、口径12.1 cm、器高5.1 cmである。C－93は、内面に黒色処理が行われている。

坏V類：口縁部と体部の境に段あるいは稜をもち、口縁が外傾するもの。23点認められ、11点図示した。器形復元のできるものはないが、底部は丸底と考えられる。

A：口縁が外反するもの－C－49・86・87・89・90・134の6点である。調整は、外面は不明のC－134を除きすべてヨコナデで、内面ヨコナデのち黒色仕上げ処理の行われているC－49、内面ヘラミガキのち黒色処理のおこなわれているC－86・87・90・134内面ヨコナデのち赤彩されているC－89に分けられる。胎土は、砂粒を含むC－134を除き、すべて緻密で細かく砂粒はほとんど含まれていない。

B：口縁が直線的なもの－C－85・88・91の3点である。調整は、外面はすべてヨコナデで、内面ヘラミガキのち黒色処理のおこなわれているC－88、内面ヨコナデのち内外面に赤彩されているC－91に分けられる。C－85は内面調整が不明である。胎土は、砂粒を含むC－85・88と、緻密で細かく砂粒はほとんど含まれていないC－91に分けられる。

C：口縁が内湾するもの－C－135・140の2点である。調整は、外面はどちらもヨコナデで、内面ヘラミガキのち内外面に黒色仕上げ処理の行われているC－140、内面ヘラミガキのち黒色処理の行われているC－135に分けられる。胎土は、どちらも緻密で細かく砂粒はほとんど含まれていない。

坏VI類：その他、器形のわかる坏。5点認められ、それぞれ異なる。

A：口縁部と体部の境に段があり、丸底と考えられ、口径に対する器高の比率は約1/2と推定される。口縁は直立する。C－83の1点である。推定口径は12.6 cm。高坏坏部の可能性がある。胎土は緻密で細かい。

B：口縁部と体部の境にゆるやかな稜のあるもの。丸底と考えられ、口径に対する器高の比率は約2/5と推定される。口縁は内傾するが、端部は外へ開く。C－46の1点である。推定口径は13.2 cm。内外面に黒色仕上げ処理が行われている。胎土は緻密で細かく明橙色を呈する。

C：口縁部と体部の境にゆるやかな稜のあるもの。丸底で、口径に対する器高の比率は約1/3。口縁は直立する。C－80の1点である。口径14.8 cm、器高4.9 cm、口縁部の高さは1.7 cmである。内外面に黒色仕上げ処理が行われている。胎土は緻密で細かく明橙色を呈する。

D：口縁部と体部の境に稜があり、口縁が短く外傾するもの。C－84の1点である。推定口径16.0 cm、口縁部の高さは1.1 cmである。内面はヘラミガキののち黒色仕上げ処理が行われている。胎土は緻密で細かい。砂粒を含む。

E：大型坏。口縁が強く外反し、口縁部と体部の境にわずかな稜をもつもの。C－48の1点である。丸底と考えられる。推定口径21.8 cm。

坏VII類：坏I類・II類の体部～底部破片。胎土、色調、調整の特徴によって類別した。111点認められ、黒色仕上げ処理の行われているものも多い。

坏VIII類：その他の坏小破片。64点認められる。このなかには、赤褐色を呈し、砂粒を多く含むやや厚手の坏破片が7点識別されている。

第2表　ＳＤ３出土の坏の分類と数量

	1層	2層	3層	4層	計
ＩＡ類	11	36	3	0	50
ＩＢ類	6	17	1	0	24
IIＡ類	4	21	0	1	26
IIＢ類	14	36	4	0	54
IIIＡ類	0	2	0	0	2
IIIＢ類	1	0	0	0	1
IV類	0	5	0	0	5
V類	2	18	0	3	23
VI類	2	3	0	0	5
VII類	10	99	2	0	111
VIII類	10	46	5	1	64
計	62	283	15	5	365

壺は25点認められ、7点を図示した。器形と大きさ、口縁の形態などからいくつかに分類される。

壺Ⅰ類：体部が球形を呈し、大型のもの。

A：口縁部が外反し、端部が丸みをもつもの。C－105の1点である。1個体が潰れた状態で出土している。外面の調整は口縁部ヨコナデ、体部はヘラナデののち下部にヘラミガキが行われている。口径19.7 cm、器高33.6 cm、体部径31.5 cmである。胎土には砂粒を多く含んでいる。

B：口縁部が外反し、端部外面に平坦面をもつもの。C－129の1点である。外面の調整は口縁部ヨコナデ、体部は刷毛目ののちヘラミガキが行われている。口径23.6 cmである。胎土には砂粒を多く含んでいる。

壺Ⅱ類：体部が球形を呈し、小型のもの。

A：口縁部が外反し、端部が丸みをもつもの。C－102の1点である。口縁部から体部上端が残存している。口縁部の調整は、内外面ヨコナデである。口径は13.6 cmである。胎土には砂粒を多く含んでいる。また、口縁部資料であるC－101については、器形も類似し、口径も推定13.6 cmで、この類に属する可能性もある。調整はC－102とは異なり内外面にヘラミガキが行われている。胎土は緻密で細かく砂粒をほとんど含まない。

B：体部資料である。C－104の1点である。調整は、外面ヘラケズリのち主に上半部にヘラミガキ、内面ヘラナデで、外面には黒色仕上げ処理が行われている。体部高14.6 cm、体部径16.7 cmである。胎土は、緻密で細かく砂粒をほとんど含まない。

壺Ⅲ類：体部が縦に長い楕円形を呈し、小型のもの。

A：口縁部が直線的に外傾し、端部外面に段をもち直立するもの。C－103の1点である。口縁部から体部上端が残存している。内外面ともヘラミガキによる調整が行われている。内外面とも黒色仕上げ処理が行われている。口径は12.8 cmである。胎土は緻密で細かく明橙色を呈し、砂粒をほとんど含んでいない。

B：口縁部が外反気味に立ち上がるもの。C－55の1点である。口縁下部から体部上半が残存している。外面の調整は、口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリである。体部径16.0 cmである。胎土は緻密で細かく明橙色を呈し、砂粒をほとんど含んでいない。

甕は741点認められる。全体の器形が復元されたものが少ないため、破片資料を含めて22点を図示し、第3表には体部外面の調整を8つに分け、層位ごとの数量を示した。なお、741点のなかには、甑の破片も含まれている可能性もある。

甕Ⅰ類：口縁が外反あるいは直線的に外傾し、体部が膨らむもの。口径20 cm前後と10～15

cm ほどの大小 2 種類がある。口径と体部径の関係、体部の膨らみなどによって 5 つに分けられる。また、これらの胎土には砂粒を多く含んでいるが、小型の甕には緻密で細かく、砂粒をほとんど含まないものもある。

A：体部が張り、口径に比べ体部径の方が大きいもの。C－53・110・111・113・137 の 5 点である。口縁部は短く外反している。体部との境には段は形成されず、C－110 において軽い稜が認められる。体部外面の調整は、C－53・110・111 がヘラケズリ、C－137 がヘラナデ、C－113 がヘラナデのちヘラミガキである。

B：体部が膨らみ、口径と体部径がほぼ同じもの。C－107・122・119 の 3 点である。口縁部は外反し、体部との境に軽い稜が認められる。体部外面の調整は、C－122 がヘラケズリのちヘラミガキ、C－107 がヘラナデのちヘラミガキである。C－107 の口径は 20.0 cm、C－122 の口径は 12.5 cm と、大小の違いがみられる。

C：体部の膨らみは弱く、口縁もあまり外反せず、口径と体部径がほぼ同じもの。C－118 の 1 点である。体部外面の調整はヘラナデである。

D：体部はやや膨らむが、口径に比べ体部径の方が小さいもの。C－54・106・112・114・115 の 5 点である。口縁部は、短く外反するC－112、外反するC－114、やや外反気味に外傾するC－106・115、直線的に外傾するC－54 に分かれる。体部と口縁部の境にはC－54 には段があるが、他は軽い稜をもつ。C－54 とC－106 は体部下端に段がみられる。底部は、C－54 はヘラケズリによって上げ底気味になっているが、C－106 には木葉痕が残されており、平坦である。体部外面の調整は、C－54 が刷毛目、他はヘラナデである。大きさは、C－54 が口径 21.6 cm、器高 22.9 cm、C－106 が口径 17.2 cm、器高 18.1 cm である。

E：体部はあまり膨らまず、口径に比べ体部径の方が小さく、体部最大径が体部上端付近にあるもの。C－109・116・117・130 の 4 点である。口縁部は外反しており、体部との境は、C－117 には軽い稜がみられるが、他は屈曲している。体部外面の調整はC－109 と 116 がヘラナデ、C－117 がヘラナデのちヘラミガキである。C－109 では、体部上端において、ヨコナデとヘラナデの境界が軽い稜になっている。

F：体部から底部にかけての資料である。C－108 の 1 点である。体部は膨らみをもつ。外面の調整は、刷毛目ののちヘラナデである。底部には木葉痕が残されている。

甕II類：口縁が短くやや外反し、体部が外傾するもの。C－52 の 1 点である。最大径は口縁部にある。口縁部と体部の境には軽い稜がみられる。底部はヘラケズリが行われており、平坦である。体部外面の調整は、ヘラケズリのちヘラナデ、さらにヘラミガキが施されている。口径 19.8 cm、器高 17.6 cm である。胎土には砂粒を多く含んでいる。

甕III類：口縁が内傾し、体部が膨らむもの。C－120の1点である。口縁部内面がやや膨らんでいる。最大径は体部上半にある。口縁部と体部の境には軽い稜がみられる部分もある。底部はヘラケズリが行われており、平坦である。体部外面の調整はヘラケズリである。口径16.7 cm、器高16.1 cmである。胎土は、緻密で細かく砂粒をほとんど含まない。

甕IV類：口縁がわずかに外反し、口縁部と体部の境が明瞭でないもの。C－124の1点である。口縁直下の内面がやや膨らむ。内面には粘土紐の積み上げ痕を残している。推定口径12.8 cm。胎土は、緻密で細かく砂粒をほとんど含まない。明褐色を呈する。

甑は7点認められた。すべて底部資料であり、器形のわかるものはない。C－138の1点を図示した。無底式の底部破片である。胎土には砂粒を多く含んでいる。

鉢は14点認められ、2点を図示した。それぞれ器形は異なる。

鉢I類：体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部と体部の境に稜があり、口縁は外反するもの。C－50の1点である。底部は丸底と考えられる。体部外面の調整は、ヘラケズリのち部分的なヘラミガキである。内外面に黒色仕上げ処理が行われている。胎土は、緻密で細かく明橙色を呈する。

鉢II類：体部のわずかに丸みをもって立ち上がり、口縁はそのまま直立するもの。C－121の1点である。底部は平底で、体部外面の調整はヘラケズリである。口径13.7 cm、器高9.6 cmである。胎土は、緻密で細かく砂粒をほとんど含まない。明褐色を呈する。内面は黒色仕上げ処理が行われている。

片口土器は1点認められる。C－123である。口縁部から体部にかけての破片であり、器形は不明である。体部外面の調整はヘラケズリである。内外面に黒色仕上げ処理が行われている。推定口径13.8 cmである。胎土は、緻密で細かく明橙色を呈する。

高坏は30点認められるが、器形全体がわかるものはない。このうち、IV類を含む18点は南

第3表　ＳＤ３出土の甕の分類と数量

	ヘラナデ	ヘラナデ→ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラケズリ→ナデ	刷毛目	刷毛目→ヘラナデ	ヘラミガキ	計
1層	55 (54)	1 (1)	32 (31)	0	4 (4)	4 (4)	6 (6)	0	98
2層	300 (62)	25 (5)	91 (18)	5 (1)	15 (3)	12 (2)	45 (9)	5 (1)	485
3層	33 (46)	8 (11)	5 (7)	1 (1)	0	8 (11)	17 (24)	0	72
4層	53 (62)	17 (20)	8 (9)	1 (1)	0	0	8 (9)	0	86
計	429 (57)	51 (7)	132 (18)	6 (1)	19 (3)	23 (3)	76 (10)	5 (1)	741

※（　）内はパーセントを示す。

小泉式土器の高坏と考えられる。８点を図示した。

高坏Ⅰ類：坏部資料：Ｃ－136 の１点である。口縁部と体部の境に段がある。口縁部はやや外傾しており、その下部はわずかに膨らみをもつ。内面はヘラミガキのち黒色処理である。口径 9.4 cm である。胎土には砂粒を含んでいる。

高坏Ⅱ類：坏部下部から脚部上部の資料：Ｃ－95・96・97 の３点である。坏部には段がみられず、丸みをもって立ち上がる。脚部は坏部直下から外へ広がっている。調整は、外面がヘラケズリのち部分的なヘラミガキ、内面はヘラミガキである。内外面あるいは片面に黒色仕上げ処理が行われている。胎土は、緻密で細かく明橙色を呈する。

高坏Ⅲ類：脚部資料：Ｃ－98 の１点である。脚部は外傾しており、端部はやや外へ開いている。器厚は 7～8 mm で、胎土は緻密で細かい。色調は明褐色～明橙色を呈する。

高坏Ⅳ類：脚部資料：Ｃ－99・100・139 の３点である。脚部はは外傾するものと直立するものがあり、どちらも端部は外へ開いている。脚上部が中実になっているものもある。外面にはヘラミガキが全面に行われている。器厚は 10 mm 以上と厚く、胎土には砂粒を含む。色調は橙色～赤褐色を呈する。

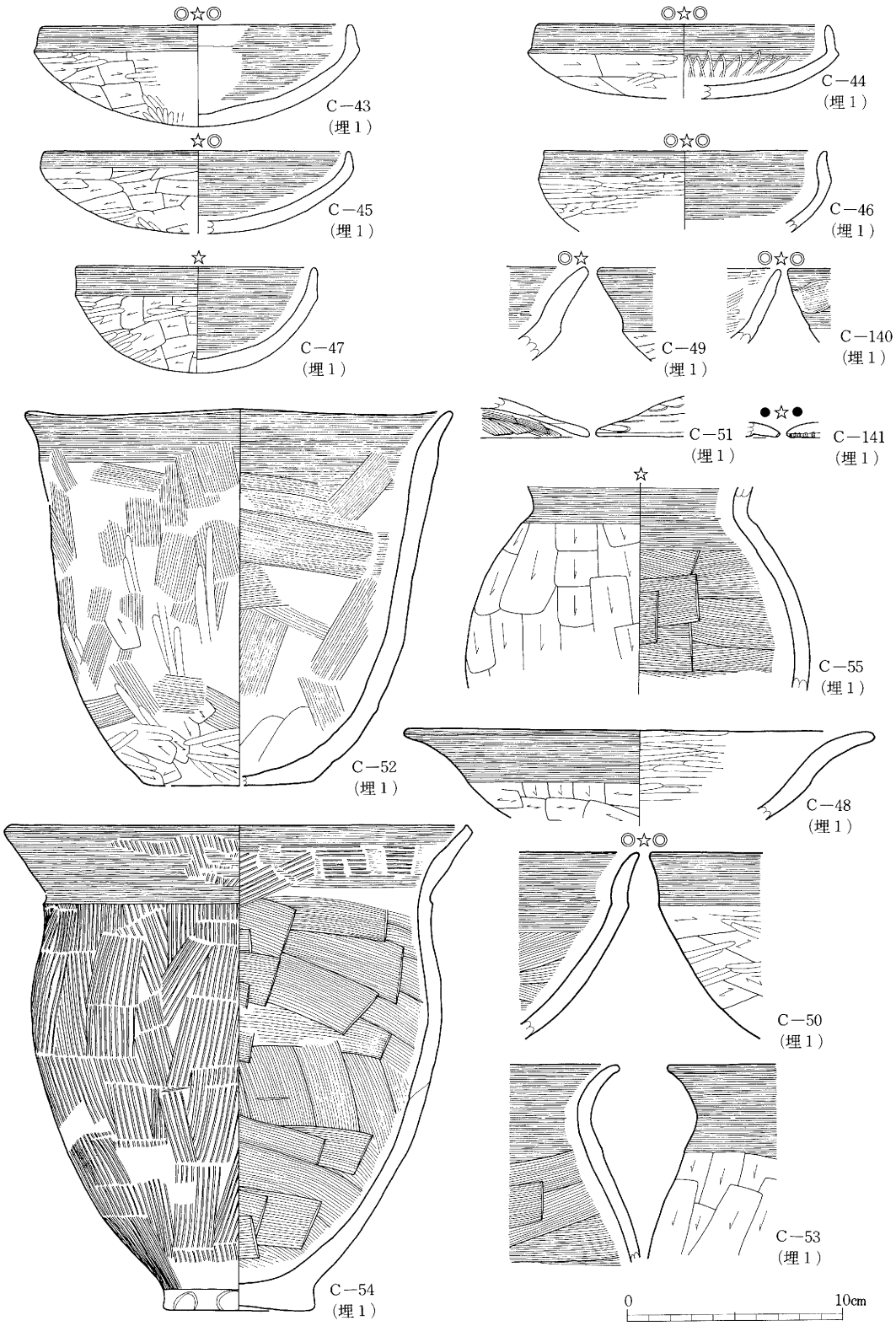
蓋は３点認められる。Ｃ－51・94・141 である。いずれも小破片である。Ｃ－51・94 は胎土に砂粒を含んでおり、Ｃ－51 の内面は黒色を呈する。Ｃ－141 は、端部に刻目があり、内外面に丹塗りが施されている。胎土は、緻密で細かく明橙色を呈する。

この他、土師器には器種不明の口縁部破片 18 点、体部破片 302 点、底部破片 63 点が認められた。

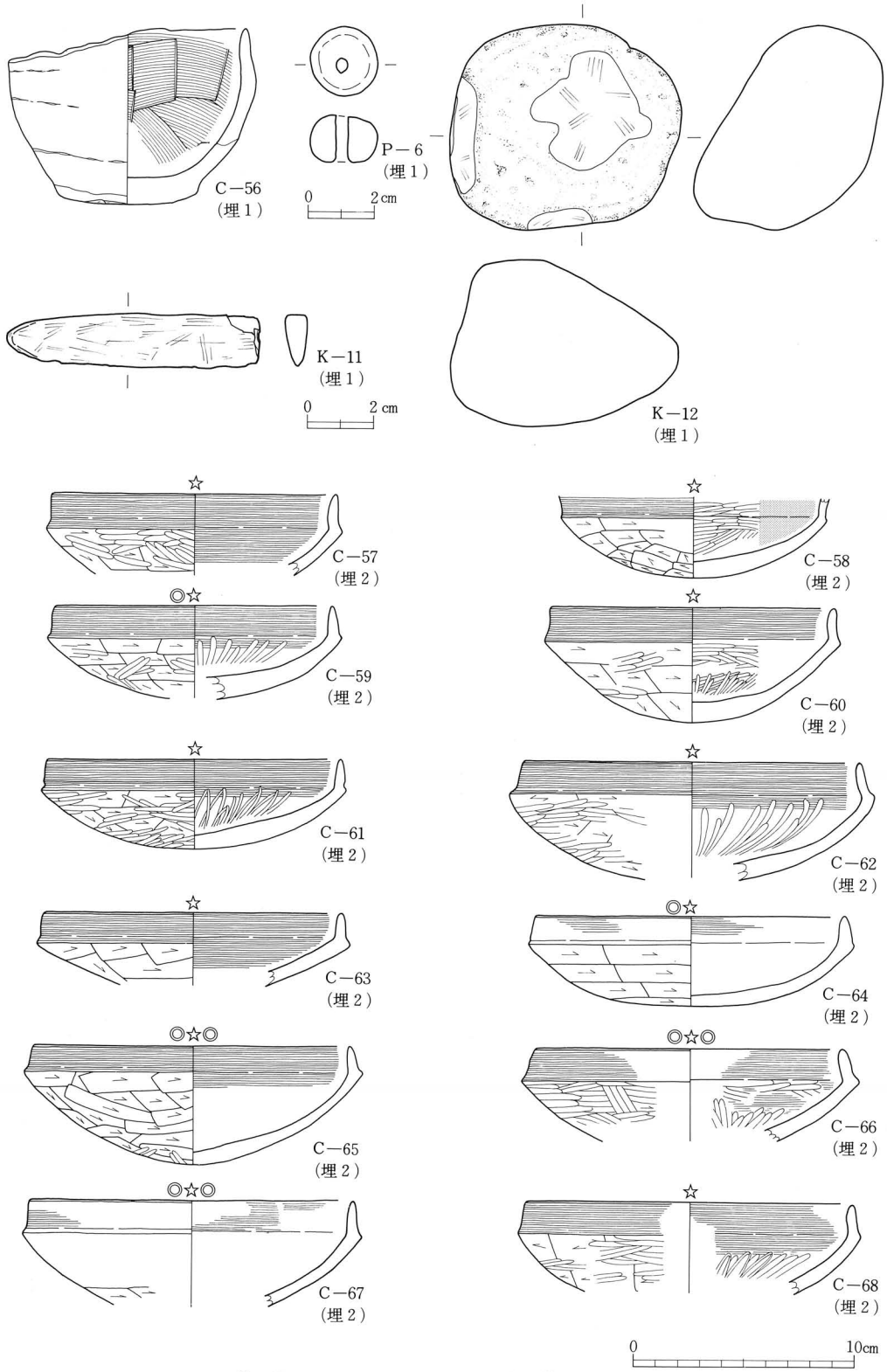
須恵器は６点認められるが、器形復元ができるのはＥ－29 の１点だけである。Ｅ－29 は短頸壺の口縁部から体部上端にかけての破片資料である。口縁部は直線的にやや外傾している。体部は肩が張り、沈線が１条めぐっている。沈線直下には櫛状の工具によって連続した斜めの刺突文が施されている。口径は推定 10.3 cm、器厚 5～6 mm。脚のつく可能性がある。胎土は緻密で、色調は暗青灰色を呈し、小さな黒色の粒子がみられる。焼成は極めて堅緻である。

金属製品は２点認められるが、どちらも鉄製品の小破片である。

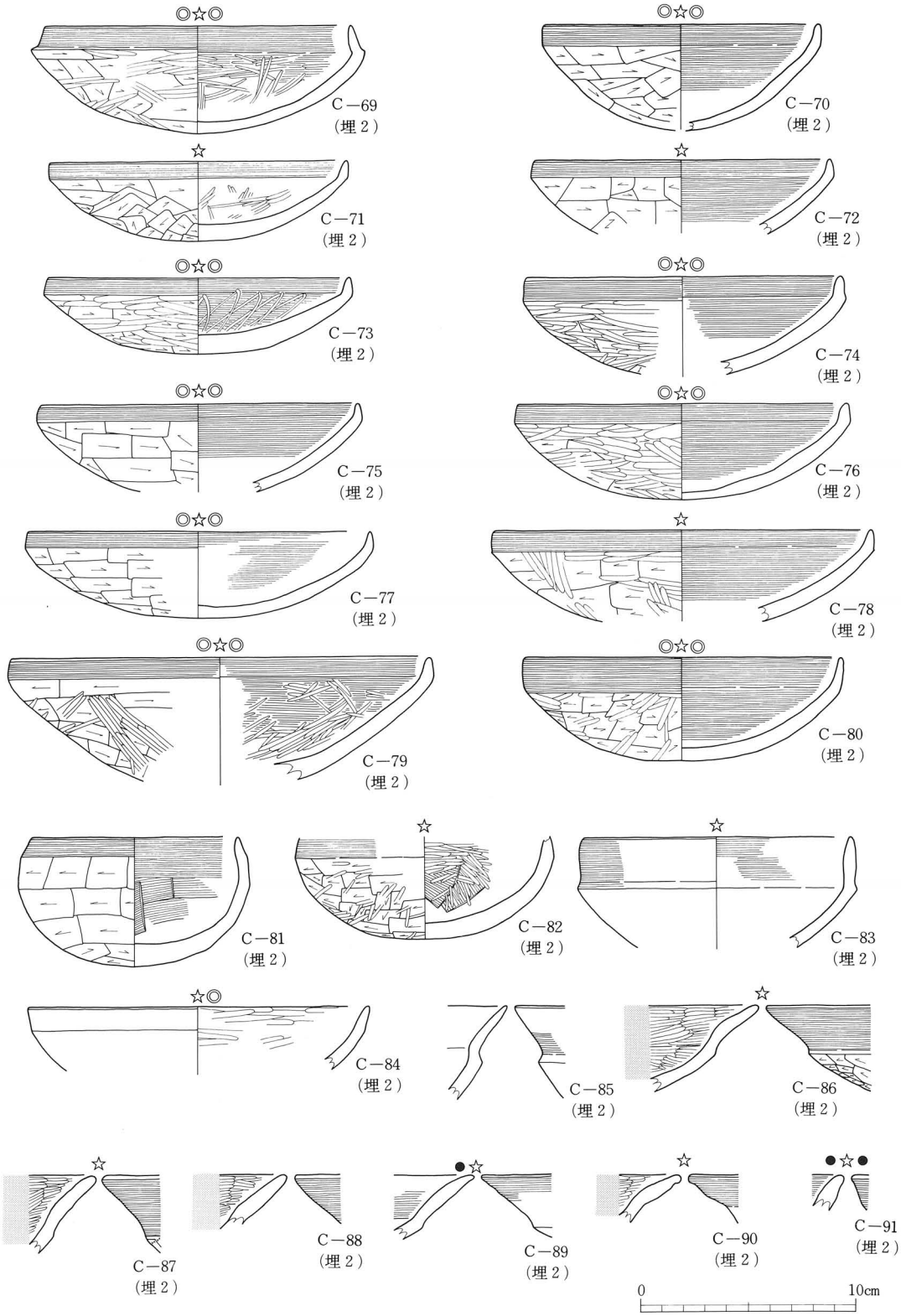
石器・石製品は 24 点認められ、そのうちＫ－11～18・20 を図示し、Ｋ－19・21・34 は写真で示した。磨石（Ｋ－12・16・20・34）と敲石（Ｋ－13）には安山岩が多く用いられている。Ｋ－34 のように重さ 13 kg の礫も使われており、磨面の広がりが明瞭に認められる。礫とした 93 点のなかには、磨面の判断に迷うものが含まれている。砥石（Ｋ－14）と凹石（Ｋ－15）は１点ずつの出土で、石材には石英安山岩質凝灰岩が用いられている。石質は軟質である。剝片石器は２点出土しており、いずれも石材は黒曜石で、Ｋ－17 は石核、他は剝片である。Ｋ－17 にはピエス・エスキーユの可能性もある。石製品は４点出土しており、石材には頁岩（粘板岩）



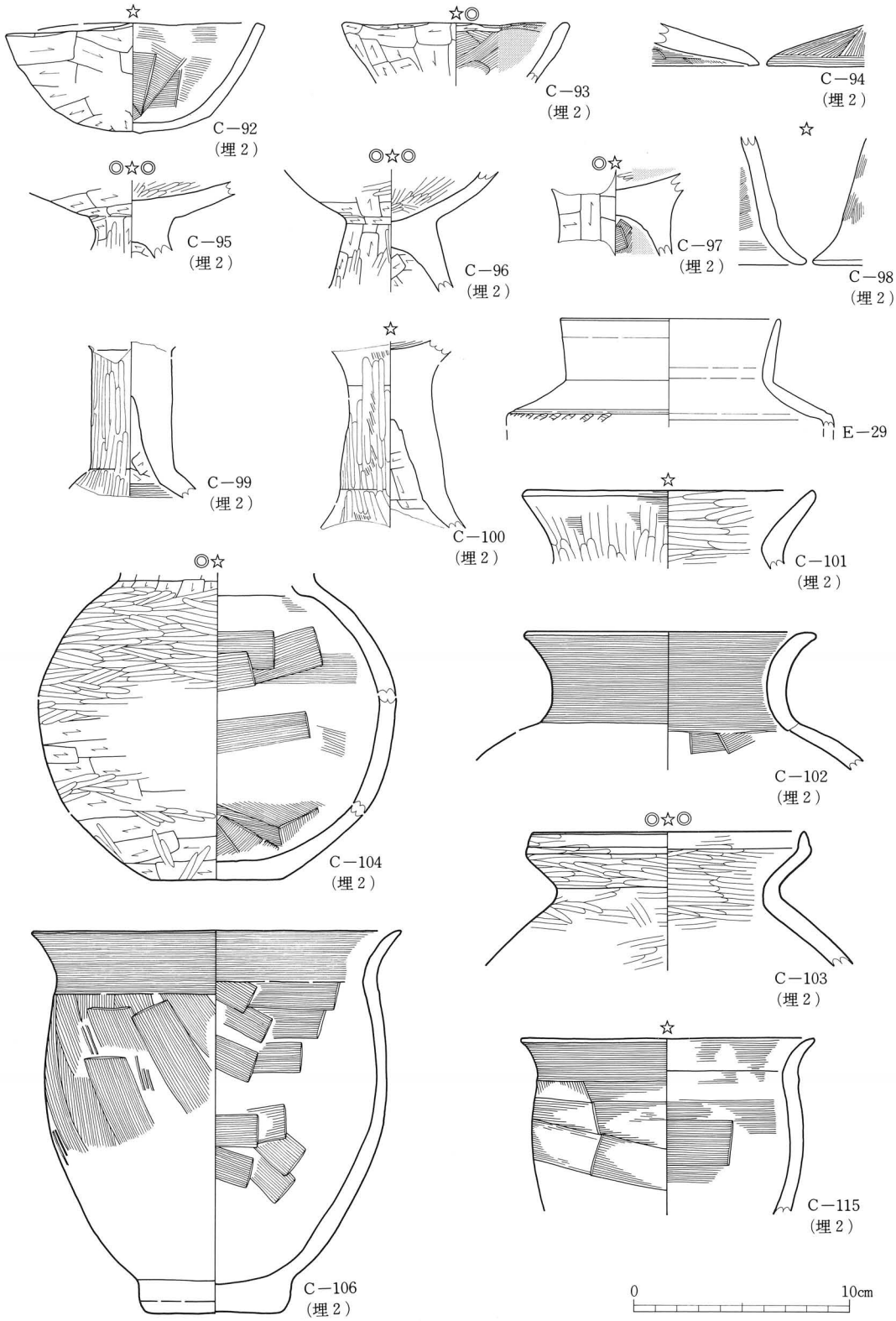
第58図　SD３　１層出土遺物実測図



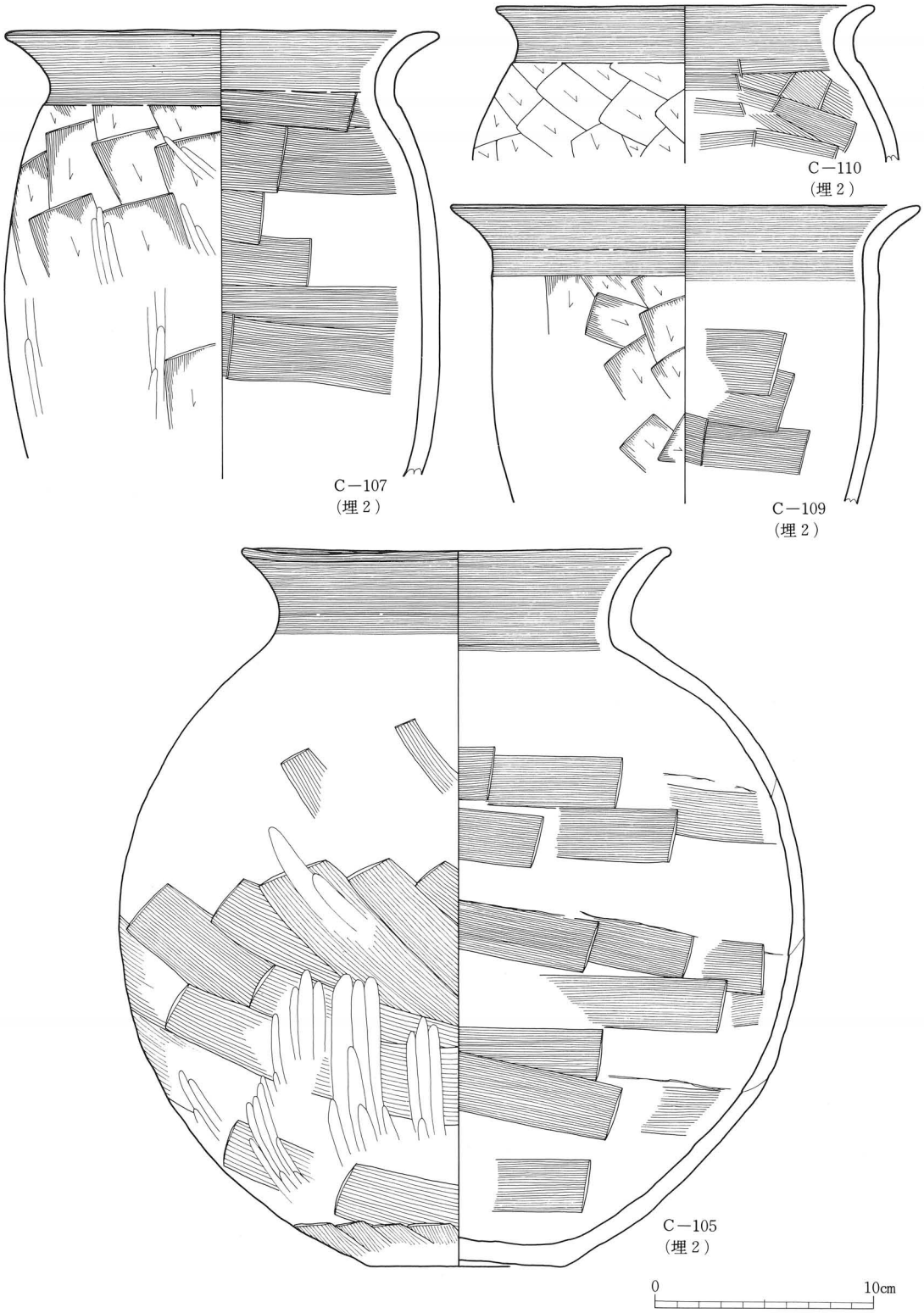
第59図　SD３　１層・２層出土遺物実測図



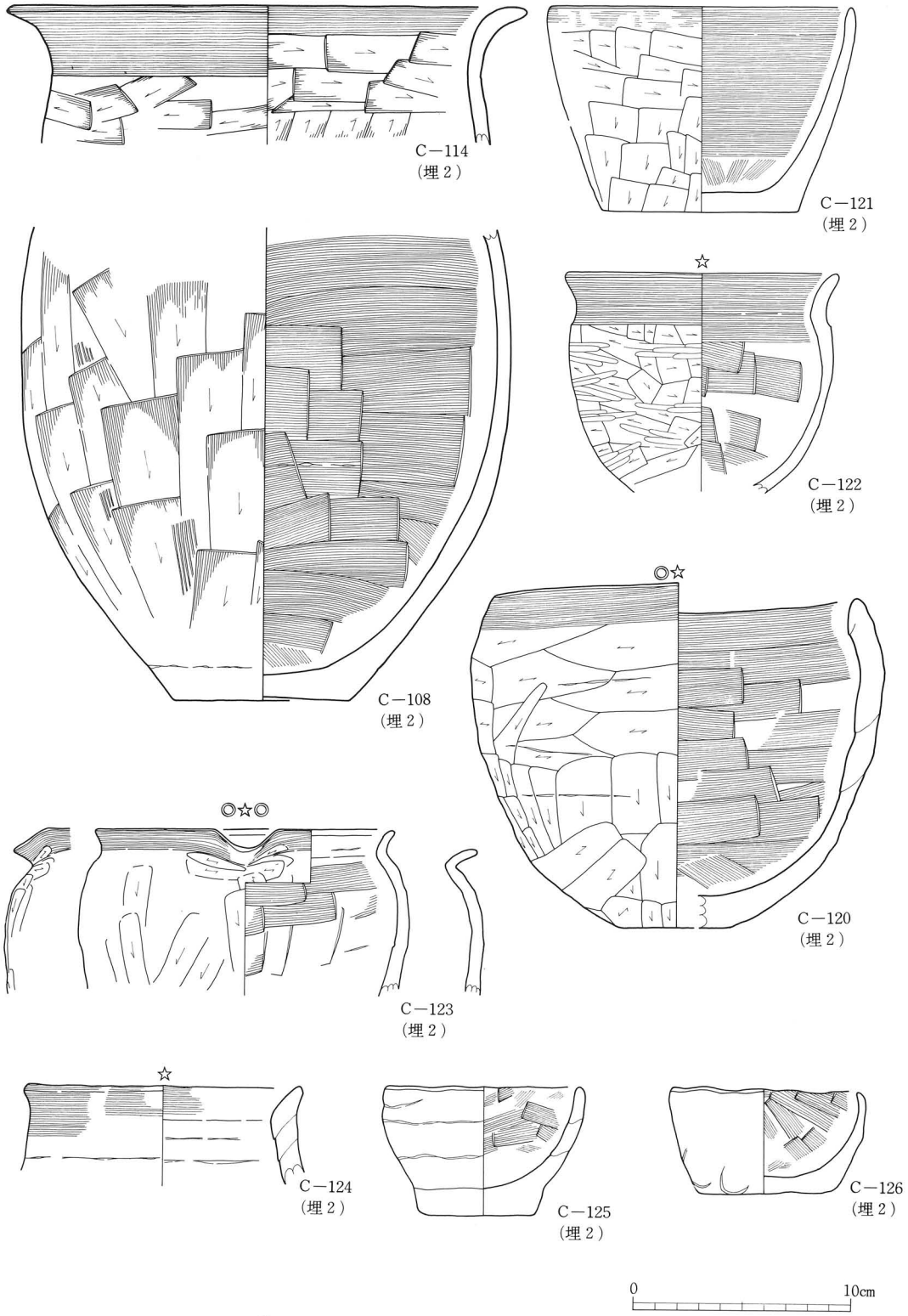
第60図　SD３　２層出土遺物実測図（1）



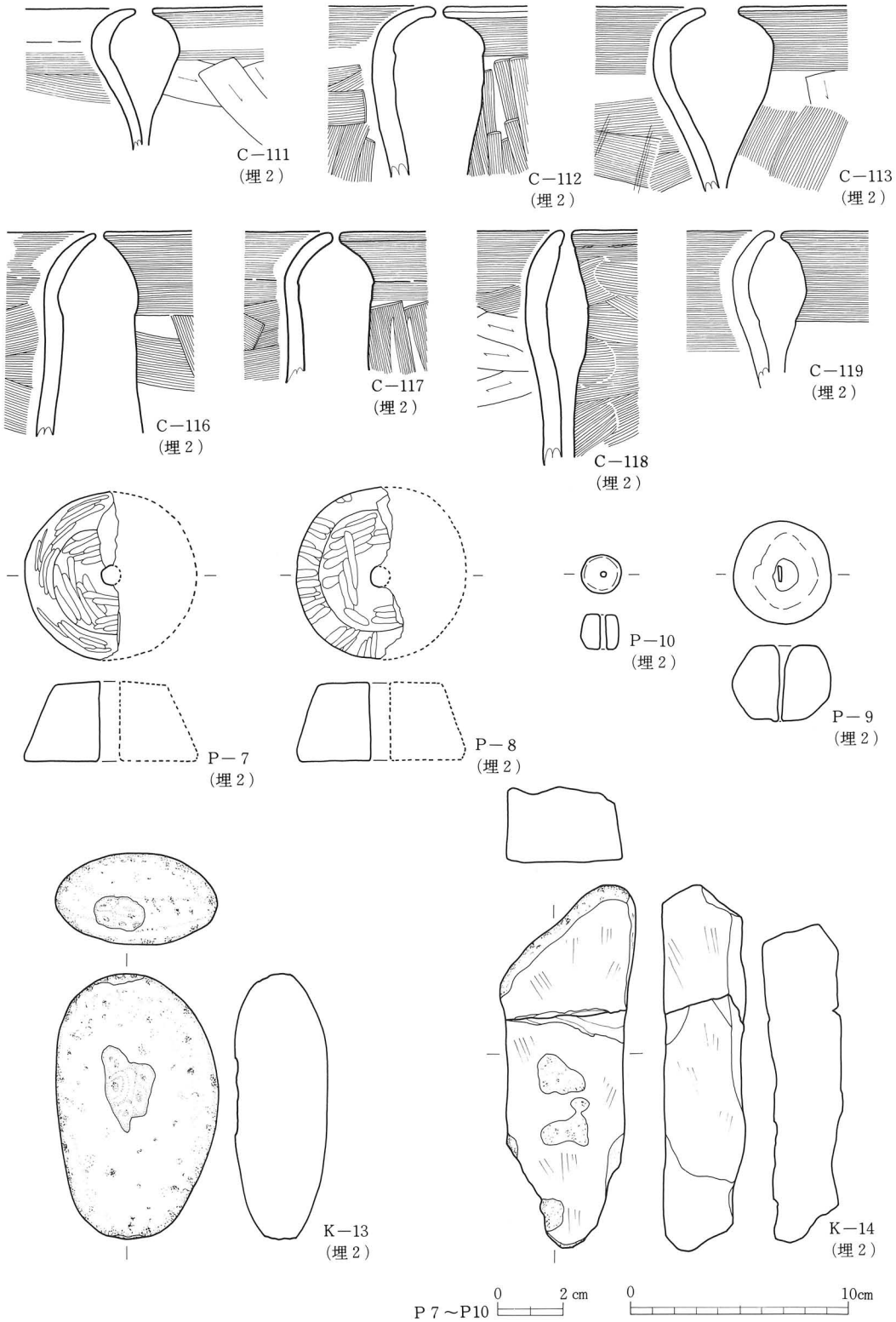
第61図　SD３　２層出土遺物実測図（2）



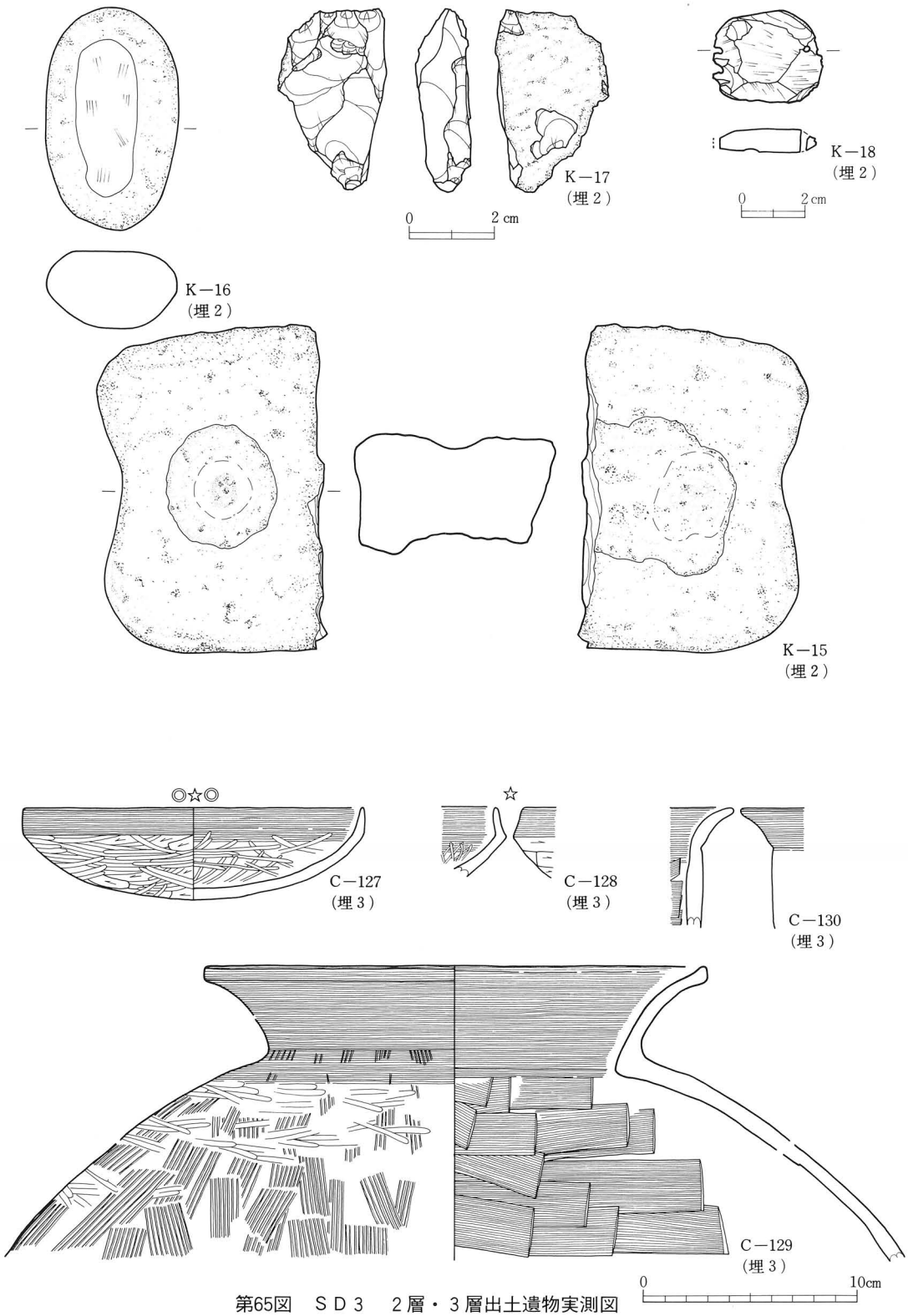
第62図　SD３　２層出土遺物実測図（3）



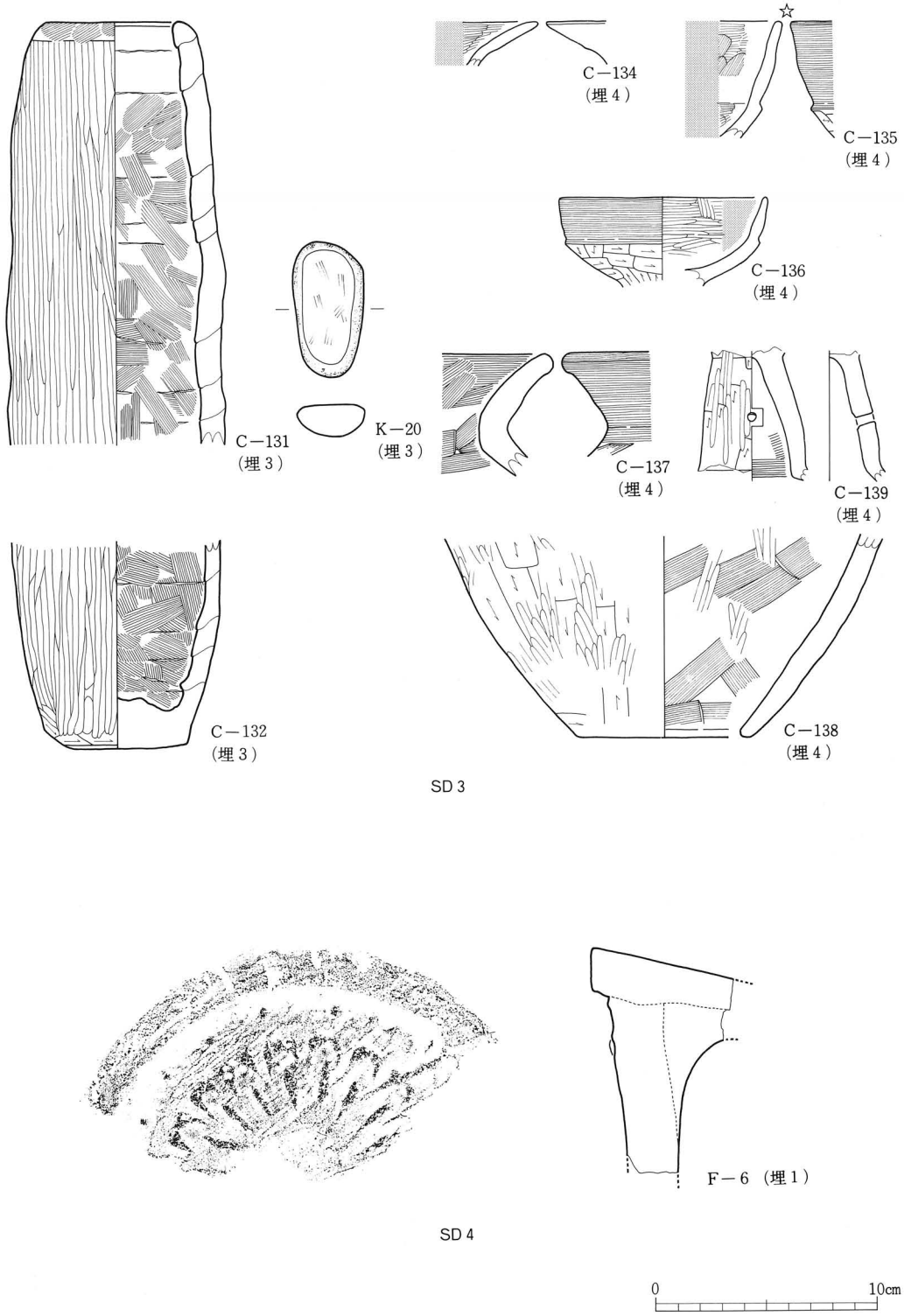
第63図　SD３　２層出土遺物実測図（4）



第64図　SD３　２層出土遺物実測図（5）



第65図　ＳＤ３　２層・３層出土遺物実測図



第66図　ＳＤ３　３層・４層、ＳＤ４出土遺物実測図

が用いられている。K－18は有孔円板、K－11は刀形をした石製品である。K－19と21は石製模造品の素材とも考えられるが、磨面がみられ、未製品であることや他の可能性もある。

筒形土器、手捏土器を含めて土製品は23点認められ、そのうちC－56・125・126・131・132 P－6～10を図示し、P 11は写真で示した。C－131・132は筒形土器である。同一個体の可能性もある。どちらも外面はヘラミガキ、内面はナデが行われている。内面には粘土紐の積み上げ痕跡を残されている。C－132の外面には火はねによる器面の剝落がみられる。C－131の残存高は19.1 cmである。胎土には砂粒を多く含んでいる。手捏土器は6点出土しており、C－56・125・126を図示した。胎土には砂粒を多く含んでいる。体部下端に段をもつC－56・125と段をもたないC－126がある。P－7、8は土製紡錘車であり、2点はほぼ同じ大きさと形態を示している。調整はヘラミガキが施されており、P－7には黒色仕上げ処理も行われている。P－6、9、10は土玉である。胎土は、緻密で細かく、砂粒をほとんど含んでいない。P－11は支脚と考えられる。円柱状を呈する。胎土は、緻密で細かいが、砂粒を含んでいる。外面はほとんど剝落している。

SD4：A・B－9～10グリットに位置する。SA1、SD1、SK3と重複関係があり、SD4は、いずれの遺構より古い。埋土は大別3層に分かれており、2層はシルトと砂が互層になる自然堆積層である。そのいずれかのシルトの上面では人の足跡が検出されている。1層は、基本層II層と類似する黄褐色土をブロック状に含んでおり、人為的に埋められた可能性がある。

遺物は、総数717点出土している。製作にロクロを使用している土師器破片が多数を占める。写真78・79に5点を示した。すべて埋土1層からの出土である。C－142は製作にロクロを使用していない土師器坏破片で、体部外面に段があり、内面には対応する屈曲はみられない。この遺構の機能していた時期には伴わないものと考えられる。D－56は土師器坏底部破片（回転糸切り無調整）、E－30は須恵器坏底部破片（手持ちヘラケズリ）、F－6は陸奥国分寺跡（伊東他：1961）で細弁蓮花文鐙瓦第一類と分類されている軒丸瓦の瓦当部である。G－8は平瓦の破片である。凸面は縦方向の縄叩き目と叩き目のつぶれ、凹面は細かい布目とそれを消すナデがみられる。この他、1層中からは赤焼土器坏破片が数点出土している。赤焼土器破片は埋土2・3層からは出土していない。

この溝の廃絶要因については、埋土2層の堆積により、溝としての機能が損なわれた可能性が考えられる。その点では、埋土1層出土遺物のなかには溝廃絶時に伴う遺物が含まれていると理解される。

SD5：A・B－11グリットに位置する。SA1、SD2、SD6と重複関係があり、SD5は、いずれの遺構より古い。遺物は、総数48点出土している。

SD6：A・B－11グリットに位置する。SA1、SD2、SD5と重複関係があり、SD6

は、ＳＤ５より新しく、ＳＡ１、ＳＤ２より古い。遺物は、総数42点出土している。写真79には２点を示した。Ｅ－31は須恵器坏底部破片（回転糸切り無調整）で、内面は体部と底部の境に屈曲をもっている。Ｇ－９は平瓦の破片である。凸面は縦方向の縄叩き目と叩き目のつぶれ、凹面は細かい布目とそれを消すナデがみられる。

ＳＤ７：Ｂ－３～５グリットに位置する。ＳＩ９、ＳＡ１と重複関係があり、ＳＤ７は、両者より新しい。遺物は、総数93点出土している。写真79にはＥ－32須恵器坏破片を示した。内面は体部と底部の境に屈曲をもっている。

ＳＤ８：Ａ－18～20グリットに位置する。Ａ－18グリット付近で方向を変えている。ＳＩ20、ＳＩ22、ＳＸ１と重複関係があり、ＳＤ８は、ＳＩ20、ＳＩ22より新しく、ＳＸ１より古い。遺物は、総数103点出土している。写真79にはＩ－２陶器甕破片を示した。常滑産であり、時期は中世と考えられる。

ＳＤ９：Ｂ－14グリットに位置する。遺物は、総数20点出土している。

ＳＤ10：Ａ・Ｂ－17グリットに位置する。ＳＩ18、ＳＩ19と重複関係があり、ＳＤ10は、両者より新しい。遺物は、総数133点出土している。写真79には埋土１層から出土したＩ－３陶器破片を示した。渥美産であり、年代は12～13世紀と考えられる。

ＳＤ11：Ａ－16グリットに位置する。ＳＩ14、ＳＤ10と重複関係があり、ＳＤ11は、ＳＤ10より新しい。ＳＩ14との関係は不明である。遺物は、総数30点出土している。

ＳＤ12：Ｂ－14グリットに位置する。ＳＩ17と重複関係があり、ＳＤ12は、ＳＩ17より新しい。遺物は、総数４点出土している。

ＳＤ13：Ａ－19グリットに位置する。検出長は短い。ＳＩ22、ＳＫ12と重複関係があり、ＳＤ13は、両者より古い。遺物は、総数５点出土している。

ＳＤ14：Ａ－19グリットに位置する。検出長は短い。ＳＩ22と重複関係があり、ＳＤ14は、ＳＩ22より古い。遺物は、総数４点出土している。

(5)　土坑他

ＳＫ１：Ｂ－10グリットに位置する。平面形は方形を呈する。底面には凹凸がみられる。遺物は、総数12点出土している。写真79にはＨ－３を示した。燻し焼成された熨斗瓦であり、焼成前に刻みを入れ、焼成後に割っている。

ＳＫ２：Ｂ－10グリットに位置する。平面形は方形を呈する。総数３点出土している。

ＳＫ３：Ａ－11グリットに位置する。ＳＤ２、ＳＤ４と重複関係があり、ＳＫ３は、ＳＤ４より新しい。ＳＤ２との関係は不明である。平面形は楕円形を呈する。底面には凹凸がみられる。遺物は、総数83点出土している。Ｈ－４（写真79）は燻し焼成された熨斗瓦であり、焼成前に刻みを入れ、焼成後に割っている。Ｋ－22（第69図、写真79）は石製紡錘車である。ていねい

なミガキが施され、線刻がみられる。

ＳＫ４：Ｂ－５グリットに位置する。ＳＤ６と重複関係があり、ＳＫ４は、ＳＤ６より新しい。平面形は楕円形を呈する。底面には凹凸がみられる。遺物は、総数18点出土している。

ＳＫ５：Ａ－７グリットに位置する。ＳＤ３と重複関係があり、ＳＫ５は、ＳＤ３より新しい。平面形は細長い楕円形を呈する。遺物は、総数351点出土している。写真79にはＤ－57を示した。製作にロクロを使用した土師器坏の破片である。内面はヘラミガキのち黒色処理が行われている。

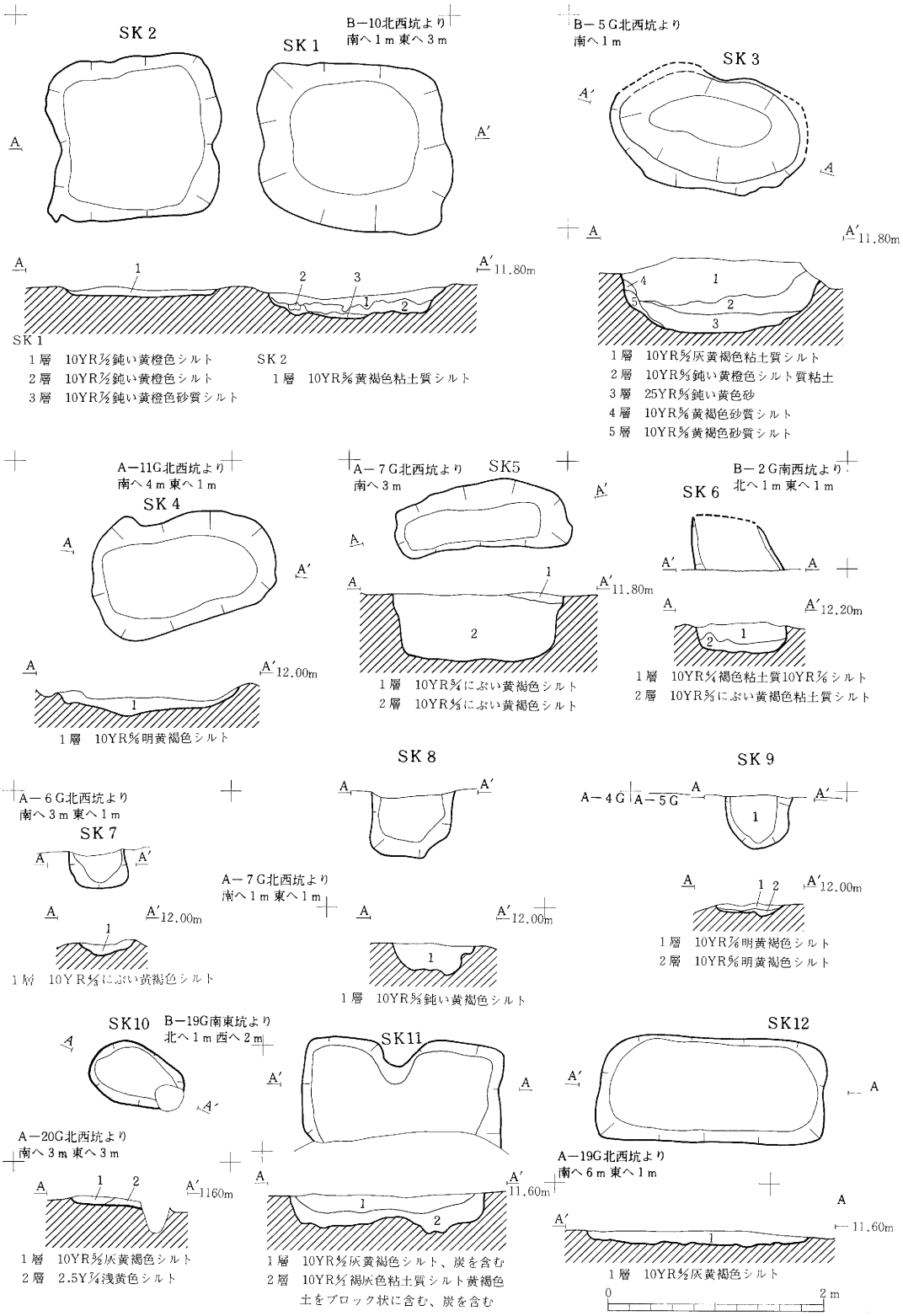
ＳＫ６：Ｂ－１～２グリットに位置する。全容は不明である。遺物は、総数10点出土している。第69図にはＤ－58を示した。製作にロクロを使用した土師器甕である。

ＳＫ７：Ａ－６グリットに位置する。ＳＩ４と重複関係があり、ＳＫ７は、ＳＩ４より古い。全容は不明である。遺物は、総数32点出土している。土師器は31点で、製作にロクロを使用したものは認められない。第69図には土師器鉢Ｃ－143と甕Ｃ－144の２点を図示した。Ｃ－143は、平底で、体部から口縁部にかけて丸みをもって外傾している。口縁部と体部の境にわずかな段がみられる。口縁直下の内面がやや膨らみをもっている。調整は口縁部外面と内面がヨコナデ、体部外面がヘラケズリである。胎土は、やや砂粒を含むが緻密で細かく明橙色を呈する。Ｃ－144は、口縁部が外反し、体部はやや膨らみをもっている。体部外面はヘラナデによって調整されている。また、小玉石が１点出土している。

ＳＫ８：Ａ－７グリットに位置する。ＳＤ３と重複関係があり、ＳＫ８は、ＳＤ３より新しい。全容は不明である。遺物は、総数28点出土している。

ＳＫ９：Ａ－５グリットに位置する。ＳＩ３と重複関係があり、ＳＫ９は、ＳＩ３より古い。全容は不明であるが、平面形は楕円形を呈すると推定される。遺物は、総数12点出土している。すべて土師器で、製作にロクロを使用したものは認められない。第69図には土師器坏Ｃ－145を図示した。丸底で、口縁部と体部の境に弱い稜があり、口縁は直立している。内面は口縁直下にわずかに屈曲をもっている。胎土は、緻密で細かく明橙色を呈する。

ＳＫ10：Ａ－20グリットに位置する。ＳＰ212と重複関係があり、ＳＫ10は、ＳＰ212より古い。平面形は楕円形を呈する。遺物は、総数37点出土している。土師器は35点で、製作にロクロを使用したものは認められない。第69図には土師器高坏Ｃ－146・147と石器Ｋ－23・24を図示した。Ｃ－146と147は中空の脚部資料で、下方へ開いている。坏部との接合は、坏部に凸部を作り、脚部に埋め込むように行われている。Ｃ－147は坏部がそのまま抜けたものである。胎土は、やや砂粒を含み赤褐色を呈する。Ｋ－23は剝片、Ｋ－24は二次加工のある剝片である。Ｋ－24は素材の末端背面に連続した二次加工が行われている。２点とも自然面打面で、先行する剝離面の加撃方向は腹面の加撃方向と同じであり、背面には自然面がみられる。石材



第67図　土坑平面図・セクション図（1）

はともに黒曜石で、挟雑物がやや含まれている。

ＳＫ 11：Ａ－19 グリットに位置する。平面形は長辺にくびれをもつ長方形を呈する。底面には凹凸がみられる。遺物は、総数 13 点出土している。

ＳＫ 12：Ａ－19 グリットに位置する。ＳＤ 13 と重複関係があり、ＳＫ 12 は、ＳＤ 13 より新しい。平面形は長方形を呈する。底面には凹凸がみられる。遺物は、総数 44 点出土している。第 69 図にはＵ－１土師質土器を図示した。底部は回転糸切りののちナデが行われている。外面には黒斑が部分的にみられる。写真 79 には 4 点を示した。Ｉ－４は丹波産のすり鉢、Ｊ－２は白磁破片である。年代は、Ｉ－４が 17 世紀前半、Ｊ－２が 17 世紀と考えられる。Ｆ－７とＧ－10 は燻し焼成された瓦で、Ｆ－７は丸瓦、Ｇ－10 は平瓦の破片である。

ＳＫ 13：Ａ－19 グリットに位置する。全容は不明であるが、平面形は楕円形を呈すると推定される。遺物は、総数 3 点出土している。

ＳＫ 14：Ａ－17 グリットに位置する。ＳＫ 15 と重複関係があり、ＳＫ 14 は、ＳＫ 15 より新しい。全容は不明であるが、平面形は円形を呈すると推定される。遺物は、総数 25 点出土している。

ＳＫ 15：Ａ－17 グリットに位置する。ＳＫ 14 と重複関係があり、ＳＫ 15 は、ＳＫ 14 より古い。全容は不明であるが、平面形は円形を呈すると推定される。遺物は、総数 14 点出土している。

ＳＫ 16：Ａ－17 グリットに位置する。ＳＩ 18、ＳＩ 19 と重複関係があり、ＳＫ 16 は、両者より新しい。平面形は長方形を呈する。壁面は直線的にやや外傾している。遺物は、総数 29 点出土している。写真 80 にはＩ－５陶器破片を示した。時期は近世と考えられる。

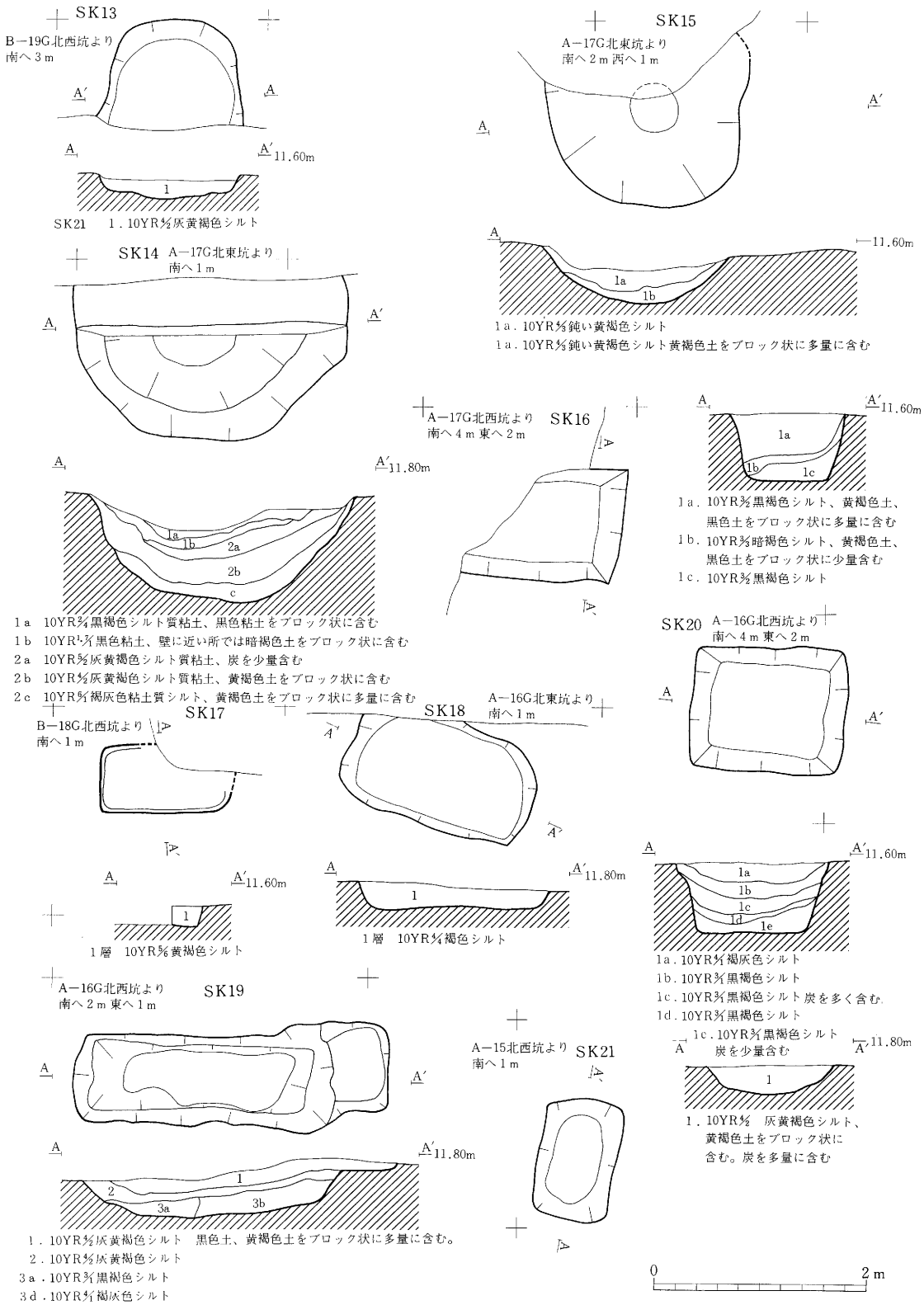
ＳＫ 17：Ｂ－18 グリットに位置する。ＳＩ 20 と重複関係があり、ＳＫ 17 は、ＳＩ 20 より古い。平面形は長方形を呈する。遺物は出土していない。

ＳＫ 18：Ａ－16 グリットに位置する。ＳＩ 25 と重複関係があり、ＳＫ 18 は、ＳＩ 25 より新しい。平面形は楕円形を呈する。遺物は、総数 44 点出土している。

ＳＫ 19：Ａ－16 グリットに位置する。ＳＩ 14、ＳＩ 25 と重複関係があり、ＳＫ 19 は、両者より新しい。平面形は長方形を呈する。東側は壁中位に段がみられる。遺物は、総数 64 点出土している。写真 80 には 2 点を示した。Ｊ－３は肥前産の磁器椀の破片で、年代は 17 世紀と考えられる。Ｇ－11 は燻し焼成された平瓦の破片である。

ＳＫ 20：Ａ－16 グリットに位置する。ＳＩ 14 と重複関係があり、ＳＫ 20 は、ＳＩ 14 より新しい。平面形は長方形を呈する。壁面は直線的にやや外傾している。遺物は、総数 52 点出土している。写真 80 にはＩ－６：美濃産の陶器皿の破片を示した。

ＳＫ 21：Ａ－15 グリットに位置する。平面形は長方形を呈する。東側は壁中位に段がみられる。



第68図　土坑平面図・セクション図（2）

遺物は、総数13点出土している。写真80には2点を示した。U－2はかわらけの底部破片で、回転糸切りののちナデが行われている。Ｉ－7は瀬戸美濃産の陶器皿の破片である。年代は17世紀前半以前と考えられる。

ＳＸ１：A・B－21グリットに位置する。ＳＤ８と重複関係があり、ＳＸ１は、ＳＤ８より新しい。全容は不明である。遺物は、総数50点出土している。

ＳＰ134：A－19グリットに位置する。ＳＩ20、ＳＩ22と重複関係があり、ＳＰ134は、両者より新しい。平面形は楕円形を呈する。遺物は、総数16点出土している。写真80にはG－11：燻し焼成された平瓦を示した。

(6) 遺構外出土遺物

基本層Ｉ層からは、総数20953点の遺物が出土している。第72図、73図、写真80・81にはそのうちのいくつかを図示した。

土師器D－59は蓋と考えられる。製作にロクロを使用している。つまみ部が細長く作られ、孔があけられている。孔は体部にもある。欠損しており、径は不明である。調整は、外面はヘラケズリ、内面はロクロ調整痕を残している。

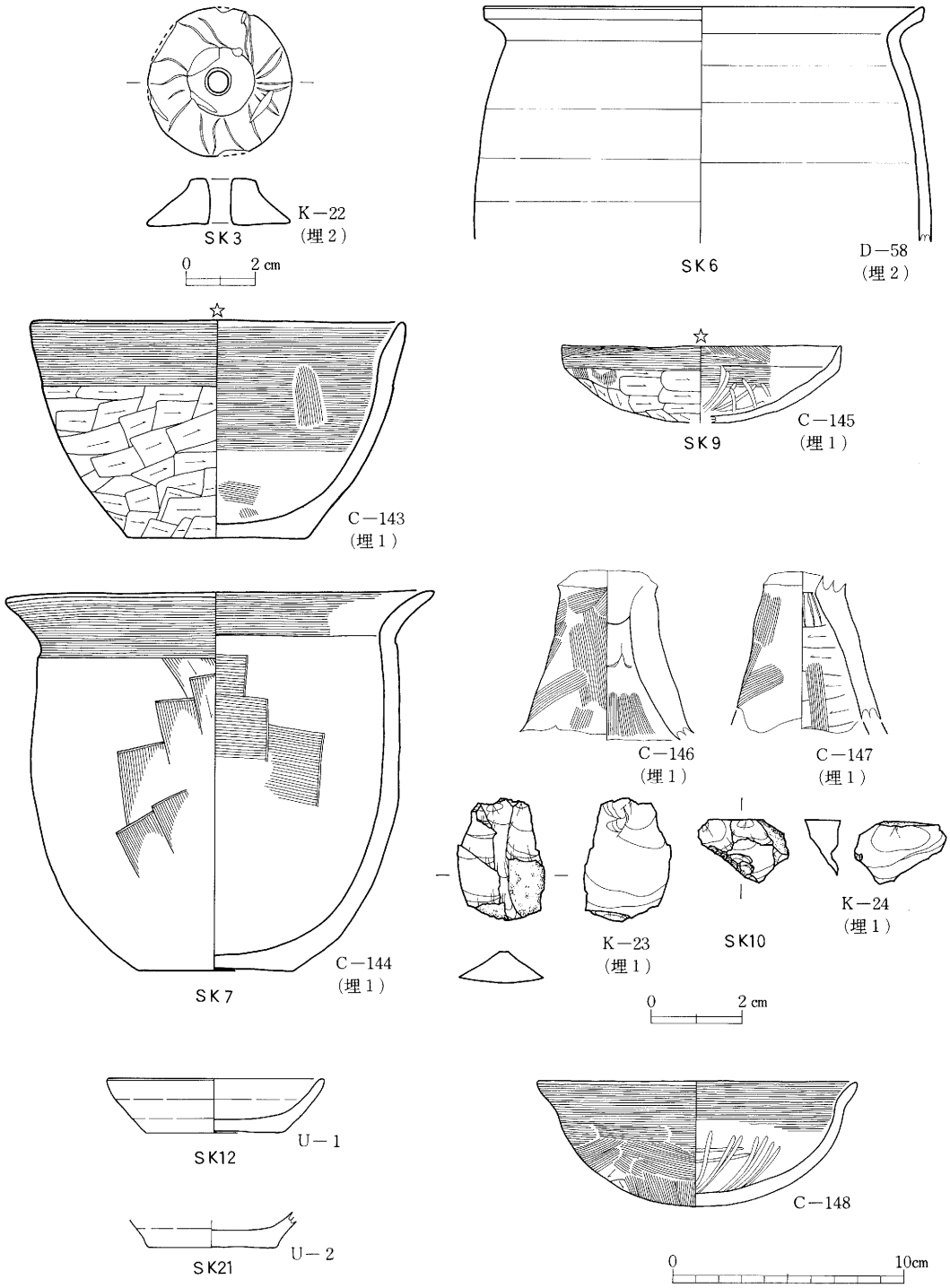
土師器C－148～150は製作にロクロを使用していない。C－148・149は坏、150は複合口縁の壺である。C－148の胎土は、砂粒を含み、赤褐色を呈している。

須恵器では、E－33・34のように返りのある蓋の破片、E－35の高台付坏の底部破片、E－36の長頸壺の頸部が出土している。

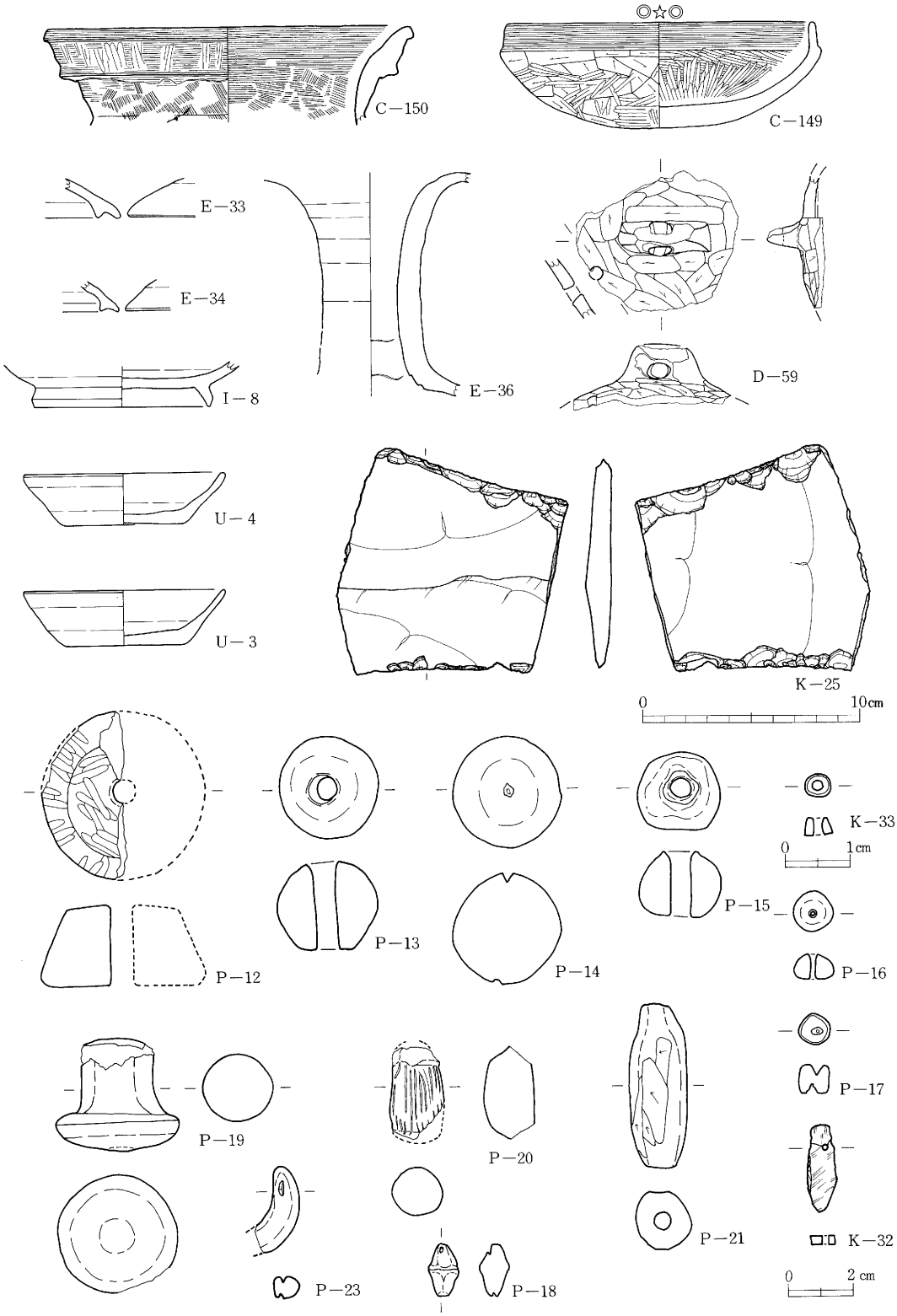
土師質土器U－3・4は、ほぼ同じ大きさと器形である。A－16グリットＳＩ14のプラン内から、口縁を合わせるようにして出土している。近接するＳＫ19、ＳＫ20に伴う可能性もある。底部はともに回転糸切りののちナデが行われている。

土製品は10点（P－12、14～21）図示した。これらはA・B－7グリット以西から出土している。A・B－7グリットから出土したP－12・14・18はＳＤ３に伴う可能性がある。P－12は土製紡錘車、P－14～17は土玉、P－19はスタンプ形の土製品、P－23は土製勾玉、P－18・20は不明である。P－14・17・18・23は孔が貫通していない。P－21は土錘である。

石製品には、K－32剣形石製模造品がある。



第69図　土坑他出土遺物実測図



第70図　基本層他出土遺物実測図

4．出土遺物の検討と遺構群の変遷

第22次調査における遺跡の年代幅は、出土した遺物から弥生時代～近世に及ぶことが知られる。弥生時代の遺構は検出されていないが、遺跡の時期的な変遷は、土器を基準として以下のように大きく4期に分けられる。

Ⅰ期：弥生土器が製作されていた時期

Ⅱ期：土師器の製作にロクロが使われていない時期（古墳時代～奈良時代）

Ⅲ期：土師器の製作にロクロが使われている時期（平安時代）

Ⅳ期：中・近世の陶器・磁器が用いられていた時期

(1)　Ⅰ期（弥生時代）

この時期の遺構は検出されていないが、弥生土器、石器が出土している。主に調査区東部のⅢ期の竪穴住居跡の埋土中から出土している。

弥生土器は、ほとんど破片であるが、中期中葉の桝形囲式土器と後期の天王山式土器が認められる。ほとんどは地文だけの体部破片であるが、内面をナデ調整しているものが比較的多く、これらは天王山式土器と理解される。Ｂ－１（写真80）は天王山式の蓋のつまみ部である。

石器では、仙台平野の弥生時代に特徴的な大型板状安山岩製石器（斎野：1992）が1点（Ｋ－25）出土している。この石器は、日本列島において地域性をもって組成される大型直縁刃石器として理解され、形式分類ではＩＢe0類（斎野：1993）に属する。南小泉遺跡では、大型直縁刃石器は第12次調査で1点出土（斎野：1988、ＩＢd0類）している。この他、写真80には剝片石器6点（Ｋ－26～31）を示したが、これらは弥生土器、大型板状安山岩製石器（Ｋ－25）とともにＳＩ20・ＳＩ22の埋土から出土しており、弥生時代に所属するものと推定される。石材には遺跡周辺で採取の容易な流紋岩などが用いられている。また、基本層Ⅰ層などからは黒曜石の剝片が出土しているが、Ⅱ期に属する可能性もある。

(2)　Ⅱ期（古墳時代～奈良時代）

この時期の遺構としては、竪穴住居跡・竪穴遺構13軒、溝跡4条、土坑2基などが検出されている。Ⅱ期は、東北南部の土師器編年（氏家：1957他）を指標とすると、Ａ～Ｃの3小期に細分される。

①　ⅡＡ期

遺構は、竪穴遺構1軒（ＳＩ13）、土坑1基（ＳＫ10）が検出されている。ＳＩ13の掘り方から出土している土師器坏Ｃ－21は、半球状の器形と砂粒を多く含み赤褐色を呈する特徴から古墳時代中期の南小泉式に属すると考えられる。ＳＩ13はⅡＢ期のＳＩ11より古いことから、この遺構の時期については、南小泉式期を上限とし、ⅡＢ期が下限とされる。ＳＫ10からは土師器高坏の脚部2点Ｃ－146・147と黒曜石の石器2点Ｋ－23・24が出土している。高坏につい

ては、器形の全容はわからないが、脚部の形態や胎土・色調からは南小泉式あるいはそれに後続する型式に属するものと考えられる。C－21と同様の胎土、色調を呈している。石器2点のうち1点には二次加工が施されている。

この他、基本層Ⅰ層からは土師器壷C－150(B－2G)、土師器杯C－148(A－3G)、C－149（A－3G)、K－32剣形石製模造品（A－2G）が出土している。C－150は複合口縁の壺であり、古墳時代前期の塩釜式に属すると考えられる。C－148は南小泉式か引田式に属すると考えられる。他時期の遺構では、SK3から石製紡錘車K－22、SⅠ16からK－8石製模造品、SD3からK－18有孔円板石製模造品が出土している。また、SD3出土の土師器坏Ⅷ類のなかに7点、高坏Ⅳ類のなかに8点、C－99、C－139のように南小泉式あるいはその前後の時期に属するものが含まれており、C－100についてもその可能性がある。他の器種でも小破片として含まれている可能性はあるが、識別は困難である。石器、石製品でも、K－11の刀形の石製品やK－17の黒曜石の石核はこの時期に伴う可能性がある。黒曜石の石器については、これまでの南小泉遺跡の調査では弥生時代にも認められ、石質も似ており肉眼での区別は難しい。今回の調査でもSD3からは2点の弥生土器の破片が出土しているが、SK10にみるように、高坏と共伴している遺構があることからすれば、SD3から他に1点出土している黒曜石の破片を含め、高坏C－99、C－139やK－18石製模造品とともにこの時期に属する可能性のほうが高いと考えられる。これらは、SK10出土遺物とともに祭祀関係遺物としての性格を示している可能性もある。

以上のように、ⅡA期は古墳時代中期の南小泉式期を中心とする時期と考えられるが、前期の塩釜式期とともにⅡB期に先行する後期を含むものとしておきたい。

② ⅡB期

遺構は、竪穴住居跡5軒（SⅠ8・9・11・23・25)、竪穴遺構2軒（SⅠ5・6)、土坑1基（SK7)、溝跡1条（SD3）が検出されている。

これらの遺構群の構成については、遺物の出土量の多いSD3の所属時期を土師器の製作方法をとおして検討し、そののち、他の遺構を含めた遺跡の構成、その背景について考えてみたい。

ⅰ） SD3出土遺物とその所属時期

前述のように、SD3の埋土は1～4層に分かれ、遺物の接合関係が各層位内でおさまる傾向がみられること、埋土3・4層が溝の機能時、埋土2層が溝の廃絶時、埋土1層が溝の廃絶時以降を示す堆積状況から、各層出土遺物はそれぞれ時間差をもっていることが考えられている。ここでは、土器組成を把握できる埋土2層出土土器を対象として、土器製作のうえでの分類と器種組成との関係、それらの編年的位置について検討したい。

・胎土・焼成の２種

２層出土遺物のなかで、地点とレベルの記録されているのは1204点で、土器は土師器1101点、須恵器５点の1106点を占める。多くは破片資料であるが、このうち、土師器のなかで、調整などが不明な破片資料285点、坏Ⅷ類46点のうち41点、ⅡＢ期に属すると考えられる坏Ⅷ類５点、高坏Ⅳ類８点を除いた762点について、土器の製作と器種との関係をみていきたい。

この762点の土師器の製作方法については、胎土・焼成の点から大きくＡ種・Ｂ種の二つに分けられる。

Ａ種：胎土は緻密で細かく砂粒をほとんど含まない。色調は明橙色～明褐色を呈する。焼成は堅緻であるが、やや軟質な感じを与える。

Ｂ種：胎土は細かいものから粗いものまであるが、砂粒を含んでいる。小礫の混じるものもある。色調は明褐色を呈するものが多い。焼成は堅緻なものから脆いものまでさまざまである。

この２種と器種及びその各分類との関係を数値で示したのが下表である。

第４表　ＳＤ３埋土２層出土Ａ種・Ｂ種と器種との関係

坏	ⅠＡ	ⅠＢ	ⅡＡ	ⅡＢ	ⅢＡ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	計
Ａ	36	17	21	36	1	5	7	3	99	225
Ｂ					1		11			12

壺	ⅠＡ	ⅡＡ	ⅡＢ	ⅢＡ	他	計
Ａ		1	1	1	2	5
Ｂ	1	1			3	5

甕	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	計
Ａ	74		1	1	76
Ｂ	408	1			409

高坏	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	他	計
Ａ	3	1	2	3	9
Ｂ					0

	甑	鉢	片口	蓋
Ａ		9	1	
Ｂ	6	4		1

この表からは、点数の少ない片口土器、蓋を除くと、Ａ種と坏、高坏、鉢、壺、Ｂ種と甕、甑の関係が強いことが知られる。そして、壺では、Ａ種は大型の壺には用いられておらず、甕においてもＡ種はＣ－115のように小型の甕に用いられている。これらのことは、Ａ種と小型の土器、Ｂ種と大型の土器の関係としても理解され、各器種の機能的な面からいえば、食膳具にＡ種、煮沸具にＢ種、貯蔵具にＡ種とＢ種が用いられている傾向を認めることができる。

また、調整のうえで特徴的な黒色仕上げ処理との関係をみてみると、食膳具としての坏（Ⅴ類を除く）、高坏Ⅱ類、鉢の３種と、貯蔵具としての小型の壺に行われているものが多く、Ａ種と密接な関係にあり、Ｂ種には認められない。つまり、Ａ種による土器の製作は、対象となる器種とともに、粘土作りから調整・焼成までの一連の工程がＢ種とは異なる方法で行われていると考えられる。

・Ａ種土器群とＢ種土器群

Ａ種による土師器の製作方法は、ⅡＡ期には認められず、地域的な土器製作技術のなかにその出自を求めることは難しい。類例は、南小泉遺跡の第11次調査や郡山遺跡において数は少な

いが坏Ⅰ～Ⅲ類が出土しており、それらは「関東系土器」あるいは「外来系土器」と呼称され、関東地方の土師器との類似性が指摘されている(結城他：1984、木村他：1991)。こうした土器については、筆者も栃木県稲荷塚遺跡などから出土した土師器に同じような土器製作技術をみており、関東を中心としたなかのいずれかの地域あるいはいくつかの地域に出自をもつとは考えている(註２)。しかし、土器組成におけるあり方は、出土数量が少ないこともあり、これまであまり明確ではなかった。今回の調査では、数量の点や、器種も坏だけではなく、組成全体と不可分の関係にあることから、基本的にこの遺跡で製作されていると考えられ、それらを含めた土器組成を知るうえでは良好な資料といえる。そこで、これらの土器に対しては、他地域に出自をもつ製作技術に系譜が求められる土器として、「Ａ種土器群」とする。

では、Ｂ種によって製作された土器群の実態はどうであるのか、Ａ種土器群の坏などとともに他地域で組成されている大型の壺、甕、甑が、器形や製作方法において認識されるのか否か、検討してみよう。それには、Ａ種土器群と器種分類において共通する小型でＢ種の土器は、少なくともこの地域の土器と考えられることから、Ａ種土器群を含まない資料によって地域的な編年的位置を求め、同じ時期の大型の土器と比較していくこととする。

Ａ種土器群と共通する小型でＢ種の土器は、坏Ⅴ類、壺ⅡＡ類、鉢、甕Ⅰ類に認められる。鉢はすべて小破片であることから、坏Ⅴ類と壺ⅡＡ類、小型の甕Ⅰ類について他の遺跡に類例を求めると、遺跡周辺では、南小泉遺跡からは南南西方６km に位置する仙台市栗遺跡があげられる。栗囲式土器の標識遺跡であり、そのⅠ期土器群（工藤：1982）を構成する10号住居跡(1974～75年調査）出土土器のなかに壺ⅡＡ類のＢ種Ｃ－102と共通する特徴を示す土器（甕Ⅰ類・小型と分類されている：P. 189-12）がみられ、Ⅱ期・Ⅲ期土器群には認められない。坏Ⅴ類については、それらは口縁部から体部にかけての破片であるが、10号住居跡に伴う坏と器形、調整に共通性は認められるが、Ⅱ期・Ⅲ期の坏と区別するのは難しい。この栗遺跡Ⅰ期土器群の編年的位置は、住社式から栗囲式への移行期の土器（工藤：1982)、あるいは住社式（東北学院大学考古学研究部・仙台市教育委員会：1979、辻：1990）と理解されている。住社式土器の標識遺跡である角田市住社遺跡は、南小泉遺跡の南方約30 km の角田盆地にあり、やや地域的に離れるが、その出土土器(志間：1958)のなかには、甕ⅠＢ類の小型のＢ種Ｃ－122と共通する器形的特徴を示す土器（鉢形土器と分類されている：第３図13）がみられる。この器形の土器は、栗遺跡において、個体数の少ないⅠ期土器群や、個体数の多いⅡ期・Ⅲ期土器群にも認められていない。これらのことは、両遺跡ともＡ種土器群を含まないことから、ＳＤ３埋土２層から出土したＢ種の土器が、住社式のなかに位置づけられる可能性が高いことを示している。なお、住社式土器については、大別２時期の細分が行われており(加藤：1990)、住社遺跡出土土器はその新しい段階に位置付けられている。また、山元町合戦原遺跡では、第Ⅲ群土器が古

い段階に相当し、5世紀末葉～6世紀前葉の年代(ＴＫ47～ＴＫ10)が与えられている(岩見：1991)。

次に、大型でＢ種の土器を、栗遺跡と住社遺跡から出土した土器と比較してみることとする。埋土2層出土の大型でＢ種の土器には、壺Ⅰ類、甕Ⅰ類、甑があるが、破片資料が多く、甑は底部破片だけなので、壺ⅠＡ類と甕Ⅰ類を対象とする。壺ⅠＡ類の類例は、住社遺跡には認められず、栗遺跡において類似する体部球形の土器はみられるが、口縁部と体部の境に段をもっていることや口縁端部の形状において異なっている。壺ⅠＡ類は、前述の壺ⅡＡ類及びそれと共通する特徴をもつ栗遺跡10号住居跡出土土器の大型品と理解され、Ⅰ期土器群に含まれると考えられる。甕Ⅰ類の器形的特徴には、器形復元がなされたものや破片資料においても、口縁部と体部の境に段のあるものは認められないことがあげられる。これは、住社遺跡と栗遺跡Ⅰ期土器群に共通する特徴であり、栗遺跡ではⅡ期以降の土器群とを区別する指標ともなっている。Ａ～Ｆに細分された甕Ⅰ類のそれぞれの器形も両者に認められている。調整は、体部外面について第3表に示してあり、ヘラナデを主体にしており、ヘラケズリを含めると、全体の90％近くを占めている。刷毛目もみられるが、その多くはヘラナデにより再調整が行われており、刷毛目調整だけの甕はほとんど含まれていないといえる。破片資料が多いことから、直接両遺跡と比較はできないが、傾向としては、刷毛目調整がほとんどの栗遺跡Ⅱ期・Ⅲ期土器群とは異なり、住社遺跡と栗遺跡Ⅰ期土器群と類似している。そのうち、ヘラケズリによる調整がみられる栗遺跡Ⅰ期土器群を構成する10号・14号住居跡については、10号住居跡の甕2点はヘラケズリのちヘラミガキで、14号住居跡の甕4点は、2点がヘラナデ、他の2点が刷毛目調整である。14号住居跡で刷毛目調整甕が基本的な組成に含まれていることは、10号住居跡との間にやや時間差のあることを示していると考えられており（東北学院大学考古学研究部・仙台市教育委員会：1979)、甕Ⅰ類では、ヘラケズリの比率が20％を越えていること、刷毛目調整はわずかにしかみられないこと、壺ⅠＡ・ⅡＡ類と共通する土器が10号住居跡出土であることから、ＳＤ3埋土2層から出土したＢ種の土器は、栗遺跡Ⅰ期土器群でも古い10号住居跡に近い時期と考えることができる。なお、Ａ種土器群の出自を関東方面に求めた場合、甕の体部外面がヘラケズリによって調整される特徴は、関東地方のこの時期に一般的に認められ、Ｂ種の甕のヘラケズリ調整をその影響と考えることも可能ではあるが、破片資料が多いこともあり、甕Ⅰａ～ｆ類との特定の対応関係や他の甕と識別できるような胎土、焼成の特徴は、認められてはいない。

以上のことは、大型・小型のＢ種の土器が、Ａ種土器群を含まない仙台平野と角田盆地の遺跡と共通する特徴をもっていることを示しており、地域の伝統的な製作技術に系譜が求められる土器と理解され、これを「Ｂ種土器群」とする。

・Ｂ種土器群の編年的位置と年代

このＢ種土器群の編年的位置については、甕を基準とした場合、「頸部に明確な段を形成するものが普遍的になる」（氏家：1957）ことが栗囲式の特徴とされており、ＳＤ３埋土２層から出土したＢ種の土器には、栗遺跡10号住居跡出土土器との共通性もあり、それに先行する時期が与えられる。また、住社遺跡出土土器とは、甕に共通するところも多いが、坏の内面調整に住社遺跡ではヘラミガキののちに黒色処理がなされていない点で異なり、それに後続する時期が推定され、住社式とすれば最も新しい段階と理解しておきたい。

また、具体的な年代を考える資料としては、須恵器短頸壺Ｅ－29がある。この須恵器は口縁部から肩部までの破片であり、短頸壺としては類例に乏しいが、胎土・焼成などの特徴から静岡県湖西産と考えられ、器形としては脚付短頸壺の破片の可能性が高く、湖西編年（後藤：1989）ではII－３ａ期（ＴＫ43併行期）の新相からII－３ｂ期（ＴＫ209併行期）の古相にあたる（註３）。脚付短頸壺は、静岡県では数は少ないながら主に古墳からの出土例が知られており、そのなかに類例を求めると、浜松市蛭子森古墳出土の２点の完形品がある（向坂他：1964、挿図７－７、８）。実見したところ、Ｅ－29に比べてやや小さいが、器形や調整は酷似していることが確かめられた（註４）。この古墳では、２回の追葬が行われたことが指摘されており、共伴する須恵器については明確でないが、２点の脚付短頸壺の脚部は２段二方透かしであり、他に長脚２段二方透かしの高坏脚部破片も１点（向坂他：1964、挿図７－９）出土している。この３点は２段二方透かしの共通性などから同じ時期と推定され、田辺編年（田辺：1966・1981）ではII期後半（ＴＫ43～ＴＫ209）の時期にあたり、両者の編年的位置はほぼ一致する。実年代については、ＴＫ43の新相を奈良県牧野古墳（広陵町教育委員会：1987）に求めると６世紀末葉に比定され、Ｅ－29は６世紀末葉～７世紀初頭に位置付けられる。

このＥ－29の年代とＢ種土器群の関係については、Ｂ種土器群とほぼ同時期の栗遺跡Ｉ期土器群の年代からみておきたい。栗遺跡では、須恵器との共伴から時期のわかる遺構はないが、Ｉ期の上限は出土した須恵器から６世紀前半～７世紀前半の間に求められている（工藤：1982）。また、栗遺跡II期・III期土器群の時期に相当する清水遺跡第IV群・Ｖ群土器の時期は、栗囲式の古い段階とされる第IV群土器の年代が７世紀前半と考えられており（丹羽他：1981）、中村編年（中村：1981）でII型式５段階（ＴＫ209併行）に比定される須恵器を伴っている。これは、栗遺跡Ｉ期土器群の上限が６世紀前半、下限が７世紀初頭以前であると理解され、Ｂ種土器群の年代は、Ｅ－29との関係から６世紀末葉（ＴＫ43新相）頃と考えられる。

・土器組成とその製作

ＳＤ３埋土２層から出土した土師器は、Ａ種土器群とＢ種土器群によって構成されていることが明らかになったが、土器組成との関係を示したのが第５表である。

第5表　ＳＤ３埋土２層出土土師器の組成

	坏	壺	甕	高坏	甑	鉢	片口	蓋	計
A種	225	5	76	9	0	9	1	0	325（42.6％）
B種	12	5	409	0	6	4	0	1	437（57.4％）
計 (％)	237 (31.1)	10 (1.3)	485 (63.7)	9 (1.2)	6 (0.8)	13 (1.7)	1 (0.1)	1 (0.1)	762

組成としては、坏（31.1％）と甕（63.7％）でほとんどを占めており、A種土器群とB種土器群の比率は、坏が主体のA種土器群が42.6％、甕が主体のB種土器群が57.4％である。また、坏の各分類においてその多くを占めるⅠ・Ⅱ類の数量と比率を示したのが第6表である。

第6表　坏Ⅰ類・Ⅱ類の数量と比率

ⅠA類	ⅠB類	ⅡA類	ⅡB類	計
36 (32.7％)	17 (15.5％)	21 (19.1％)	36 (32.7％)	110
53 (48.2％)		57 (51.8％)		

Ⅰ類とⅡ類の比率がほぼ1：1であることが知られ、Ⅰ類に比べてⅡ類の口径の方がやや大きい傾向が認められる（第71図）ことから、両者はセットをなし、Ⅰ類は坏身、Ⅱ類は坏蓋として製作されている可能性が考えられる。これは、ⅠA類とⅡB類が同率で、ⅠB類とⅡA類の比率が近似していることとも関連していよう。こうしたA種土器群と坏Ⅰ類・Ⅱ類の強い相関性が他の器種においてB種土器群とどのような関係にあるのか、次に、土器製作のうえで各器種と両群の関係を器形と調整から考えてみる。

坏では、B種土器群の器形を示すものとして坏Ⅴ類があり、ⅤA類C－86・87・90のように内面の調整にヘラミガキのち黒色処理が行われているものと、ⅤA類C－89、ⅤB類C－91のように赤彩されているものがある。A種土器群のⅠB類C－58においても、内面の調整にヘラミガキのち黒色処理が行われており、坏Ⅶ類のなかにも認められる。坏Ⅵ類についても、ⅥA類C－83、ⅥC類C－80はB種土器群の器形と理解される。また、B種土器群に、A種土器群の器形を示すものとして坏ⅢA類C－81がある。

壺では、A種土器群の壺ⅡA類C－101が、B種土器群の壺ⅡA類C－102とほぼ同じ器形を示している。

甕では、A種土器群の甕ⅠD類C－115は、大きさは異なるが、B種土器群の甕ⅠD類のC－106と器形、調整の共通性がみられる。

この他、甕Ⅲ類C－120、片口土器C－123については、この時期の類例はみられないが、栗

囲式の栗遺跡II期・III期土器群には認められる。しかし、甕III類の類例は器形的にやや細長く、頸部に屈曲あるいは段をもつことなどにおいて異なっており、片口土器の類例も頸部に段があり体部外面も刷毛目調整と異なっている。これは、甕ＩＡ類におけるＩ期土器群とII期・III期土器群の違いと共通しており、Ｃ－120 とＣ－123 は甕ＩＡ類と同様、Ｂ種土器群に含まれている可能性が考えられる。また、高坏II～IV類については器形の全容が不明なため比較することは難しいが、住社遺跡出土の高坏（加藤：1989）と比較すると、やや脚部が長く、坏部と脚部の接続部分の幅も小さい傾向があり、器形的にやや異なる可能性もある。

これらのことは、高坏に不明な点はあるが、坏、壺、甕には、Ａ種土器群にみられるＢ種土器群の器形や調整技術、あるいはＢ種土器群にみられるＡ種土器群の器形の存在が認められ、両土器群の密接な関連性を示しているといえる。土器組成全体からみても、各土器群ごとでは器種組成が成立しないことは明らかであり、両土器群の製作は一体のものとして行われていたと考えられる。その点では、土器組成に高い比率を占める煮沸具と大型の貯蔵具がＢ種土器群に含まれ、食膳具・小型の貯蔵具のなかで主体となる壺の製作にＡ種・Ｂ種の製作技術的な交錯性が認められることは、Ｂ種の土器製作者がＡ種の製作にも関わっていることを示していると考えられる。

・埋土１、３、４層出土遺物

ＳＤ３埋土１、３、４層からは、埋土２層と比べると少ないが、地点とレベルが記録されている遺物が１層：227 点、３層：141 点、４層：147 点出土している。これらの遺物のなかで、土師器の製作方法については、Ａ種土器群とＢ種土器群がみられ、器種との関係では、Ａ種土器群の主体である坏Ｉ類、II類、Ｂ種土器群の主体である甕Ｉ類が各層で組成されており、埋土２層出土土師器の共通性が認められる。ここでは、他の遺物も含めて埋土２層出土遺物との比較を行っておきたい。

３・４層からは溝の機能時を示す遺物が出土している。その数量は少ないが、埋土２層と共通する土師器坏Ｉ・II・Ｖ類がみられる。４層出土の坏ＶＡ類Ｃ－134、ＶＣ類Ｃ－135 の２点の内面調整にはヘラミガキののち黒色処理が行われていることや、甕の体部外面調整も２層とほぼ同じ傾向を示していることから、２層出土の土師器とそれほど時期差はないと考えられる。２層にみられない器形としては、４層出土の高坏Ｉ類Ｃ－136 がある。須恵器模倣の高坏と考えられる。また、３層出土の壺ＩＢ類Ｃ－129 は、栗遺跡 10 号住居跡出土土器に類例（工藤：1982・甕Ｉ類・小型と分類されている：P. 189-11）が求められる。大きさは異なるが、器形とともに調整も共通しており、２層とほぼ同じ時期であることを示している。この他、３層出土の筒形土器Ｃ－131、132 は、この地域では認められておらず、福島県でも数例出土している（柳沼：1987）が、関東地方に多くみられるもので、他の地域に出自が求められる。カマドから出土す

る傾向がみられ、手捏土器とともに2個出土している例や支柱としての報告（栃木県文化振興事業団：1987）もあり、土製品としての用途が考えられている。C－132の外面には受熱によると考えられる器面の剝落が認められ、こうした使用方法と関係している可能性がある。C－131と132は胎土、焼成、製作方法がほとんど同じで、外面の調整もヘラミガキされており、同一個体の可能性もあるが、器厚からみると別個体と考えられ、2個あったものと推定される。

1層からは溝の廃絶時以降を示す遺物が出土している。土器は2層と共通する器種も多く、坏ではⅠ類、Ⅱ類、Ⅴ類が出土しており、甕の体部外面調整もほぼ同じ傾向を示している。2層にみられない器形として、A種土器群には坏ⅢB類C－47、坏ⅥB類C－46、鉢Ⅰ類、壺ⅢB類、B種土器群には坏ⅥE類C－48、甕Ⅱ類などがある。このうち、A種土器群のC－46は、B種土器群の器形を示していると理解される。この他、蓋としたC－141は端部に刻目が認められ、内外面に赤彩されている点で他の蓋と異なっている。また、甕には、頸部に段をもち体部外面が刷毛目調整されているⅠDc類C－54が1点だけみられる。全体の器形は、2層出土のC－106とほぼ同じであり、平底の底部はヘラケズリによってやや上げ底風になっている。この土器は、栗囲式に特徴的な器形と調整を示しており、1点だけの出土ではあるが、溝の埋まる下限を示していると理解される。前述のように、1層下部には自然堆積層があり、出土遺物にもやや時間幅のあることを考えると、この層の堆積時期については、2層堆積以降、栗囲式の初期を下限としておきたい。

・SD3の所属時期

埋土1～4層出土遺物の検討からは、溝の廃絶につながる埋土2層の堆積時期は、古墳時代後期の住社式期のなかでも最も新しい段階に位置付けられる。溝の開削時期については、底面出土遺物がないため明確ではないが、その機能時期を示す埋土3・4層の堆積時期は、埋土2層との間にそれほどの時間差は認められていない。SD3の機能していた年代については、埋土2層出土土器の年代（6世紀末葉頃）から、それとほぼ同じか、あるいはやや逆る頃を考えておきたい。また溝の廃絶以降の埋土1層の堆積にはやや時間幅があり、下限は栗囲式期の初期と理解された。

ⅱ） 各遺構の所属時期と変遷

ⅡB期の各遺構からは、SD3埋土2層と類似する土器が出土しており、A種土器群・B種土器群も認められる。ここでは、それらをとおして所属時期を検討し、遺構群の構成と変遷を考えてみたい。

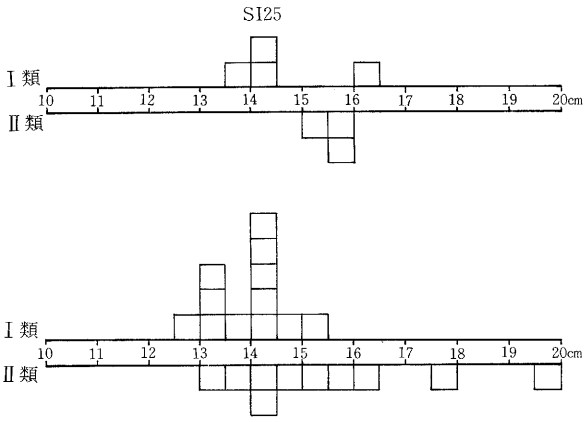
・SⅠ25出土遺物の検討

この住居跡からは、床面一括資料として土師器13点（C－27～39）が出土している。SD3埋土2層の器種分類とA種・B種との関係は第7表のとおりである。

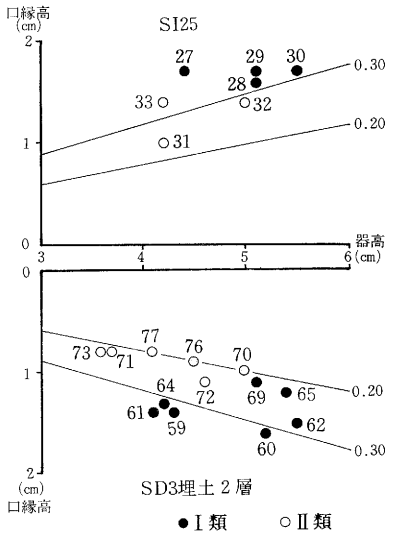
第７表　ＳＩ 25 出土土師器の器種と数量

	坏ＩＡ	坏ＩＢ	坏IIＡ	坏IIＢ	壺IIＡ	甕ＩＢ	甕ＩＤ	甑	鉢
点数	2	2	2	1	1	1	1	2	1
Ａ種	1	1	2	1	1				
Ｂ種	1	1				1	1	2	1

坏、壺のほとんどがＡ種土器群で、甕、甑、鉢がＢ種土器群であり、坏ＩＡ類Ｃ－28・ＩＢ類Ｃ－29 と壺IIＡ類Ｃ－34 に製作方法の交錯がみられる。Ａ種土器群の坏５点のうち３点には黒色仕上げ処理が行われている。甕、甑には大小２種類があり、甕Ｃ－37 と甑Ｃ－38 はセットをなすものと考えられる。体部外面の調整はヘラナデを主体にしている。これらのことは、ＳＩ 25 出土土器が、器種組成、製作方法においてＳＤ３埋土２層出土土器との共通性が高いことを示しているが、Ｂ種土器群において甑はＳＤ３では器形のわかるものは出土しておらず、鉢にもＣ－39 のように比較的胎土に砂粒の混入が少なく、口縁端部が外へ開く器形はみられないことや、坏Ｖ類がＳＩ 25 から出土していないため、時期的な同時性は明確ではない。他の遺跡などとの関係では、甕Ｃ－37 と甑Ｃ－36 の類例が住社遺跡出土土器（志間：1957、第３図２、17）や、当遺跡で住社式期とされている第 11 次調査 23 号住居跡（結城他：1984）に認められる。ＳＤ３埋土２層出土土器とほぼ同時期と考えられる栗遺跡 10 号住居跡とは、壺IIＡ類は共通するが、甑（工藤：1982：p. 189-10）の形態は異なっており、ＳＩ 25 と住社遺跡との類似性が高い可能性はあるが、両者の時期的な関係は明確にはならない。そこで、Ａ種土器群の主体である坏Ｉ類・II類の器形と調整を図示した土器で比較してみることにする。



第71図　坏Ｉ類・II類の口径分布（推定値を含む）



第72図　坏Ｉ類・II類の口縁高と器高の関係
（数字は遺物番号を示す。器高は一部推定値を含む。）

器形では、口径の分布を第71図に、器高と口縁部の高さ（口縁高）の関係を第72図に示した。口径では、両者ともⅠ類のほうがⅡ類よりやや小さい傾向がみられる。分布はＳＩ25に比べてＳＤ3のほうがまとまりがなく、ＳＤ3のⅡ類は13〜20cmと分布幅が広く、集中する傾向は認められない。また、ＳＩ25のⅠ類・Ⅱ類の口径よりも小さいものがＳＤ3には比較的多くみられる違いがある。器高と口縁高の関係においては、口縁高はＳＩ25ではⅠ類：1.6〜1.7cm、Ⅱ類：1.0〜1.4cmで、1.5cmを境にⅠ類とⅡ類が分かれるのに対し、ＳＤ3ではⅠ類：1.1〜1.7cm、Ⅱ類：0.8〜1.1cmで、1.1cmを境に分かれる違いがあり、それは器高に対する口縁高の比率にも反映されている。つまり、Ⅰ類ではＳＩ25：0.30以上、ＳＤ3：0.22〜0.34、Ⅱ類ではＳＩ25：0.24〜0.33、ＳＤ3：0.20〜0.23という数値を示す。器高もＳＤ3に低いものが多い。

調整では、Ⅰ類・Ⅱ類とも口縁部内外面はヨコナデであるので、体部内外面について第8表のように分類し、それを第9表に示した。

第8表　坏Ⅰ類・Ⅱ類の体部調整の分類

内面	a：ヨコナデ b：ヨコナデのち放射状（単線）ヘラミガキ c：ヨコナデのち放射状（複線）ヘラミガキ d：ヨコナデのち非放射状ヘラミガキ e：ヘラミガキ f：ヨコナデのち黒色処理 g：ヘラミガキのち黒色処理 h：不明	外面	1：ヘラケズリ 2：ヘラケズリのちヘラミガキ

※a〜eは、内外面あるいは片面に黒色仕上げ処理の行われるものが多い

第9表　ＳＩ25・ＳＤ3の坏Ⅰ類・Ⅱ類の体部調整

			ＳＩ25								ＳＤ3							
内面			a	b	c	d	e	f	g	h	a	b	c	d	e	f	g	h
外面	1	Ⅰ類	3					1			1						1	2
		Ⅱ類				1					4				1			
	2	Ⅰ類									2	2	2		2			
		Ⅱ類	2								3		1	2				

第9表からは、ＳＩ25に比べてＳＤ3のほうがヘラミガキが多く用いられており、調整の多様性があることが知られる。ＳＩ25の資料数が少ないこともあるが、ＳＤ3では内面調整において特徴的な放射状のヘラミガキが施されるb・cは5点みられるのに対し、ＳＩ25にはなく、そののち黒色処理の施されるgもＳＤ3に認められる。

こうした違いについては、ＳＩ25とＳＤ3の遺構の性格にもとづく可能性はあるが、前述の

ように土器組成や製作方法に共通性が認められ、坏Ⅰ類・Ⅱ類の比率もほぼ１：１であることからすれば、時期差として理解することが妥当であると考えられる。つまり、ＳＩ25の時期からＳＤ３の時期にかけて、器形的な変化として、口径の小さいものが増えること、器高・口縁高の低下とともに口縁高／器高が小さくなること、調整の変化として、多様化が進むことなどがその特徴としてあげられる。しかし、この変化については、ＳＩ25のＩ類のように、比較的口縁高の高い器形がＳＤ３にもみられることから、それが漸移的であることをも示している。また、土器製作のうえで、口径の安定性がなくなることは、製作技術とともに、製作者のＡ種土器群への関与の変化とも理解され、調整におけるヘラミガキの多用やそののち黒色処理が行われるようになることなどと関連していると考えられる。

これらのことは、それほどの時期差はないにしろ、ＳＩ25のほうがＳＤ３より古いことを示しており、ⅡＢ期に２時期の変遷を考えることができる。ＳＩ25出土土器の編年的位置については、Ｂ種土器群に比較資料は少ないが、住社遺跡出土土器に類例の求められる土器があることから、そこを上限とし、土器組成や製作方法に共通性が認められるＳＤ３埋土２層出土土器に先行する時期と理解しておきたい。また、ⅡＢ期の細別については、ＳＩ25出土土器によって「ⅡＢ期古」、ＳＤ３埋土２層出土土器によって「ⅡＢ期新」とする。

・遺構群の変遷

ⅡＢ期古・新の設定にもとづいて、各遺構の所属時期について検討していき、遺構群の変遷を考えてみたい。

ＳＤ３・ＳＩ25を除くⅡＢ期の遺構としては、ＳＩ５、ＳＩ６、ＳＩ８、ＳＩ９、ＳＩ11、ＳＩ23、ＳＫ７がある。ＳＩ５では、Ａ種土器群の土師器坏Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅵ類４点が出土している。すべて破片ではあるが、床面から出土しているＩＡ類Ｃ－１は、器形的にＳＤ３出土のＣ－62に類似していること、埋土Ⅰ層出土のＣ－３はＳＤ３から１点出土しているＣ－80に類似し、ⅥＣ類に分類されること、ⅡＡ類Ｃ－２の口縁高が0.9cmであることから、時期はⅡＢ期新の可能性が高い。ＳＩ６からはＡ種土器群の土師器坏ＩＡ類Ｃ－５、ＩＢ類Ｃ－６が埋土１層から出土している。ともに破片ではあり、口縁高はいずれも1.6cmと比較的高いが、新古のどちらに属するかはわからない。ＳＩ８では、床面からＡ種土器群土師器坏Ａ１類Ｃ－９とＢ種土器群土師器Ｃ－７・８が出土している。Ｃ－９は口縁端部を欠損しており、口縁高は不明である。土師器壺Ｃ－７の器形は、ＳＤ３の分類にも含まれておらず、この調査では出土していない。そのため、細別時期は不明であるが、他の遺跡にＣ－７の類例を求めると、住社遺跡出土土器（斎藤：1991）のなかに１点（１号住居跡16）認められる。Ｃ－７のほうがやや大きいが、内面の体部上端にみられる稜線も共通している。ＳＩ９からはＡ種土器群の土師器坏ⅡＡ類Ｃ－10、11が貼床から出土している。ともに破片ではあるが、口縁高はＣ－10が0.8cm、

C－12が0.9cmで、SD3のⅡA類に共通しており、ⅡB期新に属する可能性がある。SI 11からは、A種土器群土師器坏C－12～15とB種土器群土師器C－16•17が出土している。C－12～15については、すべて破片であり、埋土1層出土ではあるが、層厚が薄いことからこの住居に伴う可能性が指摘されている。そのうち、C－14は口縁高の器高に対する比率が0.22とSD3のⅡB類と共通している。C－15は、SD3の分類にも含まれておらず、内外面ともヘラミガキが施されている。内面ヘラミガキ調整である点ではSD3のⅦD類C－84に共通しようか。甑C－16は、器形としてはSI 25 C－36と類似するが、わずかに体部に膨らみがあり、調整では体部外面が刷毛目調整されていることで異なっている。これらのことから、SI 11はⅡB期新に属すると考えられる。SI 23は、出土遺物が少なく、土師器の破片資料だけであり、細別時期は明確でない。胎土、焼成、調整などの観察から、貼床からA種土器群の坏Ⅶ類1点(内外面黒色仕上げ処理)、B種土器群の内面ヘラミガキのち黒色処理が行われている坏1点などが出土している。SK7からは、A種土器群土師器鉢C－143、B種土器群土師器甕C－144が出土している。C－143の胎土にはやや砂粒が含まれている。器形は、SD3の分類には認められない。坏の出土がないこともあり、新古どちらに属するかは不明である。

以上のように、ⅡB期には新古のわからない遺構もあるが、細別時期と各遺構との関係を示したのが第10表である。

第10表　ⅡB期古・新の遺構

ⅡB期古	SI 25	SI 6、SI 8、SI 23、SK7
ⅡB期新	SD3 SI 5、SI 9、SI 11	

遺構の配置は、SI 25がA－16グリットに位置しているが、他の遺構はSD3のあるA・B－7グリット以西に位置している。特に、ⅡB期新の時期には、幅が約7mのSD3をはさんで、東側には遺構がみられず、西側にだけ竪穴住居跡及び竪穴遺構が展開し、それらの方向性が、SD3とほぼ同じ傾向を示しており、大溝で区画された居住形態を示している。土製品との関係ではⅡB期の竪穴住居跡やSD3からも出土している土玉や土製紡錘車などの土製品のいくつかはA種土器群と同様の方法で製作されている。基本層Ⅰ層から出土している土製品にもその特徴がみられ、主な分布がA・B－7グリット以西であることとも関連していよう。また、新古の不明なSI 6、SI 8、SI 23、SK7も同じような配置をとっており、SI 8を除く各遺構の方向性もSD3とほぼ同じ傾向を示すことは、これらの遺構もSD3との関連性のうえに理解されるが、細別時期については、遺構間の新旧関係や密接した配置がみられ、それらすべてをⅡB期新とするには難しい面もある。土器の製作方法や器種との関係が共通していることは、坏Ⅰ類に新古両者にみられる形態のあることからも、ⅡB期古から新への連続

した変化ととらえられ、新古の不明な遺構のなかにはⅡB期古に属する遺構のあることも考えられ、それは、時期の明確でないＳＤ３の開削時期とも関係していよう。

いずれにしても、ⅡB期新の時期にはＳＤ３で区画された居住形態を示しているこれらの遺構群は、土器のあり方からみても、この地域の一般的な集落とは異なることが推定される。関東方面に出自をもつＡ種土器群の安定した組成や、ＳＤ３埋土３層から出土した筒形土器は、人の移住とともに生活様式も移入されていると理解されるが、Ｂ種土器群も安定して組成されており、土器製作のうえで、Ａ種とＢ種の交錯性もみられることは、この集落の構成員が他地域の人だけではないことを示している。大溝ＳＤ３の性格については、出土遺物からはわからないが、その幅からすると単なる区画溝とは考えにくく、防御的な機能をもつ可能性もあり、地域集団との関係に不安定な要素のあることとも受け取れる。

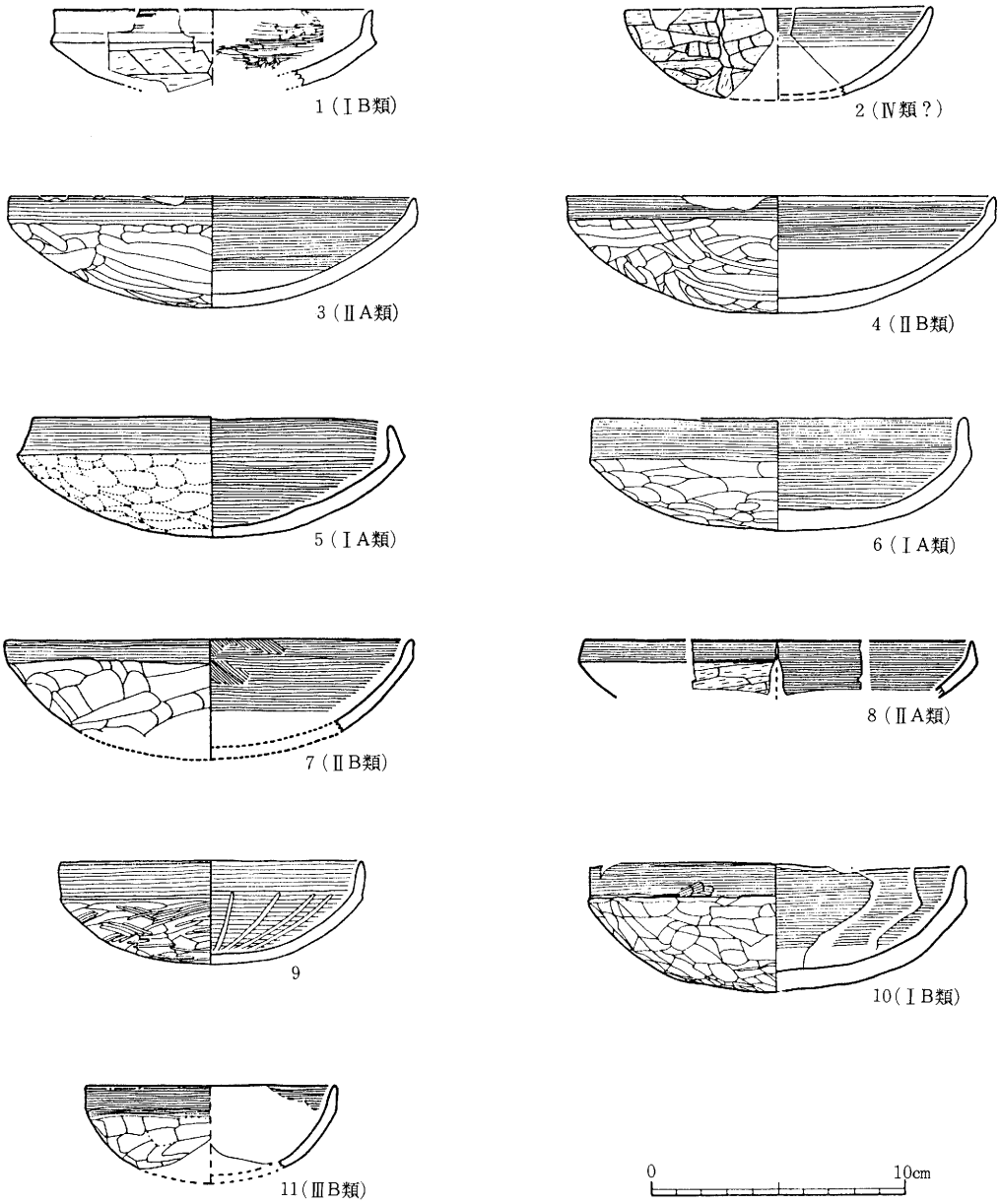
では、こうした居住形態の背景にはどのような要因があるのか、南小泉遺跡周辺においてＡ種土器群の出土する遺跡をとおして考えておきたい。

iii）　遺跡周辺出土のＡ種土器群

南小泉遺跡周辺の名取川下流域では、本稿ⅡB期のＡ種土器群と類似する土師器は、南小泉遺跡第11次調査地点や、第１図の遺跡分布図では藤田新田遺跡、郡山遺跡などで認められてきている。それらの器種はほとんどが坏であり、主なものを第73図に11点示した。ＳＤ３の分類では、坏Ⅰ～Ⅲ類がみられ、他の器形もあるがその数は少なく、坏Ⅰ・Ⅱ類が多い傾向がある。ここでは、ＳＤ３や他の遺跡との比較を行いながら、それらの編年的位置を検討してみる。

南小泉遺跡第11次調査地点（結城他：1984）と藤田新田遺跡（後藤他：1992）から出土した４点については、Ｂ種土器群が不明であるが、ⅡB期古新の土器と比較してみると、１（ＩＢ類）は口径が推定で12.9 cmと小さく、口縁高も1.3 cmと低く、ⅡB期新に属する可能性がある。２はⅣ類と類似する外面ヘラケズリ調整の坏である。ともに偏平な球形を呈するが、Ⅳ類では、口縁端部もヘラケズリによる面取りが行われている点で異なっている。しかし、全体の器形や調整は共通するところがある。３（ⅡA類）と４（ⅡB類）は、ⅡB期新の坏Ⅱ類の特徴と一致する。口縁高も低く、器高に対する比率も３が0.23、４が0.20であり、対比資料としては、Ｃ－77（ⅡA類）、Ｃ－78（ⅡB類）があげられる。この２点と同じ層位からは、平底であるが、口縁部から体部上半にかけては坏ⅢA類と類似する坏が出土している。

郡山遺跡では、Ａ種土器群の出土は比較的多く、ＳＩ 260の５～７（木村他：1983）、ＳＩ 1206の８（結城：1989）、ＳＩ 1299の９（斎野：1991）は、Ｂ種土器群とともに出土している。ＳＩ 260で共伴する甑（Ｂ種土器群）の器形は、ＳＩ 25のＣ－38の大型品とも理解され、また、他の遺跡との比較では栗遺跡10号住居跡出土の甑（工藤：1982、p. 189-10）とは、体下部の径がやや大きいが、器形や調整にも類似性がみられ、ⅡB期に位置付けられる可能性がある。坏



1・2：南小泉遺跡第11次調査ＳＤ46
5～7：郡山遺跡第35次調査ＳⅠ260床面
9　：郡山遺跡第87次調査ＳⅠ1299床面
11　：郡山遺跡第68次調査
3・4：藤田新田遺跡ＳＤ302、６層
8　：郡山遺跡第79次調査ＳⅠ1206、２層
10　：郡山遺跡第35次調査
※各報告書より転載

第73図　遺跡周辺出土のＡ種土器群坏（カッコ内は本稿分類）

の比較では、5（ＩＡ類）と6（ＩＢ類）は口縁高が1.5〜1.7 cmと高く、器高に対する比率は5が0.31、6が0.35である。IIＢ期新でも、坏Ｉ類に口縁高の器高に対する比率が0.30を越えるものはあるが、それらは口径が小さく、口縁高も1.3〜1.4 cmと低いことから、この2点はIIＢ期古に属すると考えられる。7（IIＢ類）とともに、口径や器高、内面の調整にも共通性がみられ、ＳＩ 260の時期を示している。ＳＩ 1206は、共伴する甕と甑（Ｂ種土器群）が、栗遺跡Ｉ期土器群の時期に比定されており、8（IIＡ類）は破片資料ながら口縁高が0.9 cmと低いことから、IIＢ期新に属する可能性が高い。ＳＩ 1299出土の9は、ＩＡ類に類似するが、口縁部に最大径がある点で異なっており、共伴する坏（Ｂ種土器群）とともに名取市清水遺跡の第III群土器（丹羽他：1981）を介して住社式のなかに位置付けられ、口径の小さいことから時期的にはやや降る可能性などが指摘されていた土器である。南小泉遺跡IIＢ期には認められていない器形であり、Ｂ種土器群の器形として理解することもできる。しかし、Ａ種土器群との胎土、調整が共通することや、口径が12.2 cmと小さいことからすると、IIＢ期新に属する可能性もある。10･11は遺構からの出土遺物ではない。10（ＩＢ類）は第24次調査（木村他：1983）の北東部から出土しており、口縁高が1.3〜1.4 cmで、器高に対する比率が0.25と小さく、IIＢ期新に属する可能性がある。11（IIIＢ類）は第68次調査（木村：1988）で出土している。

このように、名取川下流域において分布するＡ種土器群の坏の多くには、南小泉遺跡IIＢ期に併行する時期を考えることができる。そのなかで、郡山遺跡ではＡ種土器群とＢ種土器群による土器組成がみられ、南小泉遺跡のIIＢ期古新に対応して、ＳＩ 260、ＳＩ 1206に伴う集落が存在している可能性がある。特に、図示した坏5〜11は、すべて遺跡の北部地区（第24、35、61、68、79、87、88、98次調査地区）から出土している。この地区は、7世紀後葉とされるＩ期官衙の中枢域にあたり、それに先行する郡山遺跡第2段階の竪穴住居跡などの遺構も多いところである。各遺構の出土遺物が少ないことから、時期のわかる遺構は限られるが、IIＢ期や栗囲式期の古い段階の遺構の存在、須恵器ではII型式後半からIII型式にかけての出土例（田辺：1966・1981、ＴＫ 43〜ＴＫ 217）も認められ、Ｉ期官衙の成立に繋がる集落の継続性が推定される。郡山遺跡では、こうした遺構群の変遷は遺跡の南端部など他の地区でも推測されるが、ここでは、南小泉遺跡IIＢ期遺構群の性格について、この北部地区との関係から地理的環境を含めて検討しておきたい。

iv） 南小泉遺跡と郡山遺跡

第1図にみるように、二つの遺跡は名取川の支流である広瀬川の南北両岸に位置している。立地からすると、北岸の南小泉遺跡でＡ種土器群が多く出土するところは第22次調査区とその周辺であり、微高地の南辺付近にあたる。南岸の郡山遺跡北部地区も、段丘崖の縁辺部にあた

り、両地区は広瀬川を挟んで最短距離にあり、直線距離にして2kmと、目視可能な位置にあることが知られる。これは、南小泉遺跡IIB期と郡山遺跡のＳＩ260、ＳＩ1206などが時期的に併行するとした場合、集落の同時性や土器の共通性だけではなく、両者の密接な関連性とともにＡ種土器群の背後に他地域からの人の移住を考えると、水上交通路を重視した計画性のある占地がなされた可能性がある。この二つの地区の遺構群の展開については、南小泉遺跡ではIIB期新の時期にＳＤ３が廃絶され、それ以降の集落の営みが近接するこれまでの各調査を含めても希薄であるのに比べ、郡山遺跡ではその前後からＩ期官衙の時期にかけての集落の継続性が推定される違いがある。ＳＤ３の廃絶要因については明確でないが、郡山遺跡との関係において、北岸の大溝を伴う集落の機能そのものが必要ではなくなったこともひとつの要因として考えられ、ＳＤ３埋土２層の人為的な堆積状況とも関連しているのではないだろうか。郡山遺跡Ｉ期官衙の成立は、こうした動きの延長にあると考えられ、南小泉遺跡のIIB期遺構群は、その初期の重要な役割を果たした集落と位置付けられる可能性がある。また、IIB期の居住域を区画する大溝ＳＤ３の方向は、郡山遺跡Ｉ期官衙の区画線の方向：東偏約30度とほぼ一致している。この方向は、郡山遺跡では広瀬川に沿った段丘などの崖線に影響された結果（斎野：1990）と考えられており、南小泉遺跡でも同様の可能性がある。両者の関連性については、今後その時期差を含めた検討（註５）が必要とされよう。

③　IIC期

遺構は、竪穴住居跡４軒（ＳＩ12、21、22、26）、土坑１基（ＳＫ９）が検出されている。各遺構の所属時期については、最初に出土遺物の比較的多いＳＩ12とＳＩ22について検討したい。

ＳＩ12については、床面から須恵器盤Ｅ－６が出土している。口縁端部が平坦になっている特徴は、清水遺跡の第Ｖ群土器や郡山遺跡でみられるが、小型である点ではやや降る可能性がある。土師器Ｃ－18・20の類例は、郡山遺跡のII期官衙外郭大溝（木村他：1985）からも出土しているが、蔵王町塩沢北遺跡第２群土器（小川：1980）には土師器坏Ｃ－18と甕Ｃ－19の類例がともに認められている。この土器群は栗囲式でも新しい時期に位置付けられており、７世紀中・後葉とされる清水遺跡第Ｖ群土器に後続することが指摘されている（丹羽他：1981）。このことから、ＳＩ12の年代的は７世紀末葉～８世紀初頭頃と推定され、郡山遺跡II期官衙とほぼ併行する時期と考えられる。

ＳＩ22については、土師器坏Ｃ－23・24はいずれも弱い丸底で、Ｃ－23の外面には軽い稜はあるが、内面には屈曲はみられない。調整は、外面は体下部をヘラケズリしたのち、口縁部から底部までヘラミガキが施されており、内面はヘラミガキのち黒色処理がなされる共通性がある。この坏にみられる特徴は、国分寺下層式（氏家：1961、1967）として設定された土器群

の中に類似するものがあるが、両者を比較すると、C－24と類似する国分寺下層式の大型の坏が平底に近いことや、C－23のように口縁部が直線的に外傾するものが国分寺下層式にはないことから、ＳＩ22のほうが古いと考えられる。C－23・24と土師器高坏C－25を含めた類例は郡山遺跡のII期官衙外郭大溝（木村他：1985）からも出土しているが、C－23のように口縁部ヨコナデののちヘラミガキの行われている坏は少ない。ＳＩ22の出土遺物が少ないことから比較することはできないが、高坏C－25の類例は8世紀前半とされている元袋III遺跡（現在は元袋遺跡）のＳＩ18（渡部：1987）からも出土しており、年代としては、やや幅をもたせ、7世紀末葉～8世紀前半頃としておきたい。

次に、ＳＩ21、ＳＩ26、ＳＫ9については、出土遺物が少なく、すべて破片資料であることから明確な時期はわからないが、可能性について述べておきたい。ＳＩ21から出土した土師器C－22は、器形としてはＳＩ12のC－18に類似しており、ほぼ同じ時期の可能性がある。ＳＩ26については、土師器甕C－42、坏C－41の特徴からすると、ＳＩ12と同じかあるいはそれよりは古い可能性が考えられ、類例は郡山遺跡でも出土している。また、ＳＩ26とＳＫ9から出土している土師器坏C－40とC－145の2点は、胎土・焼成の特徴がIIＢ期のＡ種土器群とほぼ同じであり、その系譜を引く土器と考えられる。Ａ種土器群の坏との器形の類似性はあるが、口径が小さく、C－40の内面はヘラミガキのち黒色処理がなされている。

このほか、IIＣ期の遺物としては、基本層Ｉ層から須恵器蓋Ｅ－34・35が出土している。

以上のように、IIＣ期は、古墳時代後期後半から奈良時代にかけて、土師器の編年では栗囲式から国分寺下層式にかけての時期にあたり、遺構数にみられるように大きな集落の形成は認められない。

④　細別時期の不明なII期の遺構・遺物

出土遺物に細別時期を示すような遺物がない遺構として、ＳＩ7がある。出土した土師器には製作にロクロを使用したものがないことから、II期の遺構と考えられる。

また、遺物としてはＳＩ16のＰ1出土の須恵器壺Ｅ－14がある。Ｅ－14は平安時代の竪穴住居跡であるＳＩ16の廃絶時に伴うものと考えられるが、製作年代についてはII期に属する可能性がある。

(3)　III期（平安時代）

この時期の遺構としては、区画施設2条、竪穴住居跡12軒、溝跡4条、土坑2基などが検出されている。III期は、東北南部の土師器編年では表杉ノ入式の時期にあたる。最初に、出土遺物の比較的多い6軒の竪穴住居跡について、土器の分類とその属性の比較から細別時期の検討などを行い、次に、そのほかの遺構を含めて集落の変遷について考えてみたい。

①　細別時期の検討

奈良・平安時代の土師器・須恵器の変遷については、製作技法や器形的な属性から細分が行われてきており（岡田・桑原：1974、白鳥1980、丹羽1982他）、時期が新しくなるほど坏の口径に対する底径の比率が低下する傾向や、底部切り離し後の調整が行われなくなる傾向などが明らかにされている。本稿においても、こうした研究成果をふまえて細別時期を検討していきたい。対象となる資料は、竪穴住居跡6軒：ＳＩ１、ＳＩ３、ＳＩ15、ＳＩ16、ＳＩ17、ＳＩ20から出土した土師器と須恵器の坏である。

第74図に示すように、土師器坏、須恵器坏の器形は大きく6つに分けられる。つまり、外形線と口縁端部の計状からＩ～Ⅲ類、内面の形態によってａ種、ｂ種に細分される。

Ⅰ類：体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの

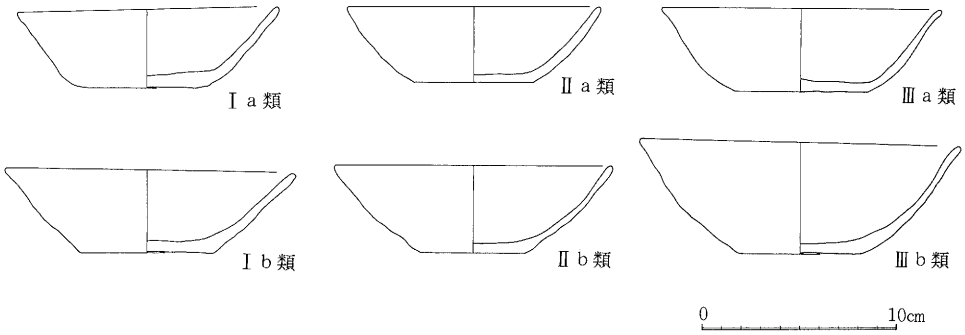
Ⅱ類：体部から口縁部にかけて丸みをもって立ち上がり、口縁端部はそのまま外傾するもの

Ⅲ類：体部から口縁部にかけて丸みをもって立ち上がり、口縁端部が外へ開くもの

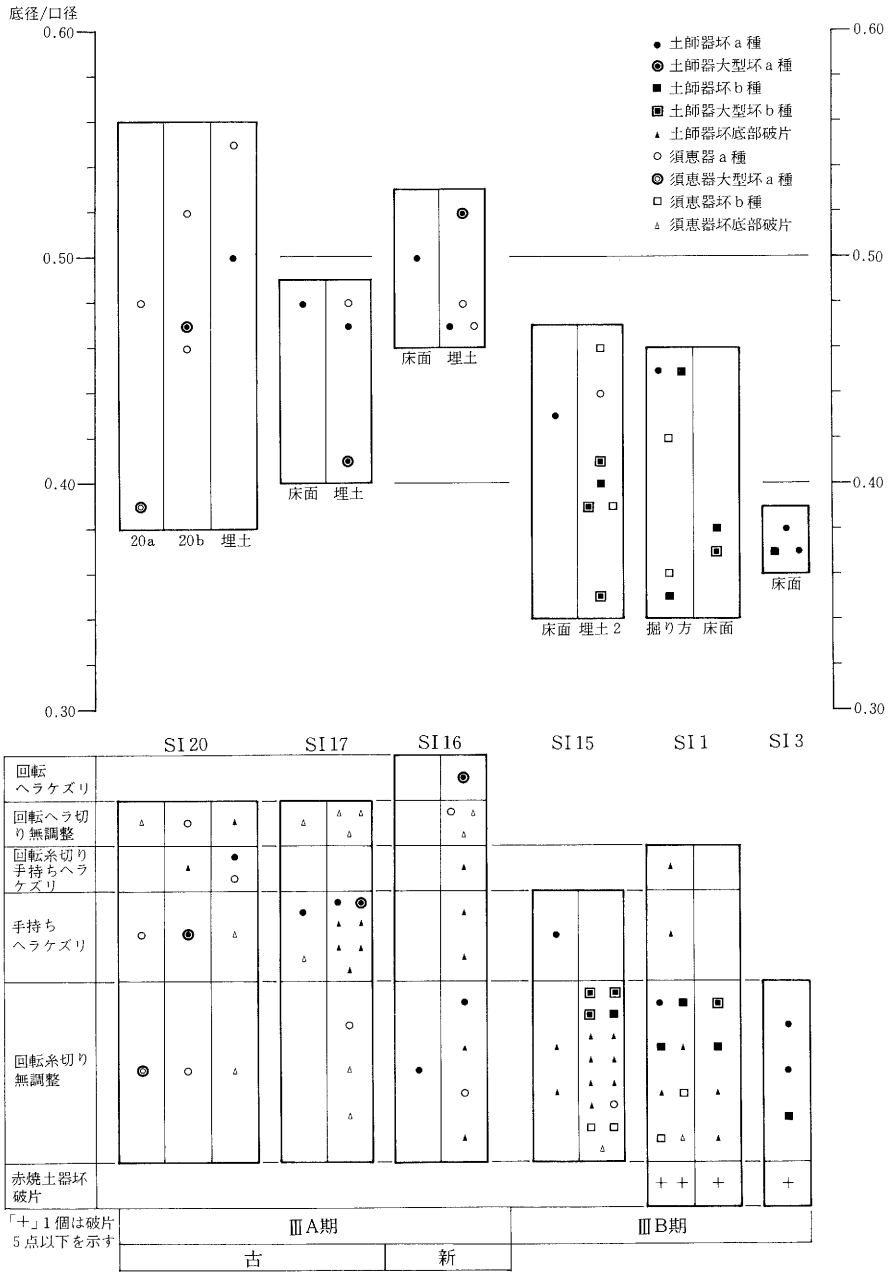
ａ種：内面の底部と体部の境に屈曲をもつもの

ｂ種：内面の底部と体部の境に屈曲をもたないもの

第75図には、器形的な属性として口径に対する底径の比率（口径底径比）、ａ種・ｂ種及び大きさとの関係、製作技法として底部の切り離し技法と調整の有無、種類を、竪穴住居跡ごとに示してある。口径底径比の違いと、底部の調整の有無の比率により、２時期の変遷のあることが知られることから、古いほうをⅢＡ期、新しいほうをⅢＢ期とする。これは、遺構間の重複関係においてＳＩ15（ⅢＢ期）のほうがＳＩ16（ⅢＡ期）より新しいことと矛盾しない。この変遷と器形各類と底部の切り離し技法との関係を示したのが第76図である。また、他の竪穴住居跡出土の坏を比較すると、ＳＩ18、ＳＩ19がⅢＡ期、ＳＩ３、ＳＩ24がⅢＢ期に属すると考えられる。これらの坏の大きさについては、口径と器高を第77図に示した。大型坏との区



第74図　Ⅲ期の坏の器形分類



第75図　ⅢA期・ⅢB期の坏　（口径底径比と底部の切り離し技法）

別は、ⅢA期では口径 14 cm、器高 5 cm、ⅢB期では口径 15.5 cm、器高 5 cm を基準とした。

② ⅢA期、ⅢB期の土器群

次に、この 2 時期の土師器坏、須恵器坏を含めた土器群の内容と年代を考えてみたい。

i） ⅢA期

土師器坏の器形は、Ⅱa類、Ⅲa類を主体とし、須恵器坏の器形は、Ⅱa類を主体としており、断面形はすべてa種である。土師器、須恵器とも、大型坏と坏の大きさの違いは明瞭であり、坏の器高は 4.5 cm 以下である。しかし、土師器坏の口径が 13 cm 前後で、器高も 3.9～4.4 cm なのに対して、須恵器坏は口径が 14 cm 前後と大きく、器高は 3.5～4.2 cm と低く、土師器と須恵器の坏の法量の違いがみられる。口径底径比では、大型坏に 0.40 前後の数値がみられるが、坏は 0.46～0.55 と 0.50 前後の数値が共通してみられる。また、器高口径比は須恵器坏：0.25～0.30、土師器坏：0.30～0.41 である。

坏の底部の切り離し技法と調整の有無、種類については、土師器、須恵器とも回転へら切りと回転糸切りがあり、切り離し後の調整のあるものとないものの両者がみられる。しかし、土師器においては、調整のあるものが主体となっているＳＩ 17 とＳＩ 20 に比べ、ＳＩ 16 では無調整のもののほうが多く、連続した変化のなかでの時期差として理解され、ＳＩ 17 とＳＩ 20 の時期をⅢA期古、ＳＩ 16 の時期をⅢA期新とする。

ⅢA期の他の器種には、土師器の甕、灰釉陶器の長頸瓶がある。土師器の甕には大小がみられる。ＳＩ 16 から出土している灰釉陶器の長頸瓶Ｉ－１は、口縁端部を欠損するが、ほぼ器形を復元できるもので、黒笹 14 号窯式に比定される（愛知県教育委員会：1983、高島：1971）。

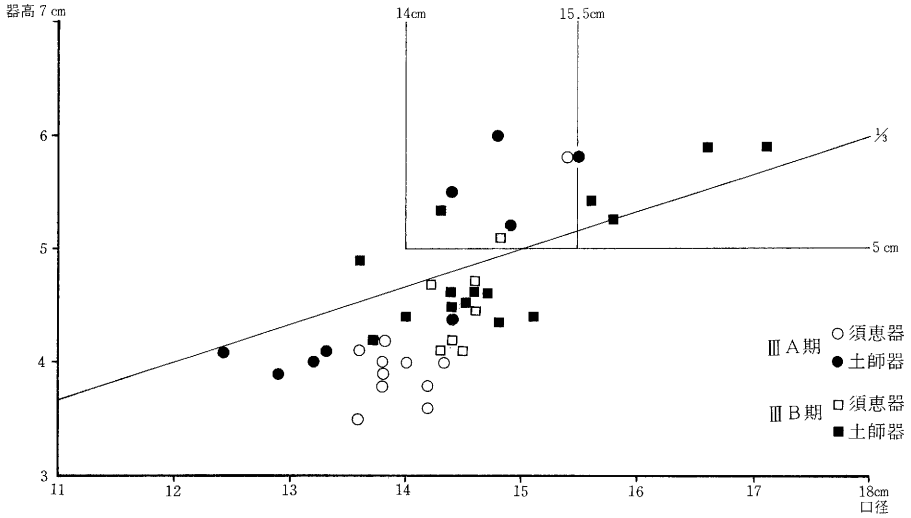
ii） ⅢB期

土師器、須恵器とも、坏の器形はⅡb類を主体としており、法量も、坏の器高は 4.1～4.9 cm、口径は 14～15 cm と共通しているが、土師器は口径のやや異なるものもあり、個体差がみられ

	土師器				須恵器					
	Ⅱa	Ⅲa	Ⅰb	Ⅱb	Ⅰa	Ⅱa	Ⅲa	Ⅱb		
ＳＩ20		□ ◎			□	□◎○	○		ⅢA	古
ＳＩ17	□	□ □				○				
ＳＩ16	⊡ ○	○			○	□				新
ＳＩ15	□			○ ○ ○ ○	○			○ ○	ⅢB	
ＳＩ1	○		○	○○○				○ ○		
ＳＩ3		○ ○	○							

凡例 ⊡回転ヘラケズリ □回転ヘラ切り無調整 ◎回転糸切りのち手持ちヘラケズリ △手持ちヘラケズリ ○回転糸切り無調整

第76図 坏の器形と底部の切り離し技法との関係



第77図　ⅢA期・ⅢB期の坏の法量分布（器高・口径）

る。大型坏と坏の大きさの違いは、土師器では比較的明瞭であるが、須恵器ではその差が小さい。口径底径比では、大型坏と坏に違いはみられず、0.35～0.46 と 0.40 前後の数値が 3 軒の竪穴住居跡に共通してみられる。また、器高口径比は須恵器坏が 0.28～0.34、土師器坏が 0.29～0.37 である。

坏の底部の切り離し技法と調整の有無、種類については、土師器、須恵器とも回転糸切り無調整がほとんどを占めている。また、須恵器の内面調整には、すべてコテナデ（小川：1987）がみられる。この調整痕は、須恵器坏II b 類では底部にかけてみられるが、大型の須恵器坏Ⅰa 類では体部下半にだけにみられ、断面形の相違とも関係している。

ⅢB期の他の器種には、土師器の甕、壺、把手付の甑、高台付坏、耳皿、灰釉陶器の椀のほか、赤焼土器の坏破片が少量伴う。土師器の甕には大小があり、内面ヘラミガキのち黒色処理された小型の甕もみられる。ＳＩ１出土の甕Ｄ－８には赤焼土器の可能性がある。耳皿は燻し焼成されており、内外面黒色を呈する。ＳＩ３に伴うと考えられる灰釉陶器の椀Ⅰ－８は、体部上半を欠損するが、三日月高台であり、黒笹 90 号窯式に比定される（斎藤：1989）。

iii）　年代と坏の形態

ⅢA期とⅢB期の土器群の様相は、多賀城跡の土器編年（白鳥：1980、1982）では、C群土器（９世紀前半）～E群土器（10 世紀前半）の時期におさまるものである。ⅢA期とⅢB期をそのなかに位置付けるうえでは、多賀城跡とは遺跡の性格に違いがあることから、南小泉遺跡における土器の変化との関係もみておく必要がある。第 78 図は、これまでの調査で検出された主な遺構とⅢA期とⅢB期の土師器と須恵器の坏（大型坏を除く）の口径底径比と底部の調整

の有無を示した。土師器の出土していない遺構があるため、須恵器でみてみると、第11表のように各報告の年代から大きく4期に分けられる。

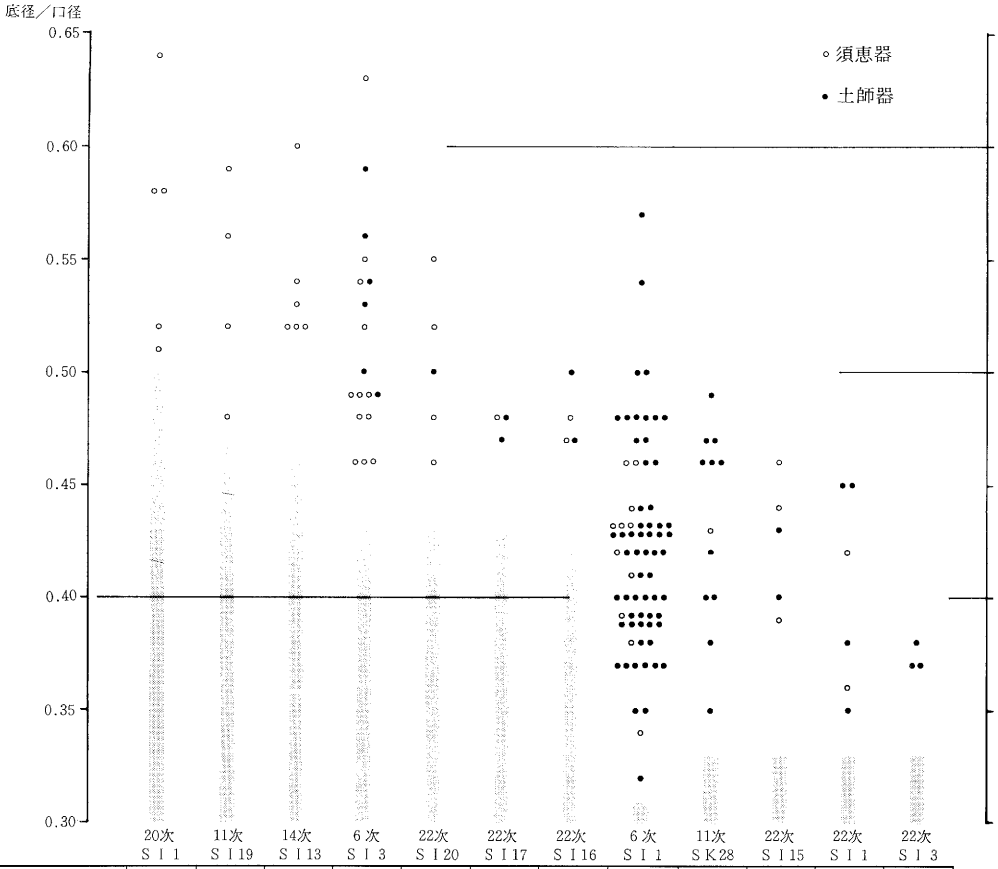
第11表　南小泉遺跡における須恵器坏の変化

遺構名	底径口径比	底部の切り離し・調整	年　　代	多賀城編年
20次ＳＩ１	0.64～0.50	回転へら切り、再調整	８Ｃ末～９Ｃ前	Ｂ群土器
11次ＳＩ19・14次ＳＩ３	0.60～0.48	回転へら切り主体	９Ｃ前葉	Ｃ群土器
６次ＳＩ３	0.55～0.46	再調整・糸切り無調整	９Ｃ前葉～中葉	Ｃ群土器
６次ＳＩ１	0.46～0.35	回転糸切り無調整主体	９Ｃ後～10Ｃ前	Ｄ群土器 Ｅ群土器

※遺構の年代は工藤（1991）、結城他（1984）、佐藤洋（1987）、渡部（1983）、佐藤甲（1985）にもとづいた。

ⅢＡ期の須恵器坏は、口径底径比は南小泉第６次調査ＳＩ３とほぼ同じであるが、底部は回転へら切りと回転糸切りが主体となっている。多賀城跡では、第60次調査で「多賀城Ｃ群土器」の良好な資料が、天長八年（832年）と記された漆紙文書とともにＳＥ2101 ＢⅢ層から出土しており（真山他：1992）、９世紀前半代におさまると考えられている。須恵器は、底径口径比が0.60～0.50を主体とし、底部は59点のうち50点が回転へら切り無調整であり、これは南小泉遺跡の11次ＳＩ19、14次ＳＩ３とほぼ同じ傾向がみられることから、ⅢＡ期の上限を示している。下限については、９世紀後半とされる「多賀城Ｄ群土器」において、底部の切り離し技法が回転糸切り無調整でほとんど占められていることから、ⅢＡ期は９世紀中葉を中心とした時期と考えられる。ⅢＡ期新のＳＩ16から出土している灰釉陶器長頸瓶Ｉ－１は、９世紀前葉～中葉とされる黒笹14号窯式（前川：1984、小森：1993）に比定され、年代的に矛盾しない。多賀城編年との関係では、ⅢＡ期の土器群は、多賀城Ｃ群土器からＤ群土器への移行期に位置するものと考えられる。

ⅢＢ期の須恵器坏は、南小泉遺跡第６次調査ＳＩ１と底径口径比及び底部の切り離し技法はほぼ同じであるが、坏の形態では、６次ＳＩ１が本稿のⅡａ類とⅡｂ類を主体としているのに対し、ⅢＢ期ではⅡｂ類が主体になっている違いがみられる。Ⅱｂ類は、多賀城Ⅳ－２期に位置付けられている仙台市五本松窯跡Ｃ群（小川：1987）において「ＡⅢ類」として識別された坏の多くと同じ特徴をもっており、このＣ群を上限とし、10世紀第１四半世紀頃まで存続していたものと考えられている。このことから、ⅢＢ期の時期は９世紀末葉～10世紀初頭頃と考えられる。これは、ⅢＢ期のＳＩ３に伴うと考えられる灰釉陶器椀Ｉ－８が、９世紀後葉～10世紀初頭とされる黒笹90号窯式（前川：1989、小森：1993）に比定されることと、ＳＩ15が10世紀前半（934年以前）に降下したと考えられる灰白火山灰（白鳥：1980）より古いことと、年代的に矛盾しない。多賀城編年との関係では、ⅢＢ期の土器群は、多賀城Ｄ群土器からＥ群土器への移行期に位置するものと考えられる。また、６次ＳＩ１については、Ⅱａ類の底径口径



		20次 S I 1	11次 S I 19	14次 S I 13	6次 S I 3	22次 S I 20	22次 S I 17	22次 S I 16	6次 S I 1	11次 SK28	22次 S I 15	22次 S I 1	22次 S I 3
須恵器	回転ヘラケズリ		1		1								
	回転ヘラ切り ロクロナデ	2											
	回転ヘラ切り 無調整	2		6		1		1					
	回転糸切り 手持ちヘラケズリ					1							
	手持ちヘラケズリ	1	1		1	1							
	回転糸切り 無調整		2		6	1	1	1	10	1	3	2	
土師器	回転糸切り 手持ちヘラケズリ				1	1			3				
	手持ちヘラケズリ				3		2		6	1	1		
	回転糸切り 無調整				2			2	40	10	1	4	3

第78図　南小泉遺跡における奈良・平安時代の坏

（口径底径比と底部の切り離し技法）

比が、0.41～0.46という数値を示し、ⅢA期で主体を占めるⅡa類の数値よりも小さいことから、ⅢA期とⅢB期の間の9世紀後葉に位置付けられよう。

iv） 坏の法量の変化

ⅢA期からⅢB期にかけての土師器、須恵器の坏の法量の変化をみておきたい。第74図に示すように、土師器、須恵器ともⅢA期とⅢB期では口径と器高に違いがみられる。これを6次ＳＩ１、11次ＳＫ28の土器とともに大型坏を除いて平均値を示したのが第12表である。

第12表 坏の口径と器高

	須恵器		土師器	
	口径	器高	口径	器高
ⅢA期	13.9 cm（13.6～14.3）	3.9 cm（3.5～4.2）	13.2 cm（12.4～14.4）	4.1 cm（3.9～4.4）
6次ＳＩ１	14.3 cm（14.1～14.7）	4.6 cm（4.2～5.0）	14.0 cm（12.5～15.2）	4.7 cm（4.0～5.4）
ⅢB期	14.5 cm（14.2～14.8）	4.5 cm（4.1～5.1）	14.4 cm（13.6～15.1）	4.6 cm（4.2～5.3）
11次ＳＫ28			14.3 cm（13.4～15.3）	4.6 cm（4.0～5.1）

この表からは、土師器、須恵器ともⅢA期からⅢB期にかけて口径と器高の数値が増えており、坏が大型化していることが知られる。須恵器では、6次ＳＩ１の時期にはⅢB期とほぼ同じ大きさとなっている。口径の平均値はやや小さいが、これは、ＳＩ１の10点の須恵器坏がⅡa類（口径平均値：14.2 cm）とⅡb類（口径平均値：14.4 cm）で構成されていることにもよる。また、9世紀末葉～10世紀初頭の年代が推定されている12次ＳＫ28から出土した土師器坏（結城他：1984）は、Ⅱb類を主体とし、ⅢB期の土師器坏と類似しており、ほぼ同じ法量を示している。土師器と須恵器の関係では、ⅢA期にみられる法量分化がⅢB期にはその差がほとんどなくなっていることが知られ、6次ＳＩ１の時期はその過渡的な様相を呈している。また、数値は示していないが、大型坏も同様の変化を示す傾向がある。こうした変化については、この遺跡での現象ともいえるが、須恵器の供給地との関係などを含めて、今後検討される必要もあろう。

③ 遺構群の変遷

ⅢA期、ⅢB期に属する竪穴住居跡10軒の時期については前述のとおりであるが、他の遺構の所属時期を検討しながら、遺構群の変遷を考えてみたい。

ＳＤ４は、その堆積状況において、埋土２層はシルトと砂が互層になる厚い自然堆積層であり、層中のシルト層上面で人の足跡が検出されていることから、溝の機能が停止したあと、ある程度の期間はそのままにされていたことが考えられる。埋土１層は人為的な堆積状況を示しており、出土遺物は少ないが、赤焼土器の坏破片数点と、細弁蓮花文軒丸瓦の瓦当部が出土している。この瓦は陸奥国分寺跡で細弁蓮花文鐙瓦Ⅱ類と分類されているもので、多賀城Ⅳ期に

位置付けられており（多賀城跡の分類では310 B）、埋没時期の上限を示している。これは、ＳＤ４と重複関係にあり、それより新しいＳＡ１・２の構築時期の上限でもある。多賀城Ⅳ期の開始時期は貞観11（869）年直後と考えられており（宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所：1982）、Ｄ群土器の時期ではその半ば頃になる。ＳＡ１・２では、出土遺物は少ないが、掘り方埋土からは赤焼土器の坏破片が数点出土している。赤焼土器の坏破片はⅡＢ期の竪穴住居跡からも出土しており、ＳＡ１・２は、それらの竪穴住居跡とは、ＳＩ24のようにすぐ近くに位置するものもあるが、重複関係はなく、構築時期の上限からも、ⅢＢ期に所属すると考えられる。また、ＳＤ４埋土１層の堆積状況をふまえると、ＳＤ４の最終的に埋まった時期とＳＡ１・２の構築時期は近接しており、それが連続して行われた可能性もある。ＳＤ４埋土２層の堆積にある程度の期間を要しているとすれば、ＳＤ４の機能していた時期はⅢＡ期に所属する可能性が高く、ⅢＡ期の竪穴住居跡の配置が、ＳＤ４の東側にあることは、両者の密接な関連性を示しており、ＳＤ４は区画施設としての機能をもっていたと考えられる。このほか、ＳＤ４、ＳＡ１・２と近接して平行するＳＤ５、ＳＤ６、ＳＤ７はそれぞれの遺構とほぼ同じ時期と推定される。ＳＤ４より西側に位置するＳＩ10、ＳＫ５・６は、ⅢＢ期に属する可能性がある。ＳＩ14とＳＢ１はＳＤ４の西側に位置しており、出土遺物も少なく、ＳＢ１がⅢＡ期古のＳＩ17よりは新しいが、細別時期は不明である。ⅢＡ期、ⅢＢ期のいずれに属するか不明な遺構もあるが、各遺構との関係を示したのが第13表である。

第13表　ⅢＡ期・ⅢＢ期の遺構

<table>
<tr><th></th><th colspan="3">竪穴住居跡</th><th>区画施設・溝跡</th><th>細別時期不明遺構</th></tr>
<tr><td rowspan="2">ⅢＡ期</td><td>古</td><td>ＳＩ20
ＳＩ17</td><td rowspan="2">ＳＩ18
ＳＩ19</td><td rowspan="2">ＳＤ4
ＳＤ5
ＳＤ6</td><td rowspan="4">ＳＩ10
ＳＩ14
ＳＢ1
ＳＫ5
ＳＫ6</td></tr>
<tr><td>新</td><td>ＳＩ16</td></tr>
<tr><td rowspan="2">ⅢＢ期</td><td colspan="3">ＳＩ1　ＳＩ4
ＳＩ3
ＳＩ15　ＳＩ24</td><td>ＳＡ1
ＳＡ2
ＳＤ7</td></tr>
</table>

この表からも知られるように、９世紀中葉のⅢＡ期には、真北方向のＳＤ４を区画溝として、その東側に居住域が展開している。竪穴住居跡の方向は、真北よりやや東偏している傾向がみられ、新古の２期変遷が認められる。９世紀末葉～10世紀初頭のⅢＢ期には、居住域がほぼ全域に展開しており、そのなかをＴ字形に交わるＳＡ１とＳＡ２によって区画している。上部構造は材木列と推測される。ＳＡ１は真東西方向を示しているが、竪穴住居跡の方向は、真北よりやや東偏しているＳＡ２に近い傾向がみられる。竪穴住居跡には２期ほどの変遷も考えられるが、遺構の残存状況が良好ではなく遺物の少ないものもあったことから、細分は行わなかった。なお、ⅢＢ期の居住域の広がりについては、西南方約200 mに位置する若林城跡の調査（佐

藤：1986）でほぼ同時期の居住域が検出されており、その関連性も今後検討される必要があろう。

(4) Ⅳ期（中世・近世）

この時期の遺構としては、竪穴遺構１軒、溝跡４条、土坑９基、性格不明遺構１基などが検出されている。Ⅳ期は出土遺物の年代から、Ａ・Ｂの２小期に細分される。

① ⅣＡ期

遺構は、調査区東部で、溝跡２条：ＳＤ８・10などが検出されている。時期は、ＳＤ10から渥美産の陶器Ｉ－３が出土しており、12～13世紀の年代が考えられる。溝の東側にあるＳＤ８からは常滑産の陶器Ｉ－２が出土しており、両者の方向性がほぼ一致することから、同時期と推定される。また、ＳＤ10の東側にはピットが集中しており、それに伴うものも少なくないと考えられる。これらのことから、ⅣＡ期には、ＳＤ10を区画溝として、その東側に居住域が展開していた可能性がある。

② ⅣＢ期

遺構は、調査区の中央部から東部にかけて、竪穴遺構１軒：ＳＩ２、溝跡２条：ＳＤ１・２、土坑９基：ＳＫ１・２・３・11・12・16・19・20・21、性格不明遺構１基：ＳＸ１などが検出されている。これらの遺構のなかで、ＳＫ12・19・21は出土した陶器、磁器によって年代が推定され、いずれもほぼ同じ時期であることが知られ、共伴する他の遺物にも共通性が認められる。これを第14表に示した。

第14表　ＳＫ12・19・21出土遺物

ＳＫ12	丹波産のすり鉢Ｉ－４（17世紀前半） 白磁（17世紀）	燻し焼成丸瓦Ｆ－７・平瓦Ｇ－10 土師質土器Ｕ－１
ＳＫ19	肥前産の磁器Ｊ－３（17世紀）	燻し焼成平瓦Ｇ－11
ＳＫ21	瀬戸美濃産の陶器Ｉ－７（17世紀前半以前）	土師質土器Ｕ－２

３基の土坑に共伴する燻し焼成瓦は、ＳＩ２、ＳＤ２、ＳＫ１・３から出土しており、土師質土器はＳＫ21から出土している。Ａ－16グリットから出土したＵ－３・４の２点の土師質土器は、Ｕ－１・２と同じ特徴を示しており、この時期に属する可能性が高い。また、こうした遺物は出土していないが、遺構の配置関係や形態などからは、ＳＤ２とＳＤ１、ＳＫ１とＳＫ２、ＳＫ12とＳＫ11、ＳＫ20とＳＫ16はほぼ同じ時期に属すると考えられる。このほか、ＳＰ134からも燻し焼成瓦が出土しており、調査区東部にはこの時期のピットも分布していることが知られる。これらの遺構は、ＳＫ12・19・21の出土遺物から、17世紀前半を中心とする近世初頭に位置づけられる。遺構群の性格については明確でないが、燻し焼成瓦の出土が比較的多いことなどから、調査区西方に隣接する若林城跡との関連性が考えられる。

③　細別時期不明の遺構

ＳＸ１については、ＳＤ８よりも新しいが、ピットの集中する調査区東部にあって、この遺構より新しいピットは１基だけであることから、ⅣＢ期以降の時期が考えられる。

⑸　時期不明の遺構

Ⅰ期～Ⅳ期のいずれの時期に所属するかわからない遺構は、区画施設１基：ＳＡ３、溝跡５条：ＳＤ９・11・12・13・14、土坑６基：ＳＫ４・13・14・15・17・18である。このうち、他の遺構との重複関係からは、ＳＡ１がⅡＣ期以降、ＳＫ17、ＳＤ13･14がⅡＣ期以前、ＳＤ12がⅢＡ期以前、ＳＤ11がⅣＡ期以前であることが知られる。また、ＳＡ３については、若林城跡の区画方向とほぼ一致する傾向がみられ、関連する可能性もあろう。

第Ⅴ章　第23次調査

この調査に関しては、始め若林城跡隣接地に於ける試掘調査として対応していたが、その結果、土師器片が出土し、住居跡と判断できる遺構の一部が確認されたため、平成4年11月から12月にかけて本調査を実施したものである。また前記したように若林城跡の関連で調査を開始したものであるが、調査内容から南小泉遺跡の内容なので、平成5年5月に南小泉遺跡の拡大の手続きをとり、その報告を第22次調査と合わせて行うことにした。

1．調査場所　　仙台市若林区南小泉三丁目15－103

2．申 請 者　　東京都杉並区浜田山四丁目20－14　阿部　武

3．試掘調査　　平成4年10月28日　約25 m²

4．本 調 査　　平成4年11月24日～12月3日　約35 m²

5．発見遺構　　（第79図）

当調査で発見された遺構は竪穴住居跡1軒、溝跡5条である。住宅建築予定箇所の南側に切り合うように発見された。以前からの住宅を解体した場所がら、所々基礎、排水管などの掘削による撹乱が及んでいたところもあった。

①竪穴住居跡（ＳＩ－１）　第2号溝（ＳＤ－２）と第5号溝（ＳＤ－５）に切られており、ほぼ4m四方の正方形である。カマドは北辺中央に施設されている。北辺といってもカマドを二分する軸線はＮ－35°－Ｗである。カマドは煙道部に当たるものはないタイプのものであろう。床面からの壁の立ち上がりが約20cmあるので、削平されたとは考えにくい。

床面には6個のピットがみられる。この内、Ｐ１とＰ２、Ｐ３と4が間隔約220cm、Ｐ１と4、Ｐ２とＰ３が間隔約250cmで四角く組むものとおもわれる。Ｐ６はカマドの対照的な位置にある。ピットの計測値は次のとおりである。

Ｐ１：径約55cm、深さ約37cm　　Ｐ２：径約45cm、深さ約28cm

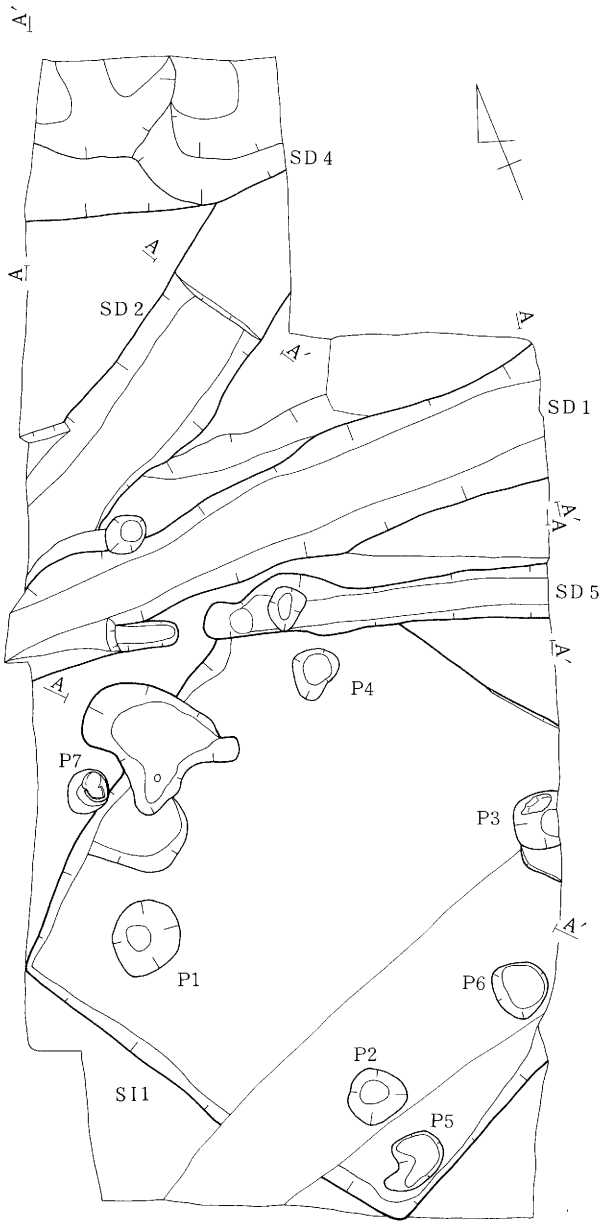
Ｐ３：径約45cm、深さ約26cm　　Ｐ４：径約40cm、深さ約30cm

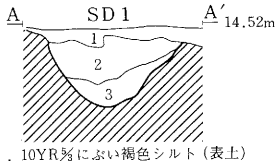
Ｐ５：長径約55cm、短径約40cm、深さ約10cm　　Ｐ６：径約40cm、深さ約12cm

カマドの左脇の壁面外側にＰ７があり、土師器の甕（Ｃ－６）が埋設状況で検出された。出土遺物のほとんどはカマド周辺からである。

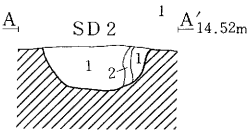
①第1号溝（ＳＤ－１）：東西方向の溝で、西側に若干傾斜する。最大幅が約1.2mであり、深さは最大で約50cmを計る。第3、第5号溝を切っている。住居跡関連遺物か、土師器片が多量に出土した。

②第2号溝（ＳＤ－２）：東西方向の溝である。幅が75cmで、深さ約25cmである。住居跡を切っていることもあり、第1号溝には及ばないが多量の土師器片が出土している。

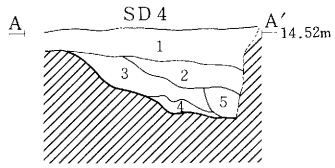




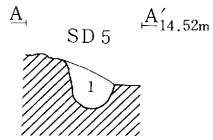
1．10YR5/3にぶい褐色シルト（表土）
2．10YR5/4にぶい褐色シルト
3．10YR3/4暗褐色



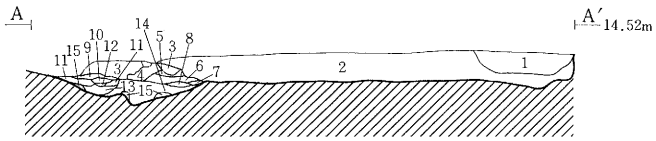
1．10YR5/3鈍い黄褐色シルト
2．10YR7/6黄褐色シルト



1．10YR5/3にぶい黄褐色シルト表土（カクラン）
2．10YR5/3にぶい黄褐色シルトに10YR5/6明黄褐色シルト混入
3．10YR5/6明褐色シルトに10YR5/3にぶい黄褐色シルト混
4．10YR5/6明褐色シルトに10YR5/2灰黄褐色シルトをブロック状に混入
5．10YR5/1褐色灰シルトに10YR5/2灰色シルト混入



1．10YR5/3にぶい黄褐色シルトに10YR7/6明黄褐色シルト混入



1．10YR5/3にぶい黄褐色シルト
2．10YR4/3にぶい黄褐色シルトに10YR7/6明黄褐色シルト混入
3．10YR5/4にぶい黄橙色シルト
4．7.5R4/3にぶい赤褐色シルト
5．7.5R5/3にぶい赤褐色シルト
6．7.5R3/3暗赤褐色シルト
7．7.5R3/2暗赤灰色シルト
8．7.5R4/2灰赤色シルト
9．7.5R4/2灰赤色シルト炭混じり
10．10R5/6赤橙色シルト
11．10R4/3赤褐色シルト
12．10R5/3赤褐色シルト
13．10R5/2灰赤色シルト
14．10YR7/6明黄褐色シルト
15．10YR7/4にぶい黄橙色シルト

第79図　第23次調査平面図・セクション図

0　2 m

③第３号溝（ＳＤ－３）：南西～北東方向の溝である。幅約 90 cm、深さ約 30 cm で、第１号溝と第４号溝に切られている。土師器片が若干出土している。

④第４号溝（ＳＤ－４）：第３号溝を切る東西方向のものである。幅は 1.2 m 以上、深さは調査区内で最大 80 cm を計るが凹凸が激しく、撹乱かもしれない。土師器片が若干出土した。

⑤第５号溝（ＳＤ－５）：第１号溝に切られ、住居跡を切っている。ほぼ東西方向で、幅約 50 cm、深さは状況の良好な北東側で約 40 cm である。土師器片が若干出土した。

６．発見遺物（第 80 図）

出土遺物は土師器片が殆どであるが、その他須恵器片、砥石、カマド支脚などが若干出土している。遺物は住居跡を中心として、第１号溝跡、第２号溝跡からの出土が多い。

土師器には甕、坏、高坏の器種がみられる。特に甕片が多く、ロクロ未使用・長胴系で頸部に若干の縊れが見られる。口縁部は内外面ともヨコナデされ、体部は外面が太めの縦方向のハケメ、内面が横方向のヘラナデとなっている。底部には本葉痕が見られる。

坏片は殆どが小破片であるが、口縁部と体部の境に段を持つものが多く、内面ないしは内外面が黒色処理されているものである。住居跡出土のものには関東系と見られるものもあるが、小破片のため詳細は指摘できない。

７．遺構、遺物の年代観

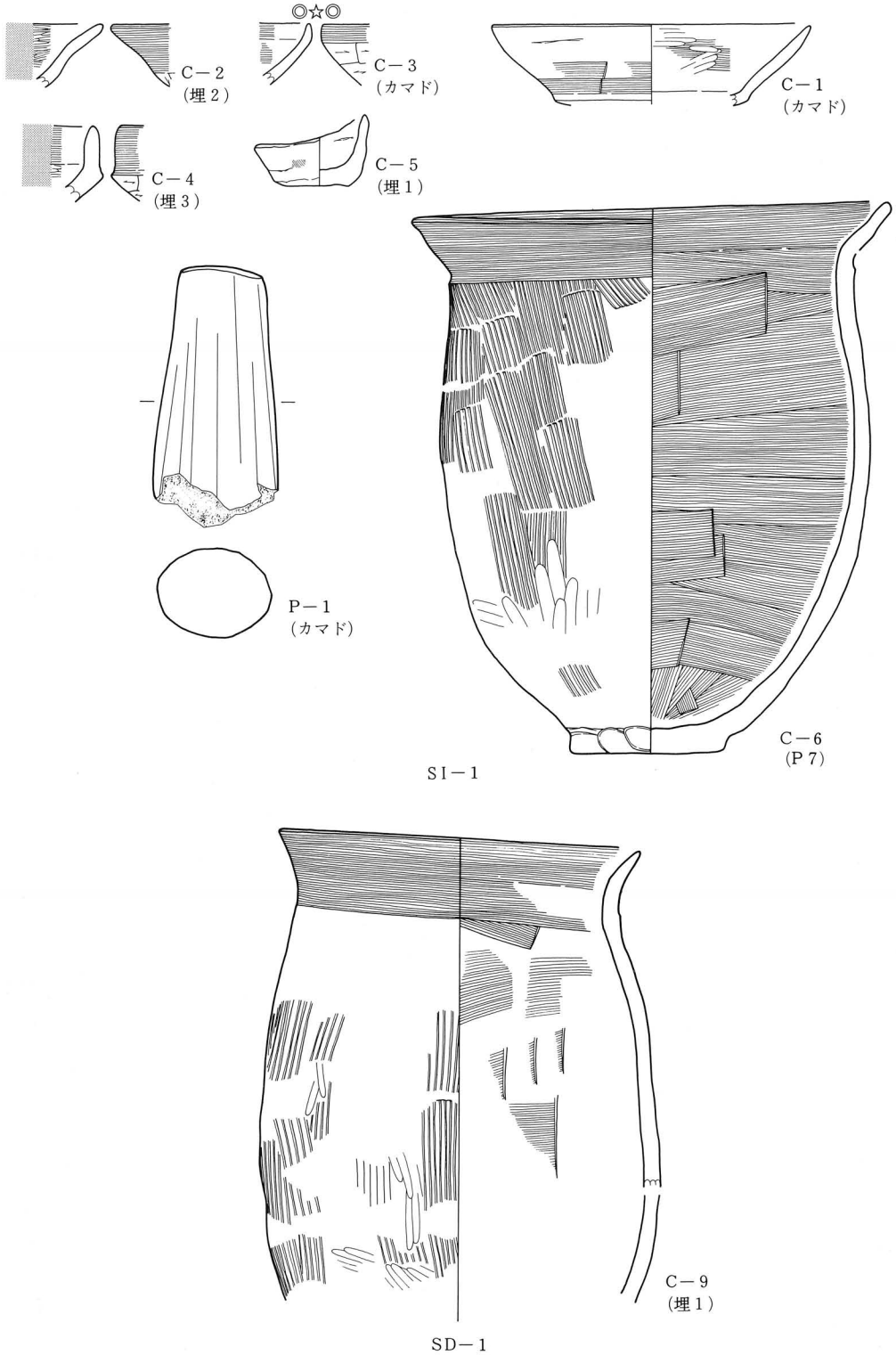
出土遺物、特に土師器の甕の観察をまとめてみると、

①胴下部の張った長胴系であること、②口縁部と体部の境に軽く段が付くこと、③体部外面にハケメが施されていることが挙げられる。

これらの特徴は仙台平野出土の土師器に照らし合わせると、住社式と栗囲式の特徴に重なるものがあると判断できるが、この二型式を比較した場合、他社式甕の頸部には段の形成が見られない。また住社式の甕には前型式の南小泉式の特徴を残し、丸胴系、外面ミガキのものも若干見られるが、本来の住社式の土師器甕は「胴下部の張った長胴形であること、ハケ目擦痕がない」との特徴が指摘されているものである（志間：1981）。今回の調査区から出土した甕片にはハケメ痕の見られないものはない。

以上の特徴を総合してみると、これらの出土土師器は栗囲式出現時期と把握され、６世紀末頃と考えておきたい。

遺構の年代は住居跡については土師器の年代観に連動しよう。しかしながら溝跡の年代観は把握できない。溝跡から出土した土師器は住居跡出土の土師器片と同様であるが、住居跡を切っているか近い溝跡からの出土が多い。新しい遺物も入っていないことから、住居跡以降としか捉えられない。



第80図　第23次調査出土遺物実測図

第VI章　ま　と　め

今回の南小泉遺跡の調査は、仙台市都市計画街路南材木町古城線建設（第22次）、共同住宅建設（第23次）に伴う緊急発掘として、1992年9月～12月に行われた。

この調査をとおして、以下のことが明らかにされている。

第22次調査では、弥生時代から近世にかけての遺構、遺物が検出された。これらは、大別4期（Ⅰ期～Ⅳ期）に分けられ、Ⅱ期以降は第81図に示すように細別7期にわたる遺構群の変遷が認められた。各期の調査成果を要約すると、

Ⅰ期(弥生時代)：遺構は検出されなかったが、後期の天王山式土器や大型板状安山岩製石器などの遺物が検出された。

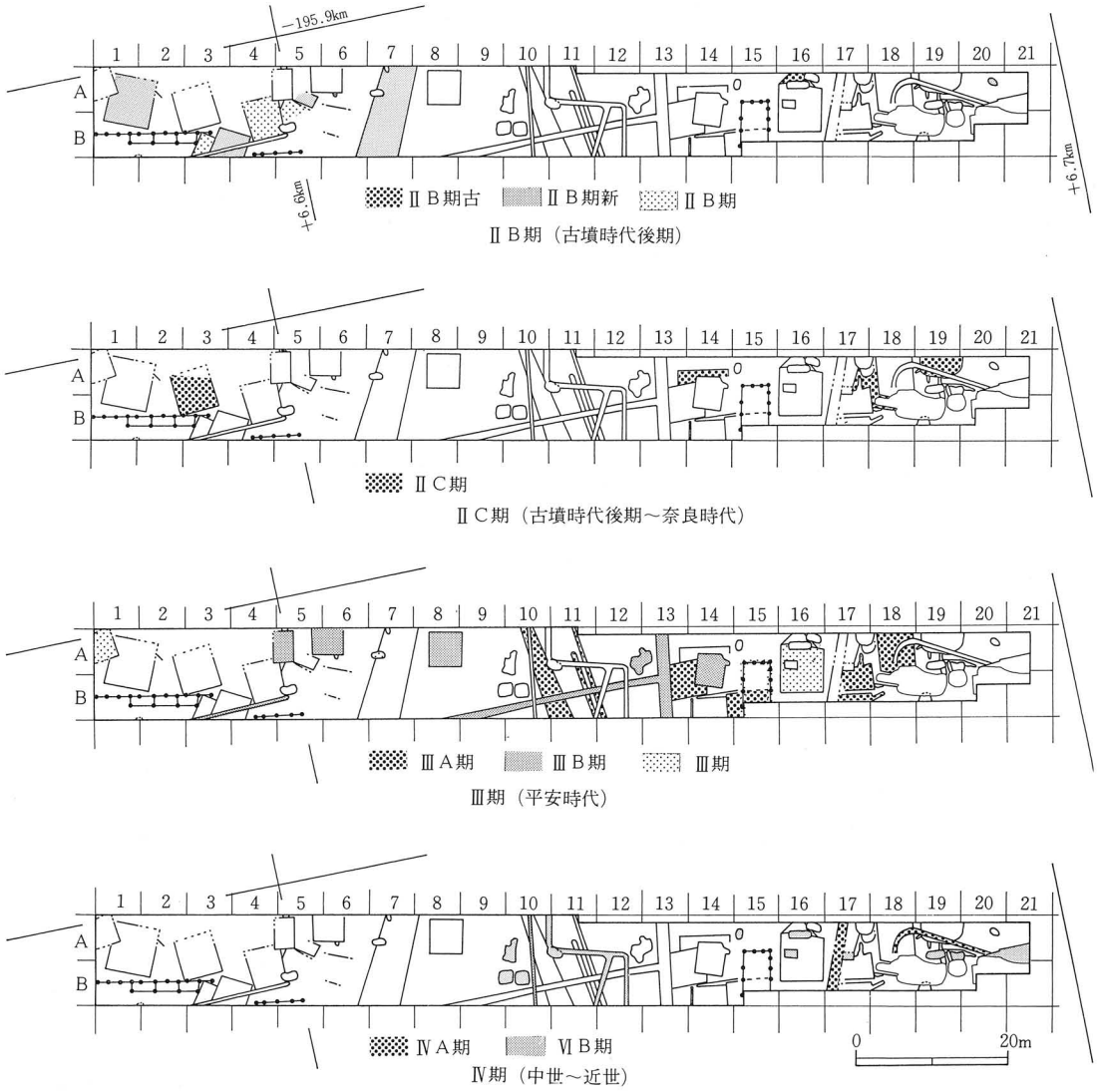
Ⅱ期(古墳時代～奈良時代)：6世紀末葉を中心とするⅡB期には、幅7mの大溝で居住域を区画する集落の一部が検出された。この大溝の西方へ展開する居住域の広がりは不明であるが、遺構から出土した土器などをとおして、関東方面からの人の移住を伴う居住形態が知られ、広瀬川を挟んで対岸に位置する郡山遺跡との関連性が考えられた。また、その前後のⅡA期（古墳中期前後）とⅡC期（古墳後期後半～奈良時代）では、遺構の数は少ないが、竪穴住居跡などが検出されている。

Ⅲ期（平安時代）：ⅢA期（9世紀中葉）とⅢB期（9世紀末～10世紀初）に区画施設をもつ居住域が検出されている。ⅢA期は居住域の西辺を溝で区画しており、ⅢB期では材木列により居住域内を区画している。

Ⅳ期（中世・近世）：ⅣA期（12～13世紀）には溝を区画施設とする居住域の存在が推定された。また、ⅣB期（17世紀前半）には隣接する若林城跡との関連性が考えられる遺構群が検出されている。

第23次調査では、古墳時代後期（6世紀末葉頃）の竪穴住居跡1軒などが検出されている。第22次調査のⅡB期に併行するものと考えられる。

これらのことは、今回の第22次・23次調査が、これまであまり調査の行われていなかった南小泉遺跡西端部の様相を把握するうえで貴重な成果となったことを示している。広瀬川に南面する微高地縁辺部に立地するこの地区は、近接する南小泉遺跡第6次調査や第12次調査、若林城跡の調査成果をふまえると、弥生時代から近世にかけて連綿とした人類の営みが知られ、なかでも、6世紀後半から7世紀初頭にかけての古墳時代後期と、9世紀から10世紀前半にかけての平安時代には、大規模な集落の存在が予想され、近世初頭における若林城跡との関連性など、名取川下流域の地域史理解にとって、その重要性が再認識された。



第81図 第22次調査遺構群の変遷

註１：こうした特徴から、２枚の平瓦は一枚作りによる同じ工程で製作されており、凸面両側縁付近に叩き目の潰れがみられることから２工程を経ていると考えられる（小川：1987）。凹面側の工程では、側面のヘラケズリが行われているが、凹面の広端から瓦の中央部にかけてみられる指ナデ状の痕跡は意図的な布目を消すための調整としては部分的すぎる。凹面側縁のヘラケズリが時計回り方向であることから回転する凹型台の使用を考えるとすれば（小川：1987）、瓦を押さえる必要があり、凸面側の対応する位置に叩き目の潰れがあることは、凹面を押さえることもあったと推定される。

註２：Ａ種土器群の出自をめぐる他地域の土器との比較検討は今後の課題とされるが、製作地や製作者といった要素からの変容の有無、程度をどのように識別していくのか、他の遺物などを含め、慎重なアプローチをしていく必要がある。

註３：湖西市教育委員会の後藤健一氏のご教示による。また、後藤氏には、湖西出土の須恵器について、胎土、色調など、実見しながらお教えいただきました。記して感謝します。

註４：蛭子森古墳出土の須恵器について、浜松市博物館の川江秀孝氏に実見とともに種々のご教示をいただきました。記して感謝します。また、いっしょに実見した松井一明氏からは文献の提供並びに貴重なご教示をいただきました。記して感謝します。

註５：当調査地区と郡山遺跡第２段階（Ｉ期官衙以前）との関連性については、以下の二つのことが今後の課題としてあげられる。

①　小玉石の出土

郡山遺跡では「小玉石」と称される遺物の出土が過去15年間の調査で約100点報告されている。その出土は北部地区で多く、第35次調査（木村他：1984）では２軒の竪穴住居跡からまとまって出土している（ＳＩ 444：28点、ＳＩ 446：36個）。ＳＩ 444にはＩ期官衙に先行する時期が考えられており、ＳＩ 260あるいはＳＩ 1206と同時期の可能性もある。この小玉石が当調査で２点出土しており、うち１点はⅡＢ期のＳＫ７出土である。小玉石の性格や時期、分布などについて、他の遺跡を含めた検討が必要とされる。

②　東偏30度線

ⅡＢ期の居住域を区画する大溝ＳＤ３の方向は東偏30度を示している。居住域の竪穴住居跡の方向は１軒を除きＮ－23～38°－Ｅであり、ＳＤ３の方向との関連が考えられる。郡山遺跡ではＩ期官衙の建物跡や材木列の方向がやや幅はあるものの東偏約30度を基準としており、類似性がみられる。しかし、この両者には時期差があり、関連性を追求するうえでは郡山遺跡第２段階における東偏約30度線の存否、ＳＤ３の全容の解明などを前提としなければならないが、ＳＤ３を東偏約30度で南方へ仮想延長すると、Ｎ－31°－Ｅの方向で郡山遺跡Ｉ期官衙の区画溝（ＳＤ882、881、木村他：1987）とほぼ一致する。偶然とは思われるが、今後検討してみる必要もあろう。

引用文献

愛知県教育委員会　1983『愛知県古窯跡分布調査報告書（III）』

伊東信雄他　1961『陸奥国分寺跡』陸奥国分寺跡発掘調査委員会　河北文化事業団

岩見和泰他　1991「合戦原遺跡」『合戦原遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 140 集

氏家和典　1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第 14 輯

氏家和典　1961「土器」『陸奥国分寺跡』陸奥国分寺跡発掘調査委員会　河北文化事業団

氏家和典　1967「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」『山形県の考古と歴史』

岡田茂弘・桑原滋郎　1974「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究起要』Ⅰ　宮城県多賀城跡調査研究所

小川淳一　1980「塩沢北遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第 69 集

小川淳一　1987『五本松窯跡』仙台市文化財調査報告書第 99 集

加藤道男　1990「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』Ⅱ

金森安孝　1985「第 43 次発掘調査」『郡山遺跡Ⅴ』仙台市文化財調査報告書第 74 集

木村浩二他　1991「郡山遺跡発掘調査の成果―変遷と性格」『第 17 回古代域柵官衙遺跡検討会資料』古代域柵官衛遺跡検討会

木村浩二他　1984「第 35 次発掘調査」『郡山遺跡Ⅳ』仙台市文化財調査報告書第 64 集

木村浩二他　1987「第 63 次発掘調査」『郡山遺跡Ⅶ』仙台市文化財調査報告書第 96 集

木村浩二　1988「第 68 次発掘調査」『郡山遺跡Ⅷ』仙台市文化財調査報告書第 110 集

工藤哲司　1982『栗遺跡』仙台市文化財調査報告書第 43 集

工藤哲司　1991『南小泉遺跡第 20 次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 153 集

広陵町教育委員会　1987『牧野古墳』

後藤健一　1989「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教育委員会

後藤秀一他　1992『藤田新田遺跡－仙台東道路建設関係遺跡調査概報』宮城県文化財調査報告書第 148 集

小森俊寛　1993「概要」『古代の土器 2・都城の土器集成Ⅱ』古代の土器研究会編

斎野裕彦　1988「南小泉遺跡出土の弥生時代の石器一例」『年報』9　仙台市文化財調査報告書第 122 集

斎野裕彦　1990『郡山遺跡第 84 次・85 次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 145 集

斎野裕彦　1991「第 87 次発掘調査」『郡山遺跡Ⅺ』仙台市文化財調査報告書第 146 集

斎野裕彦　1992「大型板状安山岩製石器について」『大平臺史窓』第 11 号

斎野裕彦　1994「弥生時代の大型直縁刃石器（下）」『弥生文化博物館研究報告』第 3 集

斎藤彰裕他　1991「住社遺跡」『住社遺跡・荒町遺跡・寺前遺跡・田町裏遺跡』角田市文化財調査報告書第 7 集

斎藤孝正　1989「灰釉陶器の研究Ⅱ」『名古屋大学文学部研究論集』104

佐藤甲二　1985「中田畑中遺跡第 2 次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第 78 集

佐藤甲二　1986「若林城跡」仙台市文化財調査報告書第 90 集

佐藤　洋　1987『南小泉遺跡第 14 次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 109 集

志間泰治　1958「宮城県角田町住社発見の竪穴住居跡とその考察」『考古学雑誌』第 43 巻第 4 号

志間泰治　1981「住社遺跡」『宮城県史』第 34 巻

白鳥良一　1980「多賀城跡出土土器の変遷」『研究起要』Ⅶ　宮城県多賀城跡調査研究所

白鳥良一　1982「Ⅵ－ 2 土器類、Ⅶ－ 2 (2)土器」『多賀城跡政庁跡本文編』宮城県教育委員会　宮城県多賀城跡調査研究所

高島忠平　1971「平城京東三坊大路東側溝の施釉陶器」『考古学雑誌』第57巻第1号
田辺昭三　1966『陶邑古窯址群』1　平安学園考古学クラブ
田辺昭三　1981『須恵器大成』　角川書店
辻　秀人　1990「東北古墳時代の画期について（その2）」『考古学・古代史論攷』
東北学院大学考古学研究部・仙台市教育委員会　1979『栗遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第14集
栃木県文化振興事業団　1987『稲荷塚・大野原』
中村　浩　1981『和泉陶邑窯の研究』　柏書房
丹羽　茂他　1981「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第77集
丹羽　茂　1983「宮前遺跡」『朽木橋横穴古墳群　宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第96集
前川　要　1984「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」『研究起要』Ⅲ　瀬戸市歴史民俗資料館
真山　悟他　1992「第60次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991　多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所
向坂鋼二他　1964『蛭子森古墳』浜松市教育委員会
藤沢　敦　1992「引田式再論」『歴史』第79輯
柳沼賢治　1987『大根畑遺跡』郡山市教育委員会　郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
結城慎一他　1984『南小泉遺跡』仙台市文化財調査報告書第68集
結城慎一　1989「第79次発掘調査」『郡山遺跡Ⅸ』仙台市文化財調査報告書第124集
渡部弘美　1983『南小泉遺跡』仙台市文化財調査報告書第55集
渡部弘美　1987『元袋Ⅲ遺跡』仙台市文化財調査報告書第103集

第 15 表　竪穴住居跡・竪穴遺構

No.	位置	図版	平面形	大きさ	方向	その他	時期	写真
SI1	A-8、9	第6図	正方形	4.4m×4.8m	N-12～13°-E		IIIB	6
2	A-9、10	第8図	隅丸長方形	1.6m×3.4m以上	N-12°-E	竪穴遺構	IVB	7
3	A-5、6	第9図	方形	4.1m×3.4m以上	N-13°-E		IIIB	8
4	A-4、5	第11図	長方形	4.2m×2.8m	N-12°-E		IIIB	9
5	A-5	第13図	長方形	1.8m×1.8m以上	N-58°-E	竪穴遺構	IIB新	10
6	5	第14図	方形	1.6m以上×1.6m以上	N-25°-E	竪穴遺構	IIB	11
7	6	第15図	方形	2.8m×4m	N-22°-E			
8	4、5	第16図	方形	4.4m×5m以上	N-4°-W		IIB	12
9	B-3、4	第17図	方形	4.4m×3.6m以上	N-38°-E		IIB新	13
10	A-1	第18図	方形	3.6m以上×3.8m以上	N-8°-W		III	14
11	1、2	第19図	方形	6.2m×6.6m	N-23°-E		IIB新	15
12	2、3	第21図	方形	5.6m×5.2m	N-7°-W		IIC	16
13	A-2	第22図		2.4m以上×2m以上	N-30°-W		IIA	
14	16	第23図	正方形	6.2m×6.4m	N-15°-E		III	17
15	14	第25図	正方形	4m×4m	N-20°-E	埋土1層下部に灰白色火山灰	IIIB	18-19
16	13、14	第29図	方形	4.6m×4.6m以上	N-84°-E		IIIA新	
17	B-14、15	第31図	方形	6m×3.4m以上	N-7°-E		IIIA古	20
18	17、18	第33図	方形	3.2m×3.8m以上	N-8°-E		IIIA	21
19	B-17	第35図	方形	4.4m×0.8m以上	N-83°-W		IIIA	22
20	A-18、19	第36図	方形	2.4m以上×5m以上	N-6～7°-E		IIIA古	23-24
21	17、18	第39図	方形	2.8m以上×2.9m以上	N-23°-E		IIC	
22	A-19	第40図	方形	5.6m×2.4m以上	N-75°-W		IIC	25
23	B-3	第41図	方形	1.8m以上×3.6m以上	N-35°-E		IIB	26
24	A-12、13	第42図	方形	2m以上×3.2m以上	N-1°-W		IIIB	27
25	A-16	第43図	正方形	2.6m以上×2.4m以上	N-23°-W		IIB古	28
26	14	第46図	方形	6.7m×1.6m以上	N-81°-W		IIC	30

第 16 表　掘立柱建物跡

NO	位置	図面	向き	桁行	梁行	方向	その他	時期	写真
SB1	15	第47図	南北棟	5.7m以上	3.7m	N-15°-E	桁行3間以上、梁行3間	III	32

第 17 表　区画施設

NO	位置	図面	検出長	方向	その他	時期	写真
SA1	B-8～13	第49図	29.2m	N-90°-EW	柱の抜き取りあり	IIIB	33・36・37
2	13	第49図	11.0m	N-8°-E	柱の抜き取りあり	IIIB	34・35
3	B-1～3		15.4m	N-79°-W			

第18表　溝　　跡

	位置	図面	検出長	幅	深さ	方向	その他	時期	写真
SD1	10	第49図	12.0 m	0.4 m	4～30 cm	N－8°－E		ⅣB	
2	10～12	第49図	27.6 m	0.9 m	26～28 cm	N－12・27°－E N－73°－W		ⅣB	38
3	7	第49図	12.9 m	0.9 m	124 cm	N－30°－E		ⅡB新	39～45
4	9～10	第49図	13.0 m	2.8 m	85 cm	N－8°－W		ⅢA	46・48
5	11	第49図	9.0 m	0.6 m	20 cm	N－10°－W	SD4と同方向	ⅢA	
6	11	第49図	12.5 m	0.8 m	8 cm	N－5°－W	SD4と同方向	ⅢA	
7	B－3～5	第49図	12.0 m	0.6 m	12 cm	N－85°－E	SA1と同方向	ⅢB	
8	A－18～20	第49図	15.8 m	0.5 m	8 cm	N－17.5°－E N－63°－W		ⅣA	
9	B－14		2.7 m	0.3 m	5 cm	N－10°－E			
10	17	第49図	9.1 m	1.5 m	92 cm	N－24°－E		ⅣA	47
11	A－16	第49図	3.5 m	0.4 m	20 cm	N－69°－W			
12	B－14	第49図	5.5 m	0.8 m	15 cm	N－83°－W			
13	A－19	第49図	1.1 m	0.3 m	12 cm	N－13°－E			
14	A－19	第49図	1.2 m	0.3 m	14 cm	N－12°－E			

第19表　土坑・性格不明遺構

	位置	図面	平面形	長軸	短軸	深さ	方向	その他	時期	写真
SK1	B－10	第67図	方形	1.8 m	1.6 m	8 cm	N－77°－W	SK2と並んで配置	ⅣB	49
2	B－10	第67図	方形	1.6 m	1.5 m	22 cm	N－81°－W		ⅣB	50
3	A－11	第67図	楕円形	1.9 m	1.2 m	70 cm	N－69°－W		ⅣB	
4	B－5	第67図	楕円形	1.7 m	1.2 m	17 cm	N－89°－W			51
5	A－7	第67図	楕円形	1.6 m	0.7 m	62 cm	N－89°－W		Ⅲ	52
6	B－1～2	第67図		0.8 m	0.5 m	30 cm	——		Ⅲ	
7	A－6	第67図		0.5 m	0.4 m	10 cm	——		ⅡB	
8	A－7	第67図		0.8 m	0.6 m	28 cm	——			
9	A－5	第67図	楕円形	0.6 m	0.5 m	12 cm	——			
10	A－20	第67図	楕円形	0.9 m	0.6 m	8 cm	N－53°－W		ⅡA	53
11	A－19	第67図	長方形	1.8 m	1.0 m	36 cm	N－78°－W	SK12と並んで配置	ⅣB	54
12	A－19	第67図	長方形	2.1 m	0.9 m	14 cm	N－76°－W		ⅣB	55
13	B－19	第68図	楕円形	1.4 m	1.0 m	18 cm	——			56
14	A－17	第68図	円形	2.6 m	1.1 m	86 cm	——			
15	A－17	第68図	円形	1.9 m	1.2 m	32 cm	——			57
16	A－17	第68図	長方形	1.4 m	1.1 m	64 cm	N－76°－W	SK20と並んで配置	ⅣB	58
17	B－18	第68図	長方形	1.3 m	0.4 m	20 cm	——			62
18	A－16	第68図	楕円形	1.8 m	1.1 m	28 cm	N－58°－W			59
19	A－16	第68図	長方形	3.0 m	1.1 m	44 cm	N－76°－W		ⅣB	60
20	A－16	第68図	長方形	1.5 m	1.2 m	68 cm	N－75°－W		ⅣB	61
21	A－15	第68図	長方形	1.2 m	0.8 m	28 cm	N－19°－E		ⅣB	
SX1	21			4.2 m	2.7 m		——		ⅣB～	63

第20表　竪穴住居跡・竪穴遺構出土遺物数量表(1)

S I-1　出土遺物数量表　(総数　363点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	95	12	
2層	1		
床面	21	1	石器2、鉄滓1
P.3	36	1	
P.5	5	1	
4層	168	17	瓦1、金属製品1

S I-2　出土遺物数量表　(総数　10点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	9		
2層			瓦1

S I-3　出土遺物数量表　(総数　320点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	54	1	
2層	55	3	
3層	24		
床面	31		
P.1	16		
P.2	7		
P.3	7	1	
P.5	5		
P.8	31		
貼床	79	6	金属製品1

S I-4　出土遺物数量表　(総数　143点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	134	3	土製品1、砥石1、敲石1
床面	3		

S I-5　出土遺物数量表　(総数　29点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	26		土製品1、砥石1
床面	1		

S I-6　出土遺物数量表　(総数　31点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	31		

S I-7　出土遺物数量表　(総数　16点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	15	1	

S I-8　出土遺物数量表　(総数　148点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	49	1	金属製品1、石器1
2層	11		
床面	78		
P.4	6		

S I-9　出土遺物数量表　(総数　232点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	215		金属製品1、石器1
P.1	12		
P.2	1		
P.3	2		

S I-10　出土遺物数量表　(総数　137点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	124	7	
床面	2		
P.1	4		

S I-11　出土遺物数量表　(総数　470点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	267	8	金属製品1、石器3
床面	42	2	金属製品1、土製品1
P.1	14		
P.2	8	1	
P.3	19	1	
P.4	7		
P.5	1		
P.8	3		
P.9	85	1	
貼床	5		

S I-12　出土遺物数量表　(総数　365点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	231	8	金属製品1、磨石1
2層	11		
床面	94	1	
P.3	5		
P.4	1		
P.5	9		
P.7	3		

S I-13　出土遺物数量表　(総数　59点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	13		
貼床	46		

S I-14　出土遺物数量表　(総数　618点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	453	10	弥生土器2、石器1、石製品1、砥石1
床面	76		金属製品
P.2	5		
P.3	23		
P.4	29		砥石1
P.5	5		
P.6	10		

第 20 表　竪穴住居跡・竪穴遺構出土遺物数量表(2)

S I -15　出土遺物数量表　（総数　1396 点）

出土状況	土師器	須恵器	その他
1 層	337	30	瓦 1、金属製品 1
2 層	681	38	石器 4
床面	27		
カマド底面	4		
カマド埋土	39	1	石器 2
P. 1	3		
P. 3	13		
P. 5	3		
P. 6	7		
P. 8	61	4	
P. 9	35	3	
P. 10	4	1	
P. 11	93	4	

S I -16　出土遺物数量表　（総数　947 点）

出土状況	土師器	須恵器	その他
1 層	474	29	
2 層	338	20	
3 層	12		
床面	7		
P. 1	63		
P. 4	2	1	
P. 6	1		

S I -17　出土遺物数量表　（総数　1776 点）

出土状況	土師器	須恵器	その他
1 層	977	70	金属製品 2、土製品 1
2 層	494	77	金属製品 1、鉄滓 3
床面	4	1	
P. 1	1		
P. 2	19		
P. 4	9		
P. 5	27		
P. 6	35		
P. 7	4		
P. 9	51		

S I -18　出土遺物数量表　（総数　697 点）

出土状況	土師器	須恵器	その他
1 層	431	18	
2 層	138	7	
床面	8		
カマド埋土	27	2	金属製品 1
P. 1	17		
貼床	48		

S I -19　出土遺物数量表　（総数　116 点）

出土状況	土師器	須恵器	その他
1 層	52	2	
2 ～ 5 層	50		
床面	12		

S I -20　出土遺物数量表　（総数　1994 点）

出土状況	土師器	須恵器	その他
1 a 層	1351	27	金属製品 2、砥石 1、石器 5
1 b 層	26	5	
床面 2	71		
2 層	465	6	弥生土器 2
床面 1	22		
3 層	1		
カマド a b	1	1 2	瓦 3
P. 3	1		

S I -21　出土遺物数量表　（総数　562 点）

出土状況	土師器	須恵器	その他
1 層	526		
床面	5		
P. 1	4		
P. 2	13		
P. 3	4		

S I -22　出土遺物数量表　（総数　360 点）

出土状況	土師器	須恵器	その他
1 ～ 3 層	248		金属製品 1、石器 1、石製品 1、土製品 1、弥生土器 2
床面	1		
P. 1	6		
P. 3	45		
P. 4	8		
P. 5	7		
貼床	38		石器 1

S I -23　出土遺物数量表　（総数　38 点）

出土状況	土師器	須恵器	その他
貼床	37		磨石 1

S I -24　出土遺物数量表　（総数　228 点）

出土状況	土師器	須恵器	その他
1 層	149	1	瓦 1
2 層	74		瓦 1、金属製品 1、石器 1

S I -25　出土遺物数量表　（総数　239 点）

出土状況	土師器	須恵器	その他
1 層	215		金属製品 2、磨石 1
床面	21		

S I -26　出土遺物数量表　（総数　60 点）

出土状況	土師器	須恵器	その他
1 層	59		弥生土器 1

第21表　遺構出土遺物数量表

遺構名	弥生土器	土師器	須恵器	陶器・磁器	瓦(布)	瓦(いぶし)	金属製品	鉄滓	石器 石製品	その他	計
ＳＢ１		111	6				4	1		礫２	124
ＳＡ１		808	80		5		2	2	6	礫24、硅化木１	928
ＳＡ２		591	63		4		10	1	7	礫１、土玉１	678
ＳＡ３		54									54
ＳＤ１		12	1								13
ＳＤ２		182	14		3	3	1	3	1	礫２	209
ＳＤ３	8	5086	13				2		24	土製品15、骨片１、礫93	5242
ＳＤ４	1	640	60		4		1		1	礫10	717
ＳＤ５		41	5							礫１	48
ＳＤ６		36	4		1		1				42
ＳＤ７		86	4				1			礫２	93
ＳＤ８		99	4								103
ＳＤ９		18						1		礫１	20
ＳＤ10		125	8								133
ＳＤ11		25	2	1			2				30
ＳＤ12		4									4
ＳＤ13		5									5
ＳＤ14		4									4
ＳＫ１		10	1			1					12
ＳＫ２		1	2								3
ＳＫ３		68	9	1		3			2		83
ＳＫ４		18									18
ＳＫ５		315	35							硅化木１	351
ＳＫ６		10									10
ＳＫ７		31								小玉石１	32
ＳＫ８		28									28
ＳＫ９		12									12
ＳＫ10		35							2		37
ＳＫ11		12	1								13
ＳＫ12		34		2		4			1	礫２、土師質土器１	44
ＳＫ13		3									3
ＳＫ14		24								礫１	0
ＳＫ15		14									14
ＳＫ16		25	2				1			土製品１	29
ＳＫ17											0
ＳＫ18		43	1								44
ＳＫ19		53	3	2		3	3				64
ＳＫ20		42	3	3			2			礫１、土師質土器１	52
ＳＫ21		7		1		1	1	1		礫１、土師質土器１	13
ＳＸ１		34	4	6		4	2				50
計	9	8735	326	16	17	19	33	9	42	165	9384

第 22 表　ピット出土遺物数量・土層註記表(1)

No	位置	出土遺物・埋土その他	No	位置	出土遺物・埋土その他
1	B-17	10 YR3/3 粘土質シルト	66	A-7	
2	A-15		67	A-21	10 YR3/3 粘土質シルト
3	B-12	土師器 1 点	68	A-21	土師器 2 点、10 YR3/3 粘土質シルト
4	B-12		69	A-21	10 YR2/2 黒褐色シルト
5	B-13		70	A-21	10 YR2/2 黒褐色シルト
6	B-19		71	A-21	土師器 3 点、石 1 点、10 YR3/3 粘土質シルト
7	B-12		72	A-21	土師器 4 点、10 YR3/3 粘土質シルト
8	B-13		73	A-21	10 YR3/3 粘土質シルト
9	AB-13		74	A-20・21	土師器 2 点、古銭 1 点、10 YR3/3 粘土質シルト
10	B-12	土師器 35 点、須恵器 1 点、石器 1 点	75	A-20	土師器 2 点、10 YR2/2 黒褐色シルト
11	B-12		76	A-20	10 YR4/4 褐色シルト
12	B-12	土師器 21 点	77	A-20	土師器 2 点、10 YR3/3 粘土質シルト
13	B-5	土師器 1 点	78	A-20	10 YR3/3 粘土質シルト
14	A-12		79	A-20	10 YR3/3 粘土質シルト
15	A-12	10 YR4/3 鈍い黄褐色砂質シルト	80	A-20	10 YR4/4 褐色シルト
16	B-13	土師器 2 点、10 YR4/3 鈍い黄褐色砂質シルト	81	A-20	10 YR3/3 粘土質シルト
17	B-9	土師器 4 点	82	A-20	10 YR3/3 粘土質シルト
18	B-9		83	A-20	土師器 7 点、10 YR3/3 粘土質シルト
19	B-10	須恵器 1 点	84	A-20	土師器 6 点、10 YR2/2 黒褐色シルト
20	A-14	土師器 9 点、須恵器 2 点	85	A-20	10 YR3/3 粘土質シルト
21	A-14	土師器 12 点	86	A-20	10 YR2/2 黒褐色シルト
22	B-14	土師器 3 点	87	A-20	10 YR2/2 黒褐色シルト
23	B-11		88	A-20	10 YR4/4 褐色シルト
24	B-11		89	A-20	土師器 2 点、石 1 点、10 YR4/2 灰黄褐色シルト
25	B-11	土師器 3 点	90	A-20	土師器 24 点、鉄製品 8 点、10 YR5/2 灰黄褐色シルト
26	B-13	土師器 1 点	91	B-11	10 YR4/3 鈍い黄褐色砂質シルト
27	B-13	土師器 5 点、10 YR6/3 鈍い黄橙色シルト	92	A-20	土師器 15 点
28	A-19	10 YR2/2 黒褐色シルト	93	A-20	土師器 1 点、10 YR4/4 褐色シルト
29	A-19	10 YR3/3 粘土質シルト	94	A-20	土師器 11 点、10 YR3/3 粘土質シルト
30	A-19	10 YR2/2 黒褐色シルト	95	A-20	土師器 2 点、石 1 点、10 YR2/2 黒褐色シルト
31	B-1		96	A-20	土師器 60 点、石 1 点、10 YR3/3 粘土質シルト
32	A-19	土師器 7 点、10 YR3/3 粘土質シルト	97	A-19・20	土師器 6 点、磁器 1 点、10 YR4/2 灰黄褐色シルト
33	A-18	10 YR4/3 鈍い黄褐色シルト	98	A-20	土師器 3 点、10 YR2/2 黒褐色シルト
34	A-19	10 YR2/2 黒褐色シルト	99	B-20	土師器 2 点、10 YR2/2 黒褐色シルト
35	A-20	10 YR3/3 粘土質シルト	100	B-20	10 YR3/3 粘土質シルト
36	A-5	土師器 7 点、須恵器 1 点	101	B-20	10 YR2/2 黒褐色シルト
37	A-5		102	B-20	10 YR2/2 黒褐色シルト
38	A-3		103	B-20	10 YR2/2 黒褐色シルト
39	B-20	石 1 点、10 YR2/2 黒褐色シルト	104	B-20	10 YR2/2 黒褐色シルト
40	B-3		105	B-20	土師器 3 点、10 YR2/2 黒褐色シルト
41	B-3		106	B-20	10 YR2/2 黒褐色シルト
42	B-3		107	A-19	土師器 4 点、10 YR4/4 褐色シルト
43	A-3		108	A-19	土師器 3 点、10 YR3/3 粘土質シルト
44	A-2		109	A-19	土師器 9 点、10 YR2/2 黒褐色シルト
45	AB-3		110	A-19	10 YR2/2 黒褐色シルト
46	B-11		111	A-19	土師器 2 点、10 YR2/2 黒褐色シルト
47	B-11		112	A-19	10 YR4/4 褐色シルト
48	B-11		113	B-11	土師器 3 点、10 YR4/3 鈍い黄褐色砂質シルト
49	B-11		114	A-19	土師器 2 点、10 YR2/2 黒褐色シルト
50	A-3		115	A-19	土師器 6 点、10 YR2/2 黒褐色シルト
51	A-3	土師器 6 点	116	A-19	10 YR3/3 粘土質シルト
52	B-2	土師器 2 点	117	A-19	10 YR3/3 粘土質シルト
53	A-2	土師器 20 点	118	A-19	土師器 3 点、10 YR4/4 褐色シルト
54	A-20	10 YR3/3 粘土質シルト	119	A-19	土師器 31 点、須恵器 1 点、10 YR2/2 黒褐色シルト
55	A-18	黒色土	120	A-19	土師器 3 点、10 YR3/3 粘土質シルト
56	A-2	土師器 1 点	121	B-20	10 YR2/2 黒褐色シルト
57	A-3	土師器 10 点、須恵器 1 点、石 1 点	122	B-19	10 YR3/3 粘土質シルト
58	A-8		123	B-19	10 YR2/2 黒褐色シルト
59	B-19	10 YR3/3 粘土質シルト	124	B-11	10 YR4/2 灰黄褐色シルト
60	A-19	10 YR3/3 粘土質シルト	125	B-12	土師器 3 点、10 YR3/2 黒褐色シルト
61	A-19	土師器 1 点、10 YR2/2 黒褐色シルト	126	A-19	10 YR4/4 褐色シルト
62	B-13	土師器 7 点、須恵器 1 点、石器 2 点、10 YR3/3 暗褐色シルト	127	A-19	土師器 3 点、10 YR3/3 粘土質シルト
63	B-17	土師器 5 点	128	A-19	10 YR4/4 褐色シルト
64	A-18	土師器 14 点	129	A-19	土師器 1 点、10 YR3/3 粘土質シルト
65	A-17	土師器 6 点、10 YR4/3 鈍い黄褐色シルト	130	A-19	土師器 4 点、10 YR2/2 黒褐色シルト

第 22 表　ピット出土遺物数量・土層註記表(2)

No	位置	出土遺物・埋土その他	No	位置	出土遺物・埋土その他
131	A-19	土師器 7 点、10 YR2/2 黒褐色シルト	196	B-14	10 YR5/3 鈍い黄褐色シルト
132	A-19	土師器 4 点、10 YR2/2 黒褐色シルト	197	B-14	10 YR4/3 鈍い黄褐色シルト
133	B-19	土師器 1 点、須恵器 1 点、10 YR2/2 黒褐色シルト	198	B-14	土師器 11 点、須恵器 1 点、10 YR3/4 暗褐色シルト
134	A-19	土師器 15 点、瓦 1 点、10 YR3/3 粘土質シルト	199	B-13	10 YR5/6 黄褐色シルト
135	A-18	土師器 9 点、10 YR5/4 鋭い黄褐色シルト	200	A-13	10 YR4/3 鈍い黄褐色砂質シルト
136	A-18	土師器 4 点、10 YR2/2 黒褐色シルト	201	B-14	10 YR4/4 褐色シルト
137	A-18	土師器 3 点、10 YR5/4 鋭い黄褐色シルト	202	B-14	10 YR3/3 粘土質シルト
138	A-18	10 YR5/4 鋭い黄褐色シルト	203	B-13	10 YR4/4 褐色シルト
139	A-18	10 YR5/4 鋭い黄褐色シルト	204	A-13	土師器 5 点、10 YR4/4 褐色シルト
140	A-18	土師器 1 点、10 YR2/2 黒褐色シルト	205	A-13	土師器 3 点、10 YR5/6 黄褐色砂質シルト
141	A-18	土師器 7 点、須恵器 1 点、10 YR3/3 粘土質シルト	206	B-19	
142	B-12	10 YR3/2 黒褐色シルト	207	A-12・13	土師器 7 点、10 YR5/4 鈍い黄褐色シルト
143	A-18	土師器 10 点、鉄製品 1 点	208	A-13	10 YR4/3 黄褐色シルト
144	A-18	土師器 6 点、須恵器 1 点、10 YR4/4 褐色シルト	209	A-14	
145	A-18	土師器 24 点、須恵器 3 点、10 YR3/2 黒褐色シルト、柱痕跡あり	210	A-14	土師器 1 点、10 YR4/3 鈍い黄褐色シルト
146	A-18	土師器 23 点、鉄製品 1 点、10 YR2/2 黒褐色シルト	211	A-21	土師器 1 点、10 YR2/2 黒褐色シルト
147	A-18	10 YR3/3 粘土質シルト	212	A-20	土師器 6 点、10 YR2/2 黒褐色シルト
148	A-18	土師器 6 点、10 YR4/4 褐色シルト	213	A-20	10 YR4/4 褐色シルト
149	B-18	土師器 1 点、10 YR3/3 粘土質シルト	214	A-20	土師器 8 点、須恵器 1 点、10 YR3/3 粘土質シルト
150	B-18	10 YR3/3 粘土質シルト	215	A-20	10 YR3/3 粘土質シルト
151	A-18	土師器 10 点、10 YR3/3 粘土質シルト	216	A-13	10 YR4/2 灰黄褐色シルト
152	A-17	土師器 6 点、10 YR3/3 粘土質シルト	217	B-13	土師器 2 点、10 YR5/2 灰黄褐色シルト質粘土
153	A-18	土師器 4 点、10 YR3/3 粘土質シルト	218	B-13	10 YR4/2 灰黄褐色シルト
154	B-17	土師器 2 点、10 YR4/4 褐色シルト	219	B-13	10 YR4/2 灰黄褐色シルト
155	B-18	土師器 6 点、10 YR3/3 粘土質シルト	220	B-13	土師器 1 点、10 YR4/3 鈍い黄褐色砂質シルト
156	B-12	10 YR3/3 暗褐色シルト	221	A-13	土師器 2 点、10 YR3/2 黒褐色シルト
157	B-17	土師器 4 点、10 YR3/3 粘土質シルト	222	A-13	10 YR4/2 灰黄褐色シルト
158	B-17	土師器 1 点、10 YR4/4 褐色シルト	223	A-13	10 YR5/3 鈍い黄褐色砂質シルト
159	B-18	土師器 1 点、石 1 点、10 YR3/3 粘土質シルト	224	A-13	土師器 2 点、10 YR4/3 鈍い黄褐色砂質シルト
160	B-12	10 YR4/4 褐色シルト	225	A-13	土師器 1 点、10 YR4/3 鈍い黄褐色砂質シルト
161	A-17	10 YR4/4 褐色シルト	226	B-15	
162	A-17	土師器 2 点、10 YR5/2 灰黄褐色シルト	227	A-13	10 YR4/3 鈍い黄褐色砂質シルト
163	B-12	土師器 5 点、10 YR3/3 暗褐色シルト	228	A-13	10 YR4/2 灰黄褐色シルト
164	A-17	土師器 17 点、鉄滓 1 点、10 YR4/4 褐色シルト	229	A-13	10 YR6/6 明黄褐色シルト
165	B-17	土師器 7 点、10 YR3/3 粘土質シルト	230	A-13	土師器 4 点、10 YR4/3 鈍い黄褐色砂質シルト
166	B-17	10 YR4/4 褐色シルト	231	A-13	10 YR4/3 鈍い黄褐色砂質シルト
167	B-17	土師器 11 点、10 YR3/3 粘土質シルト	232	A-13	10 YR4/3 鈍い黄褐色砂質シルト
168	A-12		233	A-14	10 YR3/3 暗褐色シルト
169	A-12	土師器 7 点、10 YR3/4 暗褐色シルト	234	A-17	10 YR5/2 灰黄褐色シルト
170	B-16	土師器 4 点、鉄製品 1 点、10 YR3/2 黒褐色シルト	235	A-18	土師器 3 点、10 YR3/3 粘土質シルト
171	B-16	土師器 15 点、10 YR3/3 粘土質シルト	236	A-18	土師器 16 点、須恵器 1 点、10 YR4/2 灰黄褐色シルト
172	B-16	土師器 6 点、10 YR5/3 鈍い黄褐色シルト	237	A-19	土師器 1 点、須恵器 1 点、10 YR3/3 粘土質シルト
173	B-16	土師器 1 点、10 YR3/2 黒褐色シルト	238	A-19	土師器 4 点、10 YR2/2 黒褐色シルト
174	B-16	土師器 9 点、10 YR3/3 粘土質シルト	239	A-19	土師器 2 点、10 YR2/2 黒褐色シルト
175	B-16	土師器 8 点、10 YR3/3 粘土質シルト	240	A-19	土師器 1 点、10 YR2/2 黒褐色シルト
176	B-16	土師器 10 点、石 1 点、10 YR3/3 粘土質シルト	241	A-20	10 YR3/3 粘土質シルト
177	B-16	土師器 3 点、10 YR4/4 褐色シルト	242	B-4	
178	B-16	10 YR2/2 黒褐色シルト	243	A-14	
179	B-16	土師器 1 点、10 YR2/2 黒褐色シルト	244	A-18	
180	B-16	土師器 8 点、10 YR2/2 黒褐色シルト	245	A-19	
181	B-16	10 YR3/3 粘土質シルト	246	A-20	
182	A-15	土師器 1 点、10 YR5/3 鋭い黄褐色シルト	247	A-20	
183	B-12	10 YR4/4 褐色シルト	248	A-20	
184	B-12	10 YR3/2 黒褐色シルト	249	A-20	
185	B-17	10 YR2/2 黒褐色シルト	250	B-20	
186	B-13	土師器 7 点、10 YR4/3 鈍い黄褐色シルト	251	B-20	
187	B-13	10 YR3/3 暗褐色シルト	252	B-12	10 YR3/3 暗褐色シルト
188	B-13	10 YR4/3 鈍い黄褐色シルト	253	A-19	
189	B-13	10 YR4/3 鈍い黄褐色砂質シルト	254	B-19	
190	B-13	10 YR4/2 灰黄褐色シルト	255	A-16	
191	B-14		256	B-19	
192	B-14	10 YR2/2 黒褐色シルト	257	A-7	
193	A-18	土師器 1 点、10 YR2/2 黒褐色シルト	258	A-7	
194	B-14	10 YR4/4 褐色シルト	259	A-7	
195	B-13	土師器 6 点、須恵器 1 点、10 YR4/4 褐色シルト			

第23表　グリット遺物出土数量表

グリット	弥生土器	土師器	須恵器	陶器・磁器	瓦(布)	瓦(いぶし)	金属製品他	鉄滓	石器・石製品	その他	計
A-1		991	40	18		3	17			礫98、土製品1	1168
A-2		1468	39	14	1	4	16	5	2	礫112、硅化木1	1662
A-3		790	25	2		1	13	2		礫45	878
A-4		656	26	8			4	1	3	礫50	748
A-5		1342	50	14		2	2	3	1	礫60、土製品3、土製支脚1	1478
A-6		789	43	8		1	2	4	2	礫39、土製品1	889
A-7		2054	66	4		3	9	13	9	礫16、土製品2、硅化木2	2178
A-8		1360	102	26	2	10	38	7	11	礫77、硅化木1	1634
A-9		313	32	4		5	2	2		礫12、木片1	371
A-10		273	35	5		1	6			礫4	324
A-11		423	41	22			22	1		礫12	521
A-12		8	2								10
A-13		82	1	2			1				86
A-14		135	12	5			3	1		礫4、硅化木1	161
A-15		47	6	9			3	2		礫13、木片1	81
A-16		81	4			1		3		礫1、土師質土器2	92
A-17		207	12	56	1	9	13		6	礫21、木片2	327
A-18		440	9							礫10	459
A-19		317	11	6		1	1		1	礫3	340
A-20		75	1	5		1				礫3、木製品2	87
A-21		2		2						硅化木1	5
B-1		514	24	9			6			礫11、土製品2	566
B-2		508	25	4			14	1		礫5	557
B-3		425	20	4			6			礫7	462
B-4		330	13	7			2		1	礫12	365
B-5		431	26	14			7			礫20、木片1	499
B-6		405	28	16			5			礫25、硅化木1	480
B-7		1316	64	23		3	7	9	2	土製品2、硅化木2、礫17	1445
B-8		506	74	23	2	6	21	1	1	礫23	657
B-9		331	59	23	1	11	15	1		礫8、硅化木1、古銭1	451
B-10		318	44	24		7	7			礫25	425
B-11		232	36	32	1		2			礫17	320
B-12		27	4	3		1				礫1	36
B-13		95	4	1			2				102
B-14		84	9	6			1			礫1、硅化木1	102
B-15		403	43	175	1	16	26	1	3	礫15、硅化木2	685
B-16		55	3							礫1	59
B-17		125	7							礫1	133
B-18		24				1					25
B-19		50	4	2						礫1	57
B-20		16	1	3		1				礫2	23
B-21		1	1	2		1					5
計		18049	1046	581	9	89	273	57	42	807	20953

第 24 表　第 23 次調査　遺物出土数量表

遺構名	層位他	土師器	須恵器	他
ＳＩ-１	１層	353	1	
	２層	251	1	土製品２、硅化木１
	３層	42		
	１～３	31		礫１
	カマド	66		礫１、支脚１
	P.2	7		
	P.3	10		
	P.4			石２
	P.8	4		
ＳＤ-１	１層	261	5	
	２層	63	2	
ＳＤ-２	１層	117		石４、砥石１
ＳＤ-３	１層	26		石１
ＳＤ-４	１層	30		
ＳＤ-５	１層	21		鉄滓１
ＳＲ-１	１層	117		
基本層Ⅰ層		289	1	鉄製品１、陶器２
基本層Ⅱ層		97	2	

第 25 表　弥生土器観察表

単位：cm

NO	図版	出土状況	器種	外面	内面	残存	高さ	口径	底径	備考	写真
B-1		SI 20 埋 1 層	蓋	沈線文、刺突文	ミガキ	1/3				上端部の相対する位置に完通口あり	80
B-2		SI 22 埋 1 層		横位原体圧痕（R）2 条列点刺突文		口縁部破片				口唇部に連続刺突文	80
B-3		SI 20 埋 2 層		単節ＬＲ縄文横位沈線文	ナデ	体部破片	80				80
B-4		SI 20 埋 1 層		単節ＬＲ縄文	ナデ	体部破片	80				80
B-5		SI 20 埋 2 層		単節ＬＲ縄文、交互刺突文	ナデ	口縁部破片	80				80
B-6		SI 22 埋 1 層		横位沈線文	ミガキ	体部破片	80				80

第 26 表　非ロクロ土師器観察表(1)

単位：cm

NO	図版	出土状況	器種	外面	内面	残存	高さ	口径	底径	備考	分類	写真
C-1	12	SI 5 床面	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヨコナデ	1/8	残：4.9	(16.0)		胎土：緻密（細かい） 内面黒色仕上げ	I A	68
C-2		SI 5 埋 1 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヨコナデのちヘラミガキ	口縁部破片				内外面黒色仕上げ 胎土：緻密(細かい)	II B	68
C-3		SI 5 埋 1 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヨコナデ	口縁部破片				内外面黒色仕上げ 胎土：緻密(細かい)	II B	68
C-4		SI 5 埋 1 層	坏	口：ヨコナデ	口、体：ヨコナデ	口縁～体部破片				内外面黒色仕上げ 胎土：緻密(細かい)	I B	68
C-5		SI 6 埋 1 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヨコナデ	口縁部破片				内外面黒色仕上げ 胎土：緻密(細かい)	I A	68
C-6		SI 6 埋 1 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヨコナデ	口縁部破片				内外面黒色仕上げ 胎土：緻密(細かい)	I B	68
C-7	12	SI 8 床面	壺	口、体：ヘラケズリ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	1/2	残：9.6	(11.4)		胎土：緻密（砂粒やや含む）		68
C-8	12	SI 8 床面	甕	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデのちヘラミガキ	1/6	残：16.1	(22.0)		胎土：砂粒を含む		68
C-9		SI 8 床面	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口、体：ヨコナデ	口縁～体部破片				胎土：緻密(細かい)	I B	68
C-10	20	SI 9 貼床	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヨコナデ	1/6	残：3.9	(14.2)		内外面黒色仕上げ 胎土：緻密(細かい)	II A	68
C-11		SI 9 貼床	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヨコナデ	口縁部破片				胎土：緻密(細かい)	II A	68
C-12	20	SI 11 埋 1 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口：ヨコナデ 体：ヨコナデのちヘラミガキ(放射状)	1/6	残：4.0			内外面黒色仕上げ 胎土：緻密で細かい	I A	69
C-13	20	SI 11 埋 1 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヨコナデ	1/8	残：3.3	(14.8)		内外面黒色仕上げ 胎土：緻密で細かい	II A	69
C-14	20	SI 11 埋 1 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ(部分的)	口：ヨコナデ 体：ヨコナデのちヘラケズリ	1/6	4.5	(13.2)		胎土：緻密(細かい)	II B	69
C-15	20	SI 11 埋 1 層	坏	口：ヨコナデのちヘラミガキ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ(部分的)	口、体：ヘラミガキ(放射状)	1/4	残：4.6	(13.0)		胎土：緻密で細かい	V B	69
C-16	20	SI 11 埋 1 層	甑	口：ヨコナデ 体上：ハケ目体下：ヘラケズリ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	1/3	24.7	(21.2)	8.2	胎土：砂粒を含む		69
C-17	20	SI 11 埋 1 層	甕	口：ヨコナデ 体：ハケ目のちヘラナデ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	4/5	残：24.5	17.2		底部欠損体下部器面剥落 胎土：砂粒を含む		69
C-18	26	SI 12 埋 1 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヘラミガキ 黒色処理	1/4	残：3.9	(15.0)		胎土：緻密		69
C-19	26	SI 12 埋 1 層	甕	口：ヨコナデのち 体：ハケ目のち軽いナデ	口：ヨコナデ、ヘラナデ 体：ヘラナデ	1/4	残：13.5	(24.9)		胎土：砂粒を含む		69
C-20		SI 12 床面	坏		口、体：ヘラミガキ 黒色処理	口縁部破片				外面器面剥落 胎土：緻密		69
C-21	26	SI 13 貼床	坏	口：ヘラミガキ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口：ヨコナデ 体：ヘラミガキ（放射状）	2/5	4.8	(12.1)		胎土：砂粒含む		69
C-22		SI 21 埋 1 層	坏	体：ヘラケズリ	体：ヘラミガキ	体部破片				胎土：緻密(細かい) 口縁部と体部の境に段		73
C-23	44	SI 22 埋 1 層	坏	口：ヘラミガキ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口、体：ヘラミガキ 黒色処理	1/4	残：2.4	(12.7)		胎土：緻密で砂粒を含む		73
C-24	44	SI 22 床面	坏	口～体：ヘラミガキ 体下～底部：ヘラケズリのちヘラミガキ	口、体：ヘラミガキ 黒色処理	3/4	6.4	15.0		胎土：緻密		73
C-25	44	SI 22 埋 1 層	高坏	ヘラケズリ	ヘラケズリ 端部：ヨコナデ	脚部下半 1/2				胎土：緻密で細かい 窓：4 個(方孔)		73
C-26	44	SI 22 埋 1 層	甕			口縁部 1/4	残：6.0	(11.0)		調整は器面剥落で不明		73
C-27	44	SI 25 床面	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヨコナデ	完形	4.4	13.8		胎土：緻密で細かい	I B	73
C-28	44	SI 25 床面	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヨコナデ 黒色処理	4/5	残：4.9	14.2		胎土：緻密	I A	73
C-29	44	SI 25 床面	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヨコナデ	4/5	5.1	14.4		胎土：緻密(砂粒を含む)	I B	73
C-30	44	SI 25 床面	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヨコナデ	1/4	残：5.5	(16.1)		胎土：緻密で細かい 内外面黒色仕上げ	I A	73
C-31	44	SI 25 床面	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヨコナデ(部分的へラミガキ)	3/4	4.2	15.0		胎土：緻密で細かい 内外面黒色仕上げ	II B	73
C-32	44	SI 25 床面	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ(部分的にヘラミガキ)	口、体：ヨコナデ	4/5	5.0	15.8		胎土：緻密で細かい 内外面黒色仕上げ	II A	73

※カット内は復元した数値

第 26 表　非ロクロ土師器観察表 (2)

単位：cm

NO	図版	出土状況	器種	外面	内面	残存	高さ	口径	底径	備考	分類	写真
C-33	44	SI 25 床面	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ（部分的ヘラミガキ）	口、体：ヨコナデ	2/3	4.2	(15.8)		胎土：緻密で細かい	II A	73
C-34	44	SI 25 床面	壺	口：ヨコナデのちヘラミガキ 体：ヘラミガキ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	口縁部	残：6.2	14.6		胎土：緻密で細かい 口縁を下にして出土		74
C-35		SI 25 床面	甕	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口縁部破片				胎土：緻密で細かい		74
C-36	45	SI 25 床面	甑	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ(部分的)	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	ほぼ完形	残：17.1	20.0		胎土：砂粒を含む		74
C-37	45	SI 25 床面	甕	口：ヨコナデ 体：ハケ目のち軽いナデ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	3/4	15.1	(15.2)	6.2	胎土：砂粒多く含む 体下部器面の剥落が著しい		74
C-38	45	SI 25 床面	甑	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	9/10	14.4	(15.0)	7.5	胎土：砂粒を多く含む 体下部器面の剥落著しい		74
C-39	45	SI 25 床面	鉢	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	9/10	9.2	22.2	8.0	胎土：緻密		74
C-40	45	SI 26 埋 1 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口体：ヘラミガキ 黒色処理	1/4	4.0	(12.4)		胎土：緻密で細かい		74
C-41	45	SI 26 埋 1 層	坏	口：ヨコナデ	黒色処理	破片	残：5.0			胎土：緻密		74
C-42	45	SI 26 埋 1 層	甕	口：ハケ目のちナデ 体：ハケ目	口：ハケ目のちナデ 体：ヘラナデ	破片	残：14.5			胎土：砂粒を含む		74
C-43	58	SD 3 埋 1 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口、体：ヨコナデ	1/2	4.8	(14.4)		胎土：緻密で細かい 内外面黒色仕上げ	I A	75
C-44	58	SD 3 埋 1 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口：ヨコナデ 体：ヨコナデのち放射状ヘラミガキ(剣先形)	1/6	残：3.5	(13.7)		胎土：緻密で細かい 内外面黒色仕上げ	I A	75
C-45	58	SD 3 埋 1 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口、体：ヨコナデ	1/3	残：3.9	(14.3)		胎土：緻密で細かい 内面黒色仕上げ	II A	75
C-46	58	SD 3 埋 1 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口、体：ヨコナデ	口縁部 1/4	残：3.8	(13.2)		胎土：緻密で細かい 内外面黒色仕上げ	VI B	75
C-47	58	SD 3 埋 1 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口、体：ヨコナデ	1/3	5.0	(11.2)		胎土：緻密で細かい	III B	75
C-48	58	SD 3 埋 1 層	鉢	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヘラミガキ	1/5	残：4.2	(21.8)		胎土：緻密で砂粒 を含む	VI E	75
C-49	58	SD 3 埋 1 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヨコナデ	破片	残：4.4			胎土：緻密で細かい 内面黒色仕上げ	V A	75
C-50	58	SD 3 埋 1 層	鉢	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	破片	残：8.8			胎土：緻密で細かい 口縁部内外面黒色仕上げ	I	75
C-51	58	SD 3 埋 1 層	蓋	ナデ	ナデ	破片	残：1.9			胎土：緻密で砂粒を 含む		75
C-52	58	SD 3 埋 1 層	甕	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラナデ・ヘラミガキ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	2/3	17.6	19.8	(7.9)	胎土：緻密で砂粒を 含む	II	75
C-53	58	SD 3 埋 1 層	甕	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	破片	残：10.6			胎土：緻密で砂粒を 含む	I A	76
C-54	58	SD 3 埋 1 層	甕	口：ハケ目のちヨコナデ 体：ハケ目	口：ハケ目のちヨコナデ 体：ヘラナデ	3/4	22.9	(21.6)	7.0	胎土：緻密で砂粒を 含む	I D	75
C-55	58	SD 3 埋 1 層	甕	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	1/5	残：9.6			胎土：緻密で細かい	III B	75
C-56	59	SD 3 埋 1 層	手づくね土器	粘土紐積上げ痕	ヘラナデ	4/5	8.0	11.0	6.2	胎土：砂粒を多く含む 底部：ヘラケズリ		75
C-57	59	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口、体：ヨコナデ	口縁部 1/3	残：3.7	(13.0)		胎土：緻密で細かい	I B	75
C-58	59	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	1/8	残：3.7			胎土：緻密で細かい	I B	75
C-59	59	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口：ヨコナデ 体：ヨコナデのちヘラミガキ（放射状）	ほぼ 完形	4.2	12.6		胎土：緻密で細かい 外面黒色仕上げ	I B	75
C-60	59	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口：ヨコナデ 体：ヘラミガキ	1/2	5.2	(13.0)		胎土：緻密で細かい	I B	75
C-61	59	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口：ヨコナデ 体：ヨコナデのち放射状ヘラミガキ(剣先形)	2/5	4.1	(13.4)		胎土：緻密で細かい	I B	75
C-62	59	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口：ヨコナデ 体：ヨコナデのち放射状ヘラミガキ	1/6	残：5.4	(15.4)		胎土：緻密で細かい	I A	75
C-63	59	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヨコナデ	1/6	残：3.8	(3.6)		胎土：緻密で細かい	I B	75
C-64	59	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヨコナデ	1/2	4.2	(14.2)		胎土：緻密で細かい 外面黒色仕上げ	I A	75
C-65	59	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ(部分的)	口、体：ヨコナデ	1/2	5.4	(14.4)		胎土：緻密で細かい 内外面黒色仕上げ	I A	75
C-66	59	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口：ヨコナデ 体：ヨコナデのちヘラミガキ	1/4	残：4.2	(14.0)		胎土：緻密で細かい 内外面黒色仕上げ	I A	75
C-67	59	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヨコナデ	1/3	残：4.8	(14.8)		胎土：緻密で細かい 内外面黒色仕上げ	I B	75
C-68	59	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口：ヨコナデ 体：ヨコナデのち放射状ヘラミガキ(剣先形)	1/6	残：4.1	(14.8)		胎土：緻密で細かい	I A	75
C-69	60	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口：ヨコナデ 体：ヨコナデのちヘラミガキ	ほぼ 完形	5.1	14.4		胎土：緻密で細かい 内外面黒色仕上げ	I A	76
C-70	60	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヨコナデ	1/2	5.0	(13.0)		胎土：緻密で細かい 内外面黒色仕上げ	II B	76
C-71	60	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口：ヨコナデ 体：ヘラミガキ	1/4	3.7	(14.0)		胎土：緻密で細かい	II B	76
C-72	60	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヨコナデ	1/5	残：3.5	(13.8)		胎土：緻密で細かい	II A	76

※カッコ内は復元した数値

第 26 表　非ロクロ土師器観察表 (3)

単位：cm

NO	図版	出土状況	器種	外面	内面	残存	高さ	口径	底径	備考	分類	写真
C-73	60	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口：ヨコナデ 体：ヨコナデのち放射状ヘラミガキ(剣先形)	1/2	3.6	14.2		胎土：緻密で細かい 内外面黒色仕上げ	II A	76
C-74	60	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口、体：ヨコナデ	2/5	残：4.6	(14.8)		胎土：緻密で細かい 内外面黒色仕上げ	II B	76
C-75	60	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヨコナデ	1/5	残：4.1	(15.0)		胎土：緻密で細かい 内外面黒色仕上げ	II A	76
C-76	60	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口、体：ヨコナデ	1/2	4.5	(15.6)		胎土：緻密で細かい 内外面黒色仕上げ	II A	76
C-77	60	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヨコナデ	1/4	4.1	(16.1)		胎土：緻密で細かい 内外面黒色仕上げ	II A	76
C-78	60	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口、体：ヨコナデ	1/3	残：4.3	(17.6)		胎土：緻密で細かい	II B	76
C-79	60	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口：ヨコナデ 体：ヨコナデのちヘラミガキ	1/4	残：5.8	(19.6)		胎土：緻密で細かい 内外面黒色仕上げ	II A	76
C-80	60	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口、体：ヨコナデ	1/2	4.9	(14.8)		胎土：緻密で細かい 内外面黒色仕上げ	VI C	76
C-81	60	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	1/2	残：6.1	(9.8)		胎土：砂粒多く含む	III A	76
C-82	60	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口、体：ヘラナデのちヘラミガキ	1/5	残：4.8			胎土：緻密で細かい	III A	76
C-83	60	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ	口：ヨコナデ	1/4	残：5.2	(12.6)		胎土：緻密で細かい	VI A	76
C-84	60	SD 3 埋 2 層	坏	器面剝落のため不明	口：ヘラミガキ	口縁部 1/5	残：3.0	(16.0)		胎土：緻密で細かい 内面黒色仕上げ	VI D	76
C-85	60	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ		破片	残：4.4			器面剝落の為調整不明 胎土：緻密(砂粒を含む)	V B	75
C-86	60	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヘラミガキ 黒色処理	破片	残：4.0			胎土：緻密で細かい	V A	76
C-87	60	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヘラミガキ 黒色処理	破片	残：3.7			胎土：緻密で細かい	V A	76
C-88	60	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ	口、体：ヘラミガキ 黒色処理	破片	残：2.3			胎土：緻密（砂粒を含む）	V B	76
C-89	60	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ	口、体：ヨコナデ	破片	残：3.0			内面丹塗り 胎土：緻密で細かい	V A	76
C-90	60	SD 3 埋 2 層	坏	口、体：ヨコナデ	口、体：ヘラミガキ 黒色処理	破片	残：2.3			胎土：緻密で細かい	V A	76
C-91	60	SD 3 埋 2 層	坏	口：ヨコナデ	口：ヨコナデ	破片	残：1.7			内外面丹塗り 胎土：緻密で細かい	V B	76
C-92	61	SD 3 埋 2 層	坏	口、体：ヘラケズリ	口、体：ヘラナデ	4/5	5.1	12.1		胎土：緻密で細かい 口唇部ケズリによる面取り	IV	76
C-93	61	SD 3 埋 2 層	坏	口、体：ヘラケズリ	口：ヘラケズリ 体：ヘラナデ黒色処理	破片	残：3.2	(10.7)		胎土：緻密で細かい 口唇部ケズリによる面取り	IV	76
C-94	61	SD 3 埋 2 層	蓋	ナデ	ナデ	1/8	残：2.4			胎土：緻密で砂粒を含む		76
C-95	61	SD 3 埋 2 層	高坏	坏：ヘラケズリ 脚：ヘラケズリのちヘラミガキ	坏：ヘラミガキ 脚：ヘラケズリ		残：3.6			胎土：緻密で細かい 内外面黒色仕上げ	II	76
C-96	61	SD 3 埋 2 層	高坏	坏：ヘラケズリのちミガキ 脚：ヘラケズリのちヘラミガキ	坏：ヘラミガキ 脚：ヘラケズリ		残：5.6			胎土：緻密で細かい 内外面黒色仕上げ	II	76
C-97	61	SD 3 埋 2 層	高坏	脚：ヘラケズリ	坏：ヘラミガキ 脚：ヘラケズリ		残：4.0			胎土：緻密で細かい 外面：黒色仕上げ内面：黒色処理	II	76
C-98	61	SD 3 埋 2 層	高坏	脚：ナデ	脚：ナデ	破片	残：6.0			胎土：緻密で細かい	III	76
C-99	61	SD 3 埋 2 層	高坏	脚：ヘラミガキ	脚：ヘラケズリ、ナデ	脚部の 1/2	残：7.3			胎土：緻密で砂粒を含む	IV	76
C-100	61	SD 3 埋 2 層	高坏	脚：ハケ目のちヘラミガキ	坏：ナデ 脚：ヘラケズリ	脚部の 1/2	残：8.8			胎土：緻密で細かい	IV	76
C-101	61	SD 3 埋 2 層	壺	口：ヨコナデのちヘラミガキ	口：ヘラミガキ	口縁部 1/4	残：3.5	(13.6)		胎土：緻密で細かい	II A	76
C-102	61	SD 3 埋 2 層	壺	口：ヨコナデ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	口縁部 完形	残：6.1	13.6		胎土：緻密で砂粒を含む	II A	76
C-103	61	SD 3 埋 2 層	壺	口、体：ヘラミガキ	口、体：ヘラミガキ	口縁部 1/4	残：6.3	(12.8)		胎土：緻密で細かい 口縁部内外面黒色仕上げ	III A	76
C-104	61	SD 3 埋 2 層	壺	体：ヘラケズリのちヘラミガキ	体：ヘラナデ	体部 1/2	残：14.6		6.4	胎土：緻密で細かい 外面黒色仕上げ	III B	76
C-105	62	SD 3 埋 2 層	壺	口：ヨコナデ 体：ヘラナデのちヘラミガキ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	完形	33.6	19.7	9.0	胎土：緻密で砂粒含む	I A	77
C-106	61	SD 3 埋 2 層	甕	口：ヨコナデ 体：ハケ目のちヘラナデ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	完形	18.1	17.2	6.4	胎土：緻密で砂粒を含む、底部木葉痕	I D	77
C-107	62	SD 3 埋 2 層	甕	口：ヨコナデ 体：ヘラナデのちヘラミガキ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	2/3	残：21.0	20.0		胎土：砂粒を多く含む	I B	77
C-108	63	SD 3 埋 2 層	甕	体：ヘラナデ	体：ヘラナデ	2/3	残：22.0		8.0	胎土：砂粒を多く含む 底部木葉痕		77
C-109	62	SD 3 埋 2 層	甕	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	1/3	残：13.9	(21.6)		胎土：緻密で砂粒含む	I E	77
C-110	62	SD 3 埋 2 層	甕	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	1/4	残：7.3	(17.3)		胎土：砂粒を多く含む	I A	77
C-111	64	SD 3 埋 2 層	甕	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	破片	残：6.9			胎土：砂粒を多く含む	I A	77
C-112	64	SD 3 埋 2 層	甕	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	破片	残：7.8			胎土：砂粒多く含む	I D	77

※カッコ内は復元した数値

第 26 表　非ロクロ土師器観察表 (4)

単位：cm

NO	図版	出土状況	器種	外面	内面	残存	高さ	口径	底径	備考	分類	写真
C-113	64	SD 3埋2層	甕	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラナデ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	破片	残：8.4			胎土：砂粒多く含む	I A	77
C-114	63	SD 3埋2層	甕	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	口縁部 1/5	残：6.4	(24.0)		胎土：緻密で砂粒含む	I D	77
C-115	61	SD 3埋2層	甕	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	1/2	残：8.3	(13.6)		胎土：緻密で細かい	I D	77
C-116	64	SD 3埋2層	甕	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	破片	残：9.4			胎土：緻密で砂粒含む	I E	77
C-117	64	SD 3埋2層	甕	口：ヨコナデ 体：ヘラナデのちヘラミガキ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	破片	残：6.4			胎土：緻密で砂粒含む	I E	77
C-118	64	SD 3埋2層	甕	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	破片	残：10.9			胎土：砂粒多く含む	I C	77
C-119	64	SD 3埋2層	甕	口：ヨコナデ 体：ナデ（単位不明）	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	破片	残：6.6			胎土：砂粒多く含む	I B	77
C-120	63	SD 3埋2層	甕	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	1/2	16.1	16.7	(4.9)	胎土：緻密で細かい 外面黒色仕上げ	III	77
C-121	63	SD 3埋2層	鉢	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヨコナデ	2/3	9.6	(13.7)	8.9	胎土：緻密で細かい	II	77
C-122	63	SD 3埋2層	甕	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	1/2	残：10.3	12.5		胎土：緻密で砂粒含む	I B	77
C-123	63	SD 3埋2層	片口土器	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	1/5	残：7.8	(13.8)		胎土：緻密で細かい 内外面黒色仕上げ		77
C-124	63	SD 3埋2層	甕	口：ヨコナデ	口：ヨコナデ	口縁部 1/4	残：4.6	12.8		胎土：緻密で細かい	IV	77
C-125	63	SD 3埋2層	手づくね土器	粘土紐積上痕	ヘラナデ	ほぼ完形	6.0	9.3	5.4	胎土：砂粒多く含む 底部木葉痕		77
C-126	63	SD 3埋2層	手づくね土器		ヘラナデ	4/5	4.9	9.0	4.9	胎土：砂粒多く含む		77
C-127	65	SD 3埋3層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口：ヨコナデ 体：ヨコナデのちヘラミガキ	ほぼ完形	4.4	16.0		胎土：緻密で細かい 内外面黒色仕上げ	II B	78
C-128	65	SD 3埋3層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口：ヨコナデ 体：ヨコナデのち放射状ヘラミガキ（複線）	破片	残：3.4			胎土：緻密で細かい	I A	78
C-129	65	SD 3埋3層	壺	口：ヨコナデ 体：ハケ目のちヘラミガキ（部分的）	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	3/4	残：14.0	23.6		胎土：緻密砂粒を含む	I B	78
C-130	65	SD 3埋3層	甕	口：ヨコナデ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	破片	残：5.7			胎土：緻密で砂粒含む	I E	78
C-131	66	SD 3埋3層	筒形土器	ヘラケズリのちヘラミガキ	粘土紐積上痕 ナデ		残：19.1	(6.8)		胎土：緻密で砂粒含む		78
C-132	66	SD 3埋3層	筒形土器	ヘラケズリのちヘラミガキ 火はねの痕跡あり	粘土紐積上痕		残：9.4		5.7	胎土：緻密で砂粒含む		78
C-133		SD 3埋3層	甕	ヘラナデ	ヘラナデ	破片			(6.6)	胎土：砂粒多く含む		78
C-134	66	SD 3埋4層	坏		ヘラミガキのち黒色処理	破片	残：2.0			胎土：緻密で砂粒を含む	V A	78
C-135	66	SD 3埋4層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口，体：ヘラミガキ黒色処理	破片	残：5.3			胎土：緻密で細かい	V C	78
C-136	66	SD 3埋4層	高坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	坏部 1/4	残：4.1	(9.4)		胎土：緻密で砂粒を含む	I	78
C-137	66	SD 3埋4層	甕	口：ヨコナデ	口：ヨコナデ	破片	残：5.4			胎土：砂粒多く含む	I A	78
C-138	66	SD 3埋4層	甑	ヘラケズリのちヘラミガキ	ヘラナデのちヘラミガキ	体下部 1/4	9.0		7.8	胎土に砂粒多く含む		78
C-139	66	SD 3埋4層	高坏	脚：ヘラケズリのちヘラミガキ	脚：ナデ	脚部 1/2	残：6.0			胎土：緻密で砂粒を含む、外面丹塗り	IV	78
C-140	58	SD 3埋1層	坏	口：ヨコナデ	口：ヘラミガキ	破片	残：3.5			胎土：緻密で細かい 内外面黒色仕上げ	V C	76
C-141	58	SD 3埋1層	蓋	ナデ	ナデ	破片	残：0.7			胎土：緻密で細かい 外面丹塗り、端部刻み目		76
C-142		SD 4埋1層	坏	口：ナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヘラミガキ	破片				胎土：緻密で砂粒を含む		78
C-143	69	SK 7埋1層	鉢	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	4/5	9.6	16.3	7.8	胎土：緻密で砂粒含む		79
C-144	69	SK 7埋1層	甕	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	ほぼ完形	16.8	18.7	6.9	胎土：砂粒を多く含む 外面器面の剥落著しい	I D	79
C-145	69	SK 9埋1層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口：ヨコナデ 体：ヨコナデのちヘラミガキ	1/5	残：3.4	(12.2)		胎土：緻密で細かい		79
C-146	69	SK 10埋1層	高坏	脚：ナデ	脚：ナデ	脚 1/2	残：7.5			胎土：緻密で砂粒含む		79
C-147	69	SK 10埋1層	高坏	脚：ナデ	脚：ヘラケズリのちナデ	脚 1/2	残：7.1			胎土：緻密で砂粒含む		79
C-148	69	A-3GI層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちナデ	口：ヨコナデ 体：ヨコナデのちヘラミガキ（放射状）	2/3	5.6	14.0		胎土：緻密で砂粒含む		80
C-149	70	A-3GI層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリのちヘラミガキ	口：ヨコナデ 体：ヘラミガキ（放射状）	1/4	5.0	(14.3)		胎土：緻密で細かい 内外面黒色仕上げ	I A	80
C-150	70	B-2GI層	壺	口：ヨコナデのちヘラミガキ 頸部：ハケ目のちナデ	口：ヨコナデ 体：ハケ目のちナデ	口縁部 1/3	残：4.5	(17.3)		胎土：緻密で砂粒を含む		80

＊カッコ内は復元した数値

第27表　ロクロ土師器観察表（1）

単位：cm

NO	図版	出土状況	器種	外面	内面	残存	高さ	口径	底径	備考	分類	写真
D-1	7	SI 1掘り方	坏	ロクロ調整	ヘラミガキ 黒色処理	4/5	4.2	13.7	6.2	回転糸切り無調整	II a	67
D-2	7	SI 1掘り方	坏	ロクロ調整	ヘラミガキ 黒色処理	2/3	4.4	15.1	6.8	回転糸切り無調整	I b	67
D-3	7	SI 1床面	坏	ロクロ調整	ヘラミガキ 黒色処理	1/2	4.6	(14.6)	5.5	回転糸切り無調整	II b	67
D-4	7	SI 1掘り方	坏	ロクロ調整	ヘラミガキ 黒色処理	4/5	4.35	14.8	5.2	回転糸切り無調整	II b	67
D-5	7	SI 1 P 5	坏	ロクロ調整	ヘラミガキ 黒色処理	4/5	5.9	17.2	6.4	回転糸切り無調整	II b	67
D-6	7	SI 1床面	高台付坏	ロクロ調整	ヘラミガキ	底部1/2	残：2.6		9.0	再酸化		67
D-7	7	SI 1床面	高台付坏	ロクロ調整	底：放射状ミガキ 黒色処理	底部1/3	残：1.9		(7.25)			67
D-8	7	SI 1床面	甕	ロクロ調整　体：ヘラケズリ	ロクロ調整	口縁部1/3	残：6.6	(27.0)				67
D-9	7	SI 1 P 5	甕	ロクロ調整	ロクロ調整	口縁部1/3	残：4.1	(15.6)				67
D-10	7	SI 3 P 8	坏	ロクロ調整	ヘラミガキ 黒色処理	1/3	4.4	(14.0)	5.2	回転糸切り無調整	I b	67
D-11	7	SI 3 P 8	坏	ロクロ調整	ヘラミガキ（放射状） 黒色処理	2/3	4.5	14.4	5.4	回転糸切り無調整	III a	67
D-12	7	SI 3 P 8	坏	ロクロ調整	ヘラミガキ 黒色処理	ほぼ完形	4.9	13.6	5.0	回転糸切り無調整	III a	67
D-13	7	SI 3 P 8	小甕	ロクロ調整	ロクロ調整	1/3	残：7.9		6.1			67
D-14	7	SI 3 P 8	甕	ロクロ調整	ロクロ調整　体下：ヘラケズリ	1/4	残：4.6	(21.0)				67
D-15	10	SI 3埋1層	小甕	ロクロ調整	ロクロ調整　体下：ヨコナデ有	1/4	残：10.7	(14.4)				67
D-16	10	SI 3埋2層	甕	ロクロ調整	ロクロ調整	1/2	残：8.4	17.6				67
D-17	10	SI 3埋1層	甕	ロクロ調整	ロクロ調整	1/5	残：19.1	(20.4)				67
D-18	10	SI 3埋2層	甕	口：ヨコナデ 体：ハケ目のちナデ	ヘラミガキ 黒色処理	1/4	残：6.9	(26.9)				67
D-19	10	SI 4埋1層	小甕	ロクロ調整	ロクロ調整	1/2	13.4	(13.8)	9.0	回転糸切り無調整		68
D-20	10	SI 4埋1層	甕	ロクロ調整　体：ヘラケズリ	ロクロ調整　体：ヘラケズリ	口縁部1/3	残：7.2	(21.6)				68
D-21		SI 4埋1層		ヘラケズリ、ヘラナデ	ヘラナデ	体部破片				把手剥落		68
D-22	20	SI 10床面	小甕	ロクロ調整　体下：ヘラケズリ	ロクロ調整	2/3	残：12.1	15.4		口縁内面煤付着		68
D-23	26	SI 15床面	坏	ロクロ調整	ヘラミガキ 黒色処理	4/5	5.3	14.3	6.2	手持ヘラケズリ 切り離し不明	II a	69
D-24	26	SI 15埋2層	坏	ロクロ調整	ヘラミガキ（底：放射状） 黒色処理	4/5	5.2	15.8	6.4	回転糸切り無調整	II b	69
D-25	26	SI 15埋2層	坏	ロクロ調整	ヘラミガキ 黒色処理	4/5	5.9	16.6	6.4	回転糸切り無調整	II b	69
D-26	26	SI 15埋2層	坏	ロクロ調整	ヘラミガキ（底：放射状） 黒色処理	ほぼ完形	5.4	15.6	5.4	回転糸切り無調整	II b	69
D-27	26	SI 15埋1層	坏	ロクロ調整	ヘラミガキ（底：放射状） 黒色処理	4/5	4.5	14.5	6.2	回転糸切り無調整	II b	69
D-28	26	SI 15埋2層	坏	ロクロ調整	ヘラミガキ 黒色処理	ほぼ完形	4.6	14.7	5.9	回転糸切り無調整	II b	69
D-29	27	SI 15埋2層	小甕	ロクロ調整	ロクロ調整	1/2	残：8.1	(13.4)				69
D-30	27	SI 15埋2層	甕	ロクロ調整	ヘラミガキ 黒色処理	口縁部1/4	残：7.0	(17.0)				70
D-31	27	SI 15埋2層	甕	ロクロ調整　体：ヘラケズリ	口：ヨコナデ　体：ヘラナデ	1/4	残：17.5	(23.0)				70
D-32	27	SI 15埋2層	把手付甑	ロクロ調整　体下：ヘラケズリ	ヨコナデ	1/2	残：24.0	(22.0)				70
D-33	28	SI 15埋2層	壺	ロクロ調整　体下：ヘラケズリ	ロクロ調整	体部1/2	残：9.3			頸部煤付着		70
D-34	27	SI 15埋1層	耳皿	ロクロ調整	ロクロ調整	ほぼ完形	3.7	7.0	2.5			70
D-35	28	SI 16床面	坏	ロクロ調整　体下：ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	ほぼ完形	4.1	12.4	6.2	回転糸切り無調整	III a	70
D-36	28	SI 16埋1層	坏	ロクロ調整	ヘラミガキ（底：放射状） 黒色処理	1/2	4.0	(13.2)	6.2	回転糸切り無調整	II a	70
D-37	28	SI 16埋2層	坏	ロクロ調整	ヘラミガキ 黒色処理	4/5	5.2	14.9	7.8	回転糸切り無調整	II a	70
D-38	28	SI 16埋1層	甕	ロクロ調整　体：ヘラケズリ	ロクロ調整	ほぼ完形	26.8	18.6	7.8	回転ヘラ切り無調整		71
D-39	30	SI 17床面	坏	ロクロ調整　体下：ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	ほぼ完形	4.1	13.3	6.4	回転糸切り手持ヘラケズリ	III a	71
D-40	30	SI 17埋1層	坏	ロクロ調整　体下：ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	1/4	4.4	(14.4)	6.8	手持ヘラケズリ	III a	71

：カッコ内は復元した数値

第 27 表　ロクロ土師器観察表 (2)

単位：cm

NO	図版	出土状況	器種	外面	内面	残存	高さ	口径	底径	備考	分類	写真
D-41	30	SI 17 埋 1 層	坏	ロクロ調整　体下：ヘラケズリ	ヘラミガキ（底：放射状） 黒色処理	ほぼ 完形	5.8	15.5	6.4	回転糸切り手持ヘラケズリ	II a	71
D-42	32	SI 17埋 1 層	小甕	ロクロ調整	ロクロ調整	1/4	残：7.4		5.4	回転糸切り無調整		71
D-43	30	SI 17 埋 1 層	甕	ロクロ調整　体：ヘラケズリ	ヘラナデ	1/3	残：22.6		16.0	ヘラケズリ		71
D-44	34	SI 18 埋 1 層	甕	ロクロ調整	回転ヘラナデ	3/4	残：26.3		8.0	回転ヘラ切り		71
D-45	32	SI 18 カマド 埋土	甕	ロクロ調整	ロクロ調整	1/5	残：13.1	(21.6)				71
D-46	34	SI 18 カマド 埋土	甕	ロクロ調整　体：ヘラケズリ	ロクロ調整	1/5	残：27.1	(22.7)				71
D-47	34	SI 19 床面	坏	ロクロ調整　体：ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	4/5	6.0	14.8	6.6	手持ヘラケズリ	II a	72
D-48	34	SI 19 床面	甕	口：ヨコナデ 体：ロクロ調整のちハケ目	口：ヨコナデ 体：ロクロ調整のちハケ目	1/5	残：30.3	(20.6)				72
D-49	37	SI 20 埋 1 層	坏	ロクロ調整　体下：ヘラケズリ	ヘラミガキ	4/5	3.9	12.9	6.4	回転糸切り手持ヘラケズリ	III a	72
D-50	37	SI 20 埋 1 層	坏	ロクロ調整	ヘラミガキ（底：放射状） 黒色処理	完形	5.5	14.4	6.8	手持ヘラケズリ	III a	72
D-51	37	SI 20 埋 1 層	甕	ロクロ調整	ロクロ調整	1/4	残：7.2	(18.0)				72
D-52	37	SI 20 埋 1 層	甕	ロクロ調整　体上：ヨコナデ 体下：ヘラケズリ	ロクロ調整　体：ヨコナデ	1/3	残：21.1	21.2				72
D-53	44	SI 24 埋 1 層	坏	ロクロ調整	ヘラミガキ 黒色処理	1/4	4.6	(14.4)	6.3		II b	73
D-54	44	SI 24 埋 1 層	甕	ロクロ調整	ロクロ調整	1/4	残：9.6	(23.5)				73
D-55		SA 2 埋 2 層	坏	ロクロ調整	ヘラミガキ 黒色処理	底部			5.5	回転糸切り無調整		74
D-56		SD 4 埋 1 層	坏		ヘラミガキ 黒色処理	底部破片				回転糸切り無調整		78
D-57		SK 5 埋 1 層	坏	ロクロ調整	ヘラミガキ 黒色処理	破片						79
D-58	69	SK 6 埋 2 層	甕	ロクロ調整	ロクロ調整	口縁部 1/3						79
D-59	70	A-5 G I 層	蓋	ヘラケズリ	ロクロ調整	1/2	残：2.6			残幅7.3		80

※カッコ内は復元した数値

第 28 表　須恵器観察表 (1)

単位：cm

NO	図版	出土状況	器種	外面	内面	残存	高さ	口径	底径	備考	分類	写真
E-1	7	SI 1 掘り方	坏	ロクロ調整	ロクロ調整	1/2	4.7	14.6	6.1	回転糸切り無調整	II b	67
E-2	7	SI 1 掘り方	坏	ロクロ調整	ロクロ調整	2/3	4.1	14.3	(5.2)	回転糸切り無調整	II b	67
E-3	10	SI 4 埋 1 層	坏	ロクロ調整	ロクロ調整		4.45	(14.6)	4.8	回転糸切り無調整	III b	68
E-4	10	SI 4 埋 1 層	坏	ロクロ調整	ロクロ調整		4.1	(14.5)	5.9	回転糸切り無調整	II b	68
E-5		SI 10 埋 1 層	甕	ロクロ調整　オサエ目、ナデ	ロクロ調整、平行叩目	体部破片				2 点が溶着した 状態で出土		68
E-6	26	SI 12 床面	盤	ロクロ調整　底：ケズリ	ロクロ調整	破片	残：2.4	(19.1)				69
E-7	26	SI 14 埋 1 層	坏	ロクロ調整	ロクロ調整	口縁部 1/4	残：3.3	(13.1)				69
E-8	27	SI 15 埋 2 層	坏	ロクロ調整	ロクロ調整	2/3	4.2	14.4	5.6	回転糸切り無調整	II b	70
E-9	27	SI 15 埋 1 層	坏	ロクロ調整	ロクロ調整	ほぼ 完形	4.7	14.2	6.5	回転糸切り無調整	II b	70
E-10	27	SI 15 埋 2 層	坏	ロクロ調整	ロクロ調整	ほぼ 完形	5.1	14.8	6.5	回転糸切り無調整	I a	70
E-11		SI 15 埋 2 層	甕	格子叩目	おさえ目	体部破片						70
E-12	28	SI 16 埋 2 層	坏	ロクロ調整	ロクロ調整	1/2	3.9	13.8	6.6	回転ヘラ切り無調整	II a	70
E-13	28	SI 16 埋 2 層	坏	ロクロ調整	ロクロ調整	完形	4.1	13.6	6.4	回転糸切り無調整	I a	70
E-14	30	SI 16 埋 1 層	広口 壺	ロクロ調整のち平行叩目 のち回転ヘラケズリ	ロクロ調整のち押え目	4/5	残：14.8			底部丸底		70
E-15	30	SI 17 埋 1 層	坏	ロクロ調整	ロクロ調整	4/5	3.8	13.8	6.6	回転糸切り無調整	II a	71
E-16	32	SI 18 埋 1 層	坏	ロクロ調整	ロクロ調整	4/5	4.0	14.3	7.0	回転ヘラ切りのち 手持ちヘラケズリ	II a	72
E-17	32	SI 18 カマド 埋土	坏	ロクロ調整	ロクロ調整	完形	3.5	13.6	7.4	回転ヘラ切り無調整	III a	72
E-18	32	SI 18 埋 1 層	坏	ロクロ調整	ロクロ調整	ほぼ 完形	4.2	13.8	6.8	火はねの為調整不明	II a	72
E-19	37	SI 20 床面	坏	ロクロ調整	ロクロ調整	2/3	3.8	14.2	7.4	回転糸切り無調整	III a	72

※カッコ内は復元した数値

第 28 表　須恵器観察表 (2)

単位：cm

NO	図版	出土状況	器種	外面	内面	残存	高さ	口径	底径	備考	分類	写真
E-20	37	SI 20 床面	坏	ロクロ調整	ロクロ調整	3/4	3.6	14.2	6.8	手持ちヘラケズリ	II a	72
E-21	37	SI 20 床面	坏	ロクロ調整	ロクロ調整	1/2	4.0	(14.0)	(6.4)	手持ちヘラケズリ	I a	72
E-22	37	SI 20 埋 1 層	坏	ロクロ調整	ロクロ調整	2/3	4.0	13.8	7.6	回転糸切りのち 手持ちヘラケズリ	II a	72
E-23	37	SI 20 埋 1 層	坏	ロクロ調整	ロクロ調整	1/2	5.8	(15.4)	6.0	回転糸切り無調整	II a	72
E-24	37	SI 20 埋 1 層	鉢	ロクロ調整　体：手持ちヘラケズリ	ロクロ調整	1/3	残：6.7		7.5	手持ちヘラケズリ		72
E-25		SB1、P8 埋 1 層	坏	ロクロ調整	ロクロ調整	1/6				回転ヘラ切り無調整		74
E-26		SA 2 埋 2 層	坏	ロクロ調整	ロクロ調整	1/6				回転糸切り無調整		74
E-27		SA 2 埋 1 層	坏	ロクロ調整	ロクロ調整	底部破片				手持ヘラケズリ（平底） 切り離し不明		74
E-28		SA 2 埋 1 層	坏	ロクロ調整	ロクロ調整	底部破片				回転糸切り無調整		75
E-29	61	SD 3 埋 2 層	短頸壺	ロクロ調整、刺突文	ロクロ調整	口縁～肩部の 1/3	残：5.1	(10.3)				78
E-30		SD 4 埋 1 層	坏	ロクロ調整	ロクロ調整	底部破片				回転ヘラ切り		78
E-31		SD 6 埋 1 層	坏	ロクロ調整	ロクロ調整	破片				回転糸切り無調整		79
E-32		SD 7 埋 1 層	坏			破片						79
E-33	70	A-2 G I 層	蓋	ロクロ調整	ロクロ調整		残：2.1					80
E-34	70	A-2 G I 層	蓋	ロクロ調整	ロクロ調整		残：2.6					80
E-35		B-10 G I 層										80
E-36	70	A-4 G1 層	長頸壺	ロクロ調整	ロクロ調整 頸部：輪積み痕跡あり	頸部	残：10.5					80

※カッコ内は復元した数値

第 29 表　丸瓦・軒丸瓦観察表

単位：cm

NO	図版	出土状況	名称	凸面	凹面	備考	写真
F-1		SI 1 掘り方	丸瓦	縄叩目、ナデ	布目		67
F-2		SI 16 埋 2 層	軒丸瓦			重弁連花文軒丸瓦、残存：瓦当部	71
F-3	38	SI 20 カマド	丸瓦	縄叩目、ナデ	布目	幅：18.5、高さ：7.5、残存：1/2	72
F-4		SA 1 埋 1 層	丸瓦	縄叩目、ナデ	布目	破片	74
F-5		SA 2 埋 1 層	丸瓦	縄叩目、ナデ	布目	破片	75
F-6	66	SD 4 埋 1 層	軒丸瓦			細弁蓮花文軒丸瓦、残存：瓦当部	79
F-7		SK 12 埋 1 層	丸瓦	ナデ	ナデ	燻瓦	79

第 30 表　平瓦・軒平瓦観察表

単位：cm

NO	図版	出土状況	名称	凸面	凹面	備考	写真
G-1		SI 2 埋 2 層	平瓦	ナデ	ナデ	燻瓦	67
G-2		SI 15 埋 1 層	平瓦	縦縄叩目→ナデ	布目→ナデ		70
G-3	38	SI 20 カマド 南壁	平瓦	縦縄叩目	布目、部分的ナデ	広端：27.5、狭端：24.5、高さ：8.5、長さ：38.0	72
G-4	38	SI 20 カマド 北壁	平瓦	縦縄叩目、ナデ	布目、部分的ナデ	広端：推定 31.0、狭端：24.5、高さ：8.5、長さ：41.0	73
G-5		SI 24 埋 1 層	平瓦	縦縄叩目、ナデ	布目、ナデ	広端：不明、狭端：25、高さ：8.0、残存長：33.5	73
G-6		SI 24 埋 2 層	平瓦	縦縄叩目、ナデ	布目、ナデ	広端：不明、残存長：23.0	73
G-7		SA 2 埋 1 層	平瓦	縦縄叩目、ナデ	布目、ナデ	破片	75
G-8		SD 4 埋 1 層	平瓦	縦縄叩目、ナデ	布目、ナデ	破片	78
G-9		SD 6 埋 1 層	平瓦	縦縄叩目、ナデ	布目、ナデ	破片	79
G-10		SK 12 埋 1 層	平瓦	ナデ	ナデ	燻瓦、破片	79
G-11		SK 19 埋 1 層	平瓦	ナデ	ナデ	燻瓦、破片	80
G-12		SP 134	平瓦	ナデ	ナデ	燻瓦、破片	80

第31表　その他の瓦観察表

NO	図版	出土状況	名称	凸面	凹面	備考	写真
H-1		SD 2埋1層	道具瓦	ナデ	ナデ	燻し瓦	75
H-2		SD 2埋1層	熨斗瓦	ナデ	ナデ	燻し瓦、幅：12.5	75
H-3		SK 1埋1層	熨斗瓦	ナデ	ナデ	燻し瓦、幅：13.5	79
H-4		SK 3埋2層	熨斗瓦	ナデ	ナデ	燻し瓦、幅：12.5	79

第32表　陶器観察表

単位：cm

NO	図版	出土状況	器種	外面	内面	残存	高さ	口径	底径	備考	写真
I-1	28	SI16埋2層	長頸瓶	ロクロ調整　体下部回転ヘラケズリ	ロクロ調整	2/5	残：24.2		8.6	灰釉陶器、K-14	71
I-2		SD 8埋1層				破片				常滑（中世）	79
I-3		SD 10埋1層				破片				瀬美（12～13C）	79
I-4		SK 12埋1層	スリ鉢			破片				丹波（17C前半）	79
I-5		SK 16埋1層				破片				近世	80
I-6		SK 20埋1層	皿		鉄絵型押	破片				美濃（17C前半）	80
I-7		SK 21埋1層	皿			破片				瀬戸美濃（17C前半以前）	80
I-8	70	A-6 G I層	碗	ロクロ調整	ロクロ調整	底部	残：2.1		8.2	灰釉陶器、K-90	80
I-9		B-15Gカクラン	四耳壺			破片					80
I-10		A-5 G I層				破片					80

第33表　磁器観察表

NO	図版	出土状況	器種	外面	内面	残存	高さ	口径	底径	備考	写真
J-1		SD 11埋1層				破片				中国産白磁	79
J-2		SK 12埋1層	碗			破片				白磁（17C初頭）	79
J-3		SK 19埋1層	碗			破片				肥前（17C）	80

第34表　金属製品他観察表

単位：cm

NO	図版	出土状況	名称	最大長	最大幅	最大厚	備考	写真
N-1	26	SI 12埋1層	鉄鏃	3.5	1.6	0.3		69
N-2	32	SI 17埋2層	鉄斧	8.4	3.8	1.8		71
N-3	32	SI 17埋1層	喰？	11.7	2.6	0.6		71
N-4	32	SI 17埋1層	刀子	10.7	1.5	0.7	茎長6.0	71
N-5	45	SI 25埋1層	鎌	9.8	3.1		棟厚さ0.2～0.4	74
N-6	45	SI 25埋1層	紡錘車			0.3	5.4（直径）、0.4（孔直径）	74
N-7		SA 1埋1層	碗形滓					74

第35表　石器・石製品観察表（1）

単位：cm・g

NO	図版	出土状況	名称	最大長	最大幅	最大厚	重さ	石材	備考	写真
K-1	12	SI 4埋1層	砥石	13.7	7.8	27.0	314	砂質凝灰岩		68
K-2	12	SI 4埋1層	敲石	9.7	3.9	3.0	203	石英安山岩質凝灰岩	磨面あり	68
K-3	12	SI 5埋1層	砥石	7.8	5.0	1.7	119	石英安山岩質凝灰岩		68
K-4	26	SI 14埋1層	砥石	5.0	5.5	1.8		石英安山岩質凝灰岩		69
K-5	28	SI 15埋1層	砥石	6.0	4.3	3.6	105	石英安山岩質凝灰岩	断面四角形	70
K-6	30	SI 16埋2層	砥石	5.9	3.9	3.5	79	石英安山岩質凝灰岩	断面四角形	71
K-7	30	SI 16埋1層	砥石	8.1	5.8	5.1	175	石英安山岩質凝灰岩		71
K-8	30	SI 16埋2層	石製模造品	5.2	2.1	0.5	8.7	頁岩		71

第35表　石器・石製品観察表（2）

単位：cm・g

NO	図版	出土状況	名称	最大長	最大幅	最大厚	重さ	石材	備考	写真
K-9	37	SI 20 埋1層	砥石	12.9	3.8	2.1	148	石英安山岩質凝灰岩		73
K-10	44	SI 22 埋1層	白玉	直径	0.45	0.25	0.1	頁岩？	貫通孔の直径 0.15	73
K-11	59	SD 3 埋1層	石製品	7.6	1.6	0.7	12.8	頁岩		76
K-12	59	SD 3 埋1層	磨石	9.2	10.3	7.1		安山岩		76
K-13	64	SD 3 埋2層	敲石	12.35	8.4	4.3	595	安山岩		78
K-14	64	SD 3 埋2層	砥石	15.9	5.8	3.8	333	石英安山岩質凝灰岩		78
K-15	65	SD 3 埋2層	凹み石	15.4	10.2	5.7		石英安山岩質凝灰岩		78
K-16	65	SD 3 埋2層	磨石	11.4	6.2	3.2	409	石英安山岩		78
K-17	65	SD 3 埋2層	石核	4.3	2.8	1.2	14.0	黒曜石		78
K-18	65	SD 3 埋2層	石製模造品（有孔円盤）	3.35	2.9	7.5	11.0	頁岩		78
K-19		SD 3 埋2層	石製模造品素材？	8.8	7.6	1.4	80	頁岩	（粘板岩）、石製模造品の未製品？	78
K-20		SD 3 埋3層	磨石	6.1	3.2	1.6	49	砂質頁岩		78
K-21		SD 3 埋3層	石製模造品素材？	5.8	5.2	1.3	41	頁岩	（粘板岩）、石製模造品の未製品？	78
K-22	69	SK 3 埋2層	石製紡錘車	1.9	4.2	1.3	31.4	蛇紋岩	貫通孔直径 0.8、表面ヘラミガキ、線刻あり	79
K-23	69	SK 10 埋1層	剝片	2.2	1.9	0.7	3.3	黒曜石		79
K-24	69	SK 10 埋1層	二次加工のある剝片	2.1	1.2	0.8	1.5	黒曜石		79
K-25	70	SI 22 貼床	大型板状安山岩製石器	12.7	12.9	1.3	202	安山岩	板状節理、刃角 68～74°、推定縁辺角 10～11°	80
K-26		SI 20 埋1層	石錐	2.6	0.9	0.7	1.3	頁岩	折損品	80
K-27		SI 20 埋1層	微細剝離痕のある剝片	5.9	5.0	1.8	32.2	流紋岩		80
K-28		SI 20 埋1層	剝片	5.5	5.0	1.4	35.0	頁岩		80
K-29		SI 20 埋1層	剝片	6.6	4.3	1.5	30.2	石英安山岩		80
K-30		SI 20 埋1層	石核	6.7	5.2	2.5	40.6	石英安山岩質凝灰岩	剝片粗材	80
K-31		SI 22 埋1層	石核	5.4	4.9	3.2	55.5	流紋岩		80
K-32	70	A-2 G I 層	石製模造品（剣形）	2.7	0.9	0.3	1.2	緑色片岩	先端だけ側面研磨	80
K-33	70	SI-14 埋1層	白玉	直径	0.35	0.3	0.1以下	緑色片岩	貫通孔の直径 0.2	80
K-34		SD-3 埋1層	磨石	34.8	22.8	13.3	13 kg	安山岩		80

第36表　土製品観察表（1）

NO	図版	出土状況	名称	最大長	最大幅	最大厚	備考	写真
P-1	12	SI 4 埋1層	土玉	直径	1.0	1.0	貫通孔の直径 0.3	68
P-2	12	SI 5 埋1層	土玉	直径	3.1	2.9	貫通孔の直径 0.3	68
P-3	20	SI 11 床面	土玉	直径	0.45	0.4	貫通孔の直径 0.1	69
P-4	30	SI 16 埋1層	土玉	直径	4.1	2.9	貫通孔の直径 0.6	71
P-5	32	SI 17 埋1層	土玉	直径	1.1	1.0	貫通孔の直径 0.3	71
P-6	59	SD-3 埋1層	土玉	直径	2.1	1.4	貫通孔の直径 0.3	76
P-7	64	SD-3 埋2層	土製紡錘車	推定直径	5.2	2.5	ヘラミガキのち黒色仕上げ処理、貫通孔の直径 0.6	78
P-8	64	SD-3 埋2層	土製紡錘車	推定直径	5.2	2.4	ヘラミガキ、貫通孔の直径 0.6	78
P-9	64	SD-3 埋2層	土玉	直径	3.1	2.3	貫通孔の直径 0.1～0.2	78
P-10	64	SD-3 埋2層	土玉	直径	1.2	1.1	貫通孔の直径 0.15	78
P-11		SD 3 埋2層	支脚	残存長	9.2	6.1		78
P-12	70	B-7 G I 層	土製紡錘車	推定直径	5.1	2.5	ヘラミガキ、孔の直径 0.7	81

第 36 表　土製品観察表 (2)

単位：cm

NO	図版	出土状況	名称	最大長	最大幅	最大厚	備考	写真
P-13	70	SA2	土玉	直径	3.1	3.8	貫通孔の直径 0.7～1.0、ナデの単位不明確	81
P-14	70	A-5 G I 層	土玉	直径	3.4	3.4	孔は貫通していない	81
P-15	70	B-7 G I 層	土玉	直径	2.6	2.0	貫通孔の直径 0.6	81
P-16	70	B-1 G I 層	土玉	直径	1.2	0.8	貫通孔の直径 0.2	81
P-17	70	A-7 G I 層	土玉	直径	0.95	0.9	孔は貫通していない	81
P-18	70	A-7 G I 層	土製品	1.6	0.9	0.9	上下からの孔は貫通していない	81
P-19	70	A-1 G I 層	土製品	3.55	3.75			81
P-20	70	B-1 G I 層	土製品	2.35	1.5	1.5	表裏に縦方向のスリット	81
P-21	70	A-6 G I 層	土錘	5.0	1.7	1.5	孔の直径 (0.5)、中央のふくらみは部分的にケズリによる整形	81
P-22		A-5 G I 層	土製品	残:2.7	1.0	0.7	多孔式甑の底部の再利用か？	81
P-23	70	A-5 G I 層	土製品	残:2.7	0.95	0.65	土製模造品勾玉？	81

第 37 表　土師質土器観察表

単位：cm

NO	図版	出土状況	器種	外面	内面	残存	高さ	口径	底径	備考	写真
U-1	69	SK 12	坏	ロクロ調整	ロクロ調整	3/4	2.4	9.4	6.0	回転糸切りのちナデ	79
U-2	69	SK 21	坏	ロクロ調整	ロクロ調整	底部	残：1.6		5.6	回転糸切りのちナデ	80
U-3	70	A-16GI 層	坏	ロクロ調整、体下端：ケズリ	ロクロ調整	ほぼ完形	2.6	9.4	5.4	回転糸切りのちナデ	80
U-4	70	A-16GI 層	坏	ロクロ調整、体下端：ケズリ	ロクロ調整	完形	2.9	9.4	5.6	回転糸切りのちナデ	80

第 38 表　第 23 次調査非ロクロ土師器観察表

単位：cm

NO	図版	出土状況	器種	外面	内面	残存	高さ	口径	底径	備考	写真
C-1	80	SI-1カマド	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	ヘラナデのちミガキ	1/4	残：3.6	14.2			81
C-2	80	SI-1埋2層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	破片	残：2.8				81
C-3	80	SI-1カマド	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口、体：ヨコナデ	破片	残：2.7			内外面黒色仕上げ	81
C-4	80	SI-1埋3層	坏	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ	口：ヨコナデ黒色処理 体：ヨコナデのちミガキ	破片	残：3.4				81
C-5	80	SI-1埋1層	手づくね土器	指ナデ		完形	3.2	4.9	2.9		81
C-6	80	SI-1カマド	甕	口：ヨコナデ 体：ハケ目のちミガキ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	3/5	24.6	21.3	6.9		81
C-7		SI-1埋2層	甕	口：ヨコナデ 体：ハケ目のち軽いナデ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	1/5					81
C-8		SI-1埋3層	甕	ハケ目のち軽いナデ	ヘラナデ	1/3				底部付近煤付着	
C-9	80	SD-1埋1層	甕	口：ヨコナデ 体：ハケ目のちヘラミガキ	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ	4/5	20.9	16.1			81

第 39 表　第 23 次調査土製品観察表

単位：cm

NO	図版	出土状況	名称	最大長	最大幅	最大厚	備考	写真
P-1	80	SI-1カマド	土製支脚	11.5	5.5	4.6	ケズリによる面取り	81

写　真　図　版

写真１　調査区遠景（西から）

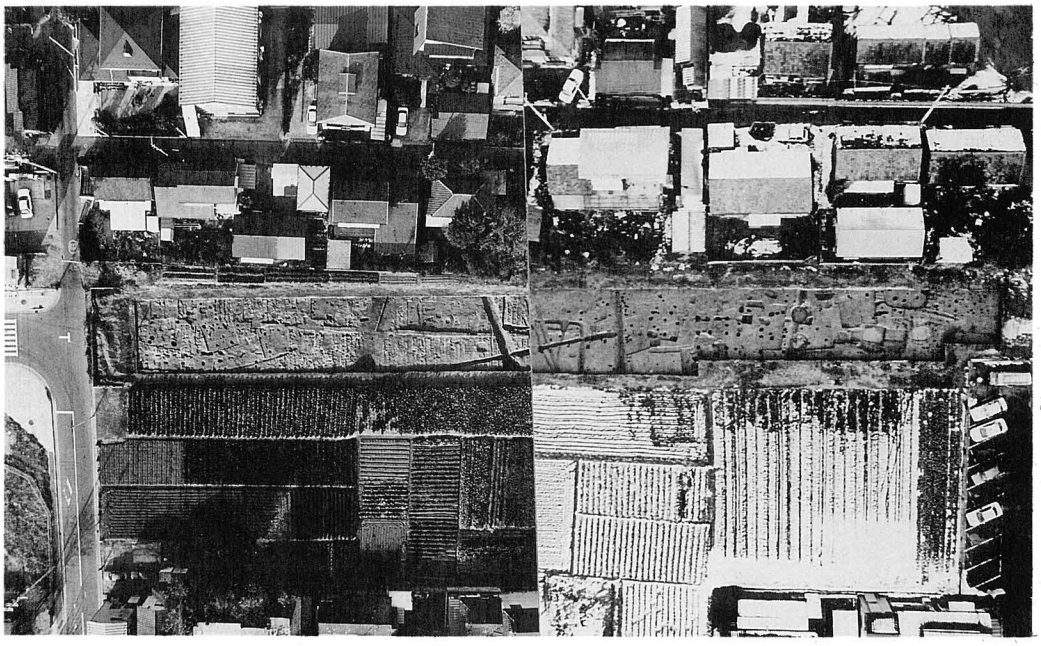


写真２　調査区全景

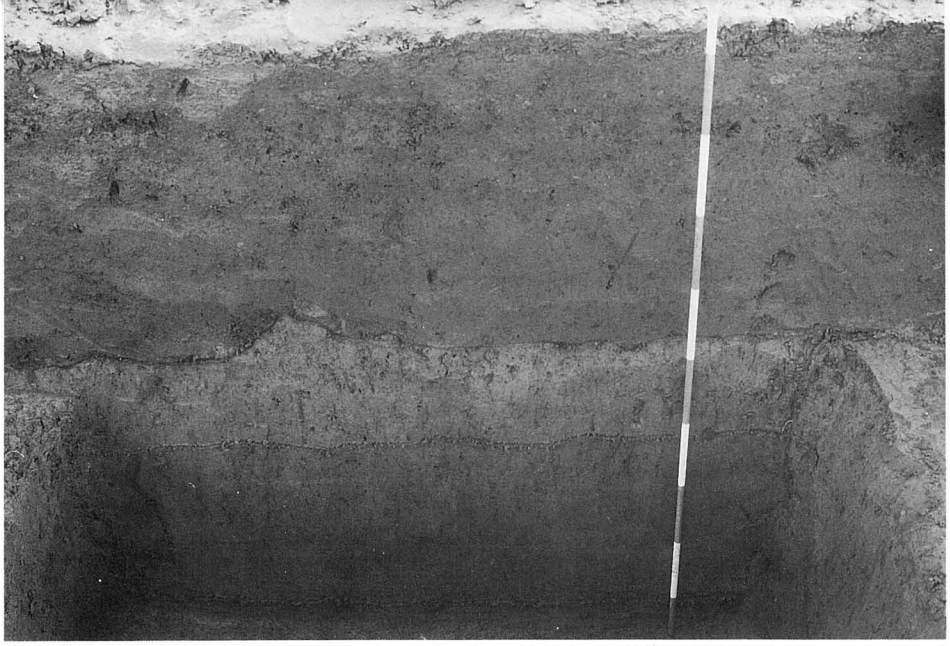


写真３　Ｂ-14Ｇ
南壁深掘りセクション
（北から）

写真４
調査風景　Ａ・Ｂ-11Ｇ以西
（南から）

写真５
調査風景　Ａ・Ｂ-11Ｇ以東
（東から）

写真6　A-8・9G
ＳＩ-1完掘全景
（北から）

写真7　A-7G
ＳＩ-2全景
（南から）

写真8　A-5・6G
ＳＩ-3全景
（西から）

写真９　Ａ－４・５Ｇ
ＳＩ－４全景
（南から）

写真10　Ａ－５Ｇ
ＳＩ－５全景
（南から）

写真11　Ａ・Ｂ－５Ｇ
ＳＩ－６全景
（南から）

写真12　A・B-4・5G
SI-8全景
（南から）

写真13　B-3・4G
SI-9全景
（南から）

写真14　A-1G
SI-10全景
（南から）

写真15　A・B-1・2G
SI-11全景
（南から）

写真16　A・B-2・3G
SI-12全景
（南から）

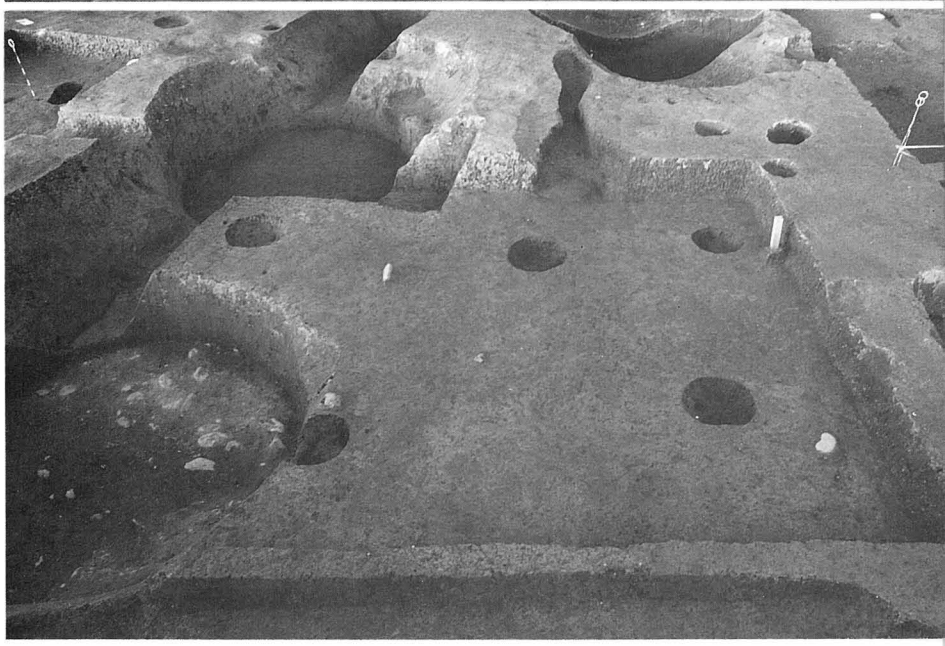
写真17　A・B-16G
SI-14全景
（北から）

写真18　A・B-14G
ＳＩ-15全景
（北から）

写真19　A・B-14G
ＳＩ-15ベルトセクション
（南から）

写真20　B-14・15G
ＳＩ-17全景
（北から）

写真21　A・B-17G
ＳＩ-18全景
（南から）



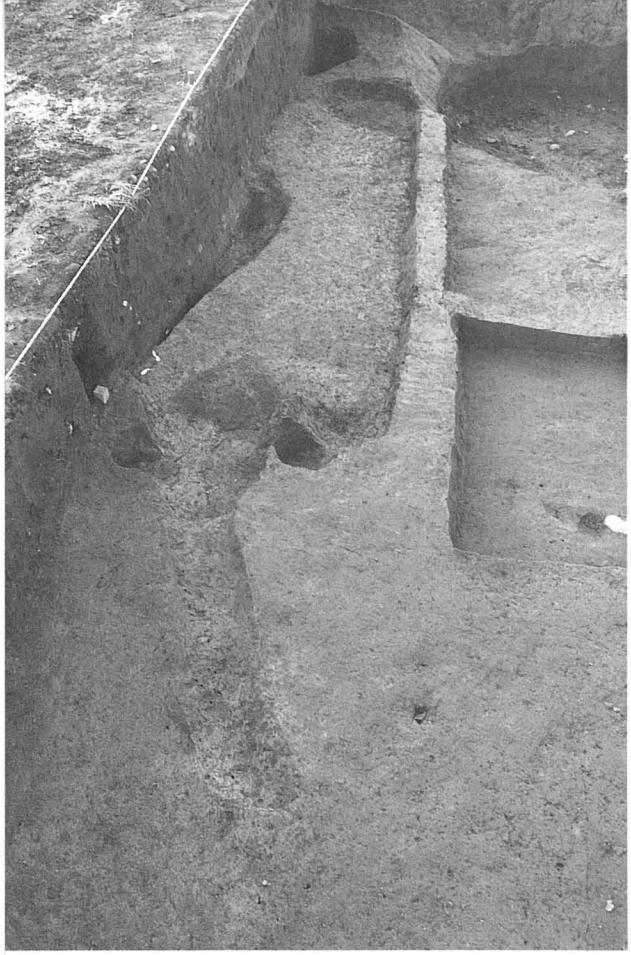


写真22　B-17G　ＳＩ-19全景（東から）

写真23　A・B-18・19G　ＳＩ-20南側かまど（西から）

写真24　A・B-18・19G　ＳＩ-20全景（西から）

写真25　A-19・20G
ＳＩ-22全景
（西から）

写真26　B-３G
ＳＩ-23全景
（南から）

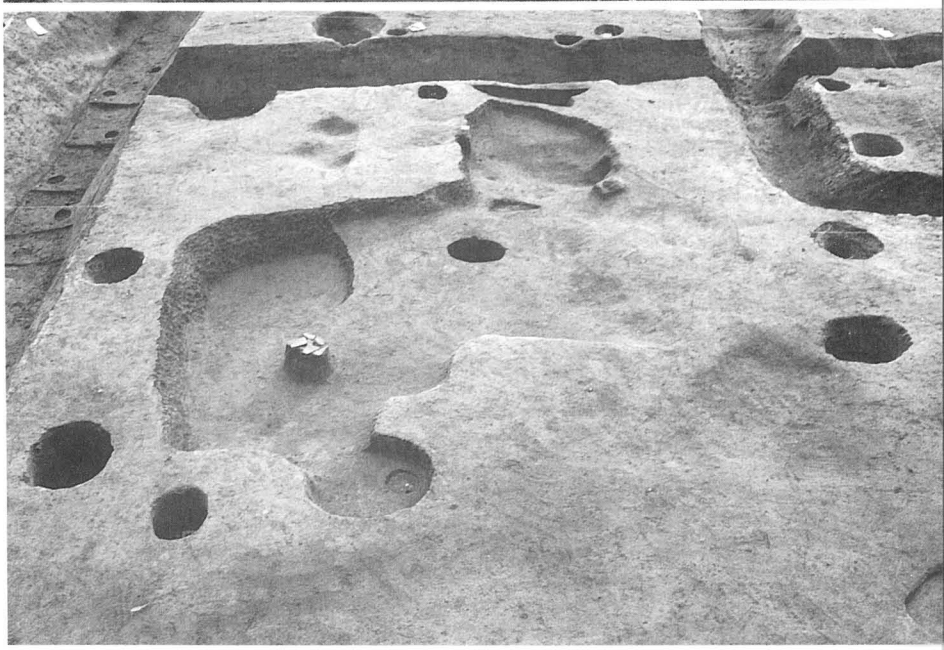


写真27　A・B-12G
ＳＩ-24全景
（北から）

写真28　A-16G
ＳＩ-25全景
（西から）

写真29　A-16G
ＳＩ-25遺物出土状況
（南から）

写真30　A-14G
ＳＩ-26全景
（南から）

写真31　A・B-12・13G
ＳＡ１・ＳＡ２全景

写真32　B-14・15G
ＳＢ１・ＳＩ17全景

写真33　A-17G　ＳＡ-１全景（西から）

写真34　A・B-13G　ＳＡ-２全景（北から）

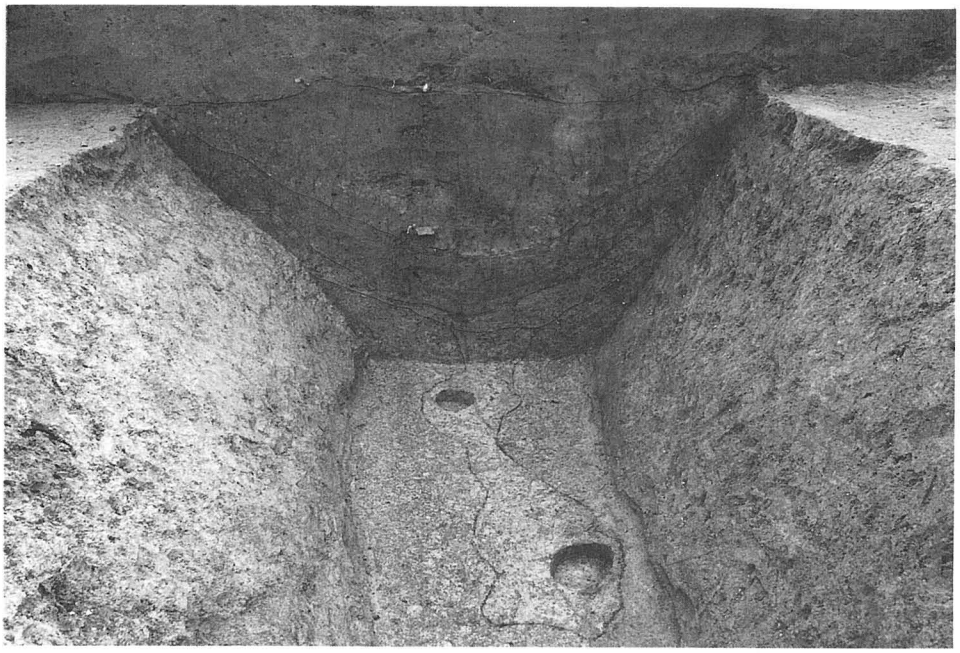


写真35　A・B-13G　ＳＡ-２セクション（北から）

写真36　A・B-7G
ＳＡ-１東側ベルトセクション
（西から）

写真37　B-10G
ＳＡ-１・Ｐ-２・３プラン
（南から）

写真38　A-11G
ＳＤ-２　全景
（北西から）

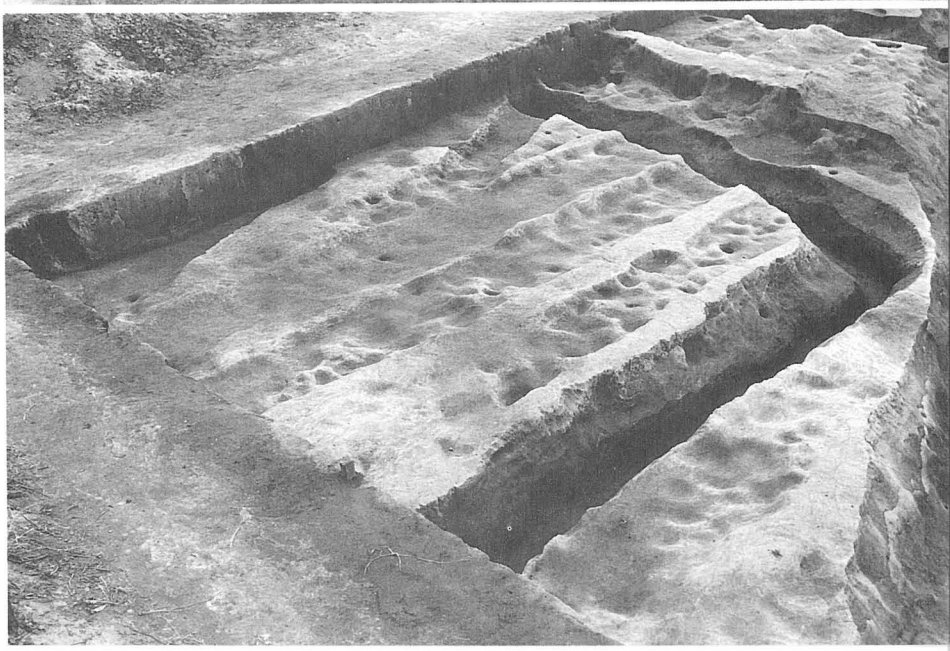


写真39　A・B-7G
SD-3全景
（南から）

写真40　A・B-7G
SD-3SP全景
（東から）

写真41　A・B-7G
SD-3作業風景
（北東から）

写真42　A・B-7G
SD-3全景
（北から）

写真43　A・B-7G
SD-3南壁セクション
（北から）

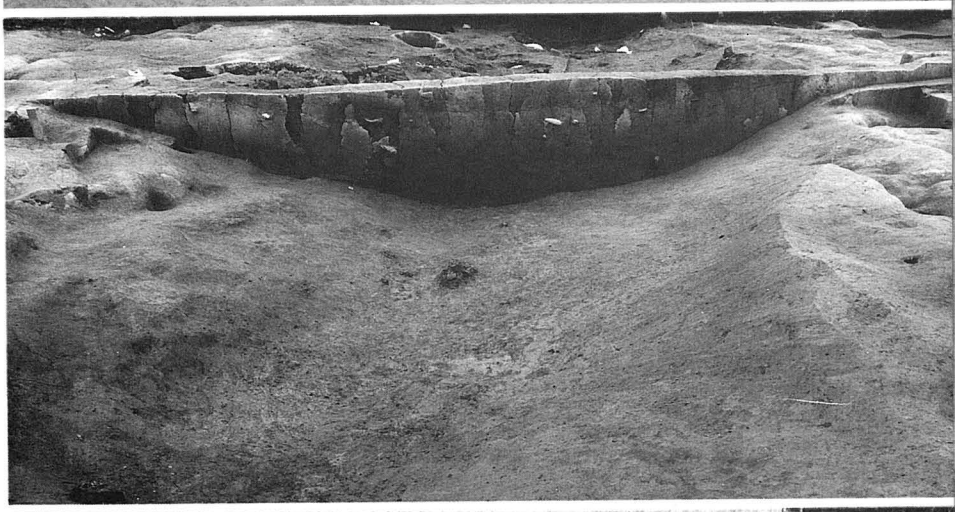


写真44　A・B-7G
SD-3中央ベルトセクション
（南から）

写真45　A・B-7G
SD-3北壁セクション
（南から）

写真46　A・B-9・10G　SD-4全景（北から）

写真47　A・B-17G　SD-10全景（南から）

写真48　B-10G　SD-4セクション（南から）

写真49　B-10G　ＳＫ-１全景（南から）

写真50　B-10G　ＳＫ-２全景（南から）

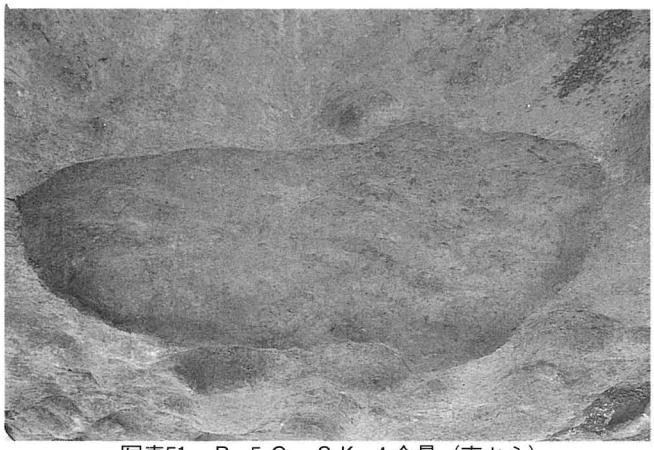


写真51　B-５G　ＳＫ-４全景（南から）

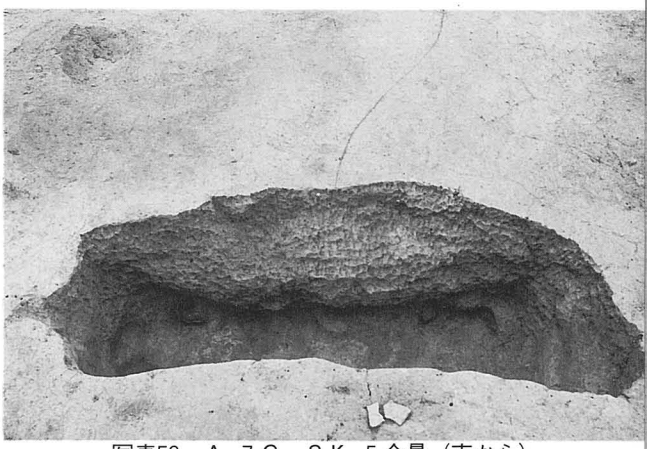


写真52　A-７G　ＳＫ-５全景（南から）

写真53　A-20G　ＳＫ-10全景（南から）

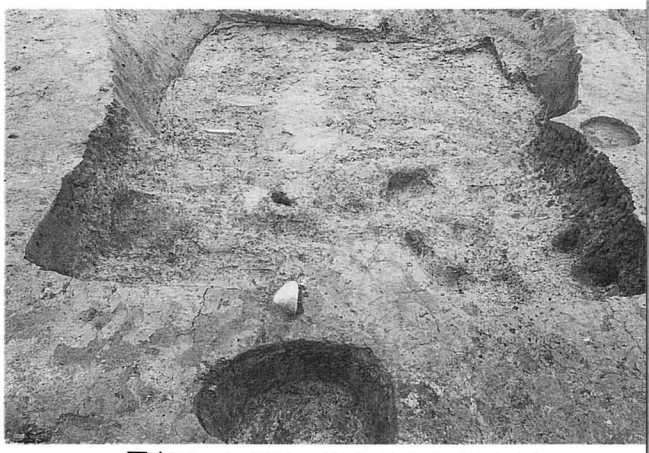


写真54　A-19G　ＳＫ-11全景（北から）

写真55　A-19G　ＳＫ-12全景（北から）

写真56　B-19G　ＳＫ-13全景（南から）

写真57　A-17G　ＳＫ-15全景（南から）

写真58　A-17G　ＳＫ-16全景（西から）

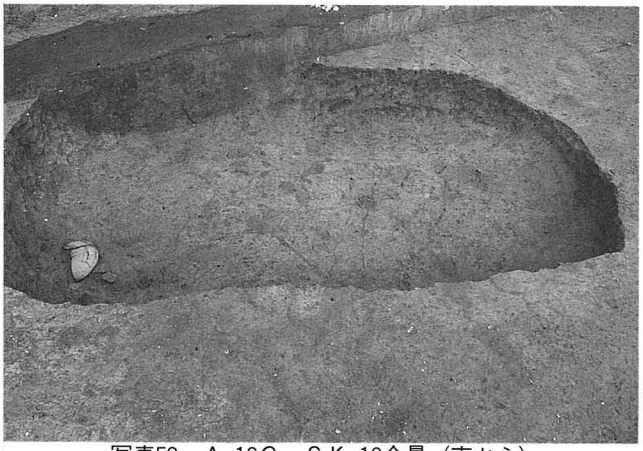


写真59　A-16G　ＳＫ-18全景（南から）

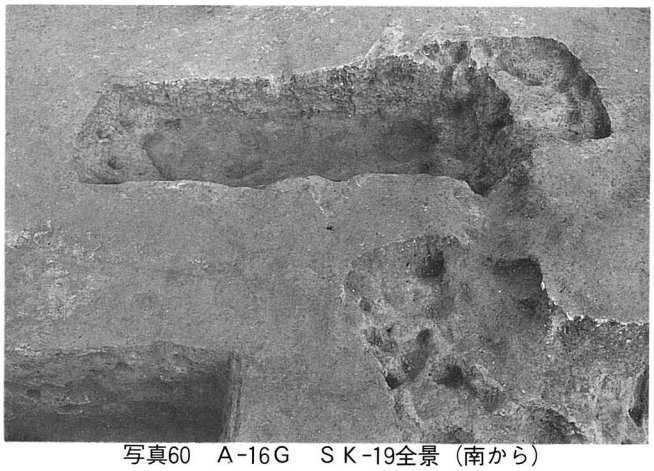


写真60　A-16G　ＳＫ-19全景（南から）

写真61　A-16G　ＳＫ-20全景（南から）

写真62　B-18G　ＳＫ-17全景（北から）

写真63　A・B-21G　ＳＸ-1セクション（西から）

写真64　第22次調査
記念写真

写真65　第23次調査
ＳＩ１全景

写真66　第23次調査
ＳＩ１カマド全景

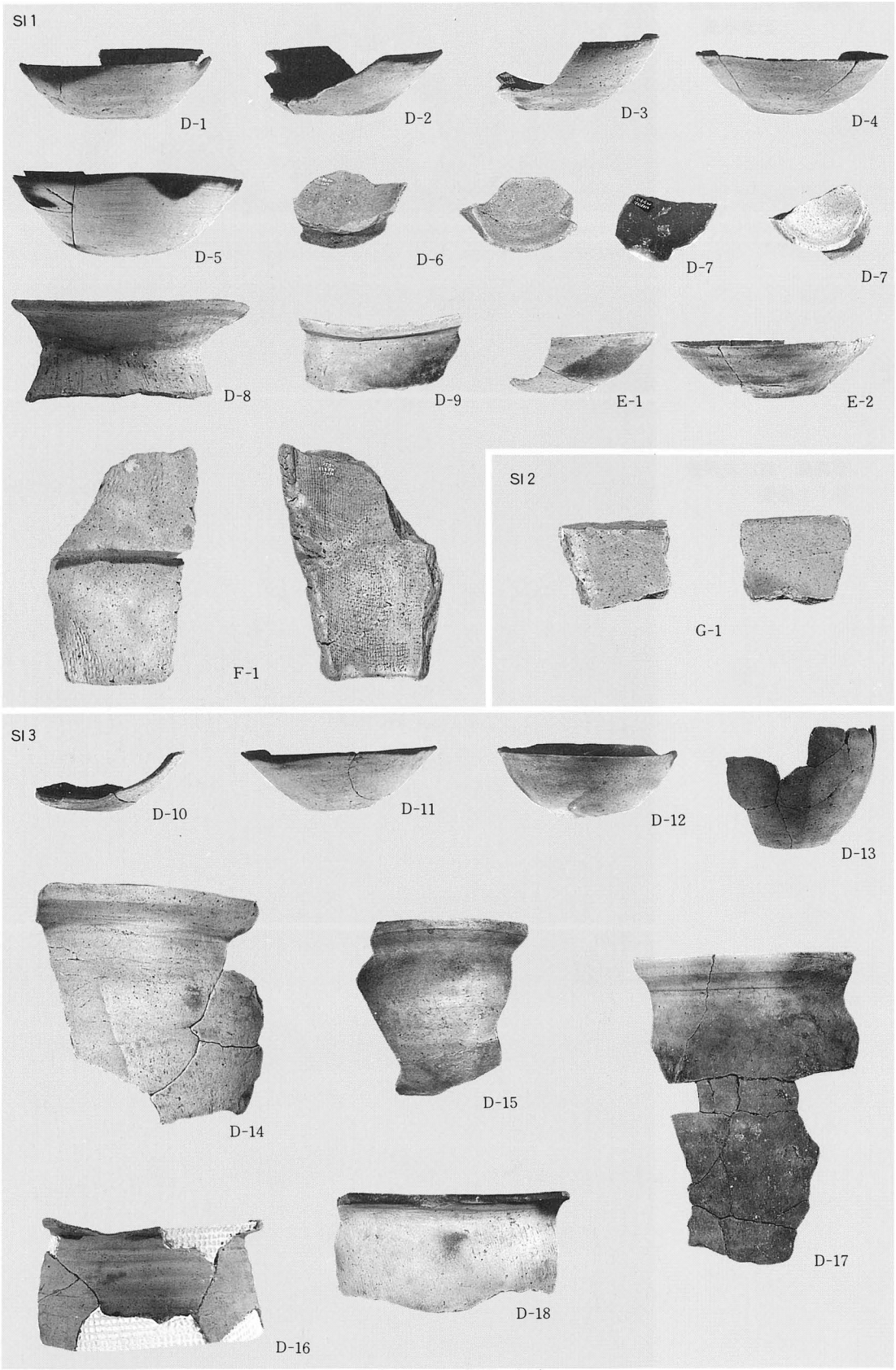
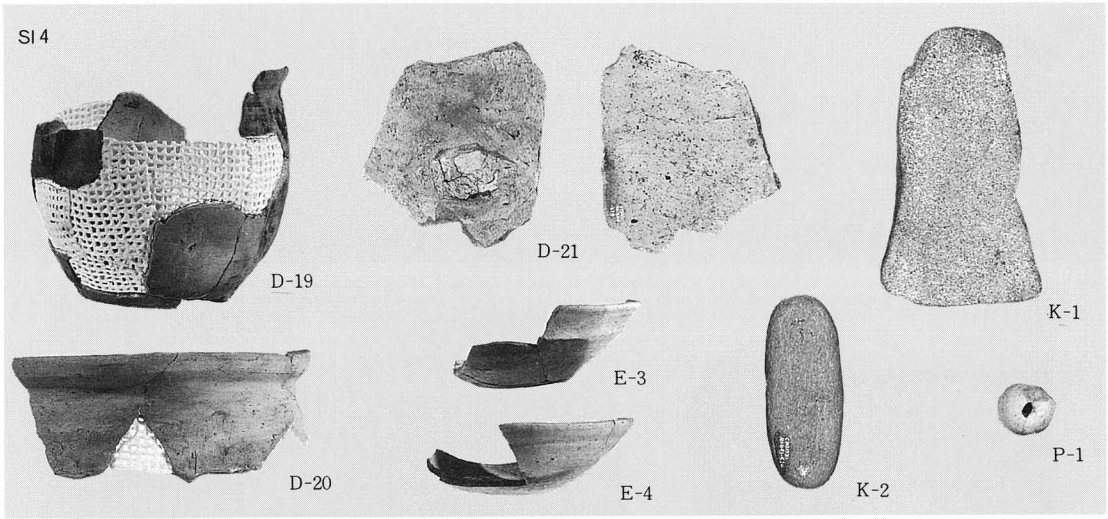
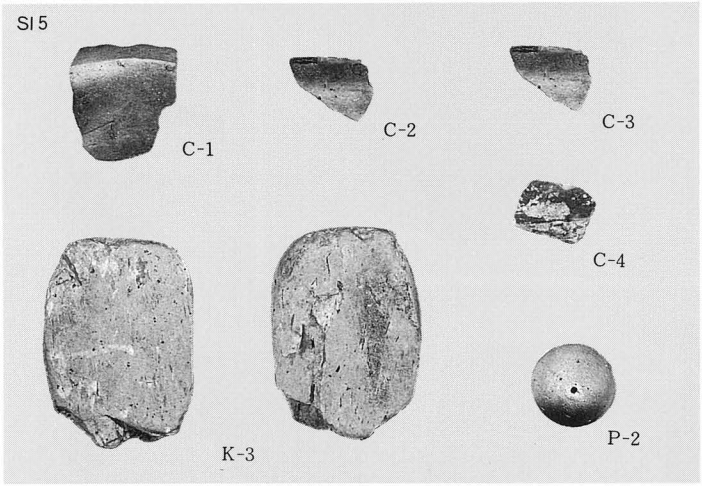
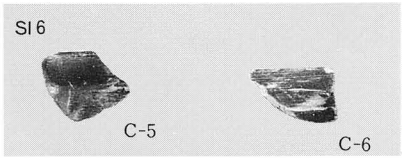
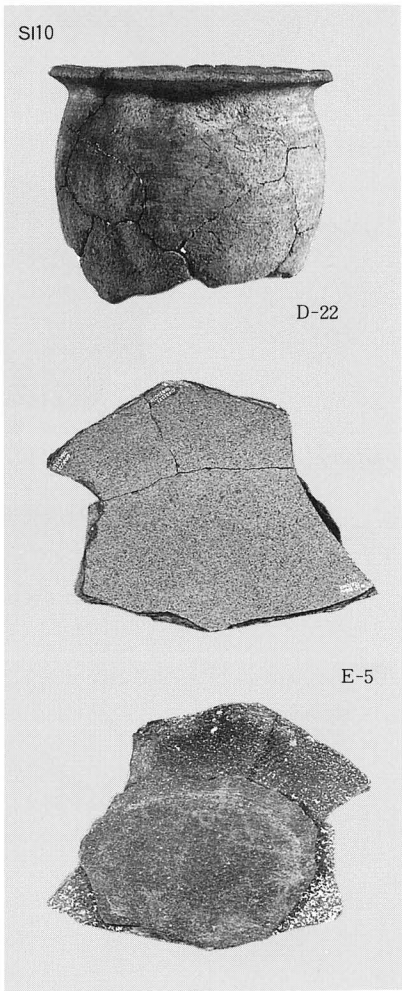

SI 1
D-1
D-2
D-3
D-4
D-5
D-6
D-7
D-7
D-8
D-9
E-1
E-2
F-1
SI 2
G-1
SI 3
D-10
D-11
D-12
D-13
D-14
D-15
D-16
D-17
D-18

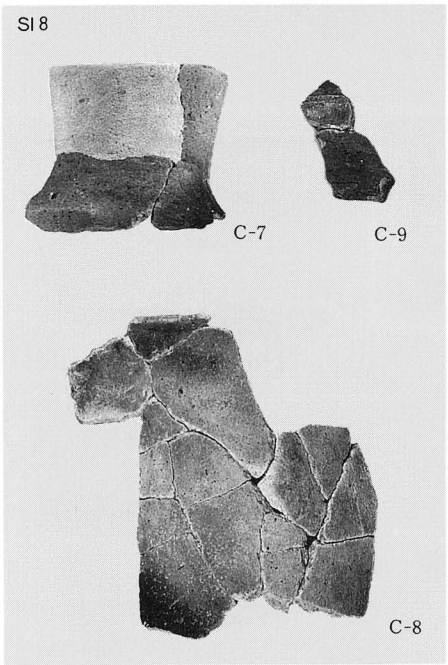
写真67　出土遺物（1）


SI 4
D-19
D-21
K-1
E-3
D-20
E-4
K-2
P-1


SI 5
C-1
C-2
C-3
C-4
K-3
P-2


SI 6
C-5
C-6


SI10
D-22
E-5


SI 8
C-7
C-9
C-8

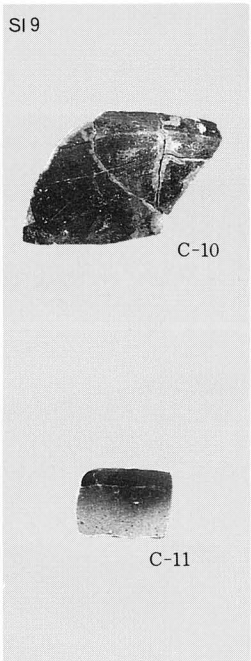

SI 9
C-10
C-11

写真68　出土遺物（2）

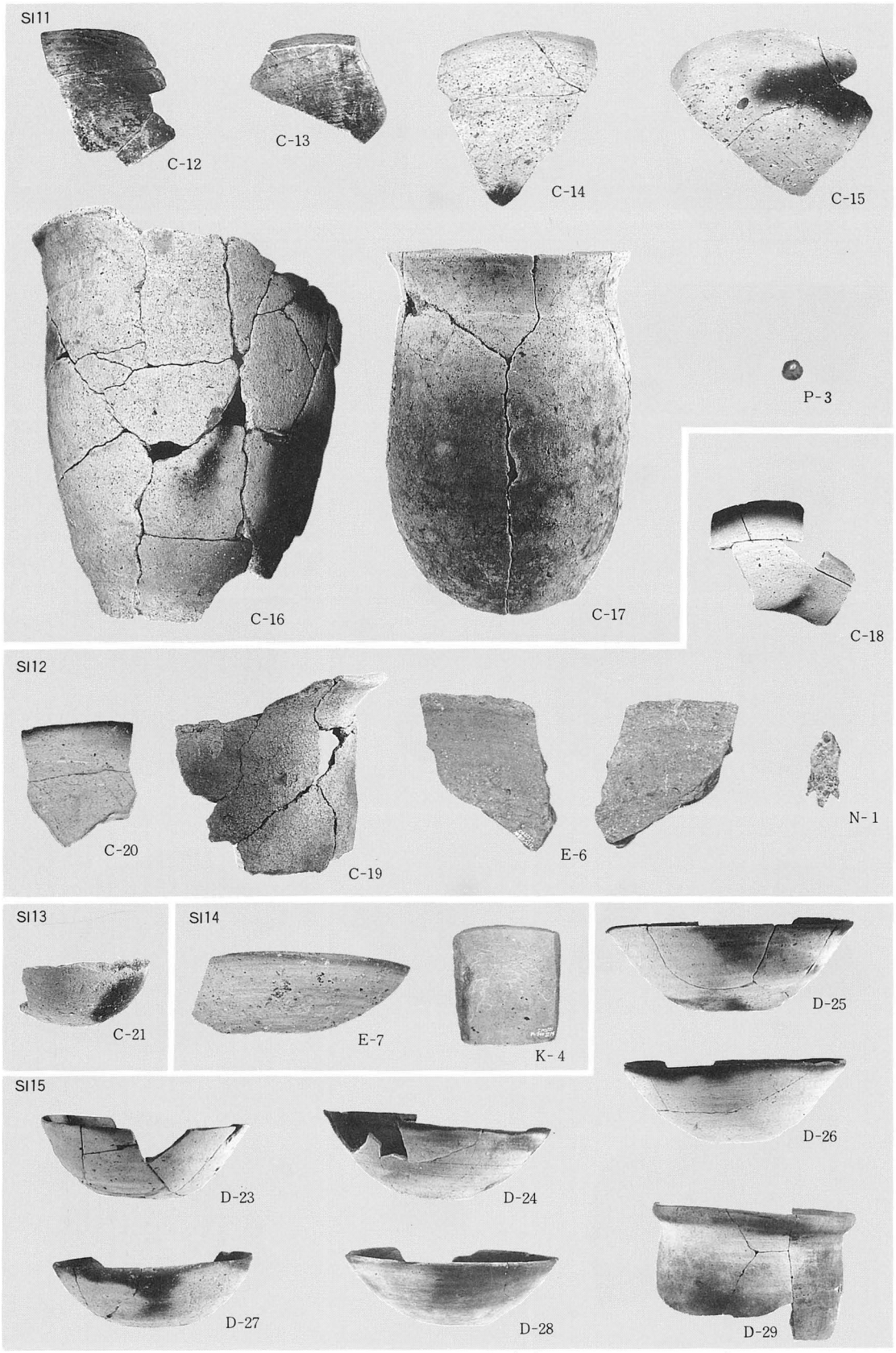

SI11
C-12
C-13
C-14
C-15
C-16
C-17
P-3
C-18
SI12
C-20
C-19
E-6
N-1
SI13
C-21
SI14
E-7
K-4
D-25
SI15
D-23
D-24
D-26
D-27
D-28
D-29

写真69　出土遺物（3）

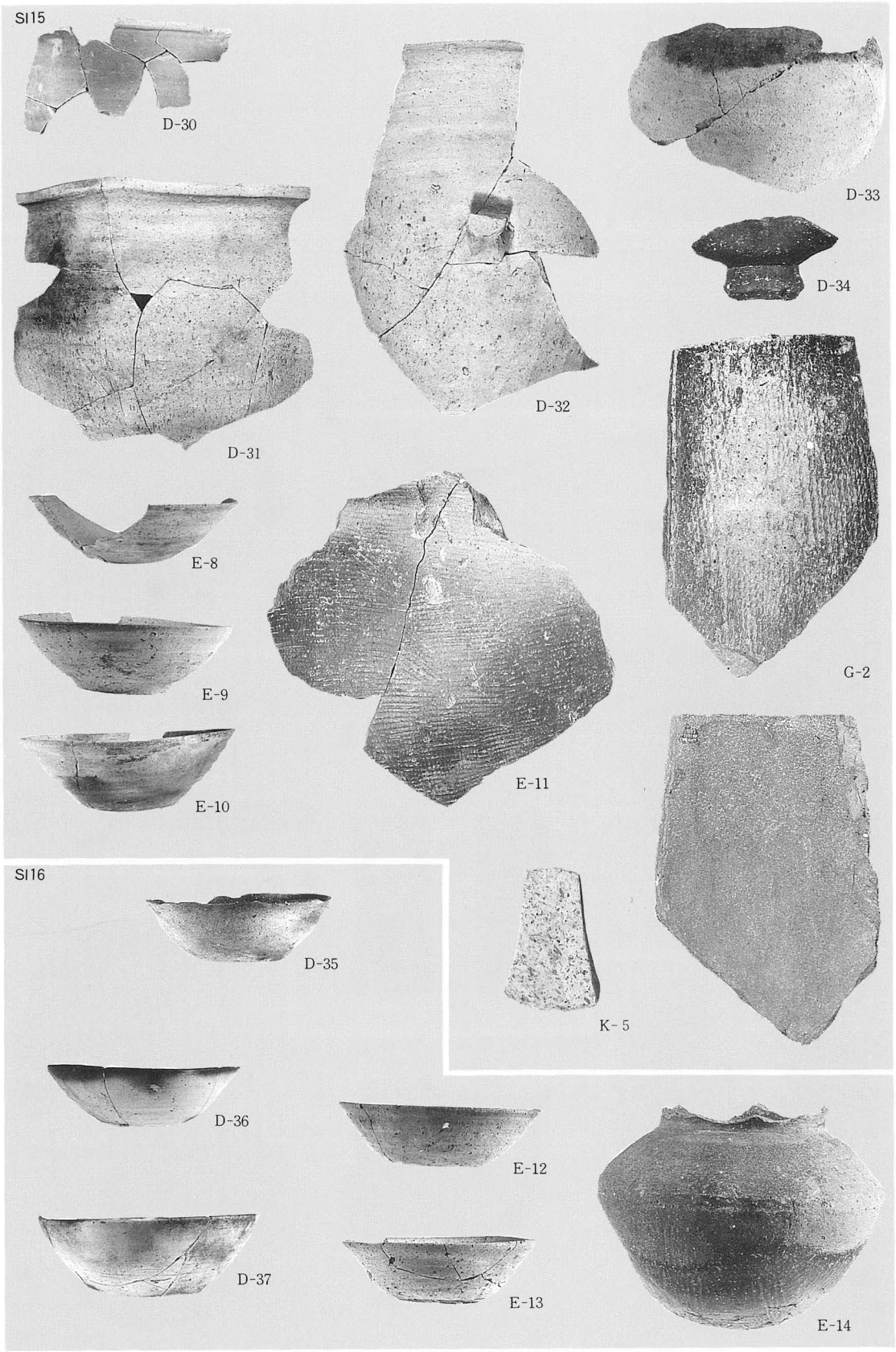

SI15
D-30
D-31
D-32
D-33
D-34
E-8
E-9
E-10
E-11
G-2
K-5
SI16
D-35
D-36
D-37
E-12
E-13
E-14

写真70　出土遺物（4）

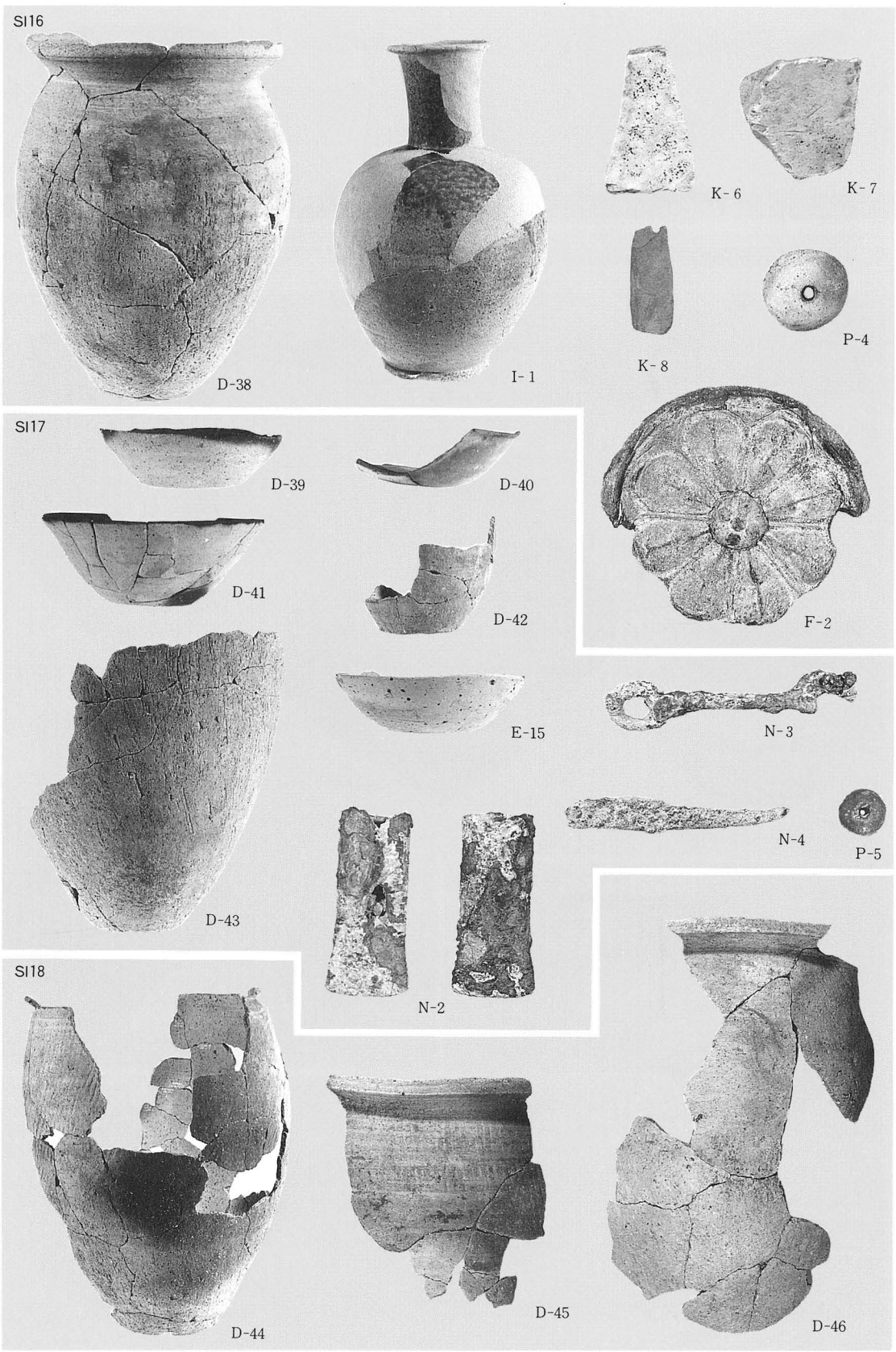
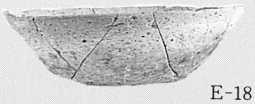

SI16
D-38
I-1
K-6
K-7
K-8
P-4
SI17
D-39
D-40
D-41
D-42
F-2
E-15
N-3
N-4
P-5
D-43
N-2
SI18
D-44
D-45
D-46

写真71　出土遺物（5）

SI18

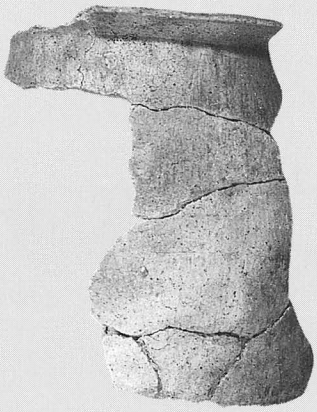
E-16

E-17


E-18

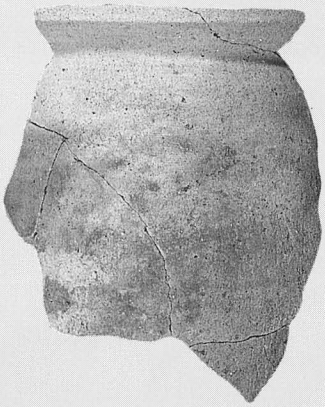
SI19

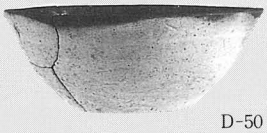
D-47

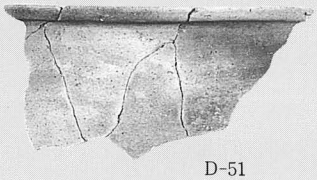

D-48

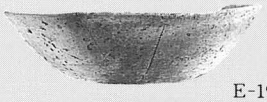
SI20

D-49


D-52

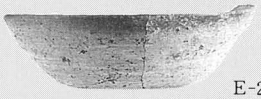

D-50

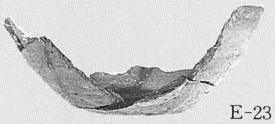

D-51

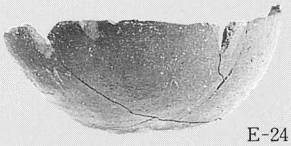

E-19

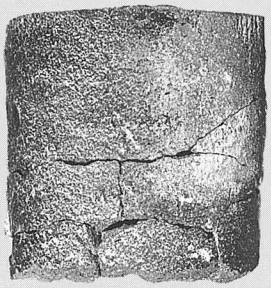
E-20

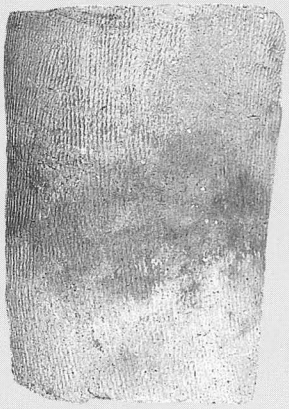
E-21


E-22


E-23


E-24


F-3



G-3

写真72　出土遺物（6）

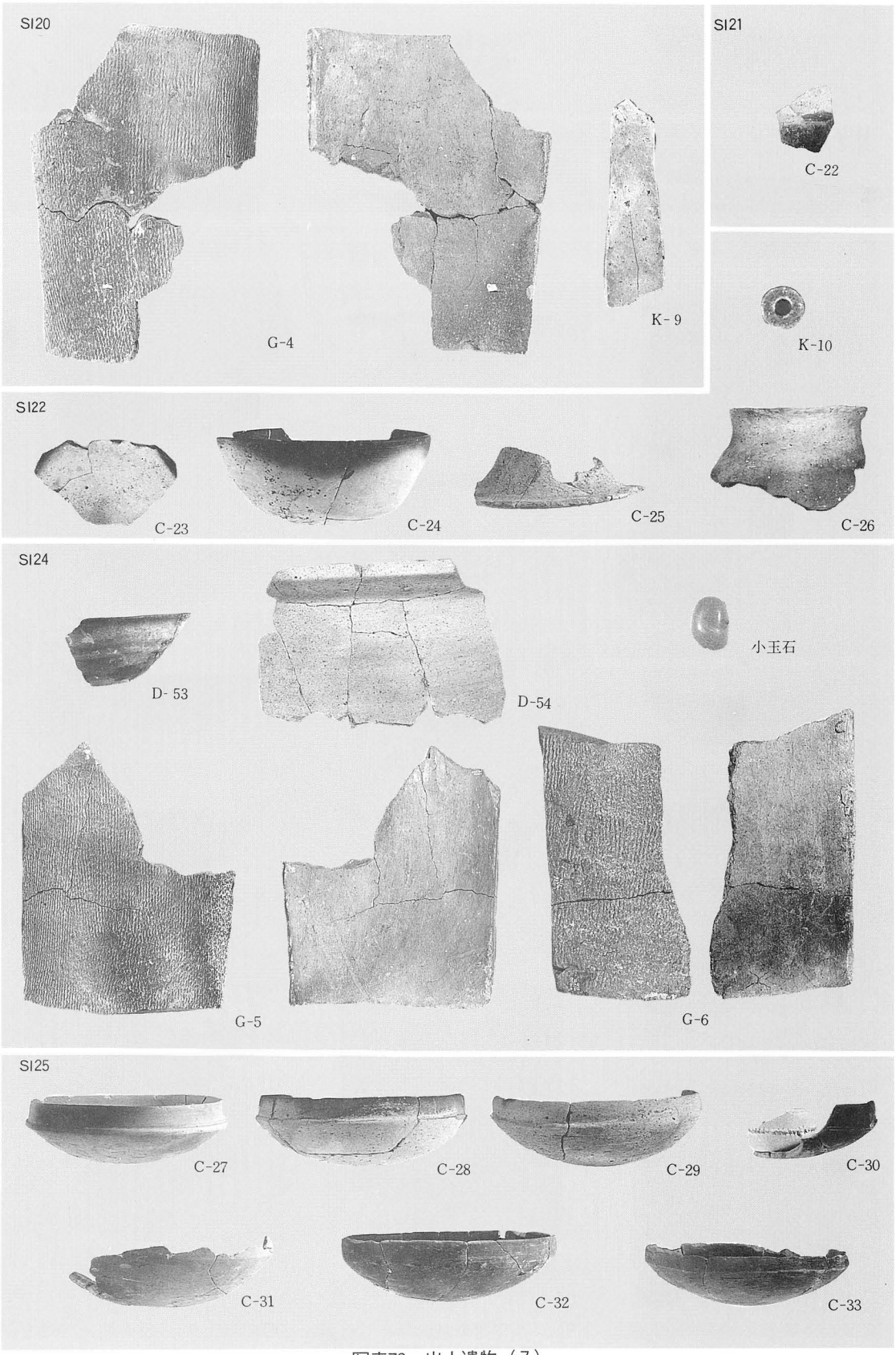
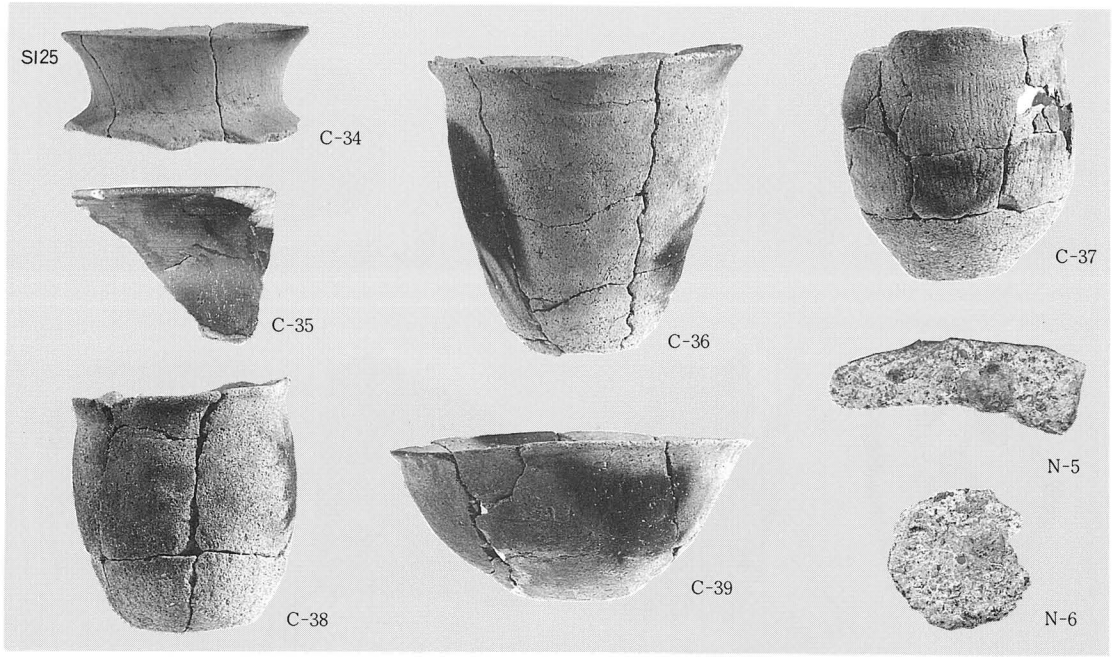
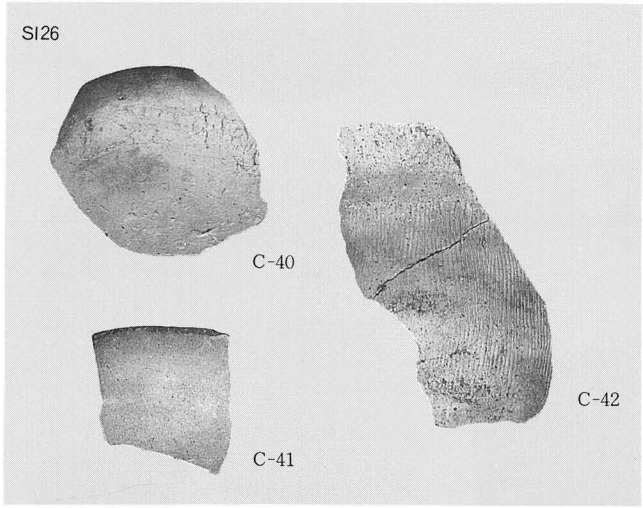
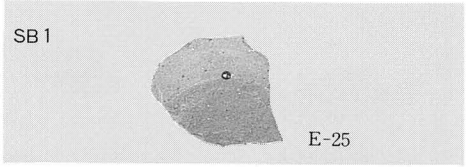
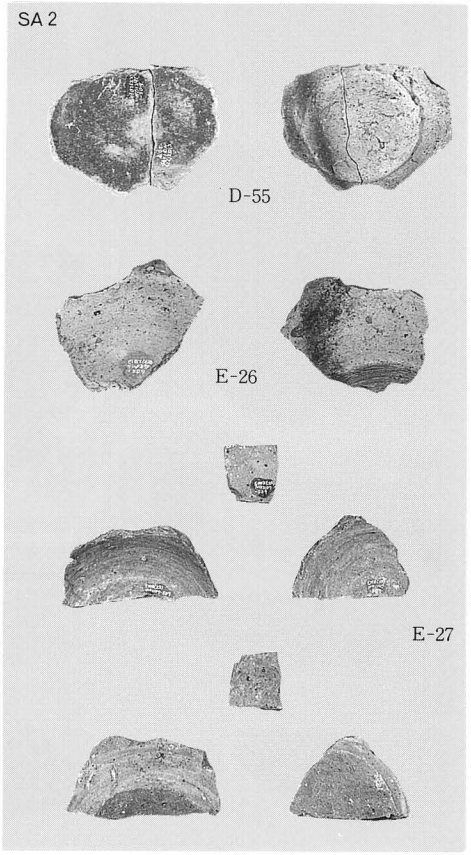

SI20
G-4
K-9
SI21
C-22
K-10
SI22
C-23
C-24
C-25
C-26
SI24
D-53
D-54
小玉石
G-5
G-6
SI25
C-27
C-28
C-29
C-30
C-31
C-32
C-33

写真73　出土遺物（7）


SI25
C-34
C-35
C-36
C-37
C-38
C-39
N-5
N-6


SI26
C-40
C-41
C-42


SB 1
E-25


SA 2
D-55
E-26
E-27

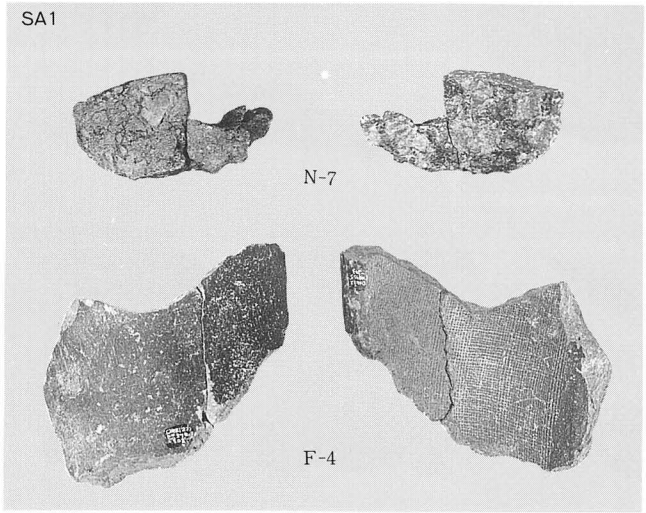

SA1
N-7
F-4

写真74　出土遺物（8）

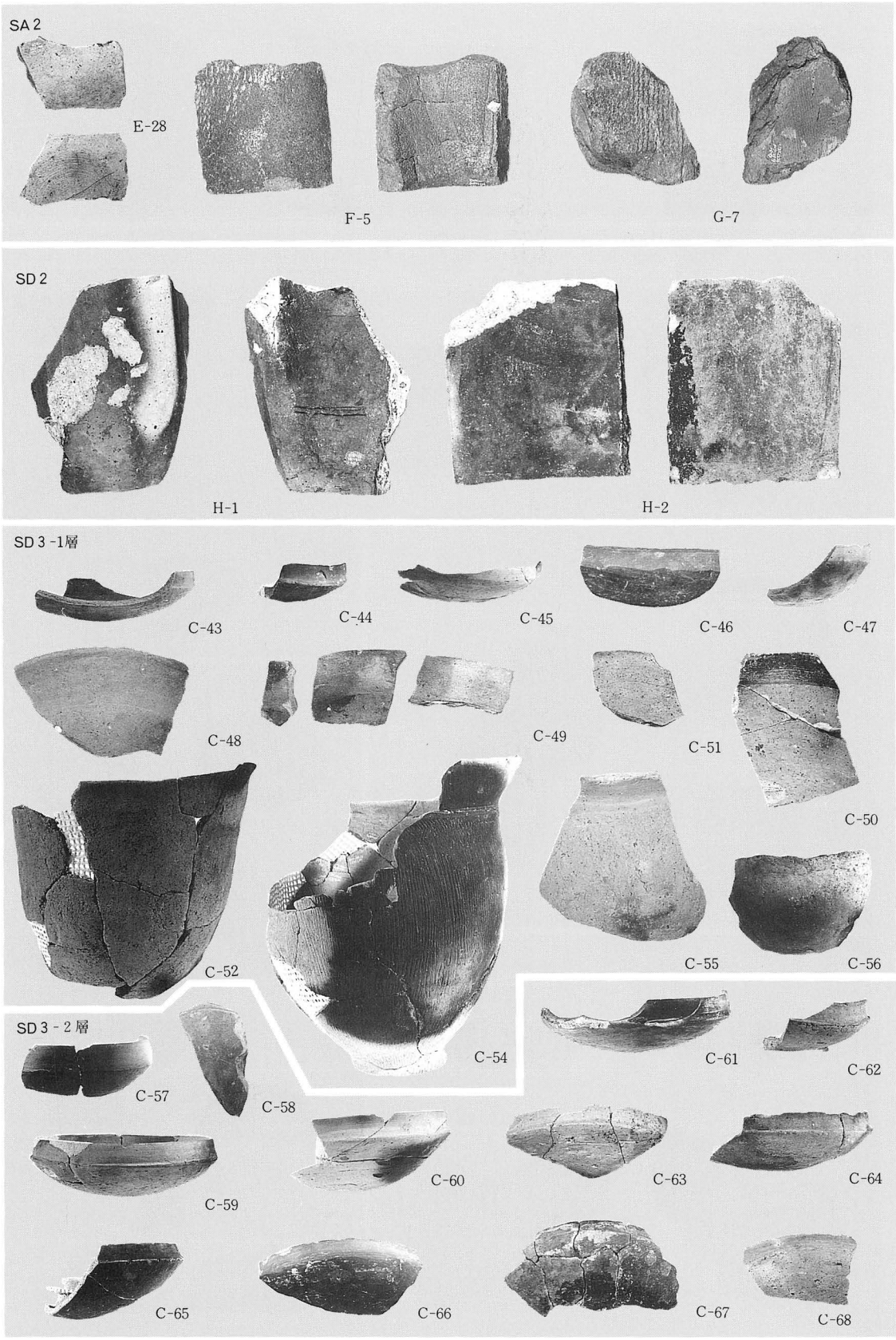

SA 2
E-28
F-5
G-7
SD 2
H-1
H-2
SD 3 -1層
C-43
C-44
C-45
C-46
C-47
C-48
C-49
C-51
C-50
C-52
C-54
C-55
C-56
SD 3 - 2 層
C-57
C-58
C-61
C-62
C-59
C-60
C-63
C-64
C-65
C-66
C-67
C-68

写真75　出土遺物（9）

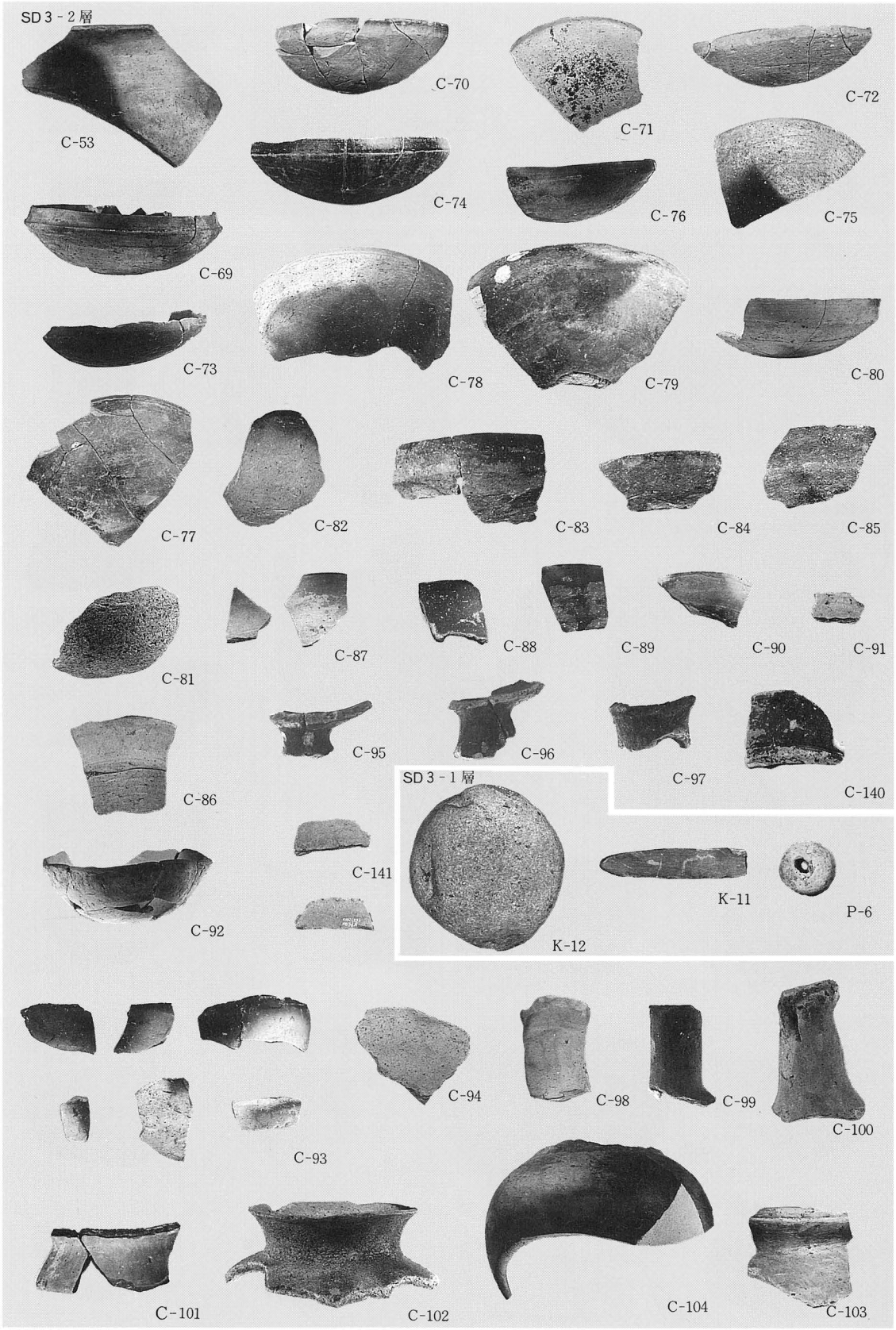

SD 3 - 2 層
C-53
C-70
C-71
C-72
C-74
C-76
C-75
C-69
C-73
C-78
C-79
C-80
C-77
C-82
C-83
C-84
C-85
C-81
C-87
C-88
C-89
C-90
C-91
C-86
C-95
C-96
C-97
C-140
SD 3 - 1 層
C-141
K-11
P-6
C-92
K-12
C-94
C-98
C-99
C-100
C-93
C-101
C-102
C-104
C-103

写真76　出土遺物（10）

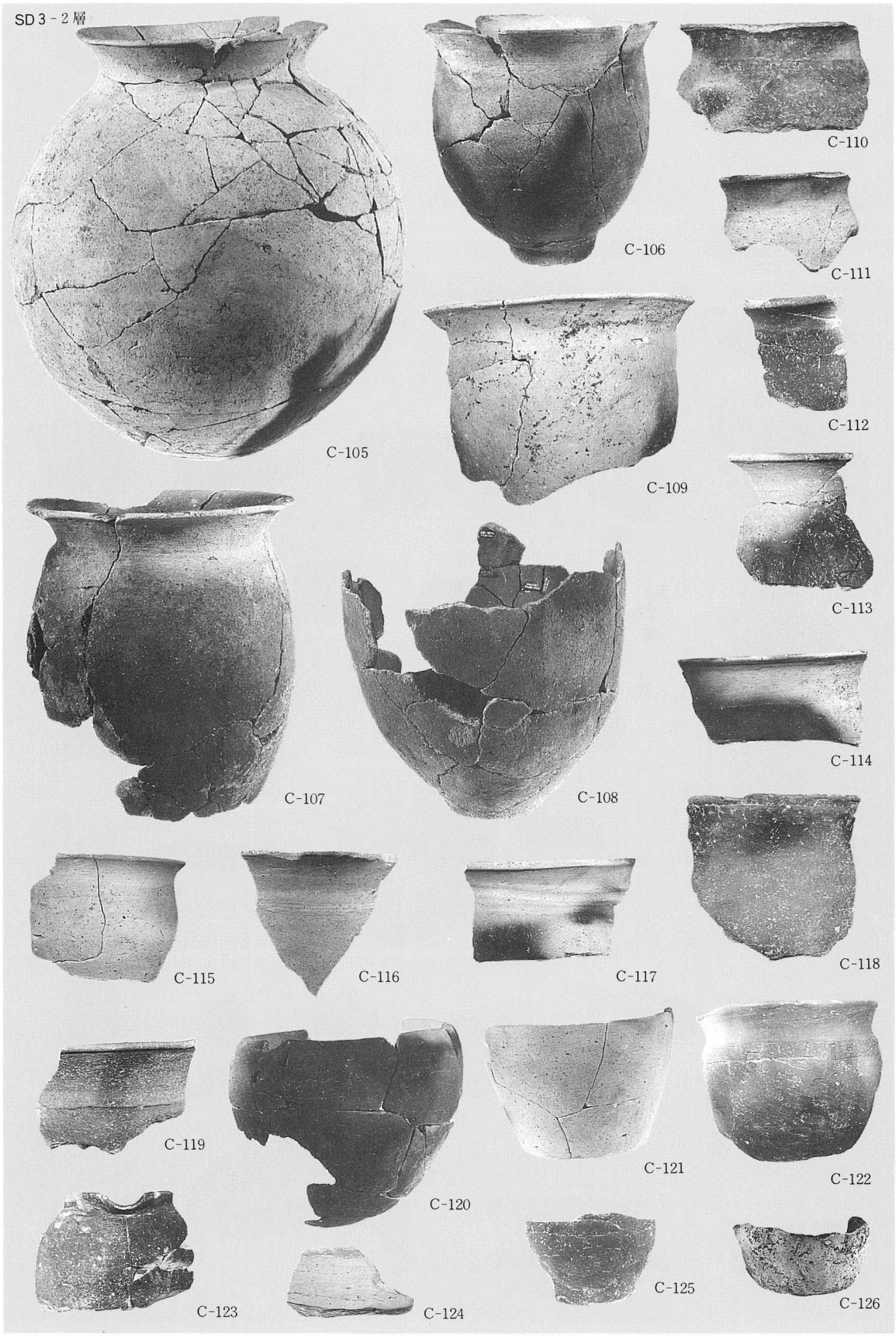

SD 3 - 2 層
C-105
C-106
C-110
C-111
C-112
C-109
C-113
C-107
C-108
C-114
C-115
C-116
C-117
C-118
C-119
C-120
C-121
C-122
C-123
C-124
C-125
C-126

写真77　出土遺物（11）

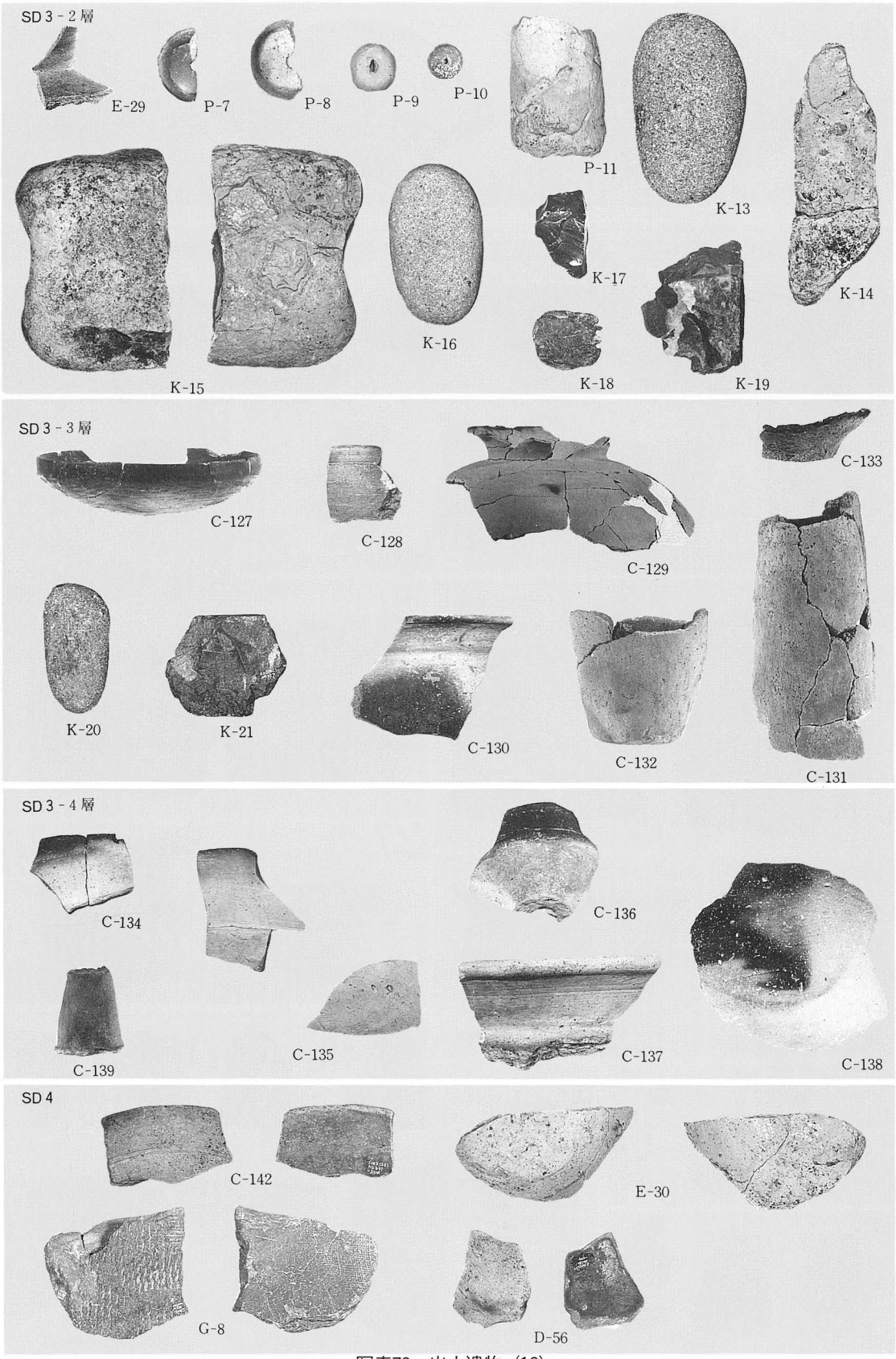

SD 3 - 2 層
E-29
P-7
P-8
P-9
P-10
P-11
K-13
K-14
K-15
K-16
K-17
K-18
K-19
SD 3 - 3 層
C-127
C-128
C-129
C-133
K-20
K-21
C-130
C-132
C-131
SD 3 - 4 層
C-134
C-136
C-139
C-135
C-137
C-138
SD 4
C-142
E-30
G-8
D-56

写真78　出土遺物（12）

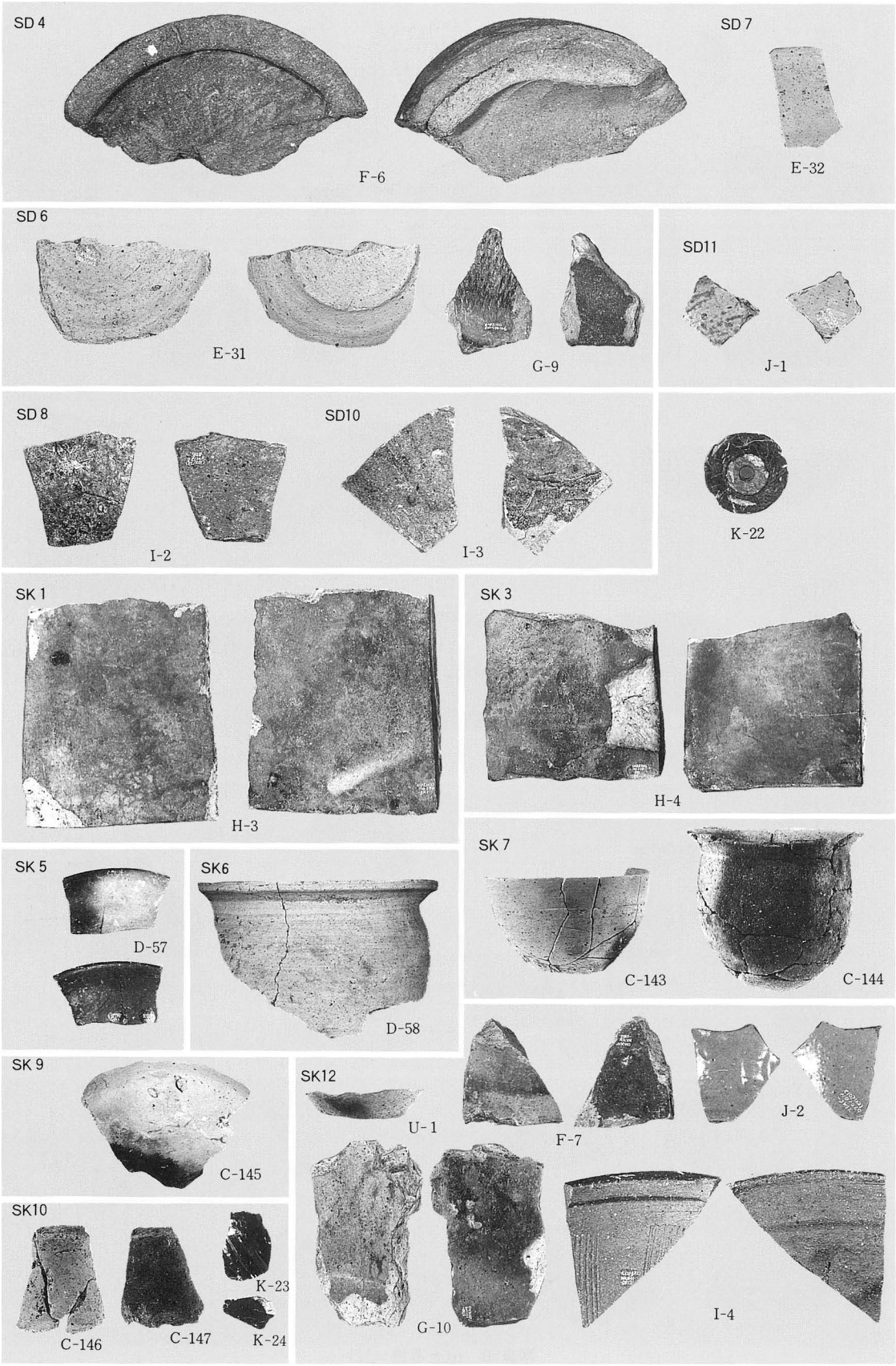

SD 4
F-6
SD 7
E-32
SD 6
E-31
G-9
SD11
J-1
SD 8
I-2
SD10
I-3
K-22
SK 1
H-3
SK 3
H-4
SK 5
D-57
SK6
D-58
SK 7
C-143
C-144
SK 9
C-145
SK12
U-1
F-7
J-2
SK10
C-146
C-147
K-23
K-24
G-10
I-4

写真79　出土遺物（13）

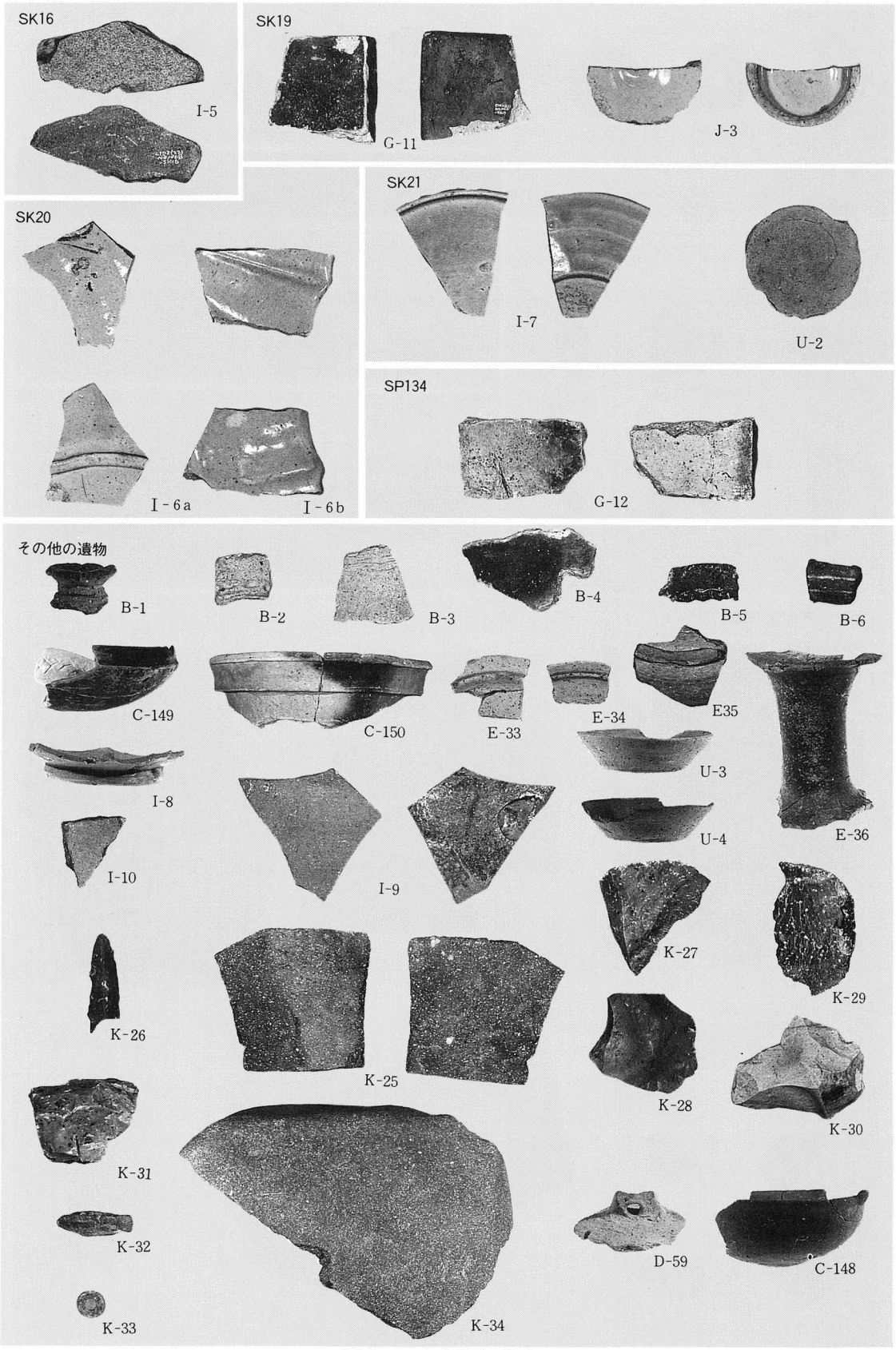
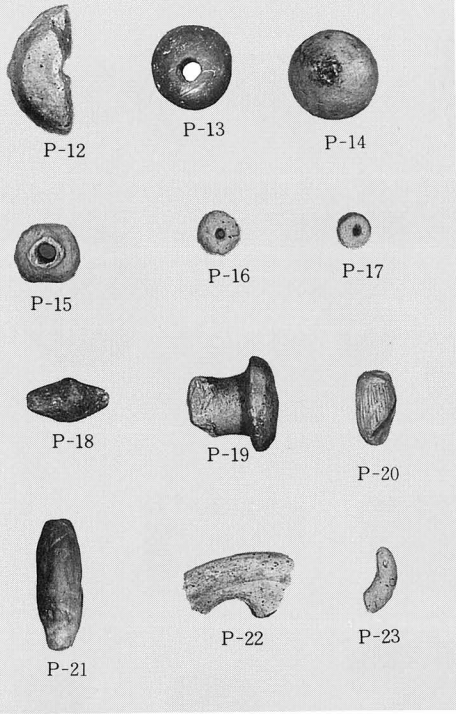
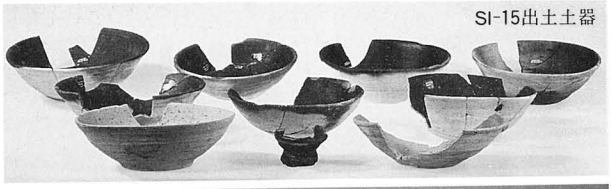

SK16
I-5
SK19
G-11
J-3
SK20
I-6a
I-6b
SK21
I-7
U-2
SP134
G-12
その他の遺物
B-1
B-2
B-3
B-4
B-5
B-6
C-149
C-150
E-33
E-34
E35
U-3
U-4
E-36
I-8
I-10
I-9
K-27
K-29
K-26
K-25
K-28
K-30
K-31
K-32
K-33
K-34
D-59
C-148

写真80　出土遺物（14）

その他の遺物





第23次 調査出土遺物

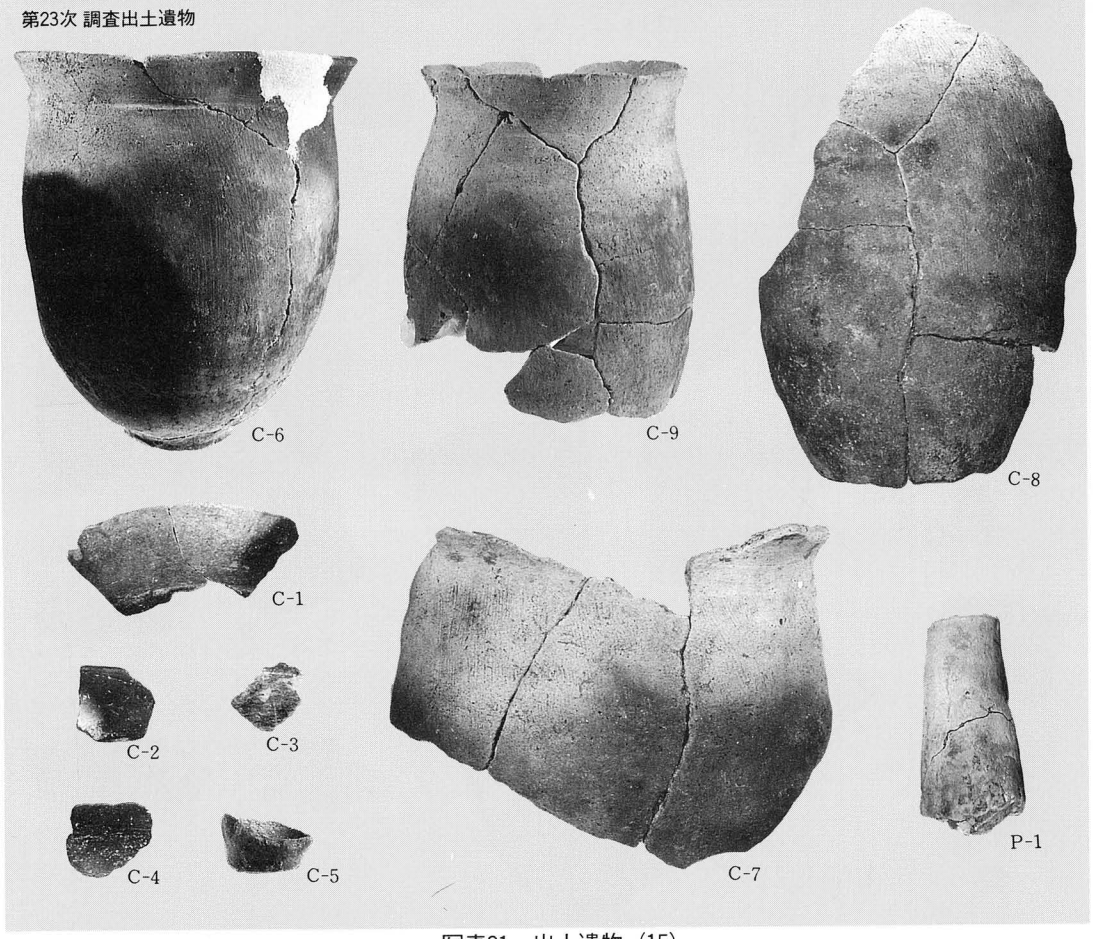


写真81　出土遺物（15）

仙台市文化財調査報告書第192集

南　小　泉　遺　跡
第22次・23次発掘調査報告書

平成 6 年 10 月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町３－７－１
仙台市教育委員会文化財課

印刷　㈱東北プリント
仙台市青葉区立町24－24 TEL 263－1166